RECONSTRUCTION

改造

經濟恐慌・內閣運命

思想と研究

米田庄太郎
小泉信三
森戸辰男
堀江歸一
上田貞次郎
山川均
堺利彦

精神創造・朝鮮人論
人性樂觀・思想分野

評論と文藝

大杉榮
柳宗悅
伊藤野枝
大泉黑石
豐島與志雄
葛西善藏
宇野浩二

六月號

現代學界の權威 十二博士 三學士講述

文化問題十五講

（四六版 總布製 箱入）定價二圓八十錢 送料十二錢

最新刊

▼本書内容の一班▲

▲日本文明の研究
▲日本文化の支那に及ぼせる影響
▲日本に於ける儒教の順應性
▲日本健國の根本精神
▲日本佛教の特例
▲日本人の拳固力
▲帝國憲法の特質
▲武士と敬神
▲同圓異中心主義
▲平安朝時代貴族の趣味
▲最近思潮と群衆心理
▲女性の心理
▲明治天皇御治蹟
▲余の觀たる孔孟の教
▲山鹿素行子の聖教

現代及び將來の世界は東洋の精神文明と西洋の物質文明の結合したる一大文化の新勢力に依つて支配せらる。今や社會改造の機運盛なる時に當り、吾人は東洋文明の精華たる日本文化の眞精神を知らざれば、現代生活を完成せしむる能はざるべし。本書は我が學界に於ける十五名家が各専門研究を以て、日本文化の眞面目を最も平明に講述せられたるもの。蓋し、現代人の内面的生活を充實せしむる活教典なり。自己の向上發展を期する士は、何人も一讀せざるべからず

發行元 東京神田南神保町 日進堂

振替東京一九二三三番

改造六月號目次

田園・工場・仕事場の全譯書出づ

ピーター・クロポトキン著 高畠素之氏序 中山啓氏譯 四六判五百余頁 總クロース上製

近刊

クロポトキンの經濟學說

クロポトキンの無政府主義は人類を呪ふ惡魔の聲か、社會を地獄より救はんとする神の啓示か、社會の進步によつて、**マルクス**は社會主義の實現を夢み、**クロポトキン**は無政府共產制の實現を信ず。二者果して何れが眞ぞ。本書は**無政府主義學最上の教典**。譯者は慧眼の批評家にして、卷末に『無政府主義批判』を添へて斯學研究の指針とす。無政府主義に對する一切の疑義は本書に依つて始めて釋然氷解す。必ず新人の一讀を薦む。

高畠素之氏曰く『誤譯大流行の當今、本書の如きは稀に見る好飜譯』と譯文の正確以て知るべし

定價金四圓
送料金十四錢

東京市芝區三田一丁目
發行所 三田書房
振替東京四一八一〇番



堺利彥著

男女爭鬪史

美裝箱入 定價金壹圓六拾錢 送料金拾錢

主要目次の一部 性交無制限時代、夫婦思想は社會組織の賊、血族群婚、妻を客に貸す風、一時的自由性交の風習、男女心身の差異、伊勢參宮と歌垣、希臘の白拍子、賣淫、姦淫、男色、獨り神と双び神、人の妻、掠奪婚、一夫一婦制の發達、婦人解放、自由戀愛（其他數十項）

發行所 榮川堂 東京麴町區有樂町一の三（振替東京六七七番）

大賣捌所 東京神田 東京堂書店

■改造社主幹 山本實彥著 【寫眞版三十餘頁】

好評五版

人を見よ山を見よ

新式總クロース 頗美本正價壹圓 郵送料拾貳錢

序に曰く 欠伸して一句。起きて一句。蛙が鳴いたで一句。世が碌になつたで一句。蚊がささぬうちに一句。みゝずのやうにのばしたこの一書。

支那政界の大立者梁士詒を拉へて共和政に及第する日玉なるやと試驗臺に立ち、明石大將は豪傑試驗の落第者、水野前内相は探偵政治家の舊型、秋山中將は神經衰弱的天才なり、屈原は高士、雪舟は古今の人格者、鉢の木の常世が現代に慕はしいと欽し、佛法僧鳥を高野山頂に聽いて世界一の靈鳥なりと讃へ、濱口雄幸は大宰相として適任なるやを評し、スコットの「湖上の美人」で名高いカトリン湖畔半日の瞑想に耽れるを叙し、高知に民權婆さんを訪ねて民權論の當時を追憶し、頭山滿の事情を語る、巴里千尺の空中より歐洲の風雲を窺ひ、雪のウラル、月のスエスに憧憬し、野武士の隊長、長曾我元親の越へし四國アルプスを越へ一記など全卷趣味溢るるが如し。

國民新聞曰く、人を見るにも山を見るにも一隻眼を有するは本書の著者なり。東京朝日曰く、人物評は皆着眼の他に類するを見ず蓋し近來の快著として江湖に推薦す。

東京芝區櫻田久保町七番地 改造社 振替東京八四〇二番

刻下讀む可き名著揃

それからの漱石猫著者　三四郎先生著――天下一品の面白い本

新刊

皮肉 社會見物

洋裝天金美本　四百餘頁　價壹圓六拾錢　送料拾貳錢

漱石先生の筆そつくりと東京日日子が評した先生の筆には更に浪六先生の妙味がある。而して其觀察は奇にして警。現代社會の表裏人事百般の百七十項に亘り先生一流の大目玉で縱横十文字に觀察し奇警なる諷刺と深刻なる皮肉と輕妙なる滑稽文にて白熱的痛罵と氷塊的冷評を加へたるもの正に言々火を發し句々風を起す。人心腐敗し道義地に落ちんとするの時刻下の讀む可き快書也

日本書院十六名著

著者	書名		
三四郎著（十版）	それからの漱石の猫	一、七〇〇	一二〇
村上浪六（廿八版）	浪六先生 皮肉文集	一、六〇〇	一二〇
九大文豪（十八版）	九大文豪 皮肉と警語	一、六〇〇	一二〇
和田博士著（六版）	諧謔 世界小話	一、八〇〇	一二〇
澀柳博士著（十二版）	これからの人間	一、〇〇〇	一〇〇
生方先生著（十二版）	一圓札と猫	一、六〇〇	一二〇
生方先生著（八版）	玉手箱を開くまで	一、六〇〇	一二〇
敏郎先生著（十版）	人のアラ世間のアラ	一、二〇〇	一二〇
仲小路閣下（六版）	新舊一新	一、六〇〇	一二〇
芳賀博士著（五版）	筆にまかせて	一、八〇〇	一二〇

發行所　東京麹町區大邉三ノ二番　電話九段二〇九一番　振替一二〇八六番　日本書院

エッチコール著

法學士 黒田禮二
法學士 谷島勝太郎 先生共譯

(最新刊)

產業自治とギルド社會主義

四六判特製 五百三十頁 定價二圓八十錢 送料十二錢

集產主義の劃一に慊焉たらずサンヂカリズムの頹廢を憎惡し玆に兩者の批評より出でゝ之が統一に向ひたる英國ギルド運動の出現は將に世界の勞働思潮に一個の時期を劃するものである、エッチコール氏がギルド運動の耆宿驍將たるは敢て絮說の要を見ないが其の該博なる理論と圓滿なる運用の實際とを兼て而も極めて明快に論評した點に於て本書の如きは確に彼の數ある文獻中の白眉である、尠くとも學者や實際家の共に等く雀躍推讀す可き良書の一たるを信ずる譯文亦平易にして暢達廣く江湖にお薦めする

堀江歸一先生著

勞働組合論

定價金二圓 送料拾貳錢

瀧本誠一先生著

利益分配法

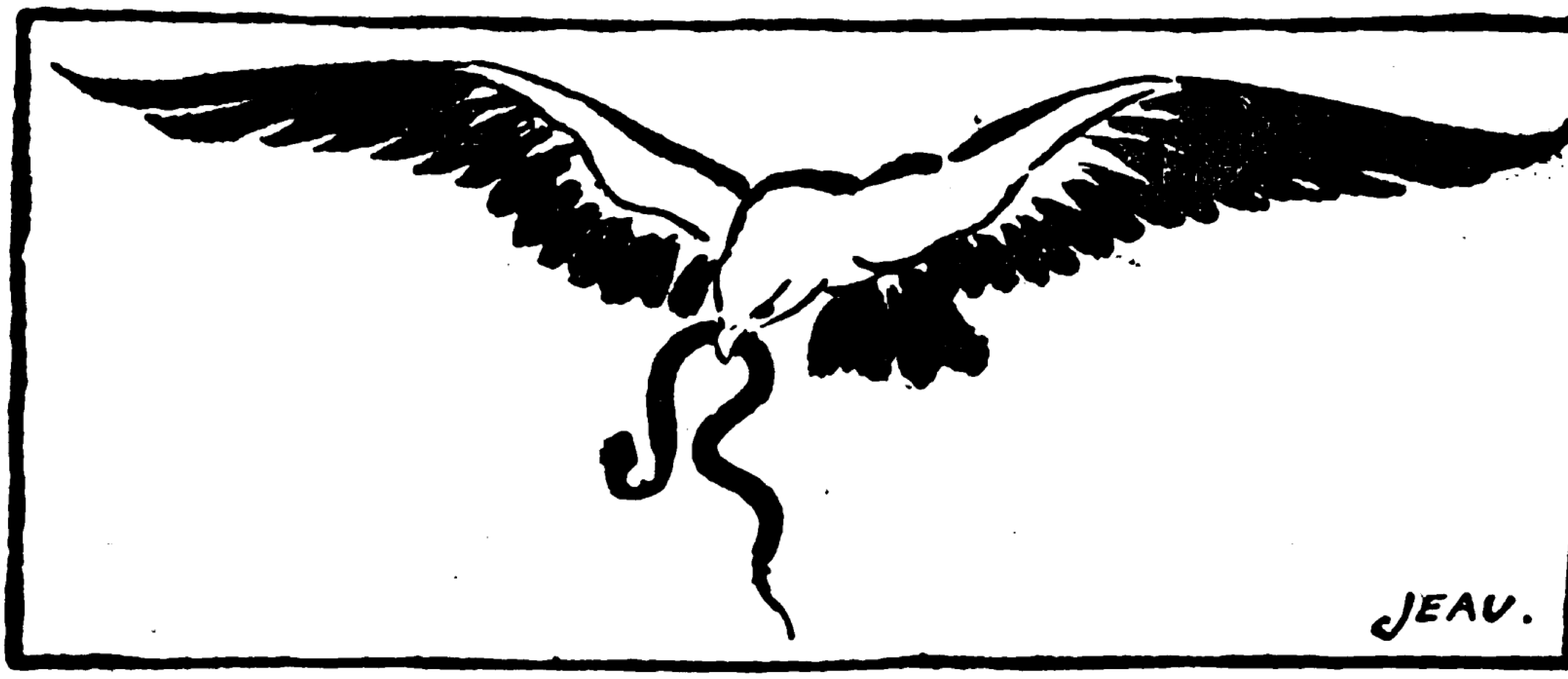
定價一圓八十錢 送料二拾錢

エードウィン ビーヴァン原著 法學士田邊忠男先生譯 四六判特製 五百三十頁 定價參圓卅錢 送料十二錢

晩近獨逸社會民主黨運動史

歐洲大戰は資本主義の崩潰を促進した、と同時に社會主義其者に於ても舊來の正統的因襲を脫せしめずには置かなかつた、此の文化發達上に深遠な社會進化の眞相を捉へるには怎うしても各國の社會主義運動史を繙くの外は無い就中獨逸の歷史に於て「現代の奇蹟たる獨逸革命」を合理的科學的に闡明せんと欲するものは何を措いても先づ本書を讀め。晩近社會運動の眞摯な研究者、殊に渾沌たる現代の獨逸に興味を有する人々は必ずや該國の社會現象の縱橫に纏れた大綱を摑み得るだらう

東京市芝區三田一丁目三十三番地　**國文堂書店**　振替口座東京四六九四九番



改造六月號

内閣の命數と國民の意氣

左黨は思ふ存分に膨大した。政府及政友會の豫期通りに肥滿した。しかし、將來の政局がしかく原内閣の思ふがまゝに運行するかは疑問である。政友會の思惑通り我黨内閣萬歲で行くことは、殆ど絶望と稱せねばならぬ。

憲政實施以來、今回の總選擧ほど國民の冷淡であつたことは類のないことである。蓋し國民の大部分が現選擧法に愛憎をつかし、現行法によりて、選擧されたる代議士に何等の共鳴も、何等の期待も繫いでおらぬ以上、かくあることは當然の歸趨でなければならぬ。

小選擧區制の弊は顯然である。見よ、選出されたる代議士がいかに縣會議員化し、市會議員化したるかを。こゝにも現内閣失敗の一汚點が鮮かに印せられたではないか。

また、金力を背影とする政商等が、自己の名譽のために、自己の便宜のために、幾十萬の財を擲した結果、議政府に送られものゝ多いのは、今日主義（ツーデーズム）の原氏や、政友會から見れば、成功だろうが、政治の理想、少壯の日本を標的として見ればそこに、政治の墮落、國民の墮落が歷々指摘さるゝのみで、新日本の表徵、新興國の意氣は永へに抹殺されたのだ。

多數黨から、絶體多數黨に成つた政友會を背影とする原内閣は、その基礎に於て一段の固さを加へたやうであるが、これは眞の國民の輿論を基礎とせない空中の樓閣である。政局はこれから一警紛糾し、國民の憤怒は新議會召集と共に、原内閣に向つて放射さるゝことだろう。

反對黨たる憲政會の旗幟は、依然として普選案でなければならぬ。普選案の高唱を忘却するが如きことは斷じて許してはならない。國民は嚴重に反對黨の言論、行動を監視し、督勵し、一日も早く、普選案を實行せしめて、國民大多數の利福のための政治を行はねばならぬのだ。

長いものに卷かるゝ事は意氣を佝び、正義に殉する我國民の忍ぶ能はざる所である。左黨の思ふがまゝに讓歩、妥協して行くことは眞實性の充溢した我が國民に出來難いことである。

今回の選擧は、少くともツーデー・ズムの勝利であつたろう。しかし明年も、明後年も實在して行かねばならぬ、我々は、自由の平等のため、自己の權利のため、社會の進化のため、一日も早く普選案の實現への奮鬪を持赦せねばならぬ。

精神的創造或は發明の心理

米田庄太郎

緒言

古今未曾有の大戰爭、尨大なる露西亞帝國や、旭日の登るが如き旺盛なる勢を以て進歩しつゝありし獨逸帝國をして忽然壞滅せしめたる世界的大戰爭、人間生活の諸方面に於て重大なる變動を生ぜしめたる此の世界的大戰爭が、幸ひに終結を告げたる今日、人間生活の諸生面に於て、改造の叫びが盛んに起つて來たのは當然な勢ひである。戰爭は古來一般に破壞的なるものであるか、又は建設的なるものであるかと云ふ問題に付ては、學者間にも異論があつて、或人々は戰爭は常に又は少くも一般には破壞的のものであるとして、極力之を排斥するに對して、他の人々は戰爭を以て最も重大なる文化的一因素であるとして、文化の發展には戰爭の必要缺く可からざるものなる事を强調して居る。尙ほ戰爭は野蠻時代に於て、又古代の文明國にありては、建設的なる有益なる進歩的一因素であつたが、之れに反して今日の文明國にありては、夫れは甚だ破壞的なる有害なる社會的一勢力であると云ふが如き、一種の折衷說を唱ふる人々もある。余は玆に此の問題を論究しようとは思はないから、之を組織的に論述することは避けたいが、併し何れの場合に付て考察するも、戰爭は常に少くも直接には破壞的な方面を有つて居ることは、疑はれない事實である。而して此の破壞的方面を必ず具有するが爲めに、國民の發展、人類の進歩が停止しない以上は、戰爭は常に改造問題を起すものである。尙ほ戰爭の破壞的方面が大なるほど、又之れに伴なふて起る改造問題は大なる可べである。大なる破壞は大なる建設、大

なる改造を伴なふ可きである。若し然らずば國民の發展、人類の進歩は停止せざるを得ない。余は今回の世界的大戰爭が勃發して以來、其の破壞的勢力の大なるを見て、戰後盛に改造問題の起る可きを豫想し、又其の改造問題の甚だ重大なるものである可きを豫想して居つた。殊に開戰前に於ける歐米諸國民の社會的文化的進化が、或意味では行き詰りかけて居ると考へて居つたから、今回の世界的大戰爭は若し其の破壞的勢力の甚大なる事によりて、全く歐米諸國民の元氣活力を消耗せしめない以上は、戰後の改造問題は甚だ重大なるものであらうと豫想して居つたのである。但し夫れと同時に、余は今回の世界的大戰爭の結果として、全く新しき社會的勢力が忽然生れてくると云ふ樣な事はあるまいと考へ、戰後改造の原動力或は運載者となるものは、開戰前に於て既に相當に發達せる或社會的勢力であらうと推察して居つたのである。而して數年前に發表せる諸論文に於て其の愚見を述べて置いたのであるが、余は今日の形勢に於て愚見が大體上適中して居ると信じて居るのである。

却說今日の如く人間生活のあらゆる方面に於て、改造問題が盛に論議さるゝに當て、吾々學究の徒も夫れ夫れ專攻の學問上より見て、諸般の具體的改造問題の解決に、何等かの貢献をなさねばならぬ義務がある。而して今日の如く人間生活のあらゆる方面に於て改造の必要が叫ばれるに當ては、如何なる學問を專攻する學究も、何等か之れに貢献する處がある可きである。若し此の際何物をも貢献しない學究があるとすれば、かゝる人々は眞に學究と稱せらるゝ價値なきものである。蓋し何れの學問も、何等かの方面に於て人間生活の進歩發展に意義を存す可きものにして、然らざる以上は、夫れは到底眞に學問と稱せらる可きものでないからである。今日改造問題を以て單に一時的な流行物に過ぎないものとして之を蔑視し、之れに觸れないのを以て自から高しとするが如き學究は、眞の學究ではなくして徒食の遊民である。

併し是れと同時に又學究の徒の大に注意す可き點がある。夫れは只箇々の實際的改造問題のみに沒頭せずして、更に改造の根本義を究明することである。余は此の點は殊に哲學や社會學の如き學問を專攻する學究の徒の注意す可きもの

であると信ずる。宇宙人生の發展、又は社會生活や文化生活の進化を其の全體より、又其の根本より見て考察することを、其の本來の任務となす哲學者や社會學者は、殊に改造の根本義を究明する爲めに盡力す可きものと思ふ。もつとも今日の如き人心の大に昂憤せる時期に於ては、かゝる根本的な深奥な問題は、あまり世人の注意しないものであるかも知れぬ。又かゝる問題は夫れこそ學究の研究に任せて置いてよい閑問題である、我々は目前に切迫せる實際問題に付て具體的な改造を要求して居るので、そんな閑問題の研究に耳を傾けて居る暇はない、吾々にはそんな事に興味を有つ餘裕はないと云ふ人々があるかも知れぬ。而して余は今日の場合にありて、我國に於ても此の如く感ずる人々の少なからざるを知ると同時に、又決して其等の人々を責めようとは思はぬ。否な深く其等の人々に同情する。余自身も實際の生活から見れば同様に感じて居る一人である。併し無力ながら學究の一人として自分を考へる場合には、只目前の箇々の改造問題を論究するだけに限らず、更に其等の問題の深い方面をも考究す可き義務があると信ずる。要するに余は實際問題を決して輕視せず、之を非常に重要視すると同時に、又之れに捕はれず、常に其の深い方面に注目して、根本的に之を究明することを以て學者の任務と信ずるのである。それで玆に改造問題の深い方面に關する余の研究の一片を公にしたいと思ふ。而して本論文に於て余の論究せんとするは、改造の根柢たる新思想は心理學上より見て如何にして天才家の腦裡に生れるかと云ふ問題である。然るに余の見る處によれば改造とはつまりは精神的創造である。されば改造の心理は結局精神的創造の心理によりて究明せらる可きものである。而して今日余輩の專攻する社會學に於ては、一般に精神的創造を發明と稱して居る。是れは余の舊師タールド先生の用語から始まつたと思ふが、とにかく玆に發明の心理を論究して、以て精神的創造及び改造の心理の一般を究明したいと思ふ。但し本雜誌の性質上出來るだけ通俗的に論述することに注意する。

（一）創造或は發明の一般的意義

夫れ文化生活の眞相は如何なるものであるかは、古來學者思想家の頭を惱ませる大問題にして、之を考察する立場の異なるに從ふて種々樣々に解決されて居る。而して此の問題の實質的解決を望むに於ては、到底萬人の一致する見解に到達することは出來まいかとも思はれるが、併し之れが形式的解決を求むるに於ては、大體上何人も承認し得る一般的見解を立てる事が出來ようかと思はれる。然らばかゝる一般的見解と云ふは、如何なるものであるかと云ふに、夫れは文化生活とはつまり社會的に傳播或は普及せる精神的創造或は發明の大體上の組織的統一であると見る見解である。要するに文化生活とは發明或は精神的創造の社會的傳播或は普及せるものが、大體上組織的に統一されたるものであると見ることには、何人も異議を挿むまいかと思ふ。而して同一の見解よりして、吾人は文化生活の發展とは、矢張り形式的に考察しての事であるが、つまり新しき發明或は精神的創造が既存の發明或は精神的創造に取り代はりて、又は之を完成して又は其の上に加はりて、大體上組織的統一的に集積し行くことであると云ひ得られると思ふ。新しき發明が舊き發明に取り代り、又は之を改良し完成し、又は其の上に加はりて、傳來の發明の基本を改良し、增大し、夫れによりて其の基本が發達し、人生が愈々豐富になり、高尙になり行くことが即ち文化生活發展の形式的意義であるのである。玆に文化生活の眞相及び其の發展の意義に付て、諸家の說を批判的に考察し、又は歷史的社會的事實をあげて余輩の右の見解を論證する暇はないから、只其の主意だけを簡單に說述するに止めて置く。

今文化生活の眞相及び其の發展の意義を形式上より見て右の如くに解するに於ては、文化生活を深く理解する爲めに吾人の考究すべき根本的問題は、先づ發明或は精神的創造の概念を出來るだけ精確に決定すること、次に發明は如何なる原動力によりて產出されるかと云ふこと、次に發明は如何にして產出されるかと云ふこと、次に發明は如何にして社會的に傳播し普及するかと云ふこと、次に幾多の發明が如何にして大體上組織的に統一されて發明基本を形成するかと云ふこと、次に其の發明基本の發達が如何にして行はるゝかと云ふこと、換言すれば新しき發明が如何にして舊き發明に取り代り、又は之を改良し、完成し、又は其の上に加はりて、以て傳來の發明基本が改良され增大して行くかと云ふ

こと等の諸問題であらねばならぬ。併し本論文に於て余の特に講究して見たいと思ふは、第三に擧げたる問題、即ち發明は如何にして産出されるかと云ふ問題である。但し此の問題も玆に其の全體に付て論究せんとするのではなく、其の中の一部分即ち天才家の腦髓に於て如何にして發明が産出されるかを心理學的に論究せんとするだけである。されど研究の混雜を避けるために、先づ發明或は創造の概念を簡單に論述して置きたいと思ふ。

上に述べし處によりて察知される如く、余は發明と精神的創造とを同一視するのである。つまり發明とは即ち精神的創造であると解するものである。而して發明を此の如き廣義に解して、之を社會生活、文化生活の中核と見る見解を、少くも社會學上始めて組織的に展開したるは、余の舊師タールド先生であると思ふが、併し今日では發明を右の如き廣義に解することは、廣く學界に行はれて來て居る。而して余は玆に夫れが爲めに特に辯明を加ふる必要はないと信んずる。併し發明を精神的創造と同一視するといふだけでは、只發明の概念の範圍を示すだけで、まだ其の概念の內容を決定したとは云はれない。然らばかゝる廣義に決定せる發明の概念の內容、或は精神的創造の概念の內容は如何なるものであるか。

最近に到着せる佛國の哲學評論(Revue Philosophique de la France et de l'étranger 此の雜誌はリボー氏の創設せるものであるが、今日は過日我國に漫遊されしレヴイブリュル氏が監理されて居る）千九百十九年十二月號の卷頭に載せられて居るアペル、レー氏の論文「發明」（A. Rey, L'Invention）の始めに發明の一般的定義が左の如く述べられて居る。

吾人は發明とは心意生活の組織されたる機能にして、夫れによりて最とも屢々心像及び表象、觀念及び概念、判斷及び推理が相互に連結せられ、相互に混交するが、併し常に本質的には新しきもの、或は吾人自身の活動によりて創造せられ生産されたるものとして見られる諸狀態が、意識に於て精練せられ、出現するものであると解する。

右の發明概念の定義はレー氏が、從來現はれたる諸家の概念を參考して、立てられたるものにして、恐くは今日の發

明概念を比較的に最とも明白に云ひ表せるものであると思ふ。而して余の是れまで立てゝ居つたものとは本質上一致して居るのである。（拙著「現代人心理と現代文明」第一章參考）。併しレー氏は發明を直ちに一の心理的機能として觀念して居るのに對して、余は之を一の心理的生產物、或は精神的創造物として觀念して居つて、其の點に於て余の見解は少くも其の云ひ表はし方に於て異なつて居るのである。要するにレー氏は「最とも屢々心像及び表象、觀念及び概念、判斷及び推理が相互に連結せられ、相互に混交するが、併し常に本質的には新しきもの、或は吾人自身の活動によりて創造せられ產出されたるものとして見られる諸狀態が、依て以て意識に於て精練せられ出現する處の、其の心意生活の組織されたる機能」其の物を發明と稱せらるゝのであるが、余は之れと異なりて同氏の云ふ處の其の「諸狀態」其の物及び夫れが客觀化されたる者を發明と稱し、而して其等の諸狀態が依て以て精練せられ產出される心理作用を假りに發明作用と稱して置くが、併し夫れは決して特定の單純なる心理作用ではなく、種々なる心理作用の種々なる結合及び協働によりて成立する複雜なる心理作用にして、其の本質は簡單に云ひ表はされ得るものでなく、詳しき分析によりて始めて理解し得られるものと考へるのである。而して余が此の如き見解をとるのは、是れ發明を以て天才の本來具有する一種の神秘力であると見る謬見や、又は本能と云ふ語の非科學的使用によりて、發明的本能と稱せらるゝが如き特定の本能の存在するを主張する謬見を避けんが爲めである。今日の研究の程度に於ては、發明產出の心理的過程は大體上明かに理解されるが、而も其の心理的過程がよく展開して發明を產出するのは、特に天才家の腦髓に於てであつて、而してかゝる腦髓が如何にして產出されるかは、生物學上まだ能く理解し得られないので、發明の產出は結局今尙ほ神秘の中に包まれて居るから、其點から見れば發明はつまり神秘的なる精神的產物或は創造であるとも云ひ得られる。併し夫れは特に發明を產出する神秘力の存在を肯定するものでなく、只生物學の研究の不完全なる爲めに、發明の產出される生物學的條件はまだ究明されて居らないことを意味するだけである。夫れが爲めに直ちに發明を產出する特定の神秘力が天才家に本來具はつて居ると認め、而して今日の心理學によつて成し得らるるだけの研究をも試みやうとしないのは、

發明の科學的研究上承認し難き謬見である。又若し本能の概念が今日心理學及び生物學に於て如何に嚴格に決定されて科學的研究の對象とされて居るかを學ぶときは、發明の如き高等な、且つ複雜な精神的產物を產出する樣な本能の存在し難きことは、明らかに會得されるのである。要するに發明的本能を說く人々は、發明を神秘力の產出するものと見る舊見解を、科學的術語によりて新たに云ひ表はせるだけで、其の見解は實質上、毫も舊見解とは異なつて居らないのである。

(二) 發明は箇人的產物か又は社會的產物か

余は發明の心理的過程を研究せんとするに先だちて、尙ほ少しく述べて置かねばならぬ問題がある。夫れは發明は箇人的精神の產出するものであるか、又は社會的に心と心との相互作用から自から產出されるものであるかと云ふ問題である。此の問題はつまり社會現象は箇人意識の產出する箇人的產物が一定の作用によりて社會的にされるものであるか、又は社會意識の產出する集團的產物にして、始めより社會的生產物であるかと云ふ問題を、異なれる言葉で云ひ表はせるものにして、社會學上の大問題であるのである。而して今日此の問題に付て、大體上三種の解釋が試みられて居ると思ふ。一は發明は本來箇人精神の生產物にして、社會的に發明が行はれると云ふ樣な事は、社會意識の性質上有り得可からざるものと見るもの、二は發明は本來社會意識が集團的に產出するものにして、箇人意識は只之を受け入れるものであると見るもの。三は發明に心と心との相互作用及び協働より自然に產出されるものと、箇人精神の人格的活動の生產物であるものとの二種あると見るものである。而して前者を特に民族心理現象と見做し、後者を特に歷史現象と見るのは、獨逸の民族心理學者の間に行はれて居る見解である。(拙著「民族心理講話」參考) 余は此等三種の見解の中で、先づ第三の見解を排斥する。蓋し社會現象或は結局發明に付て、右の如き二種の區別は到底立てられるものでないと考へるからである。さればとて第一の見解にも亦第二の見解にも、其の儘で贊成するものでない。余も第三の見解の

如く、第一及び第二の見解の調和を試みんとするものである。而して發明は直接には天才家の腦髓に於て行はるゝ一定の心理的過程によりて生れるものと見るに於て、第一の見解を承認して居る。併し特定の發明をして天才家の腦髓に於て產出せしむるに至る根本的勢力は、一定の集團心理的勢力であると見るに於て、余は第一の見解とは異なれる見解を立て而して第二の見解の主意を適當にモヂフアイして攝取して居るのである。玆に詳しく余の見解を論述して居る暇はないが、其の一般は目下印刷中の拙著「經濟心理の研究」第二章「經濟發達階段の心理化說の發達」中に述べて居るから、同書發行の節、參考に供せられたい。又詳しくは遠からず公にせんとする拙著「社會學體系」中に論述する考へである。玆には只其の極大意だけを述べて置くが、要するに余は一定の時代の文化は其の時代の社會組織によりて產出されるものと認め、而して社會組織は原始文化の時代に於ては、一定の血族團體を中心として組み立てられ、文化發展の時代に於ては一定の社會階級を中心として組み立てられたる階級組織を意味するものであると認め、其の中心となる階級を支配階級と稱し、又各支配階級には特有の社會的感覺及び理性が本來具有せられるが、而も何れの支配階級も其の特有の社會的感覺及び理性を十分に發揮する發明を自から產出するものでなく、之を十分に發揮するのは天才家の任務にして天才家は之を十分に發揮する爲めに種々なる發明を產出するものであると考へるのである。余は此の如き見解の上から社會の進化、文化の發展を研究して居るのであるから、玆に發明の心理或は心理的過程を研究せんとするに當て之を天才家の腦髓に於て、如何にして發明が產出せらるゝかを、心理學的に研究せんとするのである。

却說以上述べし諸點を讀者諸君に注意して置いて、是れより天才家の腦髓に於て、發明の產出される心理的過程を研究しようと思ふが、先づ是れが爲めに特に發明に付て注意す可き點と、夫れに基づいて立てたる研究の順序とを簡單に述べて置く。

今精神的創造とか發明とか云ふても、夫れは決して無より有を造ることを意味するものでないことは明らかである。而してさきに述べしレー氏の一般的定義によりても察知される如く、今日社會學上の問題としての創造或は發明とは、

つまり既存の心理的要素を結合し、或は總合して新しき心理的生產物を產み出す心理的生活の組織されたる機能、或は其の心理的生產物其物を意味するものとして觀念されて居るのである。倘ほ發明に於て既存の心理的要素を重要視する此の一般的見解を更に一層極端に推しつめて、發明を以て單に既存の心理要素が新しき順序に於て結合せるものに過ぎないと考へ、其の中に何等の創造的な意義をも認めようとはしない人々もある。併し是れはあまりに既存の心理的要素を過重するより起れる謬見にして、吾人は既存心理的要素を離れて發明の生れ難きこと、既存の心理的要素の甚だ重要なることを認めると同時に、又發明には既存の心理的要素とは異なれる新しき或物の存在すること、及び此の新しき或物を創造する特別なる心理作用の働いて居ることをも認めなければならぬ。要するに發明には既存の心理的要素が材料となる方面と、之れが新しき或物に成される方面との二方面がある。而して材料としての既存の心理的要素が、新しき或物に化成されることは、決して自然的器械的作用によりて行はれるのでなく、特定の心理作用が特定の腦髓に於て非常なる強度に高まりて働くが爲めに行はれるのである。換言すれば特定の腦髓に於て特定の心理作用が非常に高まり、而して夫れによりて既存の心理的要素が總合せられて、玆に新しき心理的生產物が產出されるであるが、其の新しき心理的生產物が即ち發明であるのである。

されば發明を分析して、之を科學的に理解する爲めに、先づ吾人の注目す可きは、既存の心理的要素を總合して新しき心理的生產物を產出する其の心理作用は如何なるものであるかと云ふことである。次に注目す可きは其の心理作用が如何にして既存の心理的要素を總合するかと云ふことである。此の二問題は發明の心理的過程の根本問題にして、之を研究することによりて、吾人は始めて發明の心理的過程を科學的に理解することが出來るのである。それで余は本論文に於ては主として此等の二問題を研究せんとするのであるが、倘ほ發明の材料としての心理的要素に付て少しく述べて置きたいことがある。

夫れ發明の材料は上に述べし如く、既存の心理的要素であるが、併し既存の心理的要素と云ふことを、既に長き以前

より存在せる心理的要素と云ふ意味にのみ解するときは、發明を以て既存の心理的要素の總合と見る見解は少くも不精確であると云ふ非難を免れることが出來ない。と云ふのは發明は常に長き以前から存在せる心理的要素の總合によりてのみ產出されるものでなく、又全く新しき心理的要素をも其の本質的材料となす場合は少なくないからである。而して其の新しき心理的要素と云ふは、即ち自然又は人生に付て發明家或は天才家が新たに發見する事實又は新たに感受する感覺である。吾人は藝術的發明或は創作に於て、殊に天才的藝術家が其の特異なる發達をなせる官能力によりて、自然又は人生に付て感受する新感覺が甚だ重要なる材料となつて居ることを見るのである。而して吾人はかゝる心理的要素をも直ちに既存の心理的要素の中に數へるのは、あまり精確な考へ方ではない樣に感ずる。但し自然又は人生に付て新たに發見される事實にして、夫れが甚だ多大なる思考と工夫とを要するものである場合には、吾人は之を發明と稱してもよいと思ふが、併し天才家或は發明家の知覺力や感受性が特に勝れて居るが爲めに、別に努力を要せずして比較的に容易に知覺される事實、又は感受される感覺は、既存の心理的事實と同樣に發明の材料と見做す方が穩當であらうと思ふ。それで余は發明の心理的過程を研究するに當て、今日之を研究する人々と同じく、發明の材料を單に既存の心理的要素と見做して置くが、併し場合によりては其の中に右に述べし心理的要素即ち余が便宜上單純發見と稱するものをも含めて居るのであることを記憶されたい。要するに余は嚴密に云へば、發明の材料は既存の心理的要素と單純發見とであると云ふ可きであると思ふが、論述の便宜上單に既存の心理的要素と云ふ語を用ゆるに止めて置くのである。

（三）　創造的想像

却說余は前節の終りに於て述べしが如き意味にて、發明は既存の心理的要素を總合する心理作用によりて產出されるものと見るのであるが、然らば其の心理作用と云ふは如何なるものであるか。先づ之を究明することは、發明の心理過程の研究の第一問題である。而して此の心理作用を一定の本能、即ち發明的本能とか創造的本能とか稱せらるゝものの

作用と見る人々もあるが、併しさきにも述べし如く、今日心理學者や生物學者が科學的に解する本能の嚴密なる意味にては、發明の如き高等な又複雜な心理的產物を單に本能の作用から生れるものと認め難きことは明らかである。吾人は發明の心理的過程を正當に理解する爲めには、先づ發明の如き高等複雜なる心理的產物は、決して單純なる本能の如きものの作用から生れるのでなく、夫れは甚だ複雜なる心理作用から生れるものであることを認めて置かねばならぬ。而して其の複雜なる心理作用を精密に分析することに努力しなければならない。

併し既存の心理的要素を總合して發明を產み出す心理作用は　如何に複雜なるものであつても、其の中には特に根本的と認む可き或物がなければならぬ，而して發明產出の心理作用を研究するに當て、其の根本的なる或物を發見することは、先づ第一の問題でなければならぬ。

今發明を產出する根本的心理作用は、創造的想像（l'imagination créatrice)であると見るのは、佛國の心理學者として世界的に著名なるリボー氏の說にして、而して、今日は一般に同氏の說が承認されて居る。さきに引用せるレー氏の新研究に於ても、矢張りリボー氏の說が其の基礎となつて居る。併し余は同氏の說に付て少しく疑問を挿んで居る。玆には同氏の說を紹介して居る暇はないから、(但し同氏の著 Ribot, Essai sur l'imagination créatrice は英語にも譯されて居る）只余は如何なる點に於て同氏と見解を異にして居るかを簡單に述べるだけに止めて置くが、先づリボー氏の創造的想像の概念に付て注意す可きは同氏は之を合理的探究に對立せしめて決定し、其の中より高等なる一切の推理作用を除去して居ることである。而して是れ亦今日創造的想像に付て一般に認められて居る概念であると思ふ。併し余は此の如くに創造的想像と合理的探究とを相對立せしめて觀念するのは、果して穩當であらうかと云ふ疑問を起して研究して見たが、遂にリボー氏の說とは異なれる結論に到着したのである。

夫れ創造的想像に於て想像過程（イマヂナチーヴ、プロセス）が全く合理過程（ラシヨナル、プロセス）を推しのけて獨り勢力を振ふ場合と、合理的探究に於て合理過程が全く想像過程を推しのけて勢力を振ふ場合とを比較して見ると、兩者は全然異なれる心理作用であることは明らかに

認められる。併し玆に注意す可きは創造的想像なるものが合理過程を混へず、全く想像過程として行はるる場合には、其の産出するものは空想或は妄想にして、健實なる發明とは稱し難いものであると思はれると同じく、合理的探究なるものも、想像過程を排して、純粹なる合理過程として行はるゝ場合には、其の産出するものは矢張り偉大なる發明ではないと思はれることである。余は創造的想像なるものが適當に合理過程を交へて働き、又合理的探究なるものが、適當に想像過程を交へて働く場合に、始めて健實なる發明、偉大なる發明が産出されるのであらうと考へて居る。古來重大なる發明をなせる科學者が其の發明を大成せる途行きを詳しく分析して考察すると、所謂創造的想像なるものが甚だ重要なる役目を演じて居つて、夫れは到底合理的探究のみによりては産出され得なかつたものであらうと思はれるのである。獨逸の自然科學者にして哲學者としても著名なるマッハ氏は、科學者の精神的活動と藝術家の精神的活動との間に實際上別段の差異なきことを說いて居るが、注意す可き事である。尙ほヴント氏が其の名著「生理的心理學原論」中に才能に四種の別を立てゝ、詳しく論究されて居ることは、發明の心理の研究に於て大に注意す可きものであると思ふ。玆に同氏の論究を詳しく述べる暇はないから、只其の要點だけを簡單に述べて置くが、要するに同氏の說にすれば、先づ歸納的素質が直觀的空想(die anschauliche Phantasie)と結合すれば觀察的自然研究者、實際的心理學者及び敎育家並に一般に實際家の觀察的才能を發達させ、更に詩人及び藝術家が其の作品に生活の眞實性を賦與する才能も亦此の結合に基づいて發達する。次に歸納的素質が結合する空想(die combinirende Phantasie)と結合する場合には、發明的才能を發達させる。是れ技術、工業及び科學等に於ける發見家及び發明家に特有の才能であるが、更に詩人及び藝術家にありて、適當なるコムポヂションを作る才能、即ち其の作品の諸部分を適當に排列し調整する才能は、此の結合に基づいて發達するものである。次に演繹的素質が直觀的空想と結合する場合には、組織的自然研究者及び幾何學者の分析的才能を發達させる。而してリンネーやキユヴイエなぞの如き形態學的組織家にありては此の才能の直觀的方面が重要なる地位を占め、之れに反してガウスやシユタイナーなぞの如き幾何學者にありては、此の才能の分析的方面が重要なる

地位を占めて居る。終りに演繹的素質が結合する空想と結合する場合には哲學者及び數學者の思辨的才能が發達する。而して哲學者にありては結合する空想が主となり、數學者にありては演繹的悟性が主となつて居る。

以上述べしヴント氏の說によりて見るも、發明を產出する才能或は心理作用には如何に推理作用が混交して居るかは明らかに理解されると思ふ。されば、余は創造的想像を以て發明を產出する根本的心理作用と見る場合には、之を以て全然合理的探究と對立するものと考ふるは穩當であるまいと思ふのである。而して創造的想像の中には其の働く場合によりて種々程度を異にするが、其の程度の如何を問はず高等なる推理作用も含まれて居ると認めるが穩當であらうと信ずる。併し是れと同時にリボー氏が發明の心理的過程に付てまだ十分に意識して居らなかつたと思はるゝ、或は少くもまだ十分に注意して居らなかつたと思はるゝ方面から考察すると、發明の中核となるものを產出する心理作用は常に推理作用以外の或物であることが發見されると思ふ。而して余は夫れはベルグソンの直觀と稱するが如きものであると考へる。ベルグソンの直觀と稱するは如何なるものであるかは、今日では我國に於ても識者間には一般に知られて居ると思ふから、玆に別に說明を加へずに置くが、要するに余はリボー氏の創造的想像と稱するもの、少くも余が發明產出の根本的心理作用と認める創造的想像なるものは、更に分析を要する複雜なる作用にして、夫れは少くも根本的には直觀作用と推理作用とより成立するものと考へるのである。是れより簡單に愚見を述ぶることとする。

(四) 創造と生產

前節に述べし如く、發明は創造的想像の作用によりて、既存の心理的要素が總合せられ、一の新しき心理的生產物として產出されたるものであるが、然らば創造的想像は如何にして既存の心理的要素を總合し之を新しき心理的生產物に化成するかと云ふに、玆に注意す可きは完成せる發明には其の中核となる一定の觀念があつて、而して此の中核觀念によりて既存の心理的要素が總合せられ化成せられて居ると云ふ事實である。されば發明の心理的過程の研究に於て、吾

人は先づ其の中核觀念が如何にして、産出されるかに注目し、次に其の中核觀念によりて如何にして、既存の心理的要素が總合せられ、化成されるかを考究せねばならぬ。余は發明の研究に於て從來右の二問題を區別して居つたのであるが、最近に佛國の學者マントレー氏が發表されたる論文を見ると、此の區別に基づいて天才家の知的生産物に付て、甚だ興味深き研究を試みて居る。(F. Mentré, Les lois de la production intellectuelle. Revue Philosophique, Nov. & Dec. 1919.)同氏は多數の事實を考察して、天才家或は偉人の發明に付て、其の創造の時代と生産の時代とを區別し、而して其の創造の時代は普通に成年期(la maturité)以前にある、或は創造力は普通の成年期以前に發動すると論結し、更に「一般に未來の偉人は十二歲以前に感覺を集積し、十三歲と十八歲との間に感情(サンチマン)、而して十八歲と二十五歲との間に觀念(イデ)を集積する」とまで云はれて居る。又生産の時代に付ては二十歲ぐらひから三十歲ぐらひまでの一期と、四十歲ぐらひから五十歲ぐらひまでの一期との二期を區別して居る。而して又左の如くに結論して居る。「要するに發明力は生存の二期に於て其の最頂上に達する。即ち二十五歲頃と四十五歲頃とを中心とする二期である。一は生活の春に於ける美はしき花、他は生活の秋に於ける風味ある果實である。想像力の此等の飛躍の各々は、凡そ三十年間繼續する間斷なき發達の出發點であり得る。併し之れは只非凡な活力を賦與され、非常に都合よき境遇に置かれたる天才家にありてのみ見られることである。普通には發明のリズムは夫れよりも氣まぐれなもので、又其の創造はそれよりも暫時的なものである。」但しマントレー氏は哲學者の知的生産に付ては、右の一般的法則或は傾向に對して例外の少なからざるを認めて左の如く述べて居る。「多産の時期の廣さが最とも大なるは、恐くは哲學の領分に於てであらうと思ふ。哲學者も總ての創造家の如く早熟である。彼等は早くから彼等が解釋せんが爲めに己を獻げる問題に付て明らかな又は曇れるヴイジヨンを有し、彼等が彼等の腦髓の中に藏する可能性の混雜せる豫感を有つて居る。併し彼等の多くは只おそく彼等のオリヂナリチーを表現する。而して或者は最老年に至るまで彼等の知的活力を完全に保持する」。更にマントレー氏は四十年ぐらひより五十歲ぐらひまでの生産期には屢〻戀愛的熱情の復活の伴なふことを說いて居るが、是れは性慾學上より文

化を考究せんとするものの大に注意す可き事實であると思ふ。(但し此の問題に付ては余は他日別に論述したいと思ふから、此處には之れに觸れずに置く。)

余は右のマントレー氏の研究は、余がかねて天才家の腦髓に於ける發明の中核觀念の出現を研究する點から見て、發明に創造と生産との區別を立てゝ居つたことの正當なるを、愈々確證するものであると考へて、大に興味を感じたのである。要するに發明の中核觀念が天才家の腦髓に現はれてより、夫れが現實に發明として生産されるまでの期間の長さは、文化生活の方面が異るに從ふて、又天才家の箇人的及び社會的なる種々の事情に從ふて、種々異なれるものである。併し何れの場合に於ても其の期間は存在するものであると思ふ。而して余は其の中核觀念の出現を發明の創造と稱し、又夫れが既存の心理的要素を綜合して、現實に發明を大成するのを、發明の生産と云はんとするのである。此くて余の見地より見れば、發明の心理的過程の研究は、發明の中核觀念の出現、即ち發明の創造の研究と、發明の大成即ち發明の生産の研究とに大別されるのである。而して余は發明の創造、即ち發明の中核觀念の出現は、結局主として直觀の作用によつて成就し、之れに對して發明の生産、即ち發明の大成は主として推理の作用によりて成就するものと考へるのである。此くて余は發明全體を産出する心理作用と見られる創造的想像に付て、リボー氏の見解を一部分正當と認むると同時に、又其の全體を承認せず、創造的想像はつまり直觀と推理との二作用の結合であると考へるのである。

(五) 發明とインスピレーション

余は上に述べし如くに發明の中核觀念は結局直觀の作用によりて産出されるものと考へるのであるが、然るに直觀が行はるゝ場合の心理的狀態は平常の心理的狀態とは異つて居つて、心理的機能の非常に高上せる一狀態である。而してインスピレーションの行はるゝ瞬間の心理的狀態も亦同樣に、心理的機能の非常に高上せる一狀態であつて、兩者の行はるゝ場合の心理的狀態は大に類似して居る。されば表面上から見れば兩者は同一物であるが如くにも見ゆる。即ち直

觀とインスピレーションとは結局心理的機能の非常に高上せる狀態に於て働く、同一の心理作用であるが如くに見ゆるのである。而して普通に發明を以てインスピレーションの產物であるが如くに、自己の發明の實驗に付て說述して居る發明家、天才家は少なくない。此くて發明はインスピレーションの產物であると見る學說が立てられて居るのである。併し發明を以てインスピレーションの產物と見る此の學說には、發明を以て(少くも其の中核觀念に於て)直觀の產物であると見る余輩の說とは根本的に異なれる點がある。それで余は玆に發明を以てインスピレーションの產物と見る說、卽ち便宜上余が發明インスピレーション說と稱するものを批判的に考察して、愚見を闡明する一助としたいと思ふ。但し詳しく論述する暇はないので、極簡單に要點だけを述べて置く。

今一般の解釋によると、インスピレーションが心理的に他の心理作用より區別される特質が二つある。一は其の忽然性にして、二は其の非箇人性である。卽ちインスレーションは先づ突然又無意的に心理生活に現はれるものと觀念せられ、次に意識的箇人に對して宛も外來的な勢力を啓示するが如くに、非箇人的に現はれるものと觀念されて居る。されば發明インスピレーション說は結局發明を以て突然外部より發明家に與へられるものと見るのである。卽ち發明を以て發明家、天才家の意識的努力の生產物ではなく、結局は一定の瞬間に於て外部より突然に與へられるものと見るのである。

然るに發明を以て少くも其の中核觀念に於ては、直觀の產物と見る余輩の說に於ては、直觀を以て本來箇人精神の意識的努力によりて行はるゝ超推理的或は超論理的作用と見るに從ふて、發明を以て矢張り箇人精神の意識的努力の產物人格的不斷努力の產物と見るのである。此くて發明は心理的機能の非常に高上せる狀態に於て產出されると見るに付ては發明インスピレーション說と余輩の說とは一致して居るのであるが、併し發明インスピレーション說は此の際、發明が發明家、天才家の腦髓に於て忽然として外來の勢力によりて與へられると見るに對して、余輩は之を發明家天才家の人格的能爲活動の集中或は意識的能働の凝結によりて產出されると見るに於て異なつて居る。而も玆に大に注意す可き

點がある。夫れはインスピレーションを以て箇人の腦髓に於て心理的機能が非常に高上せる刹那に忽然として外來勢力によりて或觀念の出現することであると見るは、果してインスピレーションの眞相をよく究明せる見解であるや否やと云ふ問題である。

今表面上より見ればインスピレーションは箇人の腦髓に於て心理的機能が非常に高上せる刹那に或觀念の忽然として外來的勢力の作用によりて與へられたるものの如くに出現することであるは疑はれない。只問題は是れが果してインスピレーションの眞相であるや否やにある。然るに余輩の知る範圍内にありては、インスピレーションの心理學的分析はまだあまり進歩して居らない。不幸にして余輩はまだ專門の心理學者よりして權威ある研究の結果を呈供されて居らない。而して今日心理學者がインスピレーションに加へて居る說明は種々樣々にして、余輩は其の何れに從ふ可きやを迷ふ程である。併し今日の研究によりて見るも、其の忽然性は表面的のものにして、決して其の深い本質を表示するものでないと思ふ。忽然或觀念が出現するが如く見ゆるのは、夫れは只かく見ゆるだけで、本來は發明家の永き意識的努力能働的活動の結果であると思はれるのである。而して此の事は發明家が嘗て其の發明に付て何事をも考へたことがないのに、或機會に偶然其の發明が彼の腦髓に現はれたのでないのをも見て推察される。假令其の發明或は其の發明の中樞觀念が出現せる瞬間にありては、其の出現が忽然的であるにせよ、夫れに先だちて發明家は一般に大に苦心し、彼の全力を絞つて之れが爲めに努力して居るのである。されば發明が忽然天才家の腦髓に現はるゝと云ふも、夫れは決して全くの忽然を意味するものでなく、連續的努力の一節或は一頂點としての忽然を意味するものである。つまり發明家の發明的努力の連續が心理的機能の非常に高上せる狀態に於て、一飛躍をなす際に、其の飛躍せる距離或は過程が意識に上らなかつたことを意味するのであると思ふ。併し發明の忽然性の眞相を此の如くに解すると、玆に又重大なる一問題が起つてくる。夫れは無意識的に高等なる心理作用が行はれるものであるかと云ふ問題である。

吾人若し無意識腦働說を承認するに於ては、此の問題は容易に解決し得られるのである。併し余は此の學說を承認す

ることは出來ないのである。故に其の理由を詳しく述ぶることは出來ないが、併し今日の心理學上の研究に付て一般の知識を有する人々に對しては、別に其の理由を述ぶる必要もあるまいと思ふ。余は無意識腦働說を承認せず、而して總て心意の活動は意識的であると考へたいのである。併し夫れと同時に意識に顯在意識或は覺醒意識と潜在意識との別あるを認め、心意の活動にして顯在意識的ならざるものは、總て潜在意識的であると考へたいのである。かくて發明が忽然發明家の腦髓に現はるゝ場合には、夫れは心意の潜在意識的活動によりて產出されたるものが、忽然潜在意識に上ることを意味するものと解したいのである。但し是れも尙ほ一の假說に過ぎないので、之を確實なる學理に練り上ぐる爲めには大に實驗的研究を積まなければならないのである。

余は發明インスピレーション說に於て云ふ處の發明の忽然性なるものゝ眞相は、大體上右に述べしが如きものであると考へ、更に其の云ふ處の發明の非箇人性なるものもつまりは發明家、天才家の腦髓の非凡なる創始性、偉大なる箇人性を意味するものであると解するのである。夫れは決して發明家の精神以上に偉大なる精神が宇宙に存在して居つて、其の精神が發明家の精神に夫れが自から產出し得ないものを、外部より與へることを意味するものでないと考へるのである。而して發明インスピレーション說の眞義を以上述べし如くに解し、之を發明は少くも其の中核觀念に於て發明家の直觀の產出するものであると見る余輩の說に比較して見ると、結局兩者の間に別段差異の存在しないことを覺るのである。

夫れ余輩の直觀と云ふは、つまり超論理的或は超推理的心理作用を意味するものにして、推理の必然的結論として單に推理の作用を推し進めて行くとのみから、產出され得ないものを洞察する或は覺る或は攫む心意の作用を云ふのである。されば直觀によりて發明の中核觀念を攫むと云ふことは、心理學的にはつまり推理の連續に於ける潜在意識の連續の刹那的斷絕を意味するものであつて、顯在意識の方面から見れば或意味の忽然性が含まれて居るのである。要するに發明インスピレーション說も其の眞相を正當に解するときは、余輩の直觀說と少くも大體上一致するものであるが、而

も余が敢て發明はインスピレーションの産物ではなくして、直觀の産物であることを主張せんとするのは、是れ發明は本來發明家天才家の意識的能働作用、人格的不斷努力の産出するものであると云ふ事を、特に強調して云ひ表はしたいが爲めである。或人が嘗てニユートンに向つて、發見の秘訣を尋ねた時に、彼は夫れは斷へず努力することであると答へたと云ふ。林檎の地に墜つるのを見て、偶然引力の理を覺つたと傳へられて居るニユートンにして、發明發見の秘訣を此の如くに解して居つたと云ふことは、余輩の見解から見て甚だ興味があると思ふ。

（六）發明と偶然

吾人が發明の心理を正當に究明する爲めに、尙ほ豫め注意して置く可きは、發明を以て偶然の産物と見る學說、即ち便宜上余が發明偶然說と稱するものに付てである。而して發明偶然說は根本的に大に發明インスピレーション說に類似して居るが、而も發明の外部的性質或は外來性を一層露骨に強調するに於て、其の特色を示して居る。

今發明に於て偶然の役目を大に重要視する人々も少くないので、現に佛國のスーリオ氏の如きは「發明の原理は偶然である」とさへも主張して居る。(Souriau, Théorie de l'Invention, 1881) 併し同じく偶然を重視する人々の中にも、偶然を全く客觀的意味に解する人々と、其の主觀的方面を重要視する人々とがある。スーリオ氏の如きは、即ち後者の代表的學者にして、氏は發明の原理としての偶然は、吾人の主觀的志向（アンテンシヨン）、吾人の意識的に追求する目的と、發明を決定する外部的又は内部的事件（エヴエヌマン）の進行との會合或は衝突、簡單にいへば内部的目的性と外部的機會との會合より生起するものと解して居るのである。併し偶然の主觀的或は内部的方面を重要視する點に於ては、此の學說は發明インスピレーション說と大差がないので、只少しく見方が異なつて居るだけである。即ち一層科學的な言葉を以て大體上同じ思想を云ひ表はせるものと認め得られるのである。隨ふて吾人はさきに發明インスピレーション說に加へたる論評を、少くも大體上其儘之れに適用することが出來るのである。されば茲に特に注意したいのは、外部的に見たる偶然の發明に於け

る意義である。

吾人は詳しく吟味して見ると、多くの發明に於て外部的偶然が發明の中核觀念の出現に於ても亦發明の大成に於ても一定の役目を演じて居ることを發見する。殊に技術的發明に於て外部的偶然の役目の重大なることが明らかに認められる。而して若し其の偶然の事柄が起らなかつたならば、其の發明の産出は假令不可能ではなかつたとしても、少くも其の時期が大に後れたであらうと思はれる。更に發明の産出が全く不可能であつたであらうとさへ思はれるものもある。されば單に表面的に考察するに止まるときは發明は全く外部的偶然の産出であるとも云ひ得られるのである。今日の土俗學上の研究では農業や牧畜などの實際生活上甚だ重大なる發明も、つまりは原始人の偶然の産物であるとして說明されて居る。尙ほ自然人民の生活上根本的に重大なる殆んど總ての發明は、之を偶然の産物として說明せんとするのは今日の一般の傾向である。併し實際に於て此の說明はどれだけ眞實であるかは證明し難い。是れ自然人民に關する吾人の知識の尙ほ甚だ不完全なると、文獻の徵す可きものなき彼等の發明に付て何等確實なる說明を下すことが出來ないからである。而も其等の發明が其の原始形態にありては甚だ單純なるものにして、自然現象を殆んど其の儘に復現せるに過ぎないことを考へると、假令全く偶然の産物ではないとしても、其の偶然に負ふ處の甚だ大なりしは疑はれないと思はれる。されど文化人民の有する或は彼等の文化を構成する重大なる發明にありては、其の性質は甚だ複雜なるものにして、單に偶然の産出せるものとは認められない。夫れはつまり非凡なる天才の意識的能働作用人格的不斷努力の産物であつて、而して外部的偶然は只其の發明産出の機會を與ふるに過ぎないものと思はれる。併し此く云ふことは決して偶然の役目を輕視するの意味ではない、何れの事物の産出にありても、期成原因と同樣に機會原因の重要なることは疑はれない。如何に期成原因が具はつて居つても、機會原因が現はれない場合には、何物も現實には産出されないのである。而も機會原因は矢張り機會を與ふるに過ぎないので、決して何物をも本質的に産出するものでない。而して此の理をよく理解するときは、吾人は發明に於ける偶然因來の意義を正當に評價することが出來るのである。

却說是れまで論述し來れる處によりて、余は發明或は精神的創造の本質は大體上如何なるものであるか、又其の產出の心理的過程は如何にして究明さる可きものであるかを矢張り大體上說述したと思ふが、要するに余は發明は、勿論一般的に云ふのであるが、其の中核觀念の創造に於ては主として天才家の直觀作用によりて行はれ而して其の生產に於ては、主として推理作用によりて遂行されるものと考へるのである。而して是れより進んで發明の中核觀念の創造に於ける直觀の働き、及び發明の生產に於ける推理の働きを稍々詳しく論究して見たいと思ふのであるが、併し夫れでは本論文があまりに長くなる恐れがあり又余は目下其の暇がないから、本論文に於ては只以上述べし如くに發明の心理過程の研究に關する余の方針を示すだけに止め、他日「發明に於ける直觀と推理」と云ふ題で、改めて本雜誌によりて此の問題に關する余の研究の一般を發表することにしたいと思ふ。讀者諸君が之を諒察されんことを願ふ。

余は目下京大に於ける講義以外の時間は、總て著述に費やしたい積りで、一切の雜誌よりの寄稿の依賴や、又所々より講演の依賴は悉く御斷りして居るのであるが、然るに近來雜誌の經營に於て、又吾々より原稿を徵發する事に於て、非凡の才能を發揮されつゝある「改造」社長山本氏と、勇將の下に弱卒なしとも云ふべき同社京都在任記者濱本氏との巧妙なる催促に迫られて、僅かな時間を盜んで本論文を書き上げたのであるから、論述に不完分な處もあらうと思ふが、是れ亦讀者諸君の御諒察を願ふ次第である。

(大正九年五月一日)

人性樂觀と社會組織

小泉信三

社會主義は人の自由を無視すると云ふ批評は決して新らしいものではない。既に古代希臘に於てもストア哲學の始祖Zeno（基督曆前三四〇——二六五年？）は同じ論據を以てプラトオの『共和國』を評し、國家の制規干渉の及ばざるところなきプラトオの（一種の）共產國家を非として、全く政府なるものゝない自由社會の理想を描いて之に對立せしめたと云ふ事である。此批評は幾度か繰返された後、近年に至つて又新たに勢力を得やうとして居る。最近に於ける西洋社會思想の發展に、何か著しい特徴の認むべきものがあるとすれば、國家社會主義に對する不滿が樣々の形を取て現はれつゝあることは確かにその一つだと謂つて差支はないだらう。物質上の安樂よりも自由に重きを措き、人間の隸屬Slaveryを以て一切諸惡の根源と認めるギルドソシヤリズムは、英本國に於ても我邦に於ても共に漸く贊成者を加へやうとして居る。思量打算を絕したる人間の創造衝動を尊重して『政治上の最高善は自由なる』事『最善に通ずる路は自由の路なる』事を力說するバアトランドラッセルはその『社會改造の原理』を著はしてから讀書界の寵兒となつた。而して近頃ギルドソシヤリストやラッセル等が推重措かざる詩人ヰリヤムモリスは一八八〇年代の英國にマルクスとヘンリイジヨオジ等の影響を受けて社會主義が復活したその頃から、夙くも屬僚的國家社會主義を嫌つて、マルクス系統のハインドマン一派とも、比較的多くヘンリイジヨオジの影響を受けたフエビヤン協會一派とも絕緣して、別に一旗幟を翻へした人であつた。モリスの理想とする境地が如何なるものであつたかは、彼れが規律井然たる公有公營主義の社會を描いたベラミイの『回顧』に反對して、人間が殆ど何等外力の強制を受けず。その意の赴く儘に生活する（と云ふよりも嬉遊する）狀態を想像して書いた News from Nowhere に依て窺ふことが出來やう。このモリスの主張に比較すれば當

かに着實穩當なフエビヤン協會の社會主義の方が久しく實際的な英吉利人の喜ぶところであつたのは決して不思議ではない。然るに今日、勞働黨の爲すなきに失望し、傍らサンヂカリズムの刺戟を受けた一部の英吉利人はこの平凡着實なフエビヤニズムを排して、その一度忘れたヰムリヤモリムを新たに再び迎へやうとしてゐる。そこで、再び國家社會主義の長短得失が頻りに論ぜられることになつたのである。

抑も國家社會主義又は是に近い傾向と、その正反對に立つ思想との相違は何處から起るか。私はこの相違には人間觀又は人性觀の相違があつて、其根柢をなして居ることを認めざるを得ないのである。有り來りの言葉で云へば性善性惡の二說がこの二ツの傾向の基礎になつて居ると思ふのである。人間を利己的動物と見て、而かも各個人利己心の自由發動が社會全體の爲めに望ましからぬ結果に導くべきことを認める以上は、當然個人をしてその爲るを欲せざる事を爲さしめ、或はせんと欲することを爲さしめざる爲めに、何かの形ちで人に强制を加へることが必要となる筈である。それ故公權の强制を無用とするか有害とするか、兎に角之を非認しようとする傾向の社會學說は先づその出發點に於て右に述べたのとは違つた人性觀を立てなければならぬ道理である。卽ち人間の利己的動物であることは之を承認しても、その利己心の自由發動は結果に於て社會公共の利益となるものと認めるか。或は始めから人間の利己的動物たる事を否認して、利己心よりももつと社會的な動機が有力に人間の行爲を支配して居ることを信じるか、この二つの何れかでなければならないのである。正統派經濟學の個人主義自由放任主義は第一の立場に立脚するのであるし、社會主義中公權の强制を喜ばぬ諸派、殊にその極端に走つたゴッドヰン、クロポトキン等の思想には右の第二の人性觀がその根柢をなして居る。此文の標題に所謂『人性樂觀』とは主にこの第二の人性觀を指して謂ふのであるけれども、同時にまた個人主義經濟學の基礎をなす——人間を道義的には侮蔑しながら、結果の實利害から見て之を樂觀するとも謂ふべき——一種の樂觀說を併せ論ずるのも無益ではないだらう。殊に經濟學の確立と相並んで大勢力となつた功利主義の倫理說は、人間行

爲の動機には無頓着でた、だその結果に依てのみ行爲の善惡を別たうとする。即ち結果に於て多數の幸福を進めさへすれば人の利己的行爲も亦た之を道德上の善行と認めようとするのであるから、經濟學上の自由放任主義も亦た僅かに一の人性樂觀を基礎として、その上に築かれたものと見て差支はないやうである。

利己心是認と云ふ一種の人性樂觀に基づく社會學說の由來するところは、固より遠く且つ久しいのであるが、一番人に知られて居るのは矢張りアダムスミスがその分業論、マアカンチリズム批評等の諸章で述べて居る說であらう。スミスは國富論の第一章で分業の大利益を論じた後、第二章で分業の起源を說明する。アダムスミスは人の知る通り人間能力の異同から分業が起るものとは認めないで、却て分業の行はれる結果として人の能力に異同を生ずるものと說明した。それでは分業は何から生ずるかと云へば、人間の交換慾 Propensity to exchange から生ずると云ふ。而してこの交換慾なるものはスミスの見るところに依ると人間にの限られたものであつて、人間以外の動物は之を具有して居ない。人間以外の動物は他に求めるところがある時は、相手の機嫌を取つてその好意に訴へる。相手の利害に訴へてその目的を達すると云ふ方法は彼等に知られてないのである。ところが此點になると人間は他の動物とは趣きを異にしてゐる。人間も時としては他の人間に對して同じ方法を用ゐる。人をして己れの欲求に應ぜしめる他の方法のない時には、人間も有ゆる卑屈不面目な機嫌取りをして他人の好意を獲ようとすることがある。併し彼れは有ゆる場合に此を行ふ遑がない。文明社會に於ては人は常に多數の人の協力助力を俟つ必要があるのに、彼れの生涯は僅かに少數の人の友誼を贏ち得るにしか足りない。他の動物界にあつては、各個體は何れも皆生長した後には全然獨立して、通常時に於ては他生物の助力を俟つ事が全くないのに反して、人間は殆んど絕えず他人の助力を待たなければならぬ。而して之を他人の好意にのみ期待しては目的を達することが出來ない。彼は之を彼等の利己心に訴へて、彼れの爲めにその求める事をするのは彼等自身の利益である事を示した方がその目的を達し易いであらう。誰れでも何等かの取引をする場合には皆そ

れを行つて居るのである。余の求むるところのものを與へよ、然らば汝は汝の求むるところのものを得るならんと云ふのが常に此種の申出の意味である。而して吾々の要するものの大部分を皆斯うして他人から得るのである。吾々は吾々の食物を肉屋パン屋酒造家の好意に俟たないで、彼等の自利の念に俟つ。吾々は彼等の人情(ヒユマニテイ)に訴へないで彼等の愛己心に訴へる。彼等に說くに我が必要を以てせずして彼等自身の利益を以てするのである』と云々。即ち今日の社會に於ては得んが爲めには先づ與へなければならぬ。先づ他人の利益を計ることは卽ち最もよく己れ自身の利益を進める所以である。そこで各個人の自利追求を自由に放任することは、如何なる政治家の保護奬勵にも優つて、最もよく公共の利益を進める所以だと云ふ結論を生ずるのである。故にスミスは謂ふ、『各個人はその資本の爲めに最も有利な用途を發見しようと絕えず努めて居る。尤も彼が念頭に置いて居るのは自分の利益であつて、社會の利益ではない。併乍ら自分自身の利益追求の努力は、自然的に、或は寧ろ必然的に彼れを導いて、社會の爲め最も有利なる用途を擇ばしめるのである。』『成程彼れは一般に公共の利益を進めることを志しもせず、又何れ程公共の利益を進めて居るかを知つては居ない。外國產業よりも國內產業の援助を擇ぶことに依て彼れは單に己れ自分の安全を計つて居るに過ぎない。而して生產額を最も多くする樣に其產業を指導することに依て、彼れは單に己れ自身の利益を計つて居るに過ぎないのである。而かも他の多くの場合に於けると同じく、此場合に於ても彼れは無形の手に導かれてその志望中に存せざる或結果に到達するのである。而して又それが志望中に存しないと云ふ事は必しも社會の爲めに不利益をなすものではない。人は己れの利益を追求することに依て、實際社會の利益を念頭に置いた場合よりも却て屢々一層有効に社會の利益を增進せしめるのである。』又曰く『己れの境遇を改善せんとする各個人の自然的努力は、之に許すに自由と安全とを以てする時は、他に何の助けを藉ることなく、たゞそれ丈けで、啻に社會を導いて富裕と繁榮とに至らしめる許りでなく、更に又人爲の惡法が屢々設けてその作用を阻害するところの百の妨害に打ち克つ事を得る程それ程有力な原理である。』と、そこでスミスの所謂自然的自由の制度は確立されなければならぬ。一切の人爲的特惠制限の方策は、社會の進步を促進せずし

て之を阻害し、一國年生産額を増加せしめずして却て減少せしめる。『今是等特惠制限の一切の制度を撤去すれば、自然的自由の制度は自らにして確立せられるであらう。』此制度の下に於ては正義の法を侵さざる限り、各人は勝手に兆自家の利益を追求することを許されるのである。而して主權者は個人の經濟生活には干渉せずに、たゞ僅かに三つの義務を負ふ許りである。その三つと云ふのは（一）他の社會の暴力及び侵入に對して社會を保護すること（國防）（二）社會の各員を他人の不正又は壓迫に對して保護すること（司法）及び（三）收支相償はざる爲め、之を個人に委して置いては設立維持せらるゝ見込のない、或種の公益事業公益設備を創設維持することが是れである。この第三の義務の如きは解釋のし樣に依ては隨分近世の所謂社會政策的施設をもこの中に含ませることが出來るのであるが、事實上スミス及びその後繼者は極めて之を狹く解釋したので、後にフェルヂナンドラッサルをして、嘲けり呼んで『夜警說』Nachtwächteridee と云はしめた消極的國家觀が立てられたのである。この自由放任主義も之を仔細に觀察すると、その主張者に依て nuance を異にして居るので、積極的に各個人の自利追求は社會の爲めに善き結果を齎らすと云ふのと、消極的に假令それが必しも善い結果を齎らさないにしても、國家の干渉は決してより善き結果を齎らすことはないと主張するのとの別はある。併し何れにしても自利追求の放任が最上の結果に導くと云ふに至つては一である。

アダムスミスに影響を與へた人は大勢ある。併しその中の一人として奇警なる、併し稍々不愉快なる嘲人家マンドギル Benard de Mandeville を數へることは學者の承認するところであるらしい。今玆ではスミスの個人主義思想の系圖調べをするのではないから、本來遡つてマンドギルなどを引用するには及ばないのであるが、彼れは人間を極端に低いもの、卑しいもの、汚ないものと見て、その低い卑しい汚ないものに低い卑しい汚ない事を自由にさせて置けば、結果は期せずし社會公共の利益となる。否な人間の不善が跡を斷てば却てそれこそ社會は衰頽することを免れぬと云ふ意見を、粗野猥雜な言葉で、而かも甚だしく誇張して述べて居るのが、之から後に紹介する、人性の明るい美しい一面ばかりを見た一派の思想家と著しい對照をなして居つて、而かも猶ほ後者が人性を樂觀して外力の強制を無用とするのと同

じ様に、マンドギルが人間を卑しい下等なものと見ながら、その下等な卑しいところに安心し樂觀して居たところが一種の奇觀を呈して居るから、彼れの有名な『蜜蜂物語』に就て一言を費やすことも亦た必しも無用ではないのである。『蜜蜂物語』は始め千七百五年に公にせられた『不平を鳴らす蜂群』と云ふ四百行の詩一篇が本になつて、それに註解や附錄が添へられて漸次に膨脹したものであるが、その大體の主旨は『蜜蜂物語。或は曰く私の不善は即ち是れ公の利益』Private vices, public benefits と云ふその標題に依て窺ふことが出來る。

Cynic と云ふ言葉をその語源に依て犬儒などと譯しても、この言葉に含まれて居る意味は通じない。鷗外博士は昔 Cynicism を譯して『訐穢』とせられた事があるが、マンドギルの態度は正にこの訐穢である。彼れは凡べての善行の動機を故らに卑しく解釋して、人間を極端に下等なものに曳ずり降ろさうとする。而して思切つて卑陋猥雜な言葉を以てそれを行ふのである。この態度は因襲的な虛僞を摘發して所謂お目出度い理想論を破碎する場合には慥かに痛快を感じさせるけれども、一歩度を越えて何處から何處までもそれで行かうとすると讀者は忽ち厭惡の情を起こさざるを得ない。マンドギルの場合はそれである。人間を侮蔑した事に於ては スキフトもマンドギルと同樣であつたが、スキフトには幻影（イルユウジヨン）と別れる苦痛が現はれて居る。マンドキルにはそれがない。彼れは己れをも人をも賤しんで、自らその賤しむべきものたる事に甘んじて居る。彼れは嘲笑者であるが厭人家（ミザントロープ）ではないのである『お前達ちも己れも皆豚だ。だから食つて飮んで樂まうではないか』と云ふのが彼れの態度であつた。(この數行レスリインチイヴンに據る)。而してこの態度を以て彼れはその『私の不善は即ちこれ公共の利益』を主張するのである。その一例を云ふと贅澤は不善である。併し乍ら贅澤に耽けるものがあるので一方では貧乏人が仕事に有り附くのである。マンドキルの文章は直譯し難いが大體こんな事を云ふ。贅澤に際限のない官能的な宮人、每週每週新らしい風を考へ出す輕佻なる娼婦、その乘り物、饗宴又は擧措動作に於て公女（プリンセス）の眞似をしようとつとめる傲慢な侯爵夫人、知慧も働らきもなく、見たものは何でも欲しがつて次の日にはそれを人に遣つて仕舞ふが、壞はして仕舞ふかする道樂者の浪費家、寡婦孤兒の淚から多額の金を絞り取つて

それを道樂者の息子に使はれる强慾非道な人非人。凡べてこれ等の人々こそ各種の勞働者に仕事を與へ、無數の貧乏人に正直な暮らしをさせる爲め、なくてはならぬものなのである。女の下袴に鯨骨を入れて張り擴げさせる流行の如きは甚だ愚かなものである。併し社會の繁榮に貢獻したことから云へば宗敎改革はこの愚かな新流行の案出に及ばない云々。マンドキルの論調は凡べてこの類である。彼れのパラドックスは更に一歩を進めてこんな事も云ふ。『倫敦の大火は非常な災厄であつた。併し假りに大工、煉瓦職、鍛冶屋その他これが爲めに仕事を得たものと、火事の爲めに損害を被つたものとを秤りにかけて比較して見ると喜びは泣言に勝らないまでも、少くも之れと相均衡する』云々。

さう云ふ譯で凡べて繁榮の源は不善にある。故に彼れの惡詩の一節に曰く

Thus vice nursed ingenuity,
Which join'd with time and industry,
Had carry'd life's conveniencies,
It's real pleasure, comforts ease,
To such a height, the very, poor
Lived better than the rich before.

（斯く不善は工風を促がして、生活の便宜快樂安慰の度を高め、極くの貧乏人をして猶ほ且つ昔の金持よりもよき生活を營むに至らしめた）

マンドキルは又別のところで述べて云ふのに、『以上述べたところに依て、私は明にし得たるものとひそかに信ずる。社會の基礎となるものは人間に自然に具はる親切愛情でもなく、又理性と克己とに依て養ひ得る眞の德性でもなくて、吾々が世上の惡（道德的並に自然的）と稱するものこそは却て吾等を社交的動物とならしめる大原理、有ゆる職業有ゆる仕事の堅固なる基礎たり生命たり支柱たるものなる事、而して吾々は凡べての技藝學問の眞實の起源を玆に求めなけ

れぱならぬ事、而して惡が終息した瞬間に社會は崩壊はせぬ迄も頽廢しなければならぬ事を明にし得たものとひそかに自信して居るのである。』と今この『惡』又は『不善』に代ふるに『自利』を以てすればマンドキルの云ふところとアダムスミス等の意見とは非常に接近し來るのである。

現に利己心を以て經濟社會繁榮の原動力と認める以上は、私有財產制度の是認は當然の結論である。そこで國家の最も神聖な職分は私有財產保護の一事にありとし、その他の點に於ては私人生活に對する一切國家の干涉を排斥しようとする思想が成立つ譯である。ラッサルがこの消極的な國家觀を評して『夜警說』を呼んだのは、論者の謂ふやうに、國家の職分が財產の保護と云ふ一事にのみ存するならば、國家には盜賊を警戒する夜番以上の價値はないと云ふのである。これは固より國家を以て文化の支柱、有らゆる高尙善美正義なるものゝ保障者と認めようとしたラッサルの國家宗 Staatskultus と相容れないので彼れはこの貶稱を以て個人主義を惡評したのである。

ところで利己心の發動が何故公共の利害と相容れないか。又私有財產の制度が何故に多數人の幸福を齎らさないか。それは今私の問ふところではない。たゞ兎に角吾々の目前には既に事實として、利己心發動の結果の公益の爲めに可ならざること、私有財產制度の望ましからざることを主張する一派の說が行はれて居る。ところで、始めにも云つたやうに人間を利己的の動物と認めながら、その利己心の自由發動が社會生活の爲めに望ましからぬ結果を招致するものとすれば、公權を以て個人の行爲に約束を加へることの必要なるは論を俟たない。極く大體論として云へば、國家社會主義又は是れと似た傾向の思想は此立場に據つて居るのである。國家社會主義は出發點をマンドキルと同ふして、其到着點を彼れと殊にして居ると云つても好からう。Pirvate vices; public benefits でなくて private vices; public nuisances (と云ふ英語を使つても好いか何うかは知らぬが意味丈けは通じるであらう) なのである。從つて國家社會主義と舊來の自由放任主義者とでは、その各々主張するところは甚だ趣を異にして居るが、根本に於て人間その者の見方には甚

たしい徑庭はない。異がうのは個人の自由行動が共同團體全體に及ぼす結果の利不利に對する見解であつて、人間その者は兩者の孰れの目にも主として利己心に刺戟せられて行動するものとして映じて居るのである。ただ一方は各個人の利己的行爲は無形の手に導かれて、期せずして公共の利益を增進するものであるから、之を自由に放任するが好いと云ひ、一方は利己心の發動は公共の利害と相容れないから、外部から拘束を加へて、或は爲さんと欲することを禁じ、或は爲さざらんと欲することを强制して行はしめなければならぬと云ふ丈けの違ひである。兩者の相違するところは其人性觀にあるのではない。

然るに一派の社會論者は單に私有財產の制度の廢止を主張する許りでなく、同時に併せて公權の個人に對する拘束をも否認しようとする。即ち利己心の刺戟を不必要とする許りでなく、同時に外力の强制をも無用と認めるのである。人間を主として利己心に依て動かされるものと見て、而してその利己心發動の結果が社會の爲めに有利なものと認める以上は、利己心刺戟の爲めに私有財產制度を承認しなければならぬ。若しまた利己心發動の結果が公共の爲めに望ましからぬ結果を招致するものと認めるならば、私有財產制限又は廢止し、公權を以て個人の行動に制肘を加へなければならぬとするのが當然である。然るに今、公權の强制をも、私有財產の制度をも併せ否認しようとする思想があるとすればその思想には、個人主義者とも國家社會主義者とも全く違つた人性觀があつて共根柢をなして居るものと見なければならぬ。彼等よりも遙かに人間を善良高尙親切なるもの見て居なければならぬ。この人性樂觀がなければ、この種の社會主義は成立つ譯がないのである。而して事實上此派に屬する個々の思想家に就て其の云ふところを聞けば、彼等は何れも皆普通の人よりも、遙かに人間を善きものと見過ぎて居る嫌がある。人性の暗黑卑陋なる一面に目を閉ぢて、その光明愉快なる一面にのみ視力を集注して居る嫌があるのである。ゴドキン、クロポトキンのやうに無政府共產主義まで徹底したものに於ては殊にその然るのを認め得るが、その點まで到達しないでも、一方に於ては私有財產を非とし同時に

他方に於ては公權の强制を排斥することオエン、フリエエ、モリス、ラッセル、コオルの如きは何れも皆多少の程度に於て右に述べた人性樂觀をその思想の根柢に置いて居る。マンドギルを出でてクロポトキン等に入れば、吾々は論旨の細目の異同を忘れて、先づこれと彼れとの人間その者に對する態度の根本的に違つて居るのに驚かざるを得ないのである。

人性を樂觀する此派の論者は當然現社會に於ける百般の弊害を悉く人爲の制度の罪に歸する。而してその最も極端に赴いたのはヰリヤムゴドヰンであつた。ゴドヰンの思ふところに依れば人間の生るゝや猶白紙の如きもので、その善となり惡となるは一に外界の境遇に依る。外界の境遇は人を無限に高尙善美有能の域に進めることが出來る。然るに今日その外界の境遇は人爲の制度就中法曹君主政治の爲めに想像し得らるゝ限りの不良を極めつゝある。到處に不公平が行はれ、極貧と極富壓制と隷屬とが並び行はれて居るのは一に之が爲めである。併しゴドヰンは悲觀論者ではない。彼れは人間が遂にこの悲慘なる境遇より脫すべき日のあることを確信して居つた。而して人間を拔いてこの現在の境遇より脫出せしむべきものは何かと云へば『理性』である。ゴドヰンの觀た人間は、必ず理性の命令に服從する人間であつて、人間が不合理の事を行つて居るのは、その理性に背いて之を行ふのではなくて、物の道理を知らないから之を敢てするのである。故に第一の急務は物の道理の說得である。而してこの『說得』に依て人間は何處までも完全なものになり得ると彼れは信じたのである。ゴドヰンは理性の力に依て人間が現在の法制を捨てゝ、一切强制の行はれざる社會を形成すべきことを豫期したのである。蓋し各人理性の導くところに從て行動し簡易の生活と高尙の思想とを以て滿足するに至るときは外的强制は一切無用に歸するからである。抑も現在社會に於て邪路に陷つて居るのは富の生産ではなくして實にその分配である。凡べての人をして之に與からしめるに足る丈けの富は現に生産せられて居るにも拘らず、之に均霑せしめないのである。今新社會に於ては『理性』は凡べてこの事を改めるであらう。理性は敎へて云ふ、人若し啻に人生の善き物（グッドシングス）の分配を平等にする許りでなく、同時に之を造るところの勞働をも均等に配分するときは各人は恐く一日半

時間の勞働で簡易なる生活の必要物一切を生産して剩りあるに至るであらう。而して是に依て得たところの閑暇を悉く道德的知識的の向上に捧げることになれば、單に眞理と說得との力のみに依て、何等の暴力何等の兇器をからずして圓滿と幸福とは地上に確立せらるるに至るであらう云々。ゴドキンの空想は愈々放肆となつて、精神の力が完全に肉體を征服して　人間は不眠不休不死不滅の天使の如きものとなり、各人は口以て言ふ可からざる熱心を以て、凡ての人の幸福を希ふことになる日が來るであらうと迄云ふのである。

　ゴドキンの場合は最も極端であるが、同じ様な人性觀は、境遇の改善に依ては如何なる性格の人をも造ることが出來ると信じて居たロバアト、オエンにも、また人の衝動は神に依て與へられ、社會制度は人間に依つて造られたものであるから、人間を社會に適應せしむべきものではなくて、却て社會をこそ人性に適應せしむべきものであると考へたフリエエにも、或はもつと新らしいところではヰリヤム・モリス、バアトランド、ラッセル、コオル等にも皆多少の程度に於て之を認めることが出來る。クロポトキンの社會學說が愉快なる、併し一面から見れば人の好すぎる人性樂觀に根ざして居る事は容易に人の認め得るところであらう。それではクロポトキン等と前に記したマンドヰル等の見解と、その何れが果して正しいか。クロポトキン等の觀た人間と、マンドヰルの觀た人間と何れが果して眞實の人間であらうか。私は玆に客觀的に議論では決することの出來ぬ論者の性格の問題が入つて來ると思ふのである。人間には物の暗黑面に許り目を注ぐのと、光明の一面のみを見ようとするのと二つの型（タイプ）がある。この型の分れるところは經驗に依て左右されるところも多いが、また如何なる經驗に依ても動かされることのない樂觀的な理想家が慥かにある。旣に或人の社會觀が深く其人の性格に根ざして居るものとすると、其社會觀の當否は遙かに議論丈けでは決することが出來ないやうに思はれる。吾々は或人の社會學說を評する前に先づこの人の人物を知る必要がある。近頃の實例に就て云へばクロポトキンの思想を解釋する上に最も貴重な材料としてその自叙傳が屢々擧げられるのは這般の消息を語つて居るものであらう。

クロポトキンの閲歴は既に充分人に知られて居る。それではこの多事多難の遭遇に處して彼れは如何なる面目を發揮するか。彼れの自叙傳を讀む者が第一に心着くのは彼れが全く憎惡の感情を知らぬ人らしく見えることである。彼れのやうな事業を企て彼れのやうな生涯を送つた人に敵のない筈がない。現に彼れの生命には幾度か危害が加へられやうとした。其れにも拘らずクロポトキンは何人に對しても憎惡の念を胸に藏したことがないらしく見える。『革命家の思出』前後五百頁の間に讀者は一度も著者が呪咀の言葉を發するのを聞かないのである。讀者は屢〻著者の兄弟朋友に對する友情愛情（殊に兄アレキサンダアに對する尊信愛慕の情）に動かされる。併し全篇を通じて殆んど一人の憎むべき人物を見出さないのである。之に反して彼れはその友達の長所美點を擴大するに忙しい。友達殊に勞働者の友達を讀者に紹介するときのクロポトキンは實に小兒のやうな愉快な無邪氣な態度でその人と爲りを賞揚する。その文句がまた極まつて居る。"excellentman, splendid fellow, one of the most intelligent persons I ever met斯う云ふ言葉は仕舞には讀者が微笑を禁じ得ないほど度々出て來るのである。在り來りの言葉で云ふとクロポトキンは愛することを知つて憎むことを知らない人である。さう云ふと又如何にも宗教家的臭味のある、態とらしい人物を聯想するものがあるかも知れないが、クロポトキンは此臭味からは最も遠ざかつた人物であつた。彼れは一種の自然崇拜の念を懷だいては居たが、在來の宗教に對しては夙くも少年の頃から甚だ冷淡であつた。人を憎まないのは後天的に教へられてさうなつたのではなくて、彼れが持つて生れた天性であつたらしい。ブランデスが杜翁とクロポトキンとを併稱して、二人はともに理想家で共に改革者で、共に平和を愛する人であつた。併しトルストイは暴力を排し、クロポトキンは之を是認したにも拘らず、二人の中ではクロポトキンの方が一層平和を愛する人であつたと記して居るのは讀者の首肯するところであらう。

人を（獨逸人丈けは例外らしい）憎むことを知らないクロポトキンは如何なる境遇に居ても常に樂しんで居たやうである。彼れは遂に失望嘆息の聲を發することをしない。常に所謂薔薇色の光りでものを見て居る人である。瑞西で機關紙 le Revolté を發行して居た頃、瑞西政府の壓迫の爲めに印刷を引受けるものがなくなつた事がある。彼は瑞西中の印

刷所を尋ね廻つて見たが、到るところで斷はられて『重い心を懐たいと歸つて來た』と記して居る。私が偶々この一節を覺えて居るのは、彼れが滅多にかう云ふ言葉を遣はない人なので、餘程珍らしく感じて特に記憶に存して居るのである。

クロポトキンの心が常に樂しんで居たのは、彼れが安樂愉快な境遇にのみ置かれたからでは無論ない。聖彼得聖保羅要塞に監禁せられて居た時、直ぐ下の監房に繋がれて居た一農夫が發狂する。クロポトキンはこの農夫とも、隣房の囚人とも共に敲音に依て會話を交換して居たのであつたが、會話の間に農夫の心が狂ひ始めて、漸く理性を失つて行くのが明かに分かる。彼れは遂に純然たる燥狂に陷つて仕舞ふのである。クロポトキンも『斯る狀態の下に於て人の心の破壞を觀て居るのは實に怖ろしい』と記して居る。隣房に居た彼れの友人セルヅウコフは此事件の爲めに餘程神經を刺戟せられたものらしく、四年後釋放せられると、直ぐ自殺して仕舞ふのである。クロポトキンは斯う云ふ境界を經て居る。而かもそれにも拘らず彼れの心の晴朗(セレニテ)は少しも傷けられないで濟んだのである。クロポトキンが社會の現狀を非として毫も假借して居ないにも拘らず、彼れの著作を讀むのが現社會の弊害に干して餘り暗い感じを受けないのは不思議とすべきである。此點に就て、彼れは自叙傳の中で革命新聞の任務を論じて居る。彼れは謂ふのに、社會主義新聞は兎角現狀に對する苦情の記錄となり易い傾きを持つてゐる。その結果として讀者の心は滅入らざるを得ない。そこで、その埋合せを付ける爲めに記者は燃えるやうな激しい言葉を用ゐて、讀者の元氣を鼓舞しようとする。之に反して、クロポトキンの見るところに從つて社會主義新聞の第一任務は絕望せしむることでなくて希望を懷だかせる事でなくてはならぬそこで社會主義新聞は新しい時代の近づきつゝある事、社會生活の新形態の萌芽しつゝある事等を示して居る諸徵候の記錄でなくてはならぬとして、それを實行したのである。

クロポトキンにも無論强情な一面がある。併し彼れの强情には惡意(ボースハイト)の分子を交ぢへてないやうに見える。リイプクネヒトなどの記するところに依ると、マルクスも亦た小兒らしい無邪氣な善良な一面を持つて居たやうであるが、クロポ

トキンにはマルクスが他の半面に持つて居た bitterness が缺けて居るやうである。猶太人を父とするマルクスが人種的偏見の爲め、屢々不愉快な經驗を嘗めさせられたのに反して、クロポトキンは露西亞最高の貴族の家に生れて、富裕に鷹揚に育てられた。この門地境遇の相違が或は二人の性格の相違に現はれてゐるのかも知れない。併し又成年以後の經歷の數奇を極めた事から云へば、クロポトキンが世路の艱を知ることは必しもマルクスに遜らない筈なのである。さうして見るとクロポトキンの樂天的な善良な性格は如何なる境遇も動かすことの出來ぬ程深く根ざした天性であつたのだらうか。今それはどつちでも好い。又クロポトキン其人を宏量寛大の人として之に敬意を表するとも、或は迂濶なお人好しだとして冷評するとも、それも讀者の隨意である。兎に角クロポトキンは斯う云ふ性格の人である。而して彼れの性格を知ることは彼れの社會學說を解釋する上に多大の光明を投ずるものと私は信ずるのである。

斯う云ふ性格の人が人間を信じて、人性の美しい、正しい明るい一面許りを見るのは決して不思議ではない。而して人間を利己的動物としては、何うしても解釋することの出來ない不思議な人の心の働らきに注目してクロポトキンは『相互扶助論』を著はしたのである。ダアキン學徒が生物進化の原理として生存競爭の一事のみを說いたのに反し、クロポトキンは露西亞の生物學者ケツスレル教授が『同じく自然の法則たる事に於ては相互扶助も相互鬪爭も變りがない。併し種の進歩的進化の爲めには前者は遙かに後者よりも重要である』と云つた一言に落想を得て、相互支持相互扶助の生物進化の一要素なる事を論斷すると共に、人の心の奥底に潜んで居る他愛衝動の不可思議を說明しようとしたのである。自叙傳の中にもこの觀察は現はれて居る。今その一例を擧げると、露西亞に於て某貴人が暗殺せられた時の事である。爆彈が馬車の下に投げられて數人の從者が負傷した。兇行者は現場で捕縛せられた。貴人は馭者の諫止を顧みず馬車から降り立ち、兇行者に近づいて何事をか尋問したが、それから其場を過ぎて他の一靑年の前を通過するときこの靑年は隱し携へたる爆彈を貴人と己れの身との中間に投じて貴人と共に倒れた。從者は悉く逃れ散じて貴人は久しく雪の上に倒れて居た。之を發見したのは歸營の途上に在つた幼年學校の生徒であつたが、生徒等は己れの帽子を脫ぎ外

套を脱いで負傷者を包んで其家に運んだ。然るに此時生徒等と共にこの負傷者（貴人）を助ける爲めに驅け附けたのは實に暗殺團(テロリスト)の一人で紙包みの爆彈を腋の下に抱へたまゝのエメリヤノフと云ふ靑年――即座に捕へられて絞首の刑に遭ふべき暗殺團の一人なる一靑年であつた。『人の心は此種の矛盾に滿ちて居る』とクロポトキンは記して居るのである。此種の類例は猶ほ幾つも『相互扶助論』の中に擧げられて居るが今それを一々紹介するのは無用の事だらう。

斯う云ふ性格のクロポトキンの社會學說が、マンドヰルやマンドキルと出發點を同ふする社會學說と全くその趣きを異にして居るのは當然である。私は嘗て別の處でクロポトキンに言及して、クロポトキンの著作を見れば誰れでも『此人の弱點は人間を事實以上に善きものと見て、一切の惡は現在の社會組織から生れるので、決して人間の本性に必然なものではないと樂觀して居る點にあることを感ずるだらう』と記した。私は人間を事實以上に善きものと觀ると云つた。換言すれば彼れは人間を信じ過ぎて居ると云ふのである。併乍らこの批評に對しては、それはクロポトキンが人間を信じ過ぎて居るのではなくて、批評者の人間に對する信賴が足りないのであると言ふものがあるだらう。それがさうでないとは私も保證しない。併し玆に至つて吾々は、所謂科學的論究が容易に決定することの出來ない、任意主觀的な難問に逢着する事を認めざるを得ない。私はマンドヰルの訐穢的人性觀を啻に不愉快と感ずる許りでなく、同時に甚しく誇張せられて事實に違つたものだと認めて居るが、同時にその反對の極點に立つ一派の人々の人性觀をも、また樂觀に失して事實から遠ざかつたものと認めざるを得ないのである。ゴドヰンやクロポトキンの議論の中には富の生產力の樂觀的見積りを基礎とする部分がある。この部分に對しては事實の統計的調査は可なり的確にその當否を斷言することを許すのであるが、彼等の人性觀に至つては私は或はそれが『科學的』討究の範圍外に立つものではないかを恐れるのである。社會組織の問題に對する諸見解の歸一し難き根本理由の一は或は玆に存するのではないだらうか。これが私の此文章に於て問題とするところである。

訂正、　前號の本誌で室伏君に答へた文章の中で Hobson, National Guilds を千九百六——千九百十二年の産物なるが如く記されたのは室伏君の記憶違ひではないかと記したのは卽了であつた。同書の新版を見るとこの書が千九百十二年——同十三年に至つて『新時代』紙上に連載されたものであることは私の記した通りであるが、併し室伏君の書はれた事にもまた立派な據り處があるのであつた。謹んで訂正する。但し室伏君もギルドソシヤリズムがサンチカリズムの影響の下に生れたものであると明記せられる以上は最早やギルド社會主義千九百六年創唱說を固執せられるものではないと思ふ。英吉利におけるサンチカリズムの影響がそれ程夙く現はれたと云ふ事は甚だ unlikely であるからである。是等の點は曾て國家學會雜誌大正六年五月號で稍々詳しく論じたから玆には凡べて省略する。

經濟恐慌の將來と救濟策

不景氣襲來に對する觀察

法學博士　堀江歸一

株式取引の停止

此間から東京でも、大阪でも株式取引所は閉鎖された儘であつて、何時に爲つたら取引を始めるか、殆ど見當が付かぬやうである。株式取引所は全國有價證券に對する相場の公定される機關であつて、詰り此公定相場が立つので、株式の賣買も、株式を擔保とする資金の融通も共に圓滑に行はれるのであるが、今日のやうに閉鎖された儘であつたならば、有價證券の所有者は如何に焦つても、證券で金融の目的を達することも出來ず、銀行も抵當流れに爲つた證券を處分する道がないから、證券で擔保とする貸出しを避けやうとするし、資産家の如きも今日自分の所有する財産に對して、幾何の評價を下す可きものであるか、思案に迷はざるを得ないであらう。歐洲戰爭の當初、此戰爭が關係諸國の人心を騷がせ、經濟社會を動搖させたことは甚だ大であつて、隨つて交戰諸國は勿論紐育の株式取引所も一時市場を閉鎖するの已むを得ざることゝ爲つた。當時倫敦邊では倫敦株式取引所は創立以來一度も成規の休日以外に閉鎖されたことがなかつたのに、歐洲戰爭の爲めに此不祥事を演出したのは誠に遺憾であると云ふ說もあつたが、何分にも當時多數の國が思ひも寄らぬ大戰爭に參加し、或る一ツの國の取引所が開かれて居れば、其取引所に向つて、諸國の有價證券が一齊に投賣され、證券の價格を引下げると同時に、其國から正貨を取付けると云ふ勢の歷然たるものがあり、殊に倫敦は平生世界金融の中心點であると云ふ關係から、右の如き影響を蒙り易い弱點も

あり、旁々取引所の休業は世間一般に已むを得ざることゝ承認されたのである。

之に比較すると、今日我國で株式取引所が閉鎖されて居るのは果して何の態であらうか。別に我國が世界的戰亂は愚か、東洋變亂の渦中に陷つたと云ふ譯でなく、世界の平和は兎に角確立し、次第に常調に進みつゝある。此際に我國の株式取引所が閉鎖されて、何時まで經つても。復業の見込が付かないのは何故であるかと云へば、經濟上極めて有り觸れた事情から、株式の市價が暴落し、仲買人の内に損害に堪へられぬ者があり、今無理に市場を開ひたならば、如何なる怪我人が出て、社會の他の方面に如何なる影響を及ぼすかも知れない、仲買人に對する救濟策の定まるまで、一時市場を閉鎖するのが安全であると云ふ考から、今日に至るまで取引所と云ふ經濟上最も大切な機關の活動が停止されて居る次第である。

然しながら以上の理由は株式取引所を閉鎖する辯解として、正當のものであるかと云へば、私は決して之を正當と認めない。株式の市價が變動する、其變動の間には時に暴騰するとか暴落するとか云ふことは、尋常茶飯事であつて、別に不可思議とするに足らない。而して我國の株式取引所は株式組織であつて、賣買取引の違約に依つて生じた損害に對しては、取引所自ら賠償の責任を持つて居る次第であるのに。此責任を果すのに堪へずして、市場に多少の波瀾が生ずると、取引所自ら直ちに取引を停止し、其經濟社會の全體に及ぼす影響の如きは殆ど眼中に置かず、取引所として蒙る可き後難を避けるのに、餘念なきに至つては、醜態の限りとせざるを得ない。取引所を健實にし、其取引を安全にし、從來幾多の機會に於て暴露して已まない醜狀を一掃することは、世人の今日より充分に考量しなければならぬ問題である。

株式取引所と銀行

或は株式取引所の關係者をして言はしむれば、斯く取引所のみを責めるのは、甚だ酷である。取引所が今日の窮境に陷り、而して容易に是れから脫却することの出來ないのは、金融の趨勢を支配する銀行が急劇に金利を引上げ、又貸出を禁遏するからであつて、此銀行の方針にして一變しない限り、取引所は如何ともするを得ない、取引所が其機能を盡さないと云ふが如きも、一に銀行の態度の然らしめる所であつて、責任の一部分は確に銀行に於て之を負はねばならぬと立言するかも知れない。

私は公平に考へて此取引所側の立言に相當の根據の存することを認めるのである。元來日本の銀行は其日本銀行であると、市中銀行であるとを問はず、營業上の方針に於て、又經濟社會に處するの點に於て、無主義無定見を極めて居る。少しく金融が緩漫であつて市場の遊金が銀行の手元に集まると、銀行は自己の營業を擴張する爲に、思ひ切つて金利步合を引下げ、投機熱を勃興させるが、反對に事業が計畫されて資金に對する需要が漸く增加し、銀行の力を以て如何ともすることの出來ない趨勢に爲ると、遽に狼狽して、金利を引上げるのは勿論、金融の便すら杜絕することを辭さないのである。斯る銀行の放漫粗笨なる營業方針の爲めに、我國の經濟社會は九天の高い所から奈落の底に突放されたと同じ次第である。若しも銀行が經濟社會の前途を洞察する明を備へ、反動的趨勢の到來の免かれ難きものと見越しを付けたならば、此趨勢の未だ來らざる時から、豫め金利步合を引上げて、市場を警戒し、極端に人心が興奮したり又過度に投機熱の勃興したりすることに對して制限を加へなければならぬ次第であつたのに、彼等は此邊に於ける用意に乏しく、事業界が一時の空景氣に刺戟されて、有頂天に爲ると、銀行も亦坊主頭に鉢卷をして、共に踊り出すと云ふ有樣であつては、今日事業界に著しく不健全の惡を生じ、反動來の避く可からざる勢を馴致したことに就ては、銀行たるもの一部の責任に當らなければならぬのである。

今、私の机上に在る本年三月末發行の東京銀行通信錄に據つて、東京大阪兩地の組合銀行が近年如何に信用を膨脹させ來つたかの一斑を見ると、左の如き數字を擧げることが出來るのである。（單位は千圓である）

東京組合諸銀行

	預金	貸出	金銀在高	準備比率
大正八年三月	一、七八九、〇〇八	一、六五三、五五〇	一四九、三九五	八分五釐
同　年九月	一、八九三、五四一	一、八五九、六一〇	一七八、一六三	九四
大正九年二月	一、九五三、四五九	二、〇三一、六三一	一七九、六七五	九五

大阪組合諸銀行

	預金	貸出	金銀在高	準備比率
大正八年三月	一、一九三、九〇〇	一、〇〇一、八〇五	一〇三、三一七	八七
同　年九月	一、三一九、〇四〇	一、二四四、六二五	一一三、八〇一	八五
大正九年二月	一、四四〇、六六〇	一、四八五、九六五	一二五、六〇一	八五

即ち東京大阪兩市の組合銀行が何れも支拂準備金を一割以内に引下げる程度まで、信用を膨脹させ、事業界に向つて資金を融通し、企業熱なり、投機熱なりを煽揚させたことは、爭ふ可からざる事實である。元來銀行が預金に對して所有す可き支拂準備金は如何なる割合を以つて適度とするかと云ふ問題に對し

ては、時の狀況に依り、又銀行一個の事情に依つて、解決に異なる可きものゝあるは、論を俟たないが、經濟社會に於て、變動の比較的劇しかつた既往一年間を通じて、京阪兩地の銀行が支拂準備金の割合を八分臺とか、九分臺とか云ふやうな低い點に下げたに至つては、何としても信用を過度に膨脹させた非難を免かれないのである、

斯く諸銀行が準備金比率の極めて低きに至るまで、信用を膨脹させたのは、啻に經濟社會に投機射倖の風を盛ならしめるのみならず、銀行自身の安全を傷けるものと云はねばならぬ。然し市中の諸銀行は此點に於て自ら安んずる所があつた。夫れは昨年下半季まで、日本銀行が殊更に其金利步合を低くして、市場の景氣を煽り立てゝ居つた一事である。卽ち諸銀行は幾ら金利步合を低くし、又準備金比率を薄弱にした結果として、他日預金の取付に出會つたとした所で、日本銀行の金利の低廉である以上は、同銀行に就て資金を借入れて、準備金の不足を補充するを得ると云ふ自信があつたので、自然準備金率を低くして顧みなかつたのである。然るに昨年十月以來日本銀行は其金融政策を急變し、同月上旬に一回、翌十一月中旬に一回、合せて二回の金利引上を決行した。斯くて從來日本銀行の金利の安いに乘じて、信用を膨脹させて居つた市中諸銀行は信用を收縮して、自ら衞るの方針に出でなければならなくなつた。是れが一兩月來金融市場に於て、意外なる金融梗塞の狀態を惹起し、ドノ銀行も預金利子を引上げて、市場の資金を回收しやうとはするが、貸出の方は嚴重に引締めると云ふ極端な警戒方針を取り結局株式市場に大打擊を加へるに至つた次第である。

銀行の態度は責む可きか

此處で一ツ問題が起つて來る。右の議論を以つてすると、過日來の恐怖は銀行の不用意なる金融政策の然らしめたものであると云ふ結論に歸着する。詰り銀行が一時の勢に乘じて、金融を緩め、市場の人氣を煽り立てながら、一朝形勢不可と爲れば逆落し同樣に金融を引締めたのが今日の時局を惹起した重要の原因であることは論を俟たない。然し私は更に今一步を進めて攻究したいと思ふ事がある。夫れは外でもない、日本の銀行なり、銀行業者なりは、概して臆病であつて、殆ど石橋を叩いて渡る流儀の營業を行つて居るのが常である。思ふに此事たる預金銀行を表看板とし、世間公衆から要求拂の預金を預つて居る以上は、當然とも云はれやうが、此臆病千萬の銀行業者が兩

三年來東西足を揃へて一齊に市場の景氣を盛にし、前途に對する警戒を怠り、遽に足元から鳥が飛び立つやうな勢で、昨年の十月以來警戒を施すことゝ爲つたのは、何故であるかと云へば是れは要するに政府殊に今の原内閣が經濟上に於て所謂積極主義を振廻し、機會あれば樂觀論のみを鼓吹して、市場の人氣を煽り立てることばかりして居つた結果である。原内閣は物價を調節するのは、外國貿易に害があると云ふ不可解の理由で、物價の騰貴を自然の赴く所に任せたではないか、物價の騰貴と通貨の増減とは因果の關係を持たないと云ふ非學問的論理に基いて、通貨の膨脹を甚だからしめて、顧みなかつたではないか。政府自ら財政策に於て、放縱不謹愼の範を示すこと、斯の如くであるとすれば、是れが民間に影響を及ぼさない筈はない。銀行業者の如きは、政府の爲す所を自分等の營業上に便利と爲るやうに解釋するのが自然であつて、彼等は政府にして從來の如き政策を施して居る以上は、好景氣は當分繼續するものと考へ政府其ものゝ力を信ずるの餘り、市場に對する警戒を怠り、又一時の勢に乘じて、自己の利益を謀る希望もあつて、相率いて景氣煽揚の方針に向つたものとすれば、銀行をして此方針に就かしめた責任は政府に在るものと言はなければならぬ。

政府の經濟社會に對する勢力も固より弱いとは云はれない。然し是れよりも更に強いのは、自然の大勢である。數年來輸出超過の趨勢が持續され、傭船料や運賃の收入と共に、我國に對外債權として回收された正貨は少なからぬ高に上り、斯くて通貨の膨脹と爲り、物價の騰貴と爲つた。從來諸外國は戰時經濟上の混亂時代に彷徨しつゝあつた結果、幾ら我國の物價が騰貴しやうが、正貨が増加しやうが、我國に向つて、物資を輸出して、正貨を取付ける餘裕がなかつた。而して今日戰後の整理時代と爲れば、諸國の物資が我國に輸入されるのは當然であつて斯くて我國の外國貿易には近頃輸入超過の趨勢が根强く現はれることゝ爲つたのである。即ち、我國の如き戰時輸出貿易の増進に力を致し過ぎた結果として、今日に於ては正貨が過剩で、物資が不足して居る。然らば外國で今後經濟上の實力が恢復し物資の供給の少しでも豐富に爲る時代が來ると、其物資は我國に輸送され、其代金として我國に過剩である正貨を取付けるのが當然である。是れが一時我國で二十億圓臺を突破した正貨の内外持高が十九億圓と爲り、十八億圓に降つた理由であつて、斯う正貨が減少し、通貨の收縮する形勢が歴然と爲つては、銀行業者が前途を警戒して、銀行自身の安全を期するのを以て、

適當としなければならぬ。唯私共は斯る趨勢の必ず來る可きことを餘程以前から豫想して居つた。隨つて此趨勢が脚下に迫つて來た時に、銀行の遽に狼狽して、金融を引締めたことは以つて甚だ先見の明を缺いた所業とするに躊躇しないのである。

或は言ふ、日本銀行當局者は餘程以前から金利を引上げて、金融市場に警戒を與へなければならぬことを認めて居つた。唯日本銀行の金利改正に對して、認可權を持つて居る政府が日本銀行の金利引上を承知しない、之を承知しないのは畢竟大藏大臣の高橋是淸氏が金利を引上げても通貨は收縮しないと云ふ奇論を吐いた手前もあらう、總理大臣の原敬氏が成る可く自分の內閣の政權を握つて居る際に、世間の好景氣を繋いで、黨勢の擴張を助けやうと云ふ私心も手傳つたらうが、兎に角昨年の十月以前に日本銀行では金利を引上げたい希望があつたのに、政府の方で之を妨害した爲めに、遂に經濟社會をして一方の極端から他方の極端に赴かせたと云ふ說がある。私は此說を多くの點まで眞實とするだけの證據があると考へる。隨つて經濟社會に急劇な反動的趨勢を誘致し、十數日、否或は夫れ以上に亘つて株式取引所を閉鎖させると云ふやうな恐怖狀態を惹起したことに就ては、原內閣に大なる責任の存することを斷言するに躊躇しないのである。原氏や高橋氏が政府は夙に經濟社會を警戒して居つたと云ふのは何たる白々しい言葉であらうか、又此警戒に從つて、業務を處理した者は今度の反動來で何等の損失をも蒙らなかつた。損失をした者は投機に夢中に爲つた爲めであると說いたのは、何處まで人を愚にした議論であらうか、私は兩氏の政治的道義心に對して、大なる疑を挾まざるを得ない。我國の經濟社會にあらゆる不健全な風を誘導し、結局今度の波瀾を招くに至つた責任の大部分は原氏や高橋氏に於て負はなければならぬのに、愈々波瀾が起れば、兩氏とも知らざる風を裝うに至つては、責任を第一義とす可き政治家として、最も耻づ可きではないか、否彼等を政治家と見るのが土臺間違つて居る。一人は官僚から成り上つた男で、他の一人は秘露で鑛山に引掛かつたり、銀行で算盤を彈いて居た男であると云へば、私も此以上に彼を責められない、唯斯る責任の何ものたるをも解しない輩を國家の重職に就かせて置く日本國民の不幸を大なりするものである。

救濟策の效果如何

今や原內閣は經濟界救濟の効果が擧がるか、擧がらぬかと云

ふ一事を以つて自家運命の分岐點として居るやうに見受けられる。從來財界の守護神を以つて自任し、政友會の陣笠連中をして此事を世間に鼓吹させて居つた原内閣の立場としては、内閣の存命中に恐慌が起つたり、不景氣が襲ひ來つたりするは、自家の所言を裏切る次第であつて、誠に心苦しいであらう、卽ち當局者が昨今財界救濟の爲めに、貧弱な知慧を絞つて居る所以であるが、一體彼等は如何にして景氣の挽回を謀らんとするのであるか。日本銀行に命令し、市中諸銀行を協力させて、此際何千萬圓かの資金を市場に融通させるなり、殊に此資金を以て輸出貿易を振興させるなり、株式仲買人中、買方に廻つて損害を蒙つた者を救濟させるなりしたならば、當面の窮地は或は脫しられるかも知れないが、株式市價の低落や、金融の逼迫が二度三度と重なり來つた場合には、如何する積りであるか、政府は財界救濟の爲めに奔命に疲れる外はないのである。

或は政府が財界に對して、一時的救濟策を施して居る間に、何か景氣の立直るやうな事件が續出する見込みでもあるなれば救濟策の効果も絕無なりとはしないが、私の考へる所では、今日の反動來たる、政府が多年救濟政策の方針を誤まつた結果として、餘程根强い所に及んで居るし、又外國經濟社會に於ける反動も亦我國に惡い影響を及ぼさされば已まざるの趣がある。經濟上の原則から言へば、商工業の好景氣と不景氣とは相順環す可き約束の者であつて、何年か一國の經濟社會に好景氣が續くと、其間に通貨も膨脹すれば、物價も騰貴し、企業熱が昂進して、遂に恐慌を惹起すが、此恐慌を一轉機として、爾後經濟社會は沈衰する、然し其間に商工業の整理され可きものは整理され、淘汰され可きものは自ら消滅して、全體の基礎が鞏固と爲り、物價の下落は世人の貯蓄を奬勵し、景氣の沈衰は人をして浪費を愼ませ、兩者の作用は相重なつて、國民の資力を充實させ、他日の發展に對する素地を作るので、兩三年間の不景氣は更に一變して、好景氣の時代を釀成することゝ爲るのである。斯う觀察したならば好景氣と云つた所で、喜ぶに足らないし、不景氣と云つた所で、憂ふるに當らないやうであるが、唯一つ我々の考へなければならぬことは、從來のやうに我國で人爲的に好景氣を煽り立てゝ、永く其勢を續けて居つたことである。單に好景氣の續いたと云ふことは甚だ結構のやうであるが同時に中産階級なり、俸給衣食者の階級に居る者が不自然なる物價騰貴の爲めに生活上に苦痛を感じ、虐遇を受けたことは、幾何であるか、殆ど測り知る可からざる次第である。今や經濟

社會は不景氣に陷らんとして、漸く四方に暗い陰が擴がりつゝあり、從來浮萎の如き富を獲得し來つた成金者流は漸く富を失はんとして居る場合に、中產階級の人々も既往數年間に蒙つた傷痍を脫するを得ないとしたならば、不景氣時代に於て我國は何れの方面から經濟の振興に資す可き富を得られるであらうか之を得ることが出來るとしても、或る年數を要するのは勿論であつて、私は此點から見て、今度の不景氣は存外永く續きはしないかと考へる。此邊の事情をも考へず、政府が多少金融政策上の方針を變改したならば、直に景氣の恢復を期し得るが如くに信じて居る者のあるのは、淺墓千萬とするの外はないのである。

國際經濟に於ける我國の地位

更に吾人の一考しなければならないのは、外國と我國との經濟的關係である。歐洲諸國が戰後の經濟的復興に資する爲めに我國に向つて、今後多量の物資を供給し來るのは、當然の勢であるが、一方に我國は自國の輸出貿易を伸張させる確乎たる成算があるであらうか。日本の輸出市場として、重きを置く可きは北米合衆國と支那との二個所であるが、合衆國の經濟社會に衰頽の模樣のあるのは、疑ふ可からざる事實であつて、生絲の如き何時まで從來の高値を以て、我國から輸出されるであらうか、前途甚だ覺束ない次第である。而して支那に對する我國の輸出は支那の要求する借款が行はれ、其金が廣く支那人の間に撒布されて、購買力を增進しない限り、伸張す可き譯のものでない。然し今日の國際金融に於ける狀況から判斷すると、北米合衆國なり、日本なり、又兩者の聯合なりで對支借款が成立するを得るや否や、此點に疑の存するを免かれない。

輸入が增進して、輸出が之に伴うだけ增加しないとすれば、今後の我國は貿易上輸入超過の大勢に支配されるのが當然である。貿易上の債務を決濟するだけの貿易關係以外に於ける受取勘定が我國にあれば兎に角、然らざる限り、輸入超過は正貨の在高を脅かし、金融を緊縮させ、益々不景氣の勢を強からしめるに終るのである。原首相は過日大阪で開かれた近畿政友會大會の席上に於ける演說で、輸入超過の問題を論じ、輸入超過は成る程事實に於て現出し來つたが、輸入される物資は專ら原料品であるから、結局我國で加工精製されて、再び外國に輸出される道理であつて、隨つて輸入超過の如き、少しも恐れるに足らないと云ふ意を述べたやうである。原氏の經濟論は甚だ珍ら

しいが、珍らしいと云ふだけであつて、少しも稱するに足らない。外國から輸入した原料品を加工精製するには、或る時間を要するし、資本を費さなければならず、又機械的設備も完全にしなければならぬ。從來政府が金融其他一般の經濟に人工的支配を加へて、殊更に好景氣を煽揚したり、又事業熱を刺戟した時代なれば兎に角、今日のやうに反動的趨勢が著しく現はれ出し、新事業の頓挫するのは勿論既設事業の內でも、規模を縮小しなければならぬもの〻續出する場合に、以前の註文に應じて輸入された諸種の原料品が事業家の手に還入つて、加工精製されてから輸出品として直に外國市場に現はれると云ふやうな事が望めるであらうか。輸入された原料品に對しては、之を引取る可き事業家がなくて、空しく倉庫に停滯することもあらうし事業家が引取つたとした所で、直に製造に着手するや否やは不明である。然らば今日の輸入の增加しつ〻あるのは、原料品が多量に輸入される事實に基くものであるとした所で、之を以つて直に他日の輸出增進に資するものとして、前途を樂觀しやうとするが如きは、如何にも燥急な議論であつて、何等の信用を置くに足らない。原氏が柄にもない經濟論を試みたのは、恐慌に對する人心の不安を一掃する目的に出たものであらうが、上述の如は三百代言流の論法で、世人の信望を繋がうとするは、思はさるの甚だしきものであつて、私は寧ろ原氏が厚顏に非論理的議論を繰返す病弊に對して、甚だしく不快を感ずるものである。

不景氣時代に處する國民の心得としては、好景氣時代に事業上に於て、又生活上に於て行はれた不始末を整理することを以て、急務とする。事業家であれば、事業を整理するなり、他の事業と合併するなり、適宜の方法で、事業の基礎を鞏固にして、一時苦痛に堪へる用意をしなければならず、個人であれば其家計を整理し、生活上の冗費を省き、少しでも多くの貯蓄金をして、他日の資本運用に備へなければならないのである。然し從來人爲的に維持された好景氣の下に、奢侈逸樂投機と云ふやうな惡習慣に感染した我國朝野の人々が、果して緊張した氣分に爲り得るであらうか一個の疑問である。今や國際經濟上に於ける我國の地位に就ては甚だ憂ふ可きものがある。日英同盟の改訂期は短日月の後に迫つて來たが、英國では國際聯盟の成立し、又國際關係に著しき變動の起つた今日に於ては、其改訂又は存續を不必要とする議論が段々勢力を占め來るやうである。而して假に同盟關係の斷絕を來したとして、此斷絕が我國

民の經濟的生活に如何なる影響を及ぼすであらうか、日本の工業は今日著しく發達したとは云ひながら、原料品の供給に就ては、生護謨と云ひ、羊毛と云ひ、皮革と云ひ、英吉利の植民地に之を仰ひで居るのであつて、此供給の自由であることが日本工業の存立する命の綱であると認めて、差支へないのである。而して英國並に其植民地に於て、戰後の經濟復興を速ならしめるには、斯る原料品の分配を國家に於て管理し、帝國內の製造業者に分配する分量を成る可く豐富にし、他國に分配する分量を制限しやうとする說が行はれて居る。此說と日英同盟斷絕說との間に如何なる關係があるであらうか、此點に思を致す度每に、私は我國經濟の國際的地位に就て、深憂を感ぜざるを得ない。今度の不景氣を端緒として、戰後經濟上に於ける難問題が斯の如く續出し來つた場合に、原內閣の知能見識を以て、之を解決するのは、至難の業であつて、我々には前途に對して、大なる疑惧を懷く次第である。

財界救濟の要點

政府は如何にして此行詰つた經濟社會を救濟しやうとするものであるか。今日まで世間に傳へられる所に據ると、政府の救濟策なるものは、金融の一時的緩和とか、小口落しと復活とか、要するに投機業者なり、虛業家なりに便宜を與へることだけに止まつて、此以外に出でないやうである。政府の考では、斯くの如くして、株式市場に活氣を告げたならば、自然其利益が一般の經濟社會に及ぶものとするのであらうが、私は之を以て原內閣の經濟政策が如何に投機業者、虛業家の尊重す可きことを知つて、他を顧みないものであるかと云ふことの病弊を暴露したものと認めるのである。今日の經濟社會に於て、眞に救濟す可き者ありとすれば、其一は眞面目の生產業者で、現に產出した物資を所有しながら、之を投賣りして、非常の損失を蒙らんとしつゝある者であり、其第二は失業の爲めに、所得の全部を失はんとしつゝある俸給衣食者並に勞働者である。前者の如きは兎に角物資を所有して居る、其之を所有して居るのは、既往に於て勤勞を敢てした結果であつて、是等の人々が經濟社會の反動で、意外の損失を蒙らうとして居るのは、株式投機に失敗したとか、虛業の計畫に挫折したとか云ふやうな人々と同一視す可きものではない。彼等に對して其所有する物資を担保として金融の便を謀つて遣るのは、今日の經濟策として、最も急務とす可きものである。彼等が此般の便を缺くことの結果として、

物資を投賣りすることは、一面から見れば、物價を低落させる所以であると解釋されるかも知れないが、彼等が一時の損失に堪へずして、其儘事業を停止して仕舞うか、又は倒産する悲境に陷つたならば、却つて社會は物資供給の缺乏に苦しまざるを得ない、生産業者をして急劇の反動で、其他歩を失はしめないやうにするのが、今日に於ける救濟策の本義でなければならぬ。

不景氣の時代に失業者が、俸給衣食者や勞働者の間に簇生することは已むを得ない現象であるが、是れを放任するのは、社會の安寧を維持する所以でないと同時に、勞働者の生活を脅かすの甚だしきものである。殊に俸給衣食者の如きは、從來好景氣の時代に、物價騰貴、生活費膨脹の爲めに、最も苦しめられた者であつて、今不景氣の場合に、失業するやうなとがあつたなれば、殆ど此階級の存立を危うするに至らざるを得ない。然も今日まで政府の財界救濟策は單に株式業者や虚業家を相手とするだけであつて、廣く是等以外に堅實なる業務に從う者を閑却し、疎外して居るのは何故であらうか、是れこそ即ち原内閣が其信條とする金權政治を最も露骨に發露したものであつて、今後經濟生活上に波瀾の重疊する場合に、原内閣が斯る信念で政治の方針を立てゝ行くことが如何に國民生活上に危險を齎すものであるか、私は此點に就て識者の考慮を仰がんとする者である。

政府の官吏や御用學者などが叫んで危險思想と云ふのは、如何なるものであるか、私の解釋に苦む所であるが、兎に角政府は危險思想を以つて、一部の思想家が今外國に行れつゝある思想を我國に紹介し、傳播し、宣傳する結果として起つたものゝやうに考へて居るが如くに見へる。然し今日我國で危險思想と目されて居るのは、必ずしも最近數年間に歐洲なり、亞米利加なりに起つた思想ばかりではない、隨分前世紀の人々が數十年前に發表した學説で、今日漸く祖述されて居る向もあり、年代から云へば、寧ろ舊思想とも云へやう。年代の新舊は別とし、兎に角我國現在の制度組織と相容れぬ外來思想が、昨今我國に行はれて居るのは著明の事實であるが、其原因は果して那邊に求め得られるであらうか、私は之を以て多年間に亘る國民多數の生活不如意、殊に最近數年間に於ける國民の生活難、少數者に依る富の集中獨占、斯くて生ずる貧富の懸隔、物質上に於ける能力の不平等が、精神上に及ぼす能力の不平等と云ふやうな種々の事相が昨今我國民をして現在の經濟組織なり、社會組織なりを不可なりとする外來思想に共鳴するに至らしめる所以で

ある。果して然らば今後の不景氣來で、國民の生活を苦しめる、而して政府に經濟組織を改造するに就て、何等の用意もないと云ふことは、政府自ら自分の危險とする思想を國民の間に醸成する所以であつて、天下に此位ひ矛盾した事はあるまい。

要するに原内閣の經濟上に爲す所は不熟練な飛行機乘りと同樣である。飛揚する時には、勢に乘じて、何處まで飛ぶか殆ど際限はないが、元來充分の技倆があつて、飛ぶのではないから降る時の調節が出來ず、惡氣流にでも會へば墜落するし、無暗みに飛揚した反動として、墜落するから、其慘憺たる狀態は目も當てられないことに爲る。原敬とか高橋是清とか云ふやうな人々は即ち此飛行機乘りであつて、此間中は經濟社會と云ふ飛行機を途方もない高空に揚げて、得意に居つた。然し昨年末頃から段々惡氣流が起つて來て、今や飛行機は進退兩難の窮狀に陷りつゝある。否其一機は既に墜落して、再起することの不可能なるまでに、破損したのであるかも知れない。我々國民は何時まで斯る無鐵砲な操縱者に飛行機の運命を託さなければならぬのであるか、操縱者が墜落して、負傷しやうが、ドウしやうが、其れは自分達ちの責任と諦めるの外はない。唯是れが爲めに經濟社會と稱する飛行機其ものゝ破損に對しては、國民の一員として、之を默々に付するを得ないのである。

經濟組織から觀た恐慌（社會主義的生産の提唱）

法學博士　上田貞次郎

一

恐慌に就てといふ御注文だが、別に變つた考もない。少し學校の講義臭くなるが、經濟組織から觀た恐慌といふやうなことを簡單に述べて見たいと思ふ。

誰も知る通り、恐慌は現代の經濟組織につき纏つた弊害である。徒手にして儲かることのある世の中には、働いても損をする場合のあるのは已むを得ない。實業家に言はせると、儲かる

時は樂である。損をするのは骨が折れる、といふことになる。昔封建時代に、一個々々の經濟が獨立して居て、自ら耕して食ひ、自ら紡いで着る、といふ所謂自給自足の生活をして居た時代には、勿論恐慌といふものは夢にも知らなかつた分業が進み社會の生産の各部分を專門に引受けるところの營業が出來、またその營業の生産能率を高むる必要上、營業の規模を大組織にするやうになつてから、生産と消費との距離が益々遠くなつて生産者は只市場の形勢によつて消費の將來を推測し、さうしてそれに適應するやうな生産をする事になつた。然もその生産は一人の仕事でもなく、一團體の仕事でもない。大勢の個人若しくは會社が、互に競爭しつゝ其の局に當るといふのであるから見込違ひが起るのは當然である。

今から七十年前、經濟學者は、此の自由競爭といふことを理想的のものと考へ、自由競爭の行はるゝ限り間違ひはない。たとひ間違はあつても、競爭以外には動機が支配するところの世の中に較べて見れば、其の間違ひは遙かに少ないと主張した。その次第は、各個人が生産に從事する動機は營利にある。利潤追及にある。そこで最も多き利潤を得るがためには、社會に於て最も價格の高いものを造らねばならぬ。價格の高いといふのは即ちそれだけその品物が社會に不足して居ることを示すのである。それ故に此の市價を標準として生産をすれば、自ら社會の需要に適應する筈である。而も此の場合に利潤を多くせんがためには、一方に於て需要の多い品物を造ると同時に、その生産費は出來るだけ切り詰めなければならぬ。そこで昔の品物は、生産者間の競爭の結果として、出來る範圍內の最も安き價格を以て消費者に提供されることゝなるのである。それが所謂マンチェスター派の學說であつた。獨り學說のみならず、英佛等の實際政策に偉大なる勢力を持つて居たところの議論である。

二

然るに前に言ふ通り、此の市價を標準とすることが、抑も頗る怪しいのである。第一相場は社會の心理狀態によつて種々の變動をするのである。市價を當てにして生産をしても、案外需要に適應する能はずして、見込み違ひとなることもある。加之この市價を標準として生産の方針を定める人は、一人でなくして大勢である。だから吾人の見込の中には、外の人が何をなしつゝあるかといふことも考へなければならぬ。この點に至ると各生産者は、各々競爭者たる關係上、その商賣の方針を打ち開

けるといふことは出來るものではない。そこで動もすれば衝突が起り、過剩生產となり、恐慌となり、不景氣となる。それが寧ろ當然の歸結である。

是に於てか社會主義の人は、彼の自由競爭の如きは、社會の生產をして社會の需要に適當せしむるといふ點から見れば何等の價値もない。今の世の中に恐慌の生ずる大原因は、詰りこれを營利主義に歸せねばならぬ。生產者が浪費者の需要を滿足せしむることを目的とせずして、生產者自身の利潤を增すことを目的として居るからこそ、斯くの如き矛盾撞着が生ずるのである。如何に信用組織が完全になつても、如何に中央銀行が調節を行つても、苟もこの營利のための生產が行はれて居る限り、需要供給の調和が完全に行はるゝ道理がない。今の世の中は政治上には、少くとも國內に於てだけは一個の組織をなして居るが、經濟上に於ては少しも組織がない。正にこれ無政府狀態である。この故に此の無政府狀態を改めなければ恐慌の弊害は止まないのである。

三

然らば無政府狀態を改むるの途如何。それが卽ち社會主義である。社會主義の下には營利のための生產はない。一社會の需要そのものを目的として生產をするのである。それだから何がどれ程需要されるかといふことは統計の問題として始めから分つて居るのである。そして其の生產物は各人の間に適當に配給するといふことになる。これが最も合理的な、科學的な經濟組織である。

右の社會主義の言ふところは、一應至極尤もであつて、確かに現代經濟組織の缺點を指摘したものに相違ない。昔自足自給の時代に恐慌がなかつたといふのは、各家族がそれぞれ自己の消費そのものを目的として生產をしたから、見込み違ひはなかつたのである。卽ち恐慌は起らなかつたのである。然しながらその當時には、恐るべき弊害があつて、今日その弊害の絕たれたことが一つある。それは卽ち飢饉である。

各個人若しくは狹小なる地方は、自足自給をして居る場合には、その家、その村に凶作を生ずれば、他に穀物の不足を充すべき方法がないから、凶作が卽ち飢饉を意味し、草根木皮を以て食料としなければならないやうな慘憺たる狀態に陷つたのである。交通が開け、商賣が進んで以來、或は地方の不作は他の地方の豐作を以てこれを補ふことが出來るから、飢饉の弊害は

なくなつて了つた。これは交通經濟、營利經濟のお蔭と言つても差支ない。只だ此の飢饉を消滅せしめたところのものと、同じ原因が恐慌といふ他の弊害を持ち來した事である。言はば前門の狼を追うて後門の虎に脅かされたやうな狀態になつたのである。そこで社會主義者の言ふやうに、私有財産を廢し、營利のための生産を廢し、社會の生産を一つの公共團體の指導に委ねたならば、恐慌は無論免れるであらうし、なほ又た昔の弊害であつたところの飢饉も起らずに濟むことであらう。これ程結構なことは無い筈である。

四

然しながら只だ玆に一つ考へて見なければならぬことは、如何にして其の公の生産機關を有效に且つ正直に活動せしむるかといふ問題である。社會主義にも色々派があるから、一概には言へぬが、先づ今日の經濟組織の上にその主義を行はんとするならば、出來るだけ多くの生産事業を國有若しくは市有に移すといふより外はない。さうして見れば今日でも既にその事は多少行はれて居るのである。日本でも鐵道を始め、郵便、電信、電話、それから森林の經營、兵器の製造、乃至は製鐵所、煙草及び鹽の專賣といふ如く、國有事業が澤山にある。日本に於ける最大の事業は、實に國家の營むところとなつて居る。その外都市の水道、瓦斯、電氣等の市有となつて居るものも澤山ある。

そこで是等の事業には恐慌の弊害が來ないかといふと、矢張り來る。製鐵所でも、郵便局でも、見込違ひは澤山ある。一旦やり出した仕事を都合によつて中止し、これがために賃銀を安くするとか、或は勞働者を解傭するとか、それがためにストライキが起つたとかいふ事實は、少しも他の營利事業と變つたところがない。尤も今日は社會全體が社會主義になつて居らぬ。全體が資本主義、營利主義の下に働いて居つて、只だ一部分のものが國有、市有に移されて居るのだから、所謂衆寡敵せずで大きな渦が此の一部分の事業に押し寄せて來る。それがために右の如き手違ひを生ずるのである。と斯う言へば其の點に就ては先づ以て辯解が出來るが、吾々の疑問となるところは尙ほ一つある。

それは前にも言つたところの、有效にして且つ正直なる經營といふことである。今日本の國有鐵道は、公債の利子を拂つた上に、凡そ二分位の利益があるので、これを鐵道事業の擴張に投じて行くことが出來るから失敗とは言へぬが、また其の筋の

實業家に言はせれば、この鐵道の經營にも隨分無駄が多く、浪費が多い。私有にして置いたら、旅客や荷主の負擔を增すことなしに、今少し便利な經營が出來るであらうといふ批評もある。然し鐵道は日本の國有、市有事業の中では比較的成功した方で、その外にはボロを出したものは澤山ある。製鐵所には疑獄事件あり、海軍、陸軍にも不正事件が從來屢々問題となつた。即ち正直なる經營といふことは餘程むづかしい。それから郵便電信、電話は其の無能なることに於て、今日盛んに攻擊を受けて居る。然しこれが國家の事業である、豫算に縛られ、俸給令に縛られて居るから、民間の事業と競爭して有能の事務員を吸收するといふことは出來ない。電話の如きは幾年か前に申込まなければかゝつて來ないので、電話の株に高い相場が現はれた始末である。而してその需要の多い電話は、何故に擴張しないかと言へば、曰く豫算がないからといふ返答である。斯くの如きは——若し民間の事業であつたならば、需要の起るに從つて擴張せられ、電話の相場といふが如き天下の奇觀の生ずることなどは無かつたらう。さうして見ると民間の事業の弊害は即ち過剩生産と反對に生産不足の弊害が玆に産業の痼疾となつて現はれて居る。

五

斯くの如く考へて見ると、國有、市有もなか〳〵當てにはならぬ。これをして社會主義者の言ふ如く、眞に社會の需要に應ずるやうな働きをなさしむるためには、先づ以て官僚制度の一大改革に努めなければならぬ。その官吏採用法に於て、その事務執行法に於て、今よりも遙かに伸縮自由にして、敏活に働くやうなものにならなければならぬ。また是等の公の事業を監督するものは、議會及び政府であるから、その議會なり、政府なりがもつと正直なものにならなければならぬ。今日の如く官僚に任せば官僚が不正をなし、政黨に賴れば政黨が橫暴を働くといふやうな狀態があつたら、折角の高遠なる社會主義の理想もその實行に至つて何等得るところが無いといふ結果に陷るであらう。

そこで社會主義に反對する人は、直に國有、市有事業の缺點を見つけ出して居る。曰く今日の經濟組織が恐慌の如き大弊害につき纏はれて居るとはいひながら、曲りなりにも需要供給の調和〳〵とつて行けるのは、實に營利といふ強い動機があればこそ出來るのである。人は營利のために正直有能なる經營をする

のである。營利なくしてこれだけの働きを人に求めるのはそもそもの誤であると。さう考へて見れば不完全ながら今の經濟組織は、人間の用ふる最もよい經濟組織といふことになるであらう。

此の議論は隨分勝手な議論ではあるが、然しその中には確かに眞理を含んで居る。即ち何か人の行動を指導するところの有力な働きがなければならぬといふ事である。その働きは必らずしも營利とは限らない。名譽でもよし、權力でもよし、又た社會のために働くといふ所謂社會放資の誠意でもよい。此の如きは空想と言はれるかも知れぬが、兎に角戰時に於ては、年俸一弗で、亞米利加の鐵道全部を、正直に支配した敏腕家もあつたのである。それ故に吾々は失望する必要はないが、只だ私の希望するところは、日本の社會主義若しくは其の外の新思想を呼吸する靑年が、論あつて策無き空想の程度に止まらず、事業の經營といふ方面に進み、日本の自治制度、議院制度、官制、官吏登用法、會計其の他總べての細目に入つて、日本の改造を、實行的に考へるといふ處まで進まねばならぬといふ事である。

(終)

恐慌の齎らす影響に就きて（社會主義的統制と失業）

法學博士　神戸正雄

（一）

恐慌が起つた。其はもう收まつたやうで、まだ良くは收まらない。何分膏肓に入つた病氣のあとであるから、一度の療治位ではさう容易に直ほるまい。其れで永く痛みを感じて居る間に何う病人の心裡が變化するか分らぬ。絶望と思つて首を縊ることになるか、其れとも過去の不養生不品行を十分悔悟して益々節制を重んずることとなり、益々淸き正しき人になるか、其は分らない。吾々にとつては洵に興味ある見物である。

（二）

由來恐慌に關聯して此が恰かも現代經濟組織の大弱點である。之を除去するのには、社會主義的の統制ある組織を作らなくてはならぬといふやうな考もある。斯の如きことは一應の道理のあることであつて、此度の恐慌より職を失ひ産を破り又は資本を減少することとなりたる人々の中にも斯種の考を起す者が相當に出來やうと思ふ。其れに前の好景氣時代に煩悶し苦勞した人々もがあつて、其等の人々と一緒になつて現社會を呪うことになりはせぬか。此場合之を最も用心しなくてはならぬ。

（三）

成程今度の恐慌は一方よりいへば極端なる物價騰貴、過度なる思惑、過度なる生産及企業計畫の反動であり、他面よりいへば貿易の逆調、金融梗塞の結果である。此等は現代の資本主義的、個人主義的組織の下には避くべからざる弊害であつて、若も此組織を改めて社會主義的のものと爲し、社會に於て事業を統一的に計畫し、需要と供給との調和を得せしむることが出來れば、斯の如き結果を生ぜずして濟むが如くではある。併し斯かる社會的統一計畫が行はれても果して能く人々に適當なる仕事を與え、彼等の需要品に過不足なからしむることを得るや其は甚だ疑はしい。其に於て今日の亂雜不統一なる計畫に於けるよりも一層適切になるといふことは想像し得らるるが、其れでも特に對外國干係に依る擾亂は免れぬ。或は此方は國家的に統制することが出來るかも知らぬが、其の自然の脅威に依る擾亂に至つては之を打消すに由がない。尤も此も學術技藝の進歩と、社會的の準備とに依つて或程度までは其結界を緩和し得る。其故に夫の社會主義の下に於ても到底甘くは往かないなどと一概に之を輕侮すべきものではないが、併し之に依つて彼の弊を完全に救濟し得ると思ふに至ては固より誤りである。又現社會の下に於ても國家の指導宜しきを得れば吾々が今日我邦にて見るが如き現象は呈せずして濟む。少くとも其烈しさの度合を餘程緩むことが出來、現社會に對する呪咀をして太しきに至らしめざることは出來る。

（四）

處で其の現代の社會組織の下に夫の弊害を太しくせざらんが爲めには、政府に於て相當に力強き合理的なる干渉統制を、人

人の經濟生活の上にかへなければならない。其が併し我邦に現在政治を行つて居るやうな人々に出來るか何うか。自由放任ならば彼の人達にでも出來るが、之が合理的の統制となると、或は彼等には六づかしいかも知れない。さうすると前にいふ如き弊害が今後とも屢々繰返へされて、不平の氣が社會に充滿し、現社會呪咀の勢を增すかも知れない。そして其れが困るといふならば政府も勇氣を出してしつかりしなくてはなるまい。尤も之につき政府ばかりを責めても仕方がない。其の能く適當なる仕事の行へざる政府を持つのは畢竟するに其を信任する人民が惡いともいへる。誰にしても此先き暫は我邦も混沌たるものである。

（五）

何は兎もあれ當面の失業救濟だけは、着々行はなくてはならぬ。今其方法について管々しく述べぬが、此方策がしつかり立たぬと、人々も背に腹は代えられないから、前後を顧みずして國家社會に不利を生ずるが如き事をも仕出來すであらう。併し幸にして其方法が甘く行はれたならば、そして人々が今度の恐慌打擊に懲りて、着實眞面目に產業を營み、堅實なる生活を營むことになるならば、社會の人心が一應安定することともならう。併し又社會の人心極端から極端に走つて、餘り消極的になてしまつても、國家の前途甚だ寒心すべきである。目下四圍の事情、排日氣分が横溢せりとはいへ、對外政策宜しきを得るならば餘程の度まで之を排消することも出來やうし、我邦には此度の戰爭によりて諸外國よりも經濟上の實力を加ふるに於て好都合となつた點もあるし、さう悲觀するには及ばない。其れで今後は、朝野心を一にして現社會組織の下に悲觀に失せず樂觀に走らず、最も堅實なる向上進歩を遂ぐるやうに努力することが肝要と思はるる。

經濟界の不健康と失業及個性勞働

生田長江

昨今の一般的不景氣が、嚴密に恐慌といふところまで行くものかどうか、それは我々に分らない問題である。かりに其處(そこ)まで行くものとしたら、どんな順序でどんな過程を取つて行くものか、それは尙更我々に分らない問題である。

我々に分つてゐるのは、今日の場合經濟的恐慌が全然來ないでしまふよりも、一邊來て呉れる方がよささうだと云ふことである。

くいしんぼうな經濟界は、胃腑が張り裂けるほどに詰め込んだのである。しかも調子に乘つて、恐ろしい毒藥や河豚までも貪り食つたのである。

そして我々には、現下の經濟界がこの上詰め込むことを差控えただけで、十分もとの健康狀態に復し得るものとは考へられない。一服呑んで立處(たちどころ)に功驗の著れるやうな靈藥が、たやすく見付かりさうにもない。

だから、いつその事、もどせる物はもどして仕舞ひ、くだせる物はくだして仕舞ひ、一邊腹の中を奇麗にして仕舞ふ方がよい。

處で經濟的恐慌が、實業家と稱する虛業家を、事業家と稱する投機家を、その大風に吹き飛ばし、その大浪の中に呑みつぶして行くと云ふだけならば、我々は寧ろ快哉を叫び祝盃を擧げたであらう。

けれども、所謂實業家と投機家とは、彼等が好運の頂上へのぼり詰めた時にも、不運の谷底へ逆落しに落ちて行く時にも、常に我々無産者階級を犧牲にする。或はその逆落しの道連れにし、或は其瓦解の身代りにする。云ふまでもなく、資本主義社會の經濟組織が根本的にさう出來てゐるからである。

不景氣から恐慌へかけての推移に、我々無産者階級が我々自身の階級の爲めに、最も先づ考へなければならないのは、恐ら

く失業の問題であらう。

失業の問題は、直接には失業その事によつて我々の生活を脅かし、間接には勞賃の低減によつて我々の生活を危うくする。前者は實際に於て、それほど多數の人々を犠牲にしない場合にも、直接にして退引ならぬ問題となる。後者は間接の壓迫である代りには、殆んど我々の階級全體が免れることの出來ないものになる。

――改めて云ふまでもなく、資本主義社會にあつては、勞賃の上る割合よりも物價の上る割合が大きく、勞賃の下る割合よりも物價の下る割合が小さいものと、原則的に決定されてゐるからである。

資本家階級の無意識的代辯者であるところの、一人の善良なる政府當局者は言つてゐた――『上景氣につれて工場勞働者になつた百姓なぞは、不景氣になつたらもとの百姓に歸るまでだ』と。

此問題を斯う云ふ風に、事もなげに考へてゐる人々は中々多いやうである。

しかし乍ら、農業勞働者が上景氣から來る誘惑によつて、工場勞働者に轉じたとき、彼は其手足の習慣を變へられたばかりでなく、その心の、精神の習慣をも變へられてゐる。

一度客商賣の家に奉公した女中には、もはや堅氣な御邸へ奉公にあがれないものだといふことを考へて見なければならぬ。

又、田園の農業勞働者が盛に都市の工場勞働者になつたこの數年間の大推移は農民階級に於ける家族主義の本質的破壞を來さないでは置かなかつた。そして一たび破壞された家族主義を舊態に復することは、殆んど不可能の業に近い。

ところで、日本在來の家族主義を根底に置かない農業勞働といふものを、現實に見ることがどうして出來ようぞ。

具體的の一例を擧げてもよい。戸主若しくは兩親の許諾贊助を得ないで、新しい家庭を工場地に作つた子女が、二男三男等が、その家庭を提げてもとの出身地なる田園へ歸り、農業勞働者に復しようとする場合を考へて見よ。

だが、經濟的恐慌が、少くとも一般的不景氣が、或る見地よりすれば、或る方面に好影響を及ぼすべきことも十分に考へられる。

この數年間に亘る好景氣及び空景氣、一般に生産量の増進を

のみ急いで、生産質の低下を顧みなかつた。能率は單に澤山の物を生産することにのみ關して居り、優良の品を生産することに關して居らなかつた。

少くとも不景氣は、恐慌に近い不景すらも、斯うした病弊から生産界を救治してくれるかも知れない。

殊に、私の所謂個性勞働であるべき藝術家の仕事なぞも、この數年來の一般的好景氣に煽り立てられて、無暗矢鱈と生産したかに見えるものが少くない。

畫家、特に日本畫家なぞは、今少し不景氣になつたら、質の善い生産をするかも知れない。名前ばかりで賣るわけに行かないからである。ただの成金が買ふのでなくて、畫の好きな人が買ふやうになるからである。

芝居なぞも、役者の名前と小屋の名前とで、客を呼べなくなるのは、その質を善くする所以である。そして不景氣風は既に既に、興行師等の營業振りを變へさせようとしてゐるやうである。

今日五圓十圓の觀劇料がもとの二圓三圓位になつて、三階四階のお客樣――これが實際はわかるお客樣である――が二階一階へ歸つて來るとき、役者も本氣になるのである。役者も今少し金錢的報酬を少くされると共に、藝術家としての生活を尊重されるやうになるのである。即ち、小屋が折々ほされるやうにもなり役者も今少し勉强工夫のひまを與へられるやうになるのである。

不景氣もしくは恐慌が、持ち來すかも知れない今一の好結果を考へて見よう。

これまでの上景氣は、所謂腦力勞働者もしくは精神勞働者にするよりも先きに、所謂筋肉勞働者もしくは肉體勞働者に幸ひした。

肉體勞働者の中でも、所謂不熟練勞働者が熟練勞働者に比較し、割合によく報いられてゐた。精神勞働者の中でも、私の所謂非個性勞働者が個性勞働者に比較し、割合によく報いられてゐた。

其爲めに、精神勞働者にとつては、肉體勞働者が跋扈するやうに見え、熟練勞働者にとつては、不熟練勞働者が増長するやうに見え、個性勞働者にとつては、非個性勞働者がうまいことをしてゐるやうに見えてゐた。

かうした反感が色々の勞働者階級の團結を妨げたり弱めたりしてゐたことも少くはあるまい。

ところで、今日の不景氣及び事によつたら來るかも知れない經濟的恐慌は、恐らく其失業問題をもつて、所謂精神勞働者を脅かす前に肉體勞働者を脅すであらう。熟練勞働者を襲ふ前に不熟練勞働者を襲ひ、私の所謂個性勞働者を襲ふ前に非個性勞働者を襲ふであらう。

そしてその時、割にばつこしてゐるといふ感じ、增長してゐるといふ感じ、うまいことをしてゐるといふ感じを與へたものが、最早やさうした感じを與へなくなり、若しくは氣の毒に思はれるものとなるであらう。この形勢の一變が、各種勞働階級の團結を妨げてゐたものを取り除くかも知れないといふことを此場合想像して見ずには居られない。

知識階級といふ言葉が、何を意味するかのむづかしい詮索はしばらく措く。若しそれが不熟練勞働者に對する熟練勞働者を肉體勞働者に對する精神勞働者を、また私の所謂非個性勞働者に對する個性勞働者を意味することが出來るものならば、知識階級を一般勞働階級に結合さして置くのは、否時としては一般勞働階級に對する指導的の地位にさへも据へて置くことは、現代の勞働運動の促進にとつて最も切要なる事項の一に屬するとも云へるであらう。そして此見地から我々は、一般的不景氣若しくは恐慌の齎す可き一面の影響を考察することを忘れてはなるまいと思ふ。

咬豆茶話

▲新派學者の淵叢と稱せられた京都大學も、クロポトキンでは東京大學に先鞭をつけられたので、何事にかけても負嫌ゐの河上肇氏などは一生懸命で、目下クロの研究中だそうナ。尤も東京大學といつても、クロの研究者は森戸氏一人で、京大でも米田氏は一通りの研究は遂げている。また、朝永博士は八年前、萬國遺傳研究會で、クロ翁とは面識の間柄ヂャゲナ。

▲何といつても、クロ研究の權威者は大杉君と森戸君で、大杉君はクロの著を四十種近く讀破しておるそうだ。所が、その數種が、さる女の手にあるそうで、大杉君は目下その取戻しに腐心している。さる女とは誰のことだろう、ハテナ。

▲慶大では、小泉派の花形小泉信三君が、その權威者であり、早大では、昇曙夢君が第一で、片上伸君が之に亞ぐとのことぢゃ。文藝家側より有島武郎君、上司小劍君等で、山川均君、賀川豐彥君は浪人思想家中での研究者だそうな。

▲現代思想家中で、尤も小說を愛讀するのが朝永博士、河田博士、森戸辰男君、小泉信三君等で、朝永氏は高等學校時代までは、創作家として立つつもりであつただけ、藝術に對しての智識は豐富である。その肩負は吉田絃次郎君である。

▲小泉君は大の宇野浩二黨で、宇野君の作は夫婦輪讀で片つ端から讀破するそうだ。小泉夫人は三田派文壇の領袖水上瀧太郎君の令妹に當る。その小泉君にクロを手ほどきしたのが、普選案に反對の田中萃一郎博士ぢゃから面黑い。

▲京都の佐々木博士が、高潔なる人格者たることは誰知らぬものはない。所が博士は最近令嬢を失はれた。昨年も五月に令息を失はれたので、今では一人の子供さんもなく、淋しい生活を病夫人相手にしておられる。

▲所が、引きも切らざる訪客が、博士を訪問すると、博士は先づ淨土寺の綠丘を展望して「私は新綠に對していつも愛が多いのですが」と先づ哀愁の辭、敬虔の態度に出づるので、訪客も思はず袖を濕すそうだ。

▲それがすむと、博士は襟を正して「一體現下の時事はどうです、政府も、人民も實に困つたものですナ、こんなにまで國民をして政治に失望せしめし、政府の罪業は輕からず、これでは直接行動の何のと騷がれても……」と熱烈痛快なる憤慨をやるので、客も屢はずつられて仕舞ふ。

▲最後に、モウ事玆に至つては、選擧の終了と共に辭色遊輾に草鞋がけで普選宣傳に出掛ける他に策がないと痛憤骨を刺すものがあつたそうな。

新議員の新議會と内閣改造

總選擧と内閣の運命

法學博士　堀江歸一

政友會の絶對多數

五月十四日の新聞紙に依つて、總選擧の結果を見ると、政友會二百六十七名、憲政會百九名、國民黨二十九名、無所屬四十九名と云ふことである。此外に山形、宮城、巖手諸縣の郡部や北海道の一部に未開票の所があるので、各派の議員數は今後多少の變動を見るであらうが、大體の形勢は以上の如くであつて結局政友會が豫定通り絶對多數を制することゝ爲つたのである。立憲政治の本則から云へば、總選擧を行つて、其結果絶對多數の與黨議員を得たならば、原内閣は誠に盤石の基礎に據つたものであつて、天下何ものも之に敵せざるの勢あつて然る可きであるが、原内閣なり、政友會なり、今日果して斯る心持ちで居るであらうかどうか、我々局外に在る者が觀察すると、原内閣は總選擧に勝ち、議員の頭數は揃へたが、遑々として安んずる能はざる趣のあることは、爭う可からざる事實である。

衆議院で絶對多數の政黨に擁立されてる原内閣に不安の兆があると云ふ變態を生じて居るのは何故であるか。一言を以て云へば、原内閣の衆議院に擁して居る絶對多數は一部階級の利害を代表する者であるが、して民衆を代表して居る者でなく、原内閣が此絶對多數の黨與を率ひて政治上に爲さんとする所は少しも民衆の希望する所でもなければ多數階級の贊成する所でもない、輿論を代表する場所は絶對多數黨たる政友會でもなけ

れば、衆議院でもなく、詰り原内閣は輿論を代表せず、輿論と共鳴しない多數黨を官權の威力で作り上げて、自ら得たりとして居るに過ぎないのである。原内閣の閣員にしろ、政友會の幹部員にしろ、多少なりとも這般の情僞に通じて居る者は絕對多數の寵與を擁しつゝも、内心忸怩たらざるを得ない次第であつて、陣笠議員共が絕對多數黨を鼻に掛けて、肩で風を切るやうな勢を示すのは、所謂親の心、子知らずの類ではあるまいか。

原内閣不信の證據

原内閣が眞實全國民の輿望を荷うて居るものであるとすれば全國の市部なり、大都會なりで、今少し豫想に近い勝利が收められさうなものであるのに、反對に意外の失敗を招いたのは如何なる譯であるか。之に對して政友會の某幹部は都會の人心は浮薄であるとか、政府反對の傾向を持つて居るとか云ふやうな理由を附會して、辯明を試みたが、私の見る所を以てすれば、政友會が都會に於ける選擧で失敗したのは、要するに原内閣の經濟政策が都會多數の住民を苦しめ、彼等の利害を蹂躙して顧みなかつた結果に外ならない。然らば政友會が地方郡村に强い根據を持ち、現に今度の選擧に於ても、都會に於ける失敗を郡村に於ける勝利で償ひ得たのみならず、寧ろ剩す所大なるを得たのは、原内閣の政策が郡村の利益に適合した結果であると云はれるかどうか。政友會が創立の當初から一個の農民黨であり、現に原内閣の經濟政策が米價を始めとして諸物價を引上げて、地方農民の利益を謀ることを主眼としたのも、世上公知の事實である。隨つて大都會に於ては、金權者階級や、地方に於ては、大地主階級に屬する資産家が政友會を德とし、原内閣に謳歌したのは、即ち原氏等が過般の解散を斷行した所以であらうが、之に對しては總選擧前に二ツの拔け穴が生じ來つたのである。一ツは地方農民が物價騰貴で利益したと云つた所で、現實に利益を占めたのは、大地主だけであつて、中農以下の自作農や小作人の階級に爲れば、寧ろ物價騰貴の影響に苦しんで居つたことであつて、他の一ツは過日の財界反動の結果として、株式市價の暴落は都會の事業家や資産家に大なる損失を加へた、而して斯る反動的趨勢を生じたのは、主として政友會の放漫なる財政策に基くものであると云ふことが了解されたので、是れまで原内閣を以て財界の守護神であるやに考へて居つた實業界又は資産家階級の原内閣に對する信望は著しく傷けられたことである。若しも原内閣にして財界を救濟する意があるな

らば、迅速に救濟策を實行す可き筈であつて、斯くしたならば**或は財界の信望を繋ぎ止めたかも知れないが、此點に於ては、**原氏が單に政友會近畿大會で、政府は財界の窮狀を看過する**ものでない、何等か救濟策**を施すと明言したゞけであつて、今日に至るまで、策の公にされたものがない。此事の如き明に原內閣に對する財界の輿望を失墜させ、都會に於ける政友會候補者の運動に不利の影響を及ぼすに至つたものと見なければならぬ。

然し原內閣や政友會の立場から云へば、總選擧が五月十日に行はれたので、好都合であつたのである。今後經濟社會の景氣が遽に立直る見込みはなく、益々悲境に陷ることは、內外の狀勢に於て、已むを得ないとしたならば、若し總選擧の期日が後れて、六月と爲り、七月と爲れば爲るだけ政友會は不利の立場に陷り、都會と云はず、郡村と云はず、到る所に人氣を傷けて起つ可からざるの傷痍を蒙つた筈である。郡村の景氣の惡化しない今日、總選擧が行はれた結果、郡村の人氣だけでも維持し得たのは、政友會に取つて勿怪の幸としなければなるまい。

普選の國民的要求

今度の總選擧に臨んで、政友會は原氏の意見通り、普通選擧**を以て階級を打破する危險ありとし、**又我國が普通選擧を實行したならば、露西亞や獨逸のやうに國を擧げて、過激化すると云ふとを高唱して、普選論の勢力を遮斷しやうと試みたが、交通不便、人煙稀薄な僻邑の人々なれば兎に角、相當の地方に生業を營んで居る人々で、斯る迷論を輕信した者は幾人を數ふ可きであらうか。大小の都會到る所で、普選論が意外に歡迎されたのは、明白の事實であつて、普選は知識階級に於て輿論と爲つたのである。詰り民衆は從來の如き制限選擧法の下で、一局部の利害のみを代表する議員が議會に選出され、民衆全體の利害は之を閑却しながら、彼等の選擧民たる金權者階級の利益のみを計畫する議會に對して、倦怠を覺へれば、失望をも感じて居る。左ればとて直接行動を取つて、時の爲政者を脅すことも彼等の良心が許さない。斯くて彼等は現狀を打破する唯一の合理的手段であり、又合法的方便である普通選擧を主張し、又之に共鳴することゝ爲つたのである。私は選擧運動の漸く白熱化し來つた際、秋田縣に行き、金澤市に行き、土地の有志者に就て聞くと、政友派では原總理直傳の普選は階級打破の危險を齎すと云ふ愚論を、更に俗に碎いて、普選が實行されると、今日

の有權者は有權者と云ふ特殊の地位を失つて、自家の番頭手代や、出入りの車夫と同權に爲り、彼等は主人の命令を奉じないやうに爲るなどゝ、一種の感情論を鼓吹し廻つたさうであるが、今日、我國民の政治的知識は斯る愚論に攪亂される程幼稚ではない、何處までも普選の實行に依て、現狀を打破しやうとする意氣込みの盛なことが遂に都市に於ける政友會の勢力に大打擊を加へた所以であると認められやう。斯く觀察すれば、過般の議會で原內閣が全力を擧げて、普選運動を邀擊し、不條理な解散まで行つて、制限選擧の下に、不自然極まる絕對多數を制しやうとした意味合も自ら了解されるのである。

要するに年來金權政治を信條とし、民衆を敵とする政治を行つて、憚る所なかつた政友會に取つては、眞實民意の表現され可き普通選擧は大禁物であつて、普選實行の曉に、總選擧が行はれたならば、都會と云はず、郡村と云はず、政友會が不利益の地位に陷るのは當然の數である。現に今度の總選擧に於ても、新に選擧權を得た納稅額十圓以下三圓以上の有權者が正當の理解を以て選擧權を行使した爲めに、都會に於ける非政友の空氣を濃厚にしたのは、爭う可からざる事實である。選擧權の擴張にして、尙ほ斯の如くであるとしたならば、普通選擧の實行が一層著しく民衆を敵とする原內閣や、政友會に不利の狀勢を打開することゝ爲るのは勿論であつて、彼等が如何にしても普選を抑制しやうと肝膽を碎いたのも、自己防衞の上から見て、至當の手段であつたと云はなければならぬ。

原內閣は民衆を敵とするか

然し原內閣なり、政友會なり、何時まで普選の實行を遮斷せんとするものであるか、又遮斷し得るものと考へて居るのであるか。大小都會の識者階級は盡く普選の必要を認め、又其實行を以て、勢の已むを得ざるものと信じて居る。此場合に衆議院に絕對多數の黨員を擁するのを唯一の强味とする原內閣が普通選擧に反對してとした所で、夫れが何の權威に爲るであらうか。政友會が衆議院に絕對多數を占め得たと云ふことは、我國の現狀に於ては、決して天下の輿望を收めた證據には爲らない。今後在野黨を通じて、普選案が議會の一問題と爲つた場合に、之に賛成する民衆の運動が院外に起り、一方に原內閣の經濟策の犧牲として生ずる失業者が之に和して、政治上の運動を試みたならば、如何に衆議院に絕對多數を擁する原內閣と雖も崩壞せざるを得まい。是れは甚だ逆手であつて、斯る逆手の行

ばれることは、頗る好ましくない事ではあるが、官權の威力で作り上げられた多數黨を打ち倒すには、民衆の力に依らなければばならず、又多年民衆の利害を蹂躙して居つた原內閣が民衆の力で倒されるのは因果の正に然る可き所であると思はれる。原內閣は今度の總選擧で、絕對多數を得たことを一段落として、徹底的社會政策を行つて、民望を收める工風であるやに傳へられる。過去の罪障を消滅させる手段として、此事は道理至極の着想であるが、今日のやうに、好景氣の絕頂から、不景氣のドン底に社會を沈ませる非社會的經濟策を無遠慮に行ひ、其結果として生じた失業者や倒產者を社會政策と云ふ名目の下で、救濟したとした所で、夫れが何の意味を爲すであらうか、私をして忌憚なく云はせれば、俗に謂ふ破戒僧の空念佛であつて、世人の滿足を博するに足らないである。

政友會が絕對多數を得た勝利に喜んで居る其脚下には、明に勝利を裏切るやうな事實が推寄せて來るではないか、普通選擧の即行や、失業問題の解決や、財界の救濟や、生活難の緩和や色々の難件で苦しめられる一方に、財界反動の爲めに、豫算施行難の窮境に陷つて、原內閣が朝日に雪の融ける如くに、自滅するのも、遠いことではあるまい。

金權候補者の失敗

今度の總選擧で、地方の郡村に於ては兎に角、都會に於ては所謂金權候補者が多くは落選したのも、時代の風潮の然らしめる所と見られやう。金權候補者が金の使へるに任せて、選擧運動を派手にし、場合に依つては、買收までもし、金力を以てすれば天下の事意の如く爲らさるはなしと云ふ例は從來隨所に起つた事實である。成金熱の餘燼の未だ滅しない今日、全國を通じて成金者流の候補者に立つた者は少なからずあり、而して政友會が從來金權政治で成金者流を懷柔した結果、是等の候補者は何れも政友會から公認され、又は同會の庇護を蒙つたのであるが大概は落選の憂目を見た。即ち成金が金錢の威光で、選擧場裡を左右しやうとしても、容易に目的を達し得られない、選擧界には情實もあらう、腐敗もあらう、色々の好ましくないこともあらうが、成金候補者と貧乏候補者と相對立して、競爭する場合に、後者が前者を倒すと云ふのは、何故であるかと云へば、第一には政友會に對する民心の離反から生ずる現象とも云へやう、第二には納稅額十圓以下三圓以上の新有權者が選擧權を公正に行使した結果であるとも云へやう、第三には我國民が拜金

の惡風に染まない氣象を持つて居る爲めとも云へやう、兎に角社會の一部に金權を以て左右されない階級の存在する事實を選擧の實際に於て、示したのは、金權萬能、金權政治流行の今日に臨んで、特に私の痛快とする所である。或る財產家で落選した人は嘆息して、日本でも斯う金權者流に對する民衆の反感が强く爲つては、末が案じられると云ふやうな話をしたさうであるが、民衆は今日金權政治其もの に反對するのであつて、金權者其人に反對するのではない、金權者流が原內閣と結託し、政友會と苟合して、衆議院に一席を占めるのは、益々金權政治の色彩を濃厚ならしめるものであるから、彼等が候補者に立つた場合には、極力反對することゝ爲るのである。財產家が議員に選出されて、政治上に志を伸すのは其人の自由であるが、同時に財產の威力を揮つて、財力に乏しい者の政治運動を妨害するやうな傾向の出た場合には、我々は之を抑壓することに心掛けねばならないのである。

內閣の補充は無意義なり

一時原內閣改造論なるものが世間に傳へられた。原內閣の閣員中、秕政百出、天下の非難を蒙つて居るのは外務大藏農商務の三大臣であるから、是等の人々を革職し、外に司法鐵道兩大臣に新人物を羅致し來つたならば、聊かなりとも原內閣に對する人心を一新し、內閣の壽命を續けられやしまいかと云ふのが改造論の眼目とする所であつたが、私は二ツの點から、改造の實行し難いことを考へて居つた。第一は此內閣で原氏は內閣官制に云ふ「各大臣の首班として、機務を奏宜し、旨を承けて行政各部の統一を保持す」るばかりでなく、實に自ら各省大臣に代つて、各省の施政を指揮監督して居るのである。現に議會で少し面倒な質問が各省大臣殊に脫線の氣味のある大藏大臣なり所管事務に通じない文部大臣なりに發されると、原氏自ら之を引受けて、答辯の任に當ることを見ても、如何に氏が諸大臣を次官扱にして、八人藝を行つて居るかゞ判然する。隨つて大藏なり、農商務なり、外務なりに失策があつたとした所で、其實任者は決して當局の大臣だけではなく、原氏自身亦責任の大部分を頒たなければならぬ。內閣にして改造す可くんば、前記の三大臣を革職する前に、首相たる原氏自ら處決しなければ、名分が立たぬ譯である。或は名分の如きは、原氏のやうな俗惡の政治家が夢にも思はない所であつて、自分の爲め、內閣の爲め又は政友會の爲めならば、如何なる不條理極まつた事でも斷行

するものとして、外務大藏農商務司法鐵道と云ふ五大臣の人選を如[redacted]以上の人物を求め、二大臣にも世間の映稱する人物を得られるであらうか、甚だ疑はしい次第であつて、此事も自ら改造論を不可能とする一原因である。

内閣改造論は如何なる程度まで、原氏の考慮に上つたか、固より何人も知り得ない所であるが、結局改造の如きは實行されずして、今度の二大臣の補充と爲つたのであらうが、是れがなんで人心を新にするとか、内閣の威容を加へたとか云ふ所以と爲るであらうか。今日の原内閣に最も缺けて居るのは、國家の經綸に任ずる才幹である。所管事務の如きは、何人が大臣の職に就いたとした所で、其大綱を得ることは出來るし、次官以下に人を得れば、日常の行政に支障を生ずる譯のものではない。原内閣で二大臣を補充するならば、國家經綸の重きに任ずる人物を得るのが必要であつて、斯くしたならば内閣の最も不足とした所を補ひ得たかも知れない。元田と云ふ舊人物に何の才幹があるであらうか、大木と云ふ人は元田に比べると、新人物のやうであるが、斯人の經綸とか、抱負とか纏つた政見は頓と世間に知られて居らない。さうすると原内閣には大臣の顔觸れは揃つたやうなものゝ、別に替り榮えのしたことも認められず、施政の方針が一新されるものとも思はれず、随つて世間に信望を失した内閣は依然として信望を失した儘で、施政に不滿意を感ずる外はあるまいと考へられる。

原氏が如何なる邊まで新人物を求めて、司法なり、鐵道なりの局に据へやうとしたかは知らないが、假に原氏が卑辭厚禮、有爲の材を迎へやうとした所で、今日の原内閣の如く、滿身に傷痍を蒙り、常に民衆を敵とする政治を施して憚らない内閣に一身を投ずる人は、大臣病の患者以外に求められまい。是れが今度の大臣補充をして無意義に終らしめた所以であつて、此一事を以つてしても、原内閣の運命が眼前に迫り來つたことを知り得られるのである。

國民は傍觀者である

室伏高信

（一）

今度の總選擧は豫定の道を歩るいて豫定の結果にと到達した。中には政治道樂の人達を喜ばせるだけの番狂はせと稱せられるものもないではなかつた。特に東京における選擧の結果がこの番狂はせに終つてゐるように見える。三宅雪嶺級の政治批評家は、市部だけの開票の結果を見て、國民が覺醒した結果であるかのように囃し立てた。憲政會の安達謙藏君はこれをもつて言論の勝利であるかのように吹聽した。しかしどこに國民の覺醒らしいものがあつたであらうか。どこに言論の勝利らしいものがあつたであらうか。如何にも日本橋の高木對近藤、京橋の關對某々、芝の横山對大塚、神田の古島對某々、牛込の三木對某々、麴町の鈴木對三輪田、八王子の村野對八並、これ等の爭ひにおいて近藤が勝ち、横山が勝ち、關が勝ち、古島、三木八並、鈴木が勝つたことは、政治道樂の先生方には興味ある勝負であつたに相違ない。しかしその興味とは、相撲の勝負においても、野球の試合においても、等しく感ずることのできる興味ではないか。われ等の見るところでは、日本橋における近藤の勝利は、近藤なる人が江戸ツ兒氣質と稱する、非理性的精神を利用して、所謂『親の仇』を報じたといふまでのことである。それは床次内相が俠客連中を利用したのと何の異るところもないではないか、要するに講談小說の材料となるに過ぎないであらう。關が勝ち、古島が勝ち、三木、鈴木、八並等の諸君が勝つたにしても、これまた政治的には何等の意味をももつてはゐない。あるものはそれをもつて普通選擧論の勝利だといふかも知れない。私も何ほどかこうした意味が混入してゐることの事實を認めることを拒まないにしても、關や、古島や、八並や鈴木や、三木や、これ等の人達が果して眞に普通選擧の味方で

あらうか。國民黨とは、昨年普通選擧に反對するために四、五人の犠牲者を出してまで頑張つてゐた政黨ではないか。憲政會とは最後まで普通選擧に賛成することのできなかつた政黨ではないか。勿論彼等自身は口に普通選擧を云々する。加藤高明氏は大阪における憲政會大會でしぶ〳〵ながら普通選擧急施の必要を説いた。そして長々しい演説を試みた。しかし彼れの謂ふところの普通選擧とはたゞ獨立の生計を營む男子に選擧を與へることであるに過ぎない。かくのごとき普通選擧が世界歴史以來曾つてどこかに存在したことがあるであらうか。加藤氏は英國通（トーリーとリベラルに通じてゐるといふ意味であらう）だといふが、英國においては一八八四年以來憲政會の謂ふところの普通選擧法案よりももつと進んだ法律が行はれてきた。即ち獨立の生計を營むもの丶外に、土地の所有者及び土地または家屋の占有者であつて年齢廿一歳以上のものには一般に選擧權が與へられてきたのである。しかし學者も政治家もこれをもつて普通選擧といつたものはないようである。この選擧法から一昨年になつて普通選擧にと代つたのである。それにもかゝわらず憲政會が一八八四年の英國選擧法よりもより以下の法案を提げきたりて自ら普通選擧と稱するのは滑稽でなければ僞瞞である。彼れは決して普通選擧の主張者でもなく、同情者でもなくまた普通選擧についての理解さへあるかなきか分らぬ程度のものである。此種の政黨の公認をうけた代議士が東京市から選まれたにしたところで、それは政友會の候補者と比べて何ほどの相違があるか。獨立の生計と三圓の納税者、――この間にどれほどの實質的または思想的の相違があるか。また個人的に見ても、どこに新思想の持主または新社會階級の利益を代表することのできる人達が選まれてきたか。關と辰澤とは個人的には貧乏と金持ちだけの相違はあるであらう。しかし關氏は何人を代表しようとするか。彼れの代表しようとするものはまた所有階級であるのではないか。彼れとこれとの相違は金持ちと、そしてその代辯者との相違であるに過ぎないではないか。横山對大塚の關係もそれである。麹町における鈴木對三輪田の關係とは、三越の番頭とそして事大主義の教育家との取組みであつたに過ぎない。その何れが勝ち何れが敗るゝにしても、それはたゞ個人的の勝敗または政黨勢力の消長の問題であるに過ぎない。その政黨とは何か、何れもこれ所有階級の金箔付きの辯護者であるのではないか。

（二）

市部の開票の結果政友會が不成績であつた翌日の新聞紙には憲政會の安達謙藏君がこれ言論の勝利だといふた。そしてその翌日、即ち郡部の開票の結果憲政會大敗が明らかとなつた日の新聞紙では政友會の小川平吉君がこれ國民の公平なる判斷の結果であるといふた。しかし私どもは眞面目でなくてはならない。かくのごとき職業的虚言家達に欺かるべくわれ等はあまりに賢明である。われ等は『言論の勝利』を聽く前に、日本に果して言論があるかを聽かねばならぬ。今の所有階級の政治家の諸君に都合のよくないことが一切危險として、『國家の基礎』を危うくするものとして、あらゆる野蠻と暴虐極まる干渉壓迫が行はれてゐる時に、果して眞實に言論なるものがありうるであらうか。聞えてくるものは言論ではなくしてそはたゞ虚僞である。眞實なる言論はたゞ權力によつて押しこめられたるドン底において何ごとかを囁やいてゐるに止まるであらう。またわれ等は『國民の判斷』なる言葉、――そしてその實は職業的墮落政治屋の卑しき利己心の修飾――を聽く前に、『國民』は果して『判斷』をなすべき機會が與へられてゐるかどうかを聽かなくてはならぬ。ある人は今度の選擧に對して國民が冷淡であるといふた。如何にもそうであつた。しかし『國民』にとつては冷淡であるのが當然でなくてはならない。彼等はたゞ傍觀者であるのではないか。所有階級並にその代辯者としての政治家の間における遊戯に對して狂熱するものは餘程に愚鈍な人達である。どちらが勝つても、われ等には無關係である。壓迫、干渉、官權利用、買收の選擧よ！そこで大多數の國民に特種待遇を與へて國民的責任から拒絕した横暴なる選擧よ！

（三）

私は今度の選擧について一般國民が冷淡であつたを述べた。私はこの點においてだけ今度の總選擧に意義があつたと思ふものである。何故に國民は今度の選擧に冷淡であつたか。私は次のように答へたい、そは議會の不信用、政黨の不信用、を物語つてゐるものであると。國民とは殆んど何等の交渉もない點において、衆議院と貴族院との間にどれほどの相違があるであらうか。否、議會と樞密院との間にさへどれほどの相違があるであらうか。そして政黨とは職業的虚言者を首腦者とする利益團體である。その職業的虚言者の口から所有階級の利益が議會に

おいて辯護せられる。——今日の政黨、議會、そして政治とはかくのごとき階級的、官僚的、そして腐敗と悪徳とを極めたものである。一般の國民はこの事實について長い間眠つてきた。今や漸くその長い眠りから醒めかけてきた。その醒めかけてきたことが、選擧に對する國民の冷淡となつて現はれたのである。それは國民の自覺を語るものである。國民をしてその眞實なる地位を自覺せしめよ。そして今日の政黨と、あらゆる惡德と腐敗の政治家とに冷淡たらしめよ。——あらゆる國民に政治と生活とが公平に頒ち與へられた時にのみ國民は政治に熱心となることができるであらう。

（四）

今日の議會制度、そしてそれに伴ふ政黨政治において果して政治と生活とは國民に平等に頒たれるであらうか。私どもはここに大なる改革が必要であると信ずる。小選擧區と大選擧區、三圓案と獨立生計案、政友會と憲政會、三菱系と三井系、これ等の爭ひに對しては國民は永久に傍觀者でなくてはならないであらう。

總選擧の結果と普通選擧の前途

法學博士　末廣重雄

一

此度の總選擧に於て、政友會は軍資金が豐富であり、且つ政府を後楯にすると云ふ强味が有た上に、肝心の普通選擧問題に就て、憲政會の氣勢が頗る揚らず、政友會の攻擊に對して、受太刀の氣味があつた爲め、政友會は割合樂な戰爭をしたやうである。尤も市部の成績を見ると普通選擧派は案外な好成績を收めて居るが、結局、政友會は非常な得點を得たのである。一體、昨年末普通選擧運動が起つて以來、普通選擧に對する憲政會幹部の態度は全くなつて居なかつた。尙早であると云ひ、

大正十四年實施を主張し、愈々急進派の壓迫の爲め即時斷行に贊成しても、尙斷然たる決心が無かつた。議會解散後も、普通選擧問題を提げて政友會と戰ふ勇氣に乏しく、四月二十日、大阪に於ける憲政會近畿大會の頃までは、なるべく政友會の挑戰を避ける傾向が見へて居た。憲政會の幹部は、斯くも不甲斐ない有樣で有たが、其候補者に至つても亦同樣で有て、或者は最後に至るまで尙早論を唱へ、或者は早尙論と即時斷行論の使分をした者も有た、呆れ果てた次第である。斯麼事では矢張り等分天下は政友會のものであらう。

二

然らば腐敗した我が政界を改造し、憲政有終の美をなすに必要缺ぐべからざるものと做すべき普通選擧は、近き將來に於て具體的に結果が見られるか何うか、私は決して其前途を悲觀しないのである。今回の總選擧運動中、東京では、新聞紙が、往々にして國民が政治に餘りに冷淡である事を憤慨するも有たが然し關東はいざ知らず、關西に於ては少くとも其の心でなかつた、私の見る所では、國民は可成り政治的に眼醒めて居るやうである。私は、昨年末に普通選擧宣傳運動が起つたので、京阪神地方を初め四國北部、北陸地方を遊說し。更に最近普通選擧贊成の候補者の應援演說を爲たが、殆んど總ての土地に於て、演說會は滿員以上、或る地方の如きは、入場しきれぬ會衆に、場內に餘地なきを示さん爲に木戶を解放せる時、折柄の大雨中にも拘らず、群衆は場外に佇立して傍聽すると云ふ熱心で有た。殊に私が感心したのは、元來我國には、下足と云ふ不自由な事の有る關係上、高價なる入場料を拂ふて聞く、一流の義太夫語りの出るやうな場合に於ても、會の終る前に至つて歸る者も決して少しとしない。私等のやうな辯に拙い者の演說の時は殊に然りとする。然るに昨年末なした約三十回の普通選擧宣傳の演說中、多くの場合に於ては最後まで誰も起つ者が少くない。急所々々に拍手喝采あるのみで、熱心靜肅に傍聽するを例として居る。一般に普通選擧の演說會は常にさうであるのを見ても、如何に國民が普通選擧に關して聽かんとし、知らんとする所の切なるかを見るに足るのである。

是れに反して普通選擧反對の演說に至つては、常に聽衆の大反對を受け、辯士は多くの場合に於ては演壇に立往生をなし、其の云はんと欲する所を盡す能はないのである。大岡、元田、松田、林等の政友會の諸名士が關西地方の多くの都會に於ける

演説會に於て散々味噌を附けたと云ふ事は、隱れもない事實である。斯る出來事は、勞働者が多くして殊に普通選擧熱の高まつて居る都會に於て見るばかりでなく、田舍に於ても屢々見る所である。

憲政會の普通選擧に對する不徹底なる態度にも拘らず、又政友會が普通選擧論者は危險思想家であるとか、普通選擧には革命が伴ふとか、普通選擧を實行すれば、我國は露西亞や獨逸の二の舞になるとか出鱈目の暴言を吐いて有權者を迷はさんとしたのにも拘らず、普通選擧贊成論は燎原の火の如く擴がつた。田舍に於ても普通選擧贊成の候補者が極力普通選擧を主張した所では餘程一般に理解されるやうになつたらしい。斯の次第なれば、若し憲政會の幹部に時勢を洞察する明ある者が有て、いち早く普通選擧論を提げて立つて輿論を指導して行つたならば、普通選擧論の勢大に昂り、政友會に少なからぬ打擊を與へたに相違がなかつたと誠に殘念に思ふ。

此際の總選擧に於ては兎も角も政友會は勝利を得、普通選擧論者は敗北したのであるけれども、普通選擧論は今日少からず一般の人々から理解される事になつたやうである。例へば普通選擧の先達たる、大阪北區から出馬した今井嘉幸博士が、戶別訪問は一切なさず、演説一點張で、北區の最高點者たる上田彌兵衞氏の得票の半分を得たるに見ても、如何に大阪市民が、目醒めて居るかを知る事が出來るのだ。此の勢ひならば今後四年間普通選擧論者が不斷の宣傳をなさば、次の選擧には恐く天下の大勢を動かすであらう。さうなれば機を見るに敏なる政友會は憲政會の株を奪つて、普通選擧を我物にする事になりはすまいか。原總裁の如き、今日普通選擧に反對するけれども、其れは昨春改正したばかりのものを直ちに改正するを以て輕卒急激であるとするに外ならない。總裁は此度の解散前後に於て機を見て納稅資格を廢止しても差支へなし、場合に依りては婦人にも選擧權を與へて可なりと云ひ、主義として普通選擧に贊成すると聲明して居る。何うも私には、是れは普通選擧論者に早變りをする事ある時の爲めに今日より伏線を張つて居るやうなものでないかと思ふ。政友會の陣笠連が、普通選擧は國家の基礎を危くするとか、革命を伴ふとか云つて、之れに絕對に反對するのは、所謂親の心子知らずではあるまいか。

一千九百十二年、伊太利國民は從來普通選擧に猛烈に反對して居た所のジオリツチー氏に逼つて、選擧法を改正せしめ、實質上普通選擧と異る所なき制度を採用せしむる事となつた。失

禮な云ひ分乍ら原總裁は同氏の如き、强い信念を以て普通選擧に反對して居るやうでないから、普通選擧賛成の輿論の火の手さへ盛になれば、鎧を脫いで、普通選擧に賛成するに至るは疑ひない。私は普通選擧論者の努力次第では普通選擧實行の日は必ずしも遠くないと確信する。（大正九年五月十一日）

政府は事實上の敗戰

帝大教授　大島正徳

一

今回の臨時總選擧は、何人も豫想した通りに、政府黨即ち政友會大捷の結果を見たのである。之れは豫想通りであると云ふべきことであるが、但し豫想を裏切つたことのないではない。其の一つは、世間に認められて居る通り、大體市部に於ては、政友會が豫期の通り勝利を得ることが出來なくして、憲政會若くは國民黨が勝つた事である。尙ほ一つは、國民黨は定めし慘めなる失敗に了ると思つたのに、思ひの外に相當の勝利を占め得たと云ふ事である。其の他巨細の事では多少豫想外と思はれる事、假令ば政友會乃至憲政派の古株連が、失敗したと云ふやうな點も數へ得るのであるが、先づ大なる點に於ては以上の二點が豫想外の事であつたと言はねばならぬ。

扨此の豫想の通りになり又豫想外になつた事實は、何を吾吾に示すかと云ふことは、此の際考へて見るべき事であらうと思ふ。一體今回の總選擧は、政府當局者が觸れ出した通り、解散の理由が、普通選擧の實施の可否を汎く國民に問ふと云ふことになつて居るのであるが、扨玆に考へて見ねばならぬ事は、此の度政友會が、豫定通り大捷を得たと云ふ事實は、此の選擧の可否を國民に問ふた答案が、否認と云ふ形に於て現はれたものとして觀ることが出來るか否やと云ふ點である。勿論、政友會は、其領袖をして言はしめて曰ふには、假令市部では敗けて

も、現に角大捷を得た以上は、國民は今回の解散に掲げられた普選可否の問題に就て、否認の聲を擧げたもので、即ち政友會の政治方針が、勝利を得たのである。と斯う語つて居るが、吾吾は斯様に容易く信ずることが出來ない、寧ろ何故に政友會が多數を得たかと云ふことは、他點に求めた方が正當かと思ふ。即ち夫れは、政友會は政府黨であると云ふ强味である、政府黨になつて居るものは、選擧の場合に於て勝つと云ふ事は、從來の慣例であつて、其の慣例が今日も行はれた、而も自己が造り出した小選擧制の手盛りの裡に成功したと言つた方がよいのである。殊に市部に勝てずして、郡部に勝てたと云ふことは、政府黨としての慣例事が行はれたものであると解すべきであつて普選云々の問題が、郡部を通じての國民に否認されたなどと、言はれ得べきものではないと思ふ、寧ろ斯る問題は、市部ならざる地方人には、餘り痛切に感ぜられて居ないのであると言つた方が正當であると思ふ。で勿論其の意味に於て、即ち普選問題に充分なる感覺を以て居ないと云ふ意味に於て、消極的には此の意味の不賛成であるとも解し得られないこともないではないが、しかし政府者が言ふが如くに普選は危險思想を背景として居る、夫れ故に之れに從ふべきものでないと云ふやうな意味から、政府黨に賛成して居るものであるとは考へられない、寧ろ選擧民が、夫等の問題に就て充分に覺醒して居ないが故に、何時もの選擧通りに選擧した爲め、政府黨が勝つたのであると解すべきが至當であると思ふ。若し一般選擧民の資格に基いて、政友會の主張が是認されたものであるとするならば、何故に市部や郡部、——殊に智識の發達した郡、縣、假令ば長野縣の如きに於て、政府黨は失敗をしたのであるか？其の理由を解釋するに苦しむのである。或は曰ふ、市部の選擧民乃至は所謂智識の進んで居る郡、縣に於ては、其の思想が輕躁にして、極端に走つて居るから、政府黨の趣旨を認めることをしないのであるが、多くの郡の選擧民は、思想が穩健であるからして、之れを相當と認めたのであると爲すであらうが、夫れは如何にも勝手な解釋と言はなければならない、寧ろ多くの地方民は、智識が充分に進んで居ない、舊來の因襲に從つて居るが故に、自然政府黨に有利であつたと言つた方が宜からうと思ふのである。隨つて智識の進んで獨立の判斷を爲し得る人々の多い市部又は或郡縣に於て、政府黨が敗けたと云ふことは、解散當時に提供せられたる普選可否云々の問題に關する暗默的の判斷としては、政府黨は勝つたのであるとは言へない、寧ろ其の問題それ

自身を引抜いて性質的に吟味するならば、政府黨は敗けたと言つた方が宜からうと思ふ、他の國民黨や、憲政會の普通選擧論者が美事に勝つた所に徴しても、思想問題、言論戰にかけては政府黨の趣旨は勝利を得なかつたと言つた方が正當である。尤も市部や、或郡、縣に於て、政府反對黨が勝つた理由に就ては簡單に普通選擧論を唱へたのみであると云ふことは出來ないのである。其の他種々の理由も介在して勝利を得た事と思ふ、假令ば官吏の階級が、一般に政友會内閣に反感を持つ事や、物價下落、機業の一時に慘狀を呈した事等が、政府反對の氣勢を煽つた點もあり、又智識判斷が進んで居る爲めに、其の人物本意と云ふ考へが、明白に意識に上つて、夫れに基いて相當實力ある人物が、選擧されたと云ふことにも考へ得らるゝのである。

二

要するに國民黨や、憲政會の勝利を、市部や言論智識の進んで居る地方に於て得たと云ふことは、智識、思想の進歩で獨立的に、物を考へ得る人々の多い處で、政府反對黨が勝つて、政府黨が敗けたと云ふ形になつて居る。で斯る人々の居る所では、從來の如く、金權や官權の壓迫に依つて、容易く左右することも出來ず、又、因襲に依つて、選擧が行はれると云ふ譯にも行かず、隨つて斯る地方で、政府黨が敗けたと云ふことは、政府黨は眼醒めたる人々に依つては、必ずしも贊成を得て居ない、否、却つて反感を懷かれて居ると云ふ事を證明するものであると言つてよいと思ふ。必ずしも普選論其の物を捉へた故にのみ勝利を得たと云ふことは出來なくとも、卽ち選擧民は、普選論のみに贊成をしたと云ふことは言へなくとも、少くとも政府黨の曖昧なる危險思想呼ばはりを低級視して、自己の智識判斷に依つて投票した所に於て、政府反對黨がより多くの同情を得たと云ふべきであらうと思ふ。で斯樣に、今回の總選擧の成績に就て觀察した時には、政府黨は假令大勝利を得ても、顧れば密かに内心に淋しさを感ぜざるを得ないと思ふ。量の上に於ては、多數であつても、質の上に於て眞個の力あり、贊成を得たと思ふ事が出來ないからである。智識の進みたる人々の同情を、得なかつたと云ふことは、政黨發展の上から考へても、未來に保證を保ち得ないと云ふ事である。翻つて、憲政會、國民黨の如きは量に於ては、大いに失敗したけれども、智識ある人人の多き地方に贊成を得たと云ふことは、未來に向つて希望を繫ぐ事が出來るのである。政府黨が、智識の進歩と逆行したる

形に於てのみ勝利を得た形になつて居るのは、其の將來に向つて闇黒の幕が垂れて居ると言はなければならない。是れ正に政友會の一大痛心事と認めなければならぬ。

三

扨今や政府黨は、絕對多數を得、玆に所謂腰を据へたと云ふか、內閣の一部改造まで企てゝ居るが、此の際に於て、何か方針を大いに改めて、未來に新らしき途を開拓しなければ、其の前途は、光明を見る事は出來ない。若し原首相などの曰ふが如く、普通選擧は兎に角總て到るべき理想であると考へるならば、今日に於ても、徒らに之れを危險呼ばはりせず、彼の普通選擧論者は露國の過激派と內通して居るの、愚民政治であるのと、馬鹿氣切つたる事を言ひ觸らすよりは、寧ろ之れを出來る丈け善導し、啓發して、一般國民の理解を昂め、智識階級の援助をも得るやうにせねばなるまいと思ふ。然らざれば國民の智識進歩と共に政友會は益ゝ遲れ行くものと言はなければならない、或は高等政治の上に於ては、其の多數の威力を恃んで徒らに反對黨を壓迫して、自己の黨利を擴張するやうな事に骨を折らず、誠の大局より考へて、國民の進歩を防止するやうな國家機關の改造を敢てして、國民の自治、理發心を一般に向上せしめ、未來に向つて國民を生々たらしむるやうにする事が、必要であらうと思ふ。政府當局者は此の際に於て、眞に其の腰を踞る以上、何事か國民の全體の發達の爲めに考へて居るか、甚だ怪しむべきものがある、若し然る事が無ければ、其の生命は忽にして盡るであらう、若し然る事があれば、其の生命は、更つて延る事が出來るであらう。（終）

新刊介紹

▲**社會主義の世になつたら**（堺利彥譯）ベラミーの理想鄕の抄譯である。原書は米國にて狂熱的歡迎を受けたもので、紀元二千年の發社會を畫いたもので興味深い物語り風は書き振り、譯者は名手堺氏とし輕快な筆致である（定價四十錢小石川區小日向臺町二ノ一九文化學會）

▲**野性より愛へ**（宮原晃一郎譯）ジャツクロシドンの原作小說で、曾て堺利彥氏に依りて「野性の呼聲」と題して抄譯されたものゝ全譯である。野性であるべき狼の群が、遂に愛の生洲に至ると云ふ廣野の旅の出來事を、深き思想に依つて理解したと云ふ面白い讀物である。ロンドンの作品が非常な人氣ある欣此譯を見るのは嬉しい（定價一圓四十錢東京牛込神樂町叢文閣）

内務省側の勞働組合法案を評す

山川均

一

最近、内務省側の委員により、産業調査會に提出せられた勞働組合法案は、大體に於て、農商務省側の提案に優る『進歩した』法案であると見做されて居る。然しながら斯ように此法案が、一般に氣受けのよいと云ふ所に、特別の危險が潜んでゐるとも云ふことが出來る。

内務省當局者の説明によると、組合法制定の精神は、『勞働者が其共同の利益を保護するが爲に、自然に發達し來つた勞働者結合の事實を、事實として公認し、之に一定の保護を與ふると共に、相當の責任の下に立たしむるを以て要諦と』したものである。法律は事態を創造するものではなく、唯だ事態を承認するものであるとは、前々議會の豫算委員會に於いて、内務當局者の屢々繰返したところであつた。そして政府は之を唯一の――少くとも最大の理由として、勞働組合法制定の無用を固執し、近き未來に於ける制定の必要をすらも拒否したのである。この同じ内務當局者が、十八ケ月以内に、同じ理由を以て、自己の組合法案の誇る可き理由として居る所は、彼の一年前には普通選擧を排して二圓納税資格説を主張したそんじよそこらの政治屋が、今度の總選擧には普通選擧を出したり引つこめたりした揚句幸に『當選の榮』を得ると、國民は案外選擧問題に徹底して居るとか、東京の市民は流石に豪らいとかと云つて、煽だて上げて居るのは好個の一對であつて、この朝野の政治家諸君によつて、政治道徳の何たるかは、遺憾なく民衆に敎へられたのである。

政府の當局者は、或は斯う答へるかも知らぬ――十八ケ月の間に『事態』は變化した。勞働組合は今や活きたる『事態』となつた。國家の法律がこの『事實を事實として認む』可きの時

が來た！　吾々も亦た、十八ケ月の間に、組合法の不必要を力說した政府が、組合法案の完全を誇るに至つた官僚主義者の心理的革命を說明する、唯一の事實が、この十八ケ月間に於ける勞働組合運動の勃興にあることを信ずるものである。

けれども此政府の說明が眞實であるとしたならば、勞働組合に『公認を與へた』ものは法律であらうか、それとも勞働者自身の實力であらうか。勞働者は、彼等の組合を公認する法律の存しなかつた時に、否な斯ような法律の有無を全く眼中に置かないで事實の上に彼等の組合を組織した。內務當局者は前に議會に於て、日本には組合を禁止するの法律がない、それ故に今更ら組合公認の法律を設けずとも、組合運動の發達は、何等の障害をも壓迫をも不正をも蒙つて居らぬといふ理由から、勞働組合法制定に反對したことは、何人も尙ほ記憶する所であるけれども政府が今日、『今更』に組合法の制定――殊に內務當局者の說明によれば、『自由にして公正なる立場において立法せられた』組合法制定の必要を感じたのは、明らかに前々議會に於ける說明を裏切るものであつて、日本の組合運動は――少くとも政府當局者の見解によれば――此組合法によつて公認せられるまでは、疑ひもなく不自由にして、不公正なる取扱の下に、其當然の發達を阻害されてゐたものと見做さなければならぬ。日本の勞働者は、斯くの如き境遇の下に、法律が認めざるを得ない『事態』を創造し、法律が『事實を事實として認め』ざるを得ない。勞働組合なる『事實』を創造したものである。若し政府當局者が、十八ケ月の間に『事態』が變化したので、從つて政府の組合法制定に對する方針も變化したと說明するならばこの『事態』を創造した功績は、勞働者自身の實力に歸さなければならぬ。內務省の組合法案は、兎にも角にも、原則としては勞働者の團結權を認めてゐる事だけは爭ふことが出來ぬ。そして此團結權の公認は、法律の恩惠物ではなくて、勞働者自身の行動によつて獲得したものであると謂はなければならぬ。そして內務當局者の、謂ゆる『事實を事實として公認する』といふ、立法の精神は、卽ちこの勞働者自身の行動に對する頌德表と見做すことが出來る。

二

斯ように內務省の組合法案なるものは、勞働者が、勞働者自身の直接の行動によつて、法律の有無に無關心に創造した既成の『事實』を、其儘に『事實』とし、『公認』することを以て立法の

『要諦』とし、精神としたものである。そして內務省の組合法案は、それが唯だ正直眞卒に、『事實を事實として』認めた範圍に於てだけは、其說明の如く、『自由にして公正なる立場に於て立法せられたもの』と謂ふことが出來る。內務省の法案が、農商務省側の提案に比べて、大層進步的であると見做されるのは之が爲である。

然しながら、『自由にして公正なる立場に於て立法せられた』法律とは、唯だ『事實を事實として公認する』ものだとすれば、少くとも此法律は、將來に於ける『事實』の發展に對して『自由』と『公正』とを保障するものではないのである。『自由にして公正なる議場に於て立法せられた』最善の法律と雖も、それは唯だ現在の『事實』を固定するものであつて、現在の『事實』を固定することは、やがて將來の『事實』の發展を阻止するものである。『事實』は流動し、法律は停止する。『事實』は發展し、法律は固定する。今日の事實は既に昨日の『事實』ではない。然るに法律は昨日の『事實』を『事實として公認する』その事によつて、今日の『事實』は之を『事實』として認めることを拒否することを意味して居る。之は法律の避け難き缺點であつて、社會的進化と法律との間に、常に不斷なる摩擦を見るのは之が爲である。人間の社會的進化が、連續不斷の緩勾配をのみ取つて進むことが出來ないで、歷史の或時期には、危險なる急勾配を直下急轉して此兩つのもの丶間の兩整調を行ふの必要に迫られるのも、其一半の理由はこ丶に在る。

そこで勞働組合運動の現在の事實を、唯だ事實として公認した法律は、必ずしも勞働組合運動の將來の發展に對してまでも『自由にして公正』なる法律と見做すことは出來ぬ。三才の兒童の現在の『事實を事實として』作つた着物は、如何に現在の事實に對して『自由にして公正』であつても、兒童の未來に取つて『自由にして公正』であるとは云はれない。日本の勞働組合運動は大なる未來を有することに於ては、正に三才の兒童である。若し此三才の兒童に、『自由にして公正』なる鋼鐵板の着物を仕立て丶吳れる親切な繼母があつたなら、其慈愛の代價が何物であるかは、井戶端會議の論決を待たないでも明らかである。

そこで內務省の組合法案が――少くとも其一部分が――單に現在の『事實を事實として公認』して居るといふ事は、未だ必ずしも、勞働階級に對する繼母の『自由』と『公正』との證據とはならぬ。

三

內務省の組合法案は、大體に於て六つの部分から成立つて居る。法案は第一條に於て、勞働組合に定義を下し、第二、三條は組合成立の條件を規定し、第四條乃至第七條に於ては、組合が法人として登記を受ける場合、並に受けたる場合の規定である。第八、九、十の三條は、內務當局者の說明に謂ふところの組合に『一定の保護を與ふる』條項であつて、日本の組合運動が此法律の制定によつて與へらる可き利益の總計である。そして第十一條から第十五條までは、この保護と引換に組合を『相當責任の下に立たしめ』た箇條であり、第十六條以下第十九條までは、全ての法律の共通の特徴たる刑罰――甘い饅頭のあとの苦いお藥――である。

法案は勞働組合を次の如く定義する。

『本法において勞働組合と稱するは、勞働條件の維持改善、組合員の共濟修養、其他共同の利益を保護增進するを目的とする勞働者十五人以上の團體、又は其聯合をいふ』

此法文を一瞥した者は、最近十八ケ月の間に、內務當局者の思想に、如何に猛烈な過激化的革命の行はれたかを驚くに相違ない。此法律が勞働組合と呼ぶものは、それは最早や床次內相の『若し工場每に資本家と從業者とが相調和して、事業の圓滿なる發達を期するために組織せんとするならば、之を歡迎すべし』と云つた、この歡迎すべき組合ではなくて、それは却つて川村警保局長の『政府の好まざるは勞働組合即ちツレード・ユニオンにして』と云はれた、其好ましからざる勞働組合である。(以上は共に、前々議會の豫算委員會に於ける、兩氏の答辯である) 此定議は勞働組合の目的を擧げては居るが、それは固より、此定義に該當する組合の目的を列擧したものではなくて單に例示したものと見做すべきであつて、事實上全ての合法的な勞働團體は、悉く勞働組合と認められるものである。そこで此法案によれば、共濟組合も、職業的組合も、共に勞働組合と見做されるばかりでなく、謂ゆる一工場を限つた縱の組合も、地方的又は全國的の謂ゆる橫の組合も、更に組合の聯合團體も亦た、勞働組合たる資格を有するものである。此點は內務省案が『事實を事實として公認した』ところであつて、確かに農商務側の提案よりも、また其愚劣なことに於て農商務省案に一步も退けを取らぬ憲政會案（勞働階級の普通選擧運動を代辯する、この資本家黨の提案!）よりも遙かに勝ぐれたものである。斯

ように少くとも床次内相の頭の中では、縦のものが横になつた位は愚か、縦横無盡になるほどの、一大革命が起つたものと見做さなければならぬ。そして此思想的革命が、却つて床次内相の頭蓋骨以外に起つた事實によつて生じたものだとしたならば――言葉を換へて云へば、勞働者が自己の實力によつて創造した社會的の事實そのものが、忽ちにして床次内相の價値評價と善惡の價準とを一變し、昨日の『好ましからざる』ものが、今日國家の法律によつて是認すべき『好ましきもの』となつたとしたならば、之はまた思想の唯物的解釋の、餘りに露骨な一證明を與へたものではあるまいか。

四

然しながら此定義を見て、何人も疑問を起さなければならぬことは、此法案の『勞働者』とは、何を意味して居るかと云ふことである。

若し『勞働者』といふ言葉を、日常に用ゐられてゐる最も狹義の意味に解したなら、普通に組合運動中の重要な構成分子と見做されてゐる、無產階級中の可なりの多數を、組合運動の勢力から奪ひ去られることを忘れてはならぬ。

更に此定義は如何に廣義に解しても、謂ゆる自由職業者の組合を包容しないことは一點の疑ひがない。然るに是等の自由職業者の階級に、無產階級の自覺を喚起して、勞働運動の大なる潮流のうちに參加せしめようとして居ることは、最近に於ける組合運動の著るしい傾向である。英國の自由職業者の團體のうちには、即時に勞働組合運動に投じようとする最左翼と、勞働組合との間に截然たる區別を認めてゐる最右翼との中間には、或時機を待つて組合運動に合しようとする中央派があるが、現にも角にも、從來中間階級として取扱はれ、若くは資本家階級の附屬物と見做されてゐた此階級が、最近に於いて、著るしく其色彩を變へたことは疑ひのない事實であつて、本年二月二十七日を以て倫敦に開かれた、全國專門職業者團體會議の如きも最左翼が組合運動との接近の機運を促進する目的で計畫せられたものとも傳へられて居る。此傾向は、佛國に於ても、同じく看取することが出來る。昨年九月リヨンに開かれた、開戰後第一回のC、G、Tの大會では、ジュオーの勞働經濟會議組織の提案は、三二四對一、六三三票の多數を以て通過した。勞働經濟會議は、鑛山、鐵道、水力の如き主要產業の國有を實行すると同時に、之が管理の機關たらしめようとするものであつてC、

G、Tを中堅として、技師、官吏等の階級をも包容するものである。此組織の目的が、產業の管理に對するC・G・Tの現在の組織に見出された缺陷を補はうとするものであることは言ふ迄もない。

然しながら、無產階級的意識の薄弱を免れない自由職業者といふ要素を、組合運動のうちに引き入れることは、果して組合運動の爲に利益であるか何うか。之は固より議論の餘地のあることであるから、此法案の定義が、是等の自由職業者の職業團體を迄でも包容して居らぬと云ふことは、必ずしも――そして少くとも――大なる缺點とは見做されぬ。

自由職業者の職業團體を勞働組合と見做すか何うかは、少くとも日本の勞働運動に取つては、現在の『事實を事實として』見る問題ではない。然しながら、自由職業者から一歩を轉じて俸給生活者に來るならば、問題は直ちに、現在の『事實』に關するものとなる。俸給生活者の間には、既にS、M、Uの如き組合が成立して居るばかりでなく、其組合は明らかに、勞働階級の意識から出發して、勞働組合運動として存して居るものである。この俸給者の組合が、組合法の定義の下に包容せられるか何うかは、當面の問題であつて、亦た重大な問題であると謂はなければならぬ。

更に近頃成立を傳へられた、教員の組合は何うであるか。下級官吏の組合は何うであるか。巡査の組合は何うであるか。教員と下級官吏の組合權の獲得は、佛國にあつても久しくC、G、T.の宣傳と鬪爭との目的となつたものであつて、今日では、教員組合はC、G、Tの一分子となつて居る。日本の組合運動は、無產階級中の是等の要素を、其勢力から殺がれることを苦痛としないであらうか。法文中の『勞働者』の範圍は固より不明であるが、日常に用ひられてゐる最狹義に解すれば固よりのこと、稍々廣義に解して、筋肉勞働と頭腦勞働とを兩つながら包容するものとしても、尙ほ多數の無產階級を除外することは明らかである。更に『勞働者』の意味を一層廣義に解して、一切の被傭者を包容するものとしても、尙ほ多少の不便がある。例へば此場合には、新聞記者の組合は勞働組合であるが、著作家の組合は勞働組合ではない。然るに賃銀勞働者と俸給生活者との間には、實質の上では何等の區別の無い場合があると同じように、俸給生活者と謂ゆる自由職業者との間にも、實質の上では、何等の相異のない場合があるからである。

此點は、少くとも現在の實際運動の立場からは、餘りに重大

視せられぬかも知らぬ。現に俸給生活者組合の如き、著作家組合の如き少數の例外を除いては、此種の問題を惹き起すような階級には、今の所では組合の組織せられて居るものは稀であつて、現在に於ける大多數の組合は、何等の疑點のない、純粹な筋肉勞働者の組合である。そこで是等の個々の組合の、實際運動の上から見れば、少くとも當面の問題としては、自己の組合を公認する法律案の歡迎に急であつても、必ずしも咎む可きことではない。けれども組合運動の全局と、其近き未來とを考へたなら、此問題には極めて重大な意義のあることを認めなければならぬ。

五

假りに法文の定義は、日常の用語に於ける意味での、最も狹義の勞働者のみを指すものとしたならば、郵便、電信、電話事務員の如き、鐵道の事務員の如きは、公認せられた勞働組合を組織するの自由がない。通信機關と鐵道との事務を除外しては運輸交通勞働者の組合運動は事實上の不可能である。斯ように組合の聯合は法文の上に公認せられて居つても、事實の上に禁止せられて居るに均しいものである。更に新聞記者の組合を除外しては、新聞事業の產業的組合主義は不可能である。出版事業に關する產業的組合が實現せられるとすれば、校正係の組合は固より、著作家組合も亦た其一部門となる可きものであつて今日既に著作家組合のうちには、活版工組合との合同若くは聯合の必要が主張せられて居る。然るに此法案の下では、此種の產業的組合主義は、多くの場合に於て不可能である。最近にける英國組合運動の、注目すべき傾向を示してゐる工場幹事制度（シヨツプスチユワード）の如きも、出來得る限り專門技術者と事務員との包容に勉めて居るものであるが、此法案の下では、此種の組合運動の不可能なことは謂ふまでもない。

尤も此法律は、勞働組合の定義に該當しない組合を禁止するものではない、從つて狹義の『勞働者』以外の無產者は、自由に非合法の組合を組織することが出來る、そして組合運動は、其聯合團體のうちに、是等の非合法的の組合を包括することが出來ると云ふかも知らぬ。

內務省の決案によれば、勞働組合法に準據しない、非合法的の職業團體を、自由に組織し得ることは明白である。けれども斯樣な職業團體は、法律の目からは職業上の團體ではあるが、勞働組合ではないものである。そこで此法律案の『勞働者』とい

ふ言葉の解釋文第では、今日は當然組合運動の一部と見做さる可き職業團體も、法律の成立と同時に、最早や勞働組合ではないものとなるのである。若し『勞働者』といふ言葉を狹義に解したならS、M、Uの如き、今日は何人も勞働組合と見做して居る職業團體も、近き將來に續々現はる可き下級官吏の組合、教員組合、巡査組合などは、何づれも此法律の下では勞働組合ではないものとなる。

それと同時に、是等の非合法的の組合、即ち法律が勞働組合と認めない職業團體を含んだ聯合團體も亦た、同じく勞働組合と認められないことは自明である。從つて此場合には、是等の勞働組合と認められない個々の職業團體が、第八條乃至第十條の『保護』を受け得ないばかりでなく、是等の職業團體の一つでも含んでゐる聯合團體は、同じく勞働組合とは認められず、從つて第八條乃至第十條の『保護』を受け得ないことは自明の事である。

然らば此法律が、第八條乃至第十條に於て與へようとする『一定の保護』とは、何であるかを見るの必要がある。法文は次の如く規定してゐる——

第八條、勞働組合には所得税及登記料を賦課せず。

第九條 雇傭者又はその使用人は、勞働者が勞働組合員たるの故を以て之を解雇し、又は組合に加入せず若くは組合より脫退することを雇用條件となすことを得ず

第十條 勞働組合の組合員は、勞働條件に關し組合又は組合員と締結したる契約につき、損害賠償、違約金又は補助の責務を負ふことなし、勞働組合が組合條件に關し他の組合と締結したる契約につき亦同じ。

之が勞働組合法案が、吾々に與へようとするもの丶全てゞあつて、勞働組合が此の法律より受く可き利益の最大限度であるそして就中、第十條が最も重要なものであることは云ふ迄もない。

そこで勞働組合と認められない職業團體——一層詳しく云へば、今日は明白に勞働組合と認められ、若くは現に組合運動の一部を構成して居るか、さもなければ、將來その可能性を持つて居るが、此組合法の實施によつて、勞働組合たる資格を褫奪せられ、組合運動のうちから除外せられる職業團體——は、以上の如き『一定の保護』を享有しないこと丶なる。

今ま日本の勞働組合の、總同盟團體が成立すると假定する。そして其うちには、現代の勞働組合運動中に重要な地位を占め

る郵便、電信、電話の從業員組合が加盟して居ると假定する。ところが此通信機關の技術者と事務員とは、狹義に於ける勞働者ではなく、從つて此組合法の下では、單に職業的の團體であつて勞働組合とは認められないものと假定する。此場合には通信機關從業員組合は、固より第八條乃至第十條の『保護』に浴さないものであつて、政府は之に所得稅の賦課を爲し得るばかりでなく、通信機關從業員組合員たるの故を以て之を解雇することも出來るし、通信機關從業員組合に加入せず若しくば之から脫退するといふ誓約を取つて雇傭することも出來る。

それのみでは無い、此通信機關從業員組合を加盟團體の一つとする勞働組合の總同盟團體は、同じく此條項の『保護』を受けないものであるから、資本家は其職工が、總同盟團體に加入して居るといふ理由によつて馘首することも出來るし、之に加入せず若くば之から脫退するといふ誓約の下に雇傭することも全く自由である。そこで此種の同盟團體は、此法律の下には、事實上の不可能となるかも知れぬ。少くとも此種の同盟團體は、此法律によつて、從來以上の不利益な地位に立つことだけは明らかである。

之と同じ場合は、幾つでも想像することが出來る。此法律の下に於ては、之と同じ理由によつて、新聞記者の組合を包括する、新聞業の產業的聯合は不可能である。著作家の職業團體を包容する、出版業の產業的聯合は不可能である。之と同じく全ての產業部門に於て、今日多かれ少かれ、產業の管理方面に使用せられて居る事務員、又は專門技術者をも包括する、完全なる產業的組合は悉く不可能であると謂はなければならぬ。

そこで此組合法によつて『保護』せられるものは、事實上、職業別の職工組合と職業別的の組合聯合とであつて、一度び勞働者が、產業的聯合團體の運動に進まうとするならば、其處には意外なる陷穽のあることに氣がつくのである。何故ならば、勞働者は、一度び產業的聯合團體の運動に進まうとすると、忽ちにして無產階級の勢力が、兩斷せられて居ることを發見するからである。國家が工場勞働者のみを『勞働者』として取扱はしめ、俸給者その他の所謂頭腦勞働者を『勞働者』に非ざる全く別個の階級として取扱はしめることは、そうなくとも階級的自覺の必然におくれ勝ちな後者のうちに、更に小紳士閥的心理を人爲的に培養し、彼等を久しく中間階級として、無產階級の階級的結束を破る重要な要素として、紳士閥の支配の下に留めておくことは、資本家階級の立場からすれば、極めて巧妙にし

て聰明な戰略と謂はなければならぬ。

斯ように勞働組合法案は、如何にも『自由にして公正なる立場から』有ゆる種類と性質の勞働團體を公認するものであるかの如くに見えて、而かも事實に於ては、殆ど有ゆる產業的組合の運動を不可能とするものであつて、右の手で與へたものを——若くは與へたような風をしたものを——左の手で引込ませるものに外ならぬ。否なそれは、與へたものを引込ますばかりでなく、與へざるものまでも、一緒に引込ませうとするものである。之れ『事實』の公認ではなくて、『事實』の拒否である。勞働者が、其行動と實力とによつて創造した『事實』を、一片の法文によつて拒否しようとするものである。

啻にそればかりでなく、其結果は明かに階級的心理を攪亂して、無產階級的運動の戰列を兩斷しようとする、怖るべき詭計を藏したものである。

斯くの如き結果が、立法者の不用意の爲であつたか、それとも用意の爲であつたかは、固より吾々の問はんとする所ではない。たゞ權母の行爲が、動もすれば其の結果によつて批判せられ、其動機によつて批判せられぬのは、誠に止むを得ぬことであつて、其時たまの、可愛さからの折檻も、何うやら憎くさ餘つての折檻と誤り解せられるのを見る時に、吾々は痛切に、權母の悲哀を感ずるものである。

六

法案の第二、三條は組合成立の條件を規定したものであるがそれは認可主義を取らないで、屆出主義を取つてゐる。第一條は組合規約のうちに規定せらるべき條項を揭げてゐる。組合の登記と、登記によつて法人となつた組合に關する第四條乃至第七條の規定は、左迄に重要なものではない。何故ならば、此法案によれば勞働組合が登記を經て法人の資格を得ると否とは自由だからである。特別の必要のない限り、勞働運動が、好んで煩瑣な法律の規定の支配下に這入つて來ることは考ふべきことである。勞働組合は、特別の必要のない限りは、法律の條文によつて支配せられることが、一ケ條でも少なければ其れだけ利益である。現に英國の組合でも、法人の登記を經て居るものは必ずしも多くない。組合が法人たることから豫期せられる利益は僅であるが、之から生ずる危險は重大であつて、屢々組合の存在を脅やかすに足るものである。組合が法律上の主體となつて、訴訟を提起するの資格を得ることは、組合運動の上に幾何の利

益をも齎らさない。然るに組合が法律上の主體となつて、訴訟の目的となり、組合基金が、損害賠償の責任を負ふことの危險は莫大である。此法案の第六條によれば、法人たる組合は民法第四十四條第一項の準用を受けるものであつて、此條項は法人の『理事其他の代理人が、其職務を行ふに付き他人に加へたる損害』に對しては、法人は損害賠償の責に任ずべきことを定めて居る。更に法案第六條は、法人たる組合に對して民法第七十條の準用を規定して居るが、此條項によれば、『法人が其債務を完濟すること能はざるに至りたるときは、裁判所は理事若くは債權者の請求により、又は職權を以て破産の宣告を爲す』べきものである。

組合が訴訟の目的となり、組合基金が組合役員の行動の責任を負ふて、害損賠償要求の目的物となることの危險は、英國の勞働組合運動によつて、充分に經驗せられた所である。(荒畑、山川共譯、勞働組合運動史參照) 先進者の經驗から自由に學ぶ可き特權を持つ日本の勞働者は、何を苦んでか、其團體組織を煩瑣な法律上の規定に押込め、組合と組合基金とを資本家の法律的迫害の的に曝らすの愚を學ぶであらうか。日本の組合運動者は、資本制度と賃銀制度に破産を宣告する事を使命とする組合をして、却つて破産の宣告を受く可き地位に立たしめるような、無意義な暇潰しをしないに相違ない。

七

第十一條乃至第十四條は、當局者の説明によると、組合に一定の保護を與へると共に、『相當責任の下に立たし』めて、組合法制定の『要諦』を全うしたものであつて、少くとも立法者から見れば、極めて重要なるべき規定である。是等の條項には

(一)勞働組合は其事務所に、組合員名簿及び收支の計算を明かにすべき帳簿を備へ置くを要する(第十一條)

(二)地方長官は勞働組合の業務に關する報告をなさしめ、又は財産の狀況を檢査することを得(第十二條)

(三)勞働組合の組合規約が法令に違背し、又は其選擧若くは決議にして、法令若くは組合規約に違背する時は、地方長官は其變更又は取消を命ずることを得(第十三條)

之には更に左の一項を附加して、立法の『公正』が證據立てられてゐる。

(四)前二條(第十二、十三條)の地方長官の處分に對して不服なる時は、主務大臣に訴願する事を得、但し訴願の提起は、處

分決定の日より二週間内に之をなす事を要す(第十四條)

一八八四年の佛國に於ける組合公認法は、組合規約と共に、組合役員の氏名を届出づべき條項があつたので、政府の意圖は組合運動中の活動分子を常に官憲の監視下に置かんとするものであるとして、組合界の猛烈なる反抗を惹起したことがある。此法案は幸ひにして、登記を受けんとする組合以外には、役員名簿の提出を命じた規定は無いのである。第十一條の規定は、一般組合員の閲覽に供することを目的とするものであるか、それとも官憲の臨檢の爲に備へたものであるかは、此法文の上では明かでない。現に第十二條は、組合の財政狀態を報告せしめる地方長官の權限を明記して居る位であるから、第十一條に規定した組合員名簿と會計簿とは、官憲の臨檢に對しては提示を拒み得るものと解するが至當である。けれ共實際に於ては、提示を拒むことは困難であつて、此法案が好んで斯ような曖昧な條項を挿入して居ることは、徒らに此法案の全體に對する動機の誠實を疑はしめるものであつて、立法者の爲に取らざる所である。要するに組合の會計については、直接利害關係を有する組合員が適當に監視するの方法があればいゝ譯であつて、故らに官憲の監視下に置くことは、組合の尊嚴と自治的精神とを破壞するものである。

若し官憲は組合事務所に臨檢して、役員名簿と組合員名簿とを見ることが出來、更に組合の財政狀態を報告せしめることが出來るとしたならば、資本家は勞働爭議に際して、常に其敵手たる組合の實勢力を參照することが出來て、此上もない便利に相違ないが、勞働組合運動に取つては、味方の布陣と實力とが常に筒拔けに敵の知る所となるのは隨分の迷惑である。會社組織の經營は、一個の資本家組合とも見做すべきものであるがこの傭主組合に對しては、政府は右の條項に相當する、如何なる監視の方法を實行して居るか。此點に於て、全ての傭主と被傭者との、一切の職業上の團體を、同一法規の下に置いてゐる幾多の外國の立法例は、其實質に於ては不公平を極めたものではあるが、其形式だけは公平の體を裝ふたものであつて、暗夜に乘じて覆面をして押入る強盜は、白晝素面で押入る強盜に比較すれば、幾分しほらしいとも謂ふことが出來る。

要するに第十一條十二條の規定は、徒らに勞働者の組合を官憲の支配と干渉との下に置いて、組合の自治的精神を傷つけるものであつて、全く無用の條項である。獨り無用の條項であるばかりか、極めて有害な條項である。

第十三條の規定は、自づから二つに分かれて居る。組合の規約乃至は決議が一般社會に違背する場合、地方長官が其取消又は變更を命ずることは、暫らく止むを得ざる事柄として看過しようと思ふ。今日歐米各國の組合大會の決議の如きは、大抵は其儘日本の新聞雜誌に掲載したゞけでも、發賣禁止を免れぬものが多い。そこで此思想言論の特殊國に於ては、新聞雜誌が無暗矢鱈に發賣禁止となるように、組合の決議が頻々として、治安を妨害したり秩序を紊亂したりして、『取消』や『變更』を命ぜられるのも亦た面白いかも知れぬ。

然しながら此條項のうちには、一層重要なる今一つの部分が密かに含まれてゐる。

八

第十三條は一個の規定の如くして、實は二つの規定である。而かも明白に性質の異なつた二つの作用を目的とする二つの規定である。唯だ銳利な針が眞綿に包まれて一つに見えるように此條項の一部は、他の部分の爲に巧みに蔽はれてゐる。

組合の規約又は決議が一般法令に違背する場合に、國家が之に干渉することは、多くの人々には、當然の事と見えるに相違ない。そしてこの『當然』のオブラートに包んで、極めて不當然なる鉛の熱湯を呑まさうとする所に、機微なる心理作用を利用した立法者の巧妙がある。

組合の規約又は決議が一般法令に違背する場合に、國家が之に干渉することは、假りに當然であるとしても、組合の選擧又は決議が、組合規約に違背するや否やは全く別個のことである。前者の場合に於ける國家の干渉を當然とする心理の蔭にかくれて、後者の場合に於ける、極めて不當然なる國家の干渉を恣まにしようとするのは、勞働階級を愚にすることの甚だしいものである。

組合總會その他の會議の決議、若くは選擧の方法が、組合規約に違背するや否やは、全然組合員の關する問題であつて、國家の關知する問題でない。それは恰かも、組合員の會費滯納が國家の收税吏を煩はす可き問題でないのと同じである。組合法案が第三條に於いて、組合成立の條件として、十二項に亘つて組合規約の內容を指定して居ることからして、既に官僚的干渉主義の表現と見做すことが出來る。然るに第十三條は、更に組合の決議を此規約によつて拘束し、更に國家の強制力を其間に割込ましめんとするに至つては、『自由にして公正なる立場』よ

りする驚く可き不自由と不公正である。組合の精神は自治である。組合の生命は自治である。組合の誇りは自治である。組合の尊嚴は自治である。此の『自由にして公正なる立場』に立つ立法者は、勞働組合運動の精神と、生命と、尊嚴と、その誇りとを蹂躙し、勞働者の鼻先きを捉まへて、一體何所に引張つて往かうとするのであるか。

斯ような立法に對しては、勞働者は其尊嚴と誇りの爲に、立法の精神そのものに對しても極力反對しなければならぬ。けれども此條項の實際上の運用に至つては、更に甚しい危險があるそして其危險のうちの最大の危險は、組合規約に列擧せられた目的以外の決議も行動も、此條項によつて一對不可能となるといふ點にある。例へば『勞働條件の維持、改善、組合員の共濟修養』を目的として屆出でをした組合が、普通選擧運動に關する決議をしたとすれば、それは無效である。物價調節問題に對する決議をしても無效である。外國勞働者の運動に對する、聲援の決議をしても無效である。政友會內閣に辭職を要求するに至つては、更に明白に無效である!

此問題は、英國に於ては一九〇九年に、彼の有名なオスボーン裁判事件の判決の結果として起つて居る。(前掲勞働組合運動史參照)勞働組合法の立案をする程の人が、英國組合運動史上のこれほどの事實を知らぬ筈はない。若し之を知つてゐて此法案を作つたものとすれば、曾て英國の組合運動を危うくした此の陷穽を有意に利用しようとしたものだと云ふ批判を脫れない。

九

要するに勞働組合法の如きものは、之が制定を主張する場合にも、唯だ『避け難き弊害』として主張するものである。政府當局者が、眞に『自由にして公正なる立場』に立つことが出來、そして『事實を事實として認める』の眞率さへあれば、組合公認の法律の如きは畢竟無用である。何故ならば、政府當局者の說明が證據立てゝゐる如く、勞働者は自己の實力により、自己の直接の行動によつて、組合法の規定せられる以前に、組合運動なる『事實』を創造して居るものだからである。政府や警察が、『この事實を事實として』尊重すれば足るのである。唯だ政府は何故か、資本家階級に不利なる『事實』を事實として認め得ない不思議な必然性を持つて居るらしいので、玆に『避け難き弊害』として組合公認法の制定をも必要として來るのである。

そこで組合公認といふ事に、多大の期待をするのは根本から誤つて居る。殊に勞働階級の間に、唯だ組合の公認を得ることを一切の如く考へる傾向があつたなら、其幻影の破壞は必ず大なるものがあるが相違ない。啻だに其れのみではない。組合公認の意義を過大に視て、組合さへ公認されたならと翹望してゐる心理狀態は、動もすれば、目の前にブラ下つてゐる組合法案に對する、正當な批判の力を失はしめる恐れがある。それは丁度、金に困つて居る者が、高利貸の要求する利子の步合に對して、正當の判斷を誤るのと同一である。

然しながら日本の勞働運動を指導してゐる精神は、爾かく幼稚なものではない。本年の意義あるメー・デー運動の標語が、『組合公認』を要求しないで、却つて『治安警察法の撤廢』を要求したことは、日本の組合運動の思想上の水準が、可なりに高いことを證據立てるものである。吾々は組合の公認を嘆願する暇を以て、組合運動なる事實を創造しなければならぬ。そして此事實の前に慴伏して或者は之を公認し、或者は之を私認するとも勝手である。唯だこの『事實』を充分に且つ完全に承認し、この『事實の前に衷心の尊敬と滿腹の恭順とを示さない、一切の『公認』に對しては、吾々は嚴正なる批評と、假借なき摘抉と、斷乎たる反對とを以て向はなければならぬ。

內務省の組合法案の內容を吟味して、翻つて治安警察法の存置に思ひ及んだなら、立法の精神が何處にあるかは問はずして明白である。前からは鼻環を引張り、後からは棘の鞭を當てゝ最も都合のよい畔道に牡牛を追ひ込まうとする、一切の計畫に對して、吾々は糾彈の聲を揚げなければならぬ。

更に政府は、一面には勞働組合を公認し、他面には公共的勞務に關する罷工を禁止し、又は仲裁機關の創設によつて、罷工權の一部を制限するの意があるとも傳へられてゐる。日本の勞働運動は、組合公認といふ器の美しい一椀の羹に欺かれて、其自治權を賣つてはならぬ。組合法案が何等かの形で、遠からず議會の日程に上ぼることだけは確である。日本の組合運動は、此法案に對して徹底した消極的の態度を取るか、さもなければ積極的に、全組合界の要求を代表する完全なる對案を示すの用意がなければならぬ。（五月十四日）

近代科學と無政府主義

大杉榮

一

『無政府主義文書の紹介は困る。讀者に研究心を起させるから。』

と云ふ至極御尤もな御趣旨で。五月號の僕の『クロポトキン總序』は、發行當日、先づ其の最後の一項『クロポトキン著述目錄』の四ペエジを切取られ。更に又數日を經て、

『全文、秩序紊亂の恐れあり。以後かやうなもの〻掲載を禁ず。』

と云ふ嚴命があつたとの事です。ちよつと『辯士、中止』と云つたていです。

泣く子と地頭には勝たれないさうです。長いものには卷かれろださうです。仕方がありません。僕はあきらめます。斷じてあきらめます。あきらめられぬとあきらめます。

で、豫告のクロポトキン無政府主義文書の紹介解説はよします。又、無政府主義其者の紹介解説もよします。そしてたゞ、前號からの話しの續きとして、と云つてはいけなからうが、しかし續きはやはり續きです。たゞそれが讀者諸君に研究心を起させるやうな、或は善良な社會秩序を紊すやうな、怪しからん事柄の續きでないだけです。即ち先づ題から改めて、『近代科學と無政府主義』を説く事にします。尤も、今云つた約束通り、無政府主義其者に就いては何んにも云はずに、たゞ其の近代科學との關係を説かうと云ふ、すこぶる難しい藝當を演じようと云ふんです。うまく行きますかどうか。

クロが『何んの研究をするにしても、自然科學の深い知識と其の方法に習熟する事とが、すべての基礎にならなければならない』と云ふ事をモツトオとし、實際又、其の著書のすべてを一貫する最も深い特徴が、此の『自然科學の深い知識と其の方法の習熟』であつた事は、前にも云つた。又、クロが斯く自然

科學を、一切の研究の基礎にしたのは、一方には自然科學の歸納的方法を其儘社會科學の上に適用せんとし、他の一方には斯くして自然科學の傾向と社會科學の傾向との上に一致を求めて、其處に其の一大世界觀を建てようとしたのだ。と云ふ事も前にちよつと云つた。

然らば、斯くして得た其の一大世界觀、即ち無政府主義の哲學とはどんなものか。

クロはそれを先づ其の『無政府主義の哲學と理想』の中に論じ、更に其の『近代科學と無政府主義』の中に詳論してゐる。それを今、僕は其の前者によつて、ほんの大體を瞥見して見ようと思ふ。尤もそれが、結論をぬきにした、即ち骨ぬきにした、難しい藝當を演ずるのである事は、前の約束通りだ。

二

自然の事實に就いての知識と、社會現象に就いての概念とは、常に少なからず相交涉するところあるものである。即ち宇宙の總體に就いての思想の變化と、社會現象に就いての思想の變化とは、常によく相反映する。

嘗つて吾々の先祖は信じてゐた。地球は宇宙の中心である。太陽も月も星も、すべて此の地球を中軸として、其の周圍を廻轉する。そして日月星辰を始め、萬有盡く、此の地球の上に棲息する萬物の靈長たる人間の爲めに、神の御手によつて創られた。されば神は常に人間の上を見守つて、或は其の德行を賞せんが爲めに、或は其の罪惡を懲さんが爲めに、時に野に雨を降らし、時に街に雷を鳴らすと。そして此の科學と哲學との支配してゐた史上の最も暗黑な時代を、最も雄辯に物語るものは、即ち彼の東方諸國の神權政治であつた。

けれども、やがて十六世紀の頃になつて、漸く人間と其の思想とが宗教の桎梏を脫しかけようとした時、吾々の祖先は從來地球と人間とに餘りに過大な役目を帶ばしめてゐた事に氣がついた。地球はもはや宇宙の中心ではなく、他の諸遊星よりもずつと小さい一小塊、太陽系中の一粒の砂に過ぎないと知つた。そして此の地球に代つて宇宙の中心となつた、しかも此の地球に較べれば廣大無邊な程の彼の太陽も、これと同じ大きさ或は更に大きな、天の河の中に閃めいて見える無數の他の太陽の一つに過ぎないと分つた。斯くして、今までは神のいとし兒と誇つてゐた人にも、此の宇宙の無窮に對しては、九天の上から突如として九地の下に蹴落された形となつた。

哲學史を繙いて見れば、此の天文學上の知識の變化が、どれ程社會事實の思想の上に影響を與へたかに就いて、必ず幾つかの絢爛たる文學を見出す。實に此の時代の有らゆる思想は、其の純理的なると應用的なるとを問はず、一として此の反動を蒙らざるはない。そして此の時代から、始めて、今日の謂はゆる自然科學の芽が吹き出して來た。

然るに今日また、それと同樣の事が起つて來てゐる。即ち吾々は科學的概念の總體と哲學的概念の總體との上に、既に前にもまして、更に深い更に大きな變化の起りつゝあるのを見る。

十八世紀の終りから十九世紀の始めにかけて、天文學は正にニュウトン說の全盛時代であつた。其の哲學は云ふ。太陽は吾吾の太陽系の主人であり。王である。支配者である。心である。魂である。此の太陽から、其の諸衞星の運動を指揮し其の間の調和を維持する、力が出て來る。即ち太陽の强大な引力が地球や諸遊星や又は諸彗星をすらも、各々其の軌道に安んぜしめるのだ。それらのすべてのものは此の太陽から分れ出た枝葉だ。皆んな太陽から生れて來たのだ。そして、それらの土塊に生氣を與へ且つ其の裝飾となつてゐる諸生物も亦、皆んな此の太陽のお蔭で育つてゐるんだ。此の支配者の權威によつて、始めて宇宙の間に、完全な秩序と調和とが生れる。よし多少の不秩序が起る事があつても、それはほんの一時の變動で、直ぐに太陽の引力がすべてをもとの秩序に歸らしめる。しかも此の秩序たる、實に萬世不易のものである。何んとなれば、一切の變動は、其の命ぜられた秩序に復歸せんが爲めに、互に相補整し相壞滅するが故であると。斯くして其處に新しい太陽崇拜教が起つた。

しかし此の概念も又、前のと同じやうに直ぐに打ち毀されて了つた。諸遊星と諸太陽との間の無際の空間には、數限りのない極微物質の群が飛び廻つてゐる。其の群の中には、時々地上に落下して人間を戰慄させる大きなのもあれば、漸く幾グラムか幾サンチグラムかに過ぎない小さなのもある。そして此の極く小さな土塊にも、其の周圍には、顯微鏡でなければ見えない程の無數の塵埃が空間をとりかこんでゐる。これらの極微物質は各々それ自身の生を有し、恐ろしい速度で四方八方に突進し、到る處にそして常に相衝突して相離合して、其の間に或る偉大な力を生ぜしめる。其の力は、それを一つ一つに離して見れば素より云ふにも足りない微弱なものであるが、それが相互

なり相積んで遂に恐ろしい强大なものとなる。そして太陽系其者も、其の中の同じ星晨も、又それらのものを動かす運動も其の調和も、すべて皆な此の極微物質の集合的作用に過ぎない事が分つた。更に一步を進めて云へば、ニュウトンが太陽の力であると云つた引力其者も、實は此の空間に充ち滿ちてゐる極微物質の自主的運動の結果に外ならない事が分つた。

　これを一言に云へば、從來は常に統計と結果とのみを見て、其の統計を成す各單位や、又は其の結果を導く起原に就いては、殆んど顧みられなかつた。それが今日では、反對に、寧ろ單位である起原である極微物質の方に注意を傾けるようになつた。そして、統計の中に積み重なつてゐる各個體の微かな作用が分らなければ、其の結果は分るものでないと考へるようになつた。

　更に言葉を換へて云へば、宇宙にはもはやたゞ一個の支配力と云ふやうなものはない。豫め定められた法則はない。豫め計畫された調和はない。たゞ無數の極微物質が、各々自由自在に其の向ふところに突進して、そして其の間に自然と均勢が出來る。それが宇宙の力だ。法則だ。調和だ。

　これが最近天文學の結論である。宇宙の總概念、即ちコスモロジイの結論である。

三

　天文學上の此の新しい結論は、更に有らゆる自然と人類社會との諸科學の上にも、それと同じ變化を及ぼした。

　先づ物理學上では、甞つて實體として取扱はれてゐた光とか、熱とか、電氣とか、又は磁氣とか云ふものが、餘程其の性質の解釋を變へられて來た。即ち、熱を加へられた或は電氣を通ぜられた或る物體に對して、それがもともと自分では何んの力も持たない死んだ物體であつたのが、そとの或る未知のものからそれらの力を與へられて生きて來たのだ、と云ふやうには見なくなつた。物理學者は先づ、其の物體及び其の周圍の空間の中に、有らゆる方向に突進し活躍し廻轉してゐる無數の極微物質の運動に注意し、そしてそれらのもの丶振動と衝突と生氣とによつて光や、熱や、電氣や、又は磁氣が生じたのだと說明する。

　生物學に於ても亦、種の創造とか現出とか云ふ事はもはや昔しの物語りとなつて、今日では各個體其者の生活と其の周圍と云ふ事とが、動植物學者の研究主題となつた。此の周圍の影響

とか、又毎日のやうに變つて行く其の諸條件に各器官が適應して行く狀況によつて、個體の上に起る變化を研究するようになつた。氣候の寒暖乾濕や、食物の多少や、又は其の外界の力に對する感受性の厚薄强弱等によつて、各個體の上に起る變化が、やがて新種の起原になるのだ。即ち、種の變化は各個體の上に別々に起る變化の總計若しくは結果である。各個體が其の生存する周圍の無數の影響を受けつゝ、各自が其の個性に從つてそれに適應する、其の統計が相集まつて新しい種を造り上げるものだ。

しかし、此の個體其者も又、無數のそしてそれ自身の生を持つてゐる極微物質の集合體である。生物の各器官は有機體たる無數の細胞より成り、其の各細胞はそれ自身の個性を保存しつつ相集合して、其處に或る一個體を組織する。人間はもはや唯一者ではない。分離する事の出來ない完體ではない。微生物の集合團である、細胞の群體である。器官の部落である。斯くして生物學者は、人間を知らうと思ふなら、先づ其の各單位を究めなければならないと云ふようになつた。

そして十八世紀の唯物論者すらも猶其の概念に囚はれてゐた、謂はゆる人間の靈魂なるものも、孤立した特別の存生物ではなく、要するに甚だ複雜した、即ち各自が別々に自治し獨立しつゝ、自由な行動をとつてゐる諸種の官能の群體である。總計である。これらの官能の各々には、それ〴〵の神經中樞がある。それ〴〵の種々なる器官がある。斯くして遂に心理學は一個人の心理的作用の學問ではなくなつて、其の個人の生命を組成する諸種の官能の別々の研究となつた。

社會科學にもやはり同じ變化が來た。寧ろ更に明白に此の變化が現はれてゐる。

歷史はもはや□□の歷史ではない。民衆の歷史である。更に適切に云へば、各個人の歷史である。歷史の見解はもはや謂はゆる英雄崇拜を許さない。そして史上に於ける民衆の大きな役目が、其の研究の進むに從つて、益々重大な意味を持つて來た。過去の大事件はすべて皆な幾千幾萬の個人の意志が積み重なつた結果として見られるようになつた。即ち歷史は先づ、或る時代に生存して一國民を組織する各個人が、どんな信仰を持ち、どんな生活を送り、どんな社會的理想を抱き、そしてどんな方法を以て其の理想に進んで行つたか、と云ふ事を調べて見る。そして、それらのすべての力の集合的作用によつて、史上

一切の大現象を解釋しようとする。トルストイの描いた『戰爭と平和』の中の、一八一二年の戰爭の如きは、實に其の好適例である。

法律學者も又、單に或る法典を研究するだけでは、もはや滿足が出來なくなつた。丁度人種學者と同じやうに、いろいろな制度の起原を尋ねて、時代を追うて其の進化のあとを究めて行く。そして此の研究を進めるにも、成文法などよりも寧ろ各地方の習慣、又は謂はゆる習慣法にたよつて行く、斯くして其處に無名の社會的創造、建設的天稟を發見する。

又、經濟學は嘗つて國家の富の科學であつた。されば、此の科學の始祖たるアダム、スミス自身も、其の名著に題して『富國論』と云つた。そして其の取扱つた主題は、國家の生産であつた。輸出入であつた。交換であつた。然るに今日の經濟學者はもう、國家の富を研究するだけで滿足が出來なくなつた。そして各個人が其の欲望を充たしてゐるかどうかを知る事が、其の最も重大な研究主題となつた。

今日の經濟學はもう、一國の富を測るのに、其の交換の總額によるやうな事はしない。先づ其の一國の中に、窮乏の中に蠢めいてゐる個人の數に比較して、幸福を享けてゐる個人の數がどれ程あるかを調べて見る。即ち一軒一軒と歩き廻つて、食物に事を缺いてゐやしないか、子供にさつぱりとした夜具を着せてゐるか、明日のパンに困つてゐるやうな家はないか、と探して見る。これを要するに、個人の欲望と其の滿足と云ふ事が、最近經濟學の先づ第一に知らうとするところだ。

政治學ではやはり、各國の法典に記されたいろいろな形式……
……………などは、もう左程に重大な問題ではなくなつた。たゞ政治學者が知りたいのは、各個人がどれ程までに自由を享けてゐるか、地方自治の欲望がどれ程までに滿足されてゐるか、各個人の知識的水準がどれ程までに進んでゐるか、何處まで其の思想を表白する自由があるか、そして又其の情意の衝動によつて行動する自由が何處まで許されてゐるか、と云ふ事である。即ち、政治學の研究主題は、やはり其の國民を組成する單位の各個人であつて、一國の政治的狀態などと云ふ者の結果は、其の起原たる各個人の狀態さへ分れば、自然に分つて來るものとされてゐる。

斯く物理界にも、生物界にも、又人類界にも、すべての科學に亘つて、時代の一大特徵たる此の傾向が容易に見られる。嘗

つては總計と結果とのみを見て、それに滿足してゐたのが、こんどは逆に、其の總計なり結果なりを構成する各單位の上に注意を向けるようになつた。

四

先きにもちよつと一言したやうに、近代科學の此の傾向は一つの大きな概念を近代思想の上に齎らした。それは、調和とか秩序とか云ふ思想に就いての、最近科學の結論である。

自然は實によく秩序が行き屆いてゐる。激變などと云ふ事は滅多にない。どうして日月星辰は、いつも其の空間の同じ道を往來して、互に衝突したり打ち毀し合つたりする事がないのだらうか。どうして火山の爆發や不意の地崩れなどが起つて、時に大陸を打ち崩し、又は地の底の洞や波の凹地などを埋めて了ふ事がないのだらうか。どうして又、人間の社會はこんなに固定してゐるのだらうか。どうして時々其の內部に顚覆と云ふやうな事が起らずに、長い間斯うして無事に續いて行くのだらうか。

これらの疑問に對しては、いつの時代にも必ず何等かの解答が出てゐる。そして其の解答は、其の時代によつて、いろいろと違つてゐる。

昔しの解答は極く單純なものであつた。即ち創造主が其の創造物の保存に努めてゐるのだと云つた。

けれどもやがて此の思想が法則と云ふ概念に變つた。尤も其の法則と云ふのは、最近科學の云ふそれとは、大ぶ其の意味が違ふ。即ち其の謂はゆる自然法は、斯く斯くの事が生ずれば必然にこれこれの力が起ると云ふ、物と物とのたゞの關係、云へ換れば、因果の係件的法則を指すのではない。其の諸現象の上に遙かに優れた、そしてそれらのものを指揮し命令して行く、何か特別なもの〻やうに思はれてゐた。

十九世紀の諸科學は多く此の思想の下に支配されてゐた。自然科學もさうだつた。社會科學もさうだつた。そして斯うした法則とか、規律とか、又は秩序とか云ふ思想が、大學にも、議會にも、官衙にも、商館にも、到る處で、そして又日常生活の間にすらも浸みこんで了つた。

けれども最近科學の傾向は更に其の道を轉じかけて來た。自然界に多少の調和があるのは、大きな激變の滅多に起らないのは、そして生物や無生物がよく其の周圍の事情に適應してゐるのは、それらのものが此の周圍の事情其者の產物であるからで

ある。此の周圍の事情其者がそれらのものを造り出したのだ。從つて此の周圍はそれらのものを滅多に打ち毀すやうな事をしない。建設力と破壞力との自由な働き其者が、それらのものを創造し、且つそれらのものの間に調和を維持してゐるからである。されば、自由調和がありとすれば、それはそれらの力の自由な働きの結果に外ならない。そして又此の結果は、其の時の必要に應じて、それらの力によつて常に變化され得べきものである。

調和や秩序は神の御心によるものでもない。又、或る一個の大きな力によつて課せられた法則によるものでもない。調和や秩序はたゞ次ぎの條件によつて維持されて行く。卽ち或る同一の點に働く有らゆる力の間に自由に生ずる均勢と云ふ事である。そして、これらの力の中の或者が、何者かによつて障碍される時、其の力は暫く表面には現はれずにしかし其の間に蓄積されて、やがては其の障碍物を打ち破る、斯くして謂はゆる激變が起る。

又、調和や秩序は永遠無窮のものではない。必ず斷えず改修され變化されて行くと云ふ條件の下でなければ維持されない。自然界にも又人類界にも、一物たりとも一瞬時も變化しないで潜ませるものはない。不斷の進化、これが自然の生命である。そして自然界に多少の調和があり、よし變動があつてもそれは極く稀れでしかも常に部分的であるのは、自然界の現象にはそれらのものゝ力を障碍する或る意志が滅多に交渉しないからである。其の盲目的の衝動と軋轢との結果、互に相均勢して、遂に其の間に密接なソリダリテを結ぶ。

尤も此の自然の調和と云ふのは、勿論或る範圍内での事で、從來の生物學者や哲學者のやうに誇張する事は出來ない。星とか大陸とか云ふものは、幾百千萬年かゝつて生長して來たもので、其の間に殆んど信ずる事の出來ない程の緩漫な變化を續けてゐる。斯く幾百千世紀かを其のリズムとする天體の調和と、それに較べれば無限の加速度で進行するものの調和との間には、當然區別して考へなければならない或者がある。

動植物の種は、從來考へられてゐたよりも、餘程の急速度で變化する。地質の變化もさうだ。そしてこれらの變化に對しては、從來の博物學者が使つたやうな、一樣なそして緩漫な進化などと云ふ言葉は、もう許されなくなつた。進化と激變とが常に入り混つて、そして此の二つとも等しく自然の大調和の爲めに其の力を寄與してゐる。

五

クロポトキンの世界觀、…………………と云ふのは、ざつと先づ斯んなものだ。誰れにでもちよつとは默頭ける程の、至極平凡な、又至極温健なものだ。たゞそれが…………社會觀になると、急に誰れでもなかなか默頭けない、至極突飛な、又至極過激なもののやうに見えて來る。

　しかしまあ、そんな事はどうでもいゝ。又、僕は斯くながながとクロの世界觀を說いて來たものゝ、實のところ、そんなこけ嚇しの世界觀なぞはどうでもいゝんだ。クロ自身にだつて、此の世界觀があつて、始めて其の社會觀が出來たのぢやない。世界觀の前に社會觀があつたんだ。そして其の社會觀の前にも又何者かゞあつたんだ。それはクロ自身だ。クロ自身の强い感情だ。クロの世界觀や社會觀は、此の强い感情に基づいて、それをたゞ科學的に理屈づけたものだ。クロの社會哲學の本當の値打は其處にある。

　僕は先きに、クロの科學的方法は人間の本能や感情や意志や憧憬やを蔑視する、又社會の階級的分離を無視する、謂はゆる主知主理派の科學的方法ではなかつた、と云つた。クロの社會哲學には、クロ自身の深い感情や憧憬が、其の基調になつてゐる、そして其の感情や憧憬の共鳴を同代人の生活や人類の歷史の中に求めた。

　社會進化の行程は、謂はゆる『科學的』社會主義の主張するが如き、生產方法云々を土臺とする必然的のものではない。其の社會及び其の中の各個人が持つてゐるいろんな意志、いろんな憧憬、いろんな傾向の、自由な鬪爭を土臺とする蓋然的のものだ。

　だから、社會哲學はあるが社會學はないと云つて、社會學の科學としての價値を否認する學者すらもある。しかし此の社會哲學の中に本當の社會學があるんだ。

　然らば、クロが其の社會哲學の基調としたクロ自身の深い感情、深い憧憬と云ふのは何にか。それは自由發意と自由合意とである。個性の尊重である。自他の個性の尊重である。そして其の各個性の自由なる合意、自由なる團結である。自由と平等と友愛である。

　クロがまだ十四五の時であつた。彼れは近侍學校にはいつた。

學校には古木の茂つた美しい庭園があつた。第五級の生徒は其處へはいつて遊ぶ事が出來なかつた。第一級の生徒等が其中で寢ころんだりお饒舌りしてゐる間に、新入生等は其の周圍を馳足させられたり、又は古參生等が六柱戯をやつてゐる間に其の球拾ひをさせられたりしてゐた。クロは學校にはいつた數日間、庭園の中のさうした事情を見て。其處へは行かずに自分の室に籠つてゐた。そして本を讀んでゐた。すると、人參のやうな髮に雀斑だらけの顔の一人の近侍がやつて來て、直ぐ庭園に下りて馳足をするようにと命じた。

「いやです、僕は今本を讀んでゐるんぢやありませんか。」とクロは云つた。

　近侍は怒つた。たゞさへ面白くない顔を一層無恰好にして、今にもクロに飛びかゝらうとした。クロも防禦の身構へをした近侍は其の帽子でクロの顔を擲らうとした。クロはうまくそれをはねのけた。近侍は帽子を床板の上に投げつけた。

「拾へ。」

「自分で拾ふがいゝ。」

　こんな不從順な振舞は學校では未曾有の事であつた。翌日も、又其の次ぎの數日も、クロは同じやうな命令を受けた。が彼れは頑固に二階の其の室に籠つてゐた。其のたびに益々迫害は嵩じて來た。普通の子供なら絕望して了ふ程ひどくなつた。それでも彼れは平氣で古參生等を茶化してゐた。

　第一級の近侍等は下士官の資格を持つてゐて、下級生等に對する命權を與へられ、校內の嚴重な紀律を保つ事に任ぜられてゐた。そしてニコラス一世時代には、此の近侍等の命令に反抗したものは、其の事が公けになれば兵卒（農奴）等の子供を集めた學校に送られる事にきまつてゐた。又、近侍等のちよつとした出來心に少しでも背かうものなら、彼等は重い樫の木の定規を持つて、室に集まつて、其の不從順な生徒に手痛い制裁を加へるのであつた。そしてクロは、此の長い間の惡習に反抗して、それを打破する先頭に立つたのだ。

　僕は此のたゞ一事にだけでもクロの個性の强さを見る。そして彼れは此の個性の强さと共に、やはり子供の時から、其の母から讓り受けて農奴共の間に養はれた深い友愛を持つてゐた。

　クロは彼れ自身の此の强い感情の現はれを、やがて西ヨオロツパへの其の初旅の間に、國際勞働者協會內の一大傾向の中に見た。そして其處から無政府主義を教はつた。此の事は、クロの自敍傳『一革命家の思出』の中に、彼れ自らが詳細に語つてゐる。（次號完結）

「田園、製造所、工場」
―クロポトキンの經濟學―

伊藤野枝

一

『パンの略取』は、無政府共産主義の建設的方面を書いた名著で、クロポトキンは、此の研究が、更に現在の文明諸國の經濟的生活に就いての研究を進めしめたと、其の自叙傳に書いてゐる。其の研究の結果として現はれたのが Fields, Factories Workshops である。

此の書の使命―別の言葉で云へば、此の書がどのやうな目的で書かれたものであるかを、先づ紹介して置きたい。

クロポトキンによれば、從來の經濟學者は、みんな間違つた方針の下に其の研究を續けて來た。經濟學の唯一の大きな使命は、人類の欲求と、其の欲求を人間の最少限度の精力の消耗で滿足する手段方法の研究でなくてはならない。それは決して從來のような單純な事實の記載だけのものではなく『社會生理學』とも名づくべき一の科學を構成するものであると云ふのである

從來の經濟學者は、此の人間の欲求を滿足させる手段、即ち『消費』と云ふ大事な點には非常に冷淡であつた。彼等は必ず先づ最初に『生産』を論じた。『消費』については最後に申譯ばかりに書いて、それもたゞ『富』がどんな風に少數の競爭する其の所有者の間に分たれてゐるかと云ふ事を説明するだけで、『富』の分配に與る事の出來ない大多數の者に就いては振り向いても見ない。

物を造り出すと云ふ事は勿論大事な事である。然し何物を造り出すにしても、先づそれを必要とする欲求が起つて、其の欲求によりて造り出されるのではないか？　人が狩獵をし、耕作をし、道具を作り、機械を發明するようになつたのも、悉く必要から出來たものではないか？　即ち人間の欲求が生産を支配するのであつて、その欲求に添はない生産が人間の生活を支配

してはならない。が、經濟學者等は、所謂生産の法則と云ふものを一定不變のものにきめてしまつて、萬人の欲求なぞにはおかまひなしである。彼等が『消費』について答へ得るは、『生産は萬人の欲求を充分滿し得る』。と云ふ事だけである。生産されたものがどう云ふ風に人々の欲求に添ひつつあるかとさへ彼等には答へられないのである。

今日の世態は、何處の國でも、此の人間の極めて切實な食べるだけの欲求すらも滿足されずにゐる人間の方が多い位なのである。經濟學は、何よりも先づ、『人間が勞働によつて自分に要するだけのものを生産し得るかどうか。若し出來ないとすれば何う云ふ障礙で出來ないのか、或は又、生産力を增加するにはどうすればいゝのか。』とか『しかし、どうしても欲求の滿足がされないのは、生産がひよつとして、人間の欲求と云ふ大事な目的を忘れてゐるのではないだらうか？ 或は其の組織が誤つてゐるのではないだらうか』と考へて見なければならない筈である。そして、それ等の研究と共に、若し生産組織に誤りがある場合には、それをどう改造すれば一切の欲求を滿足させる事が出來るかを研究せねばならない。それが今日の經濟學のさう迫つた重大な任務なのである。

若し、經濟學の諸章が、此の研究的態度で書かれたならば、從來の經濟學は根柢から覆へされてしまふであらう。それは現在制度の下に於ける人間の精力の恐るべき浪費を明白に證據立て、此の制度の存する限り、人間の欲求は決して充されないことを認める事になる。

『斯くして觀察點は全く一變する。吾々は此上、澤山な機織機械の後ろで、銅鐵板を穿つ穿孔器の後ろで、利益配當を蓄積してある金庫の後ろで、其の生産の技手や職工たちが、他人の爲めに獻立しながら、自分は其の饗宴に與り得ないで居るのを見るようではならない。又、吾々は彼の所謂價値や交換の諸法則の如きも、其の立脚點から誤つてゐるので、唯だ今日の事態の極めて虛僞の說明に過ぎない事を承知せねばならない。且つ、生産が社會の總ての欲求に應ずるように組織される事になれば事情は非常に違つて來る事も合點せねばならない。』

從來の經濟學者の謬見はこれのみに止まらない。彼等は、其の時々の必要以上に多額の品物が生産される事、即ち生産過剩が、經濟上の恐慌を引き起す唯一の原因だと云ふ事を躍起となつて主張してゐる。が、事實、世間一般の日用品が少しでも必要以上に生産されてゐるであらうか。

「ロシアの農民がヨオロッパに送るのは其の剰餘の小麥ではない。ヨオロッパロシアでの極く豐饒な收穫でも、やつと其の人民に足りるだけのものしか出來ない。そして、農民が地代や租稅の爲めに小麥を賣る時は、實際に自分に必要なのを割くのが通例である。

英國が世界の四隅へ送るのは、其の剰餘の石炭ではない。何故なら、毎年內地の家族の消費の爲めに殘るのは、一人について一噸の四分の三にしか當らない。そして幾百萬の英國人は多になつも火に煖る事が出來ず、少々の野菜を煮る位がやつとの事である。他の何の國よりも多くの輸出をしてゐる英國で、無用の贅澤品は別として、一般の用品で、多分、社會の必要に超えてゐようかと思はれるのは實際唯つた一種―棉―ばかりである。それでさへも、合衆王國の人民の三分の一がひどい襤褸を着てゐるのを見れば、吾々は其の棉花の輸出額も本當に國民の要求にそふた上の事であるかどうかと問ひたくなる。」

實際に、何處の輸出物でも決して剰餘の品物ではない。剰餘どころか、大抵は其の輸出國の國民の悉てに供給するにさへ不足勝な位である。それはどうして輸出してしまふのかと云へば貧乏な平民階級が、其のやすい貨銀では、自分の手で生產したものでも、買ふ事が出來ないからである。或は貧乏な農民が、其の收穫の大部分を租稅だ、初穗だ、地代だ、と云つて取り上げられてしまふからである。

生產過剰と云ふ言葉は經濟學者の恥知らずな妄言である。過剰と見られてゐる莫大な輸出品は、みんな各國の貧乏な階級から剝ぎとつた掠奪品である。生產過剰と云ふ事は決して有り得ないのである。

クロポトキンは、此の從來の經濟學者等の僻見に鋭く眼を注いだ。そして考へた。彼れは其の自叙傳の中に書いてゐる。

『よく、話に出る生產超過と云ふのは、民衆が今日其の相當な生存の爲めに必要だと見做されてゐるものすらも買へない程に貧乏だと云ふ事を意味するに過ぎない。有らゆる文明國では、其の農工業の何れの生產も總ての人の充足を保證するように更に大いに增されなければならず、又容易に增す事が出來るのだと考へた。』

そして此の研究は、近代の工業に對する偏見を糺し、近代農業の可能性を確かめさせた。此の工業と近代農業の結合が必ず悉ゆる文明社會に必ず利益ある効果を齎らすであらうと云ふ

を信ずると同時に、頭腦勞働と手藝とを同時に行はせるようにする教育の可能性をも考へた。そして此の研究と思索の結果は雜誌『十九世紀』と『フォラム』の誌上に連載した後、一八九八年に單行本として出版されたのである。

二

現在の生産組織を誤まつた方向に導いた第一のものは、從來の經濟學者が唱道して來た分業說である。

アダム、スミスによつて、分業がどんなに生産を增し吾々を富ますかについて說かれて以來、悉ての工業に分業を生じ、其の說明どほりに生産は增した。社會に起つて來た事實の記載と特權階級の利益の辯明をする事のみしか知らない多くの經濟學者等は、其の分業の結果が其の特權階級の利益と見たので、それを動かし難い原則と定めて、守り立てた。そして少數の眞面目な學者が分業は決して國民全體を富ますものでなく、たゞ富を擁してゐるもの丶みを一層富ますばかりだ、と云ふ事や、分業によつてほんの一小部分の仕事しか出來ないもの、例へば、ピンの頭だけを一生作らねばならぬ運命を背負はされた人間が馬鹿になり貧乏になるのは當然だと考へ初めた時にでも、彼等は何んにもそれに就いては云はなかつた。クロポトキンは、『田園、製造所、工場』の最初に、此の分業說に反抗してゐる。

「「分業」とは彼(アダムスミス)の標語であつた。そして分業と小分業—不變の小分業—は人類を多くの階級に分つて押し込み、丁度古代印度の階級制度のように、動かすべからざるものとした。吾々はこれを先づ生産者と消費者に分ける。即ち一方は消費の少ない生産者で、他方は生産の少ない消費者である。而して前者の中には猶多數の小區分があつて、手工勞働者があり知的勞働者がある。これは丶つきりした區別があつて、その爲めに利害關係も全く相反してゐる。尙農業勞働者があり工場勞働者がある。工場勞働者中にも更に又無數の小區分があり。其の小區分は又極めて微細な點にまで及んで、近代勞働者の理想は、悉ての者が、手藝上の何んの知識も持たず、又其の爲てゐる仕事に關する一切の觀念を把持することもなくして、終日、或は長い一生の間、常に一つの事の同じ小部分の仕事ばかりをする能があればよいと云ふのである。そして、炭坑の坑夫は幼年から老年に至るまで、始終一定區間の炭車を押し、一人の鐵工は、常に小刀の彈機をつくり、或は留針の「十八分の一」を製作して其の一生を終るのである。斯うして、勞働者は機械の爲め

に供へられた奴隷、言葉を換へて云へば、一大機械に附隨した無意味な骨と肉である。』

こんな分業の結果は、人間の仕事に對する愛や、才能や、發明の精神を奪つて、無知無能無氣力の魯鈍な人間ばかりをつくり上げる。こんな原則が不變のものとしたら、何んと云ふ呪はしい原則であらう。これは明かに社會にとつては有害であり、個人にとつてはこれ程の殘酷なものはなく、人間の生活を墮落に導き窒息させるのみである。しかも、此の原則を唯一のものとして、悉ての人―勞働者でさへも―が其の學者等の口眞似をして分業を謳歌する。斯くして、クロポトキンの言ふところによれば、多くの社會主義者中の科學の誤謬を指摘する事を恐れない程聰明な知識あり勇氣ある人々でさへも、此の分業説を是認する。そして、その人々と改革中の勞働組織を相談すれば、其の分業を維持しなければならないと答へる。一日五時間以上は働かなくてもいゝが、仕事はやはり針みがきは生涯針を磨かねばならないと云ふ。改革は、其の人間を分業のきびしい束縛から救ひ出すことは出來ない譯になるのだ、個人個人が、其の悉ての束縛から自由に解放されるのでなければ、眞の改革ではないと云ふ。

此の個人に對して一生の仕事をきめる分業は、更に進んで各國の產業を專門的に進歩させる事を主張した、即ち『ハンガリイヤロシア等は、農業國としての運命を持つてゐ、ベルギイは其の毛織物を世界の市場に供給すべきである』と云ふ風に。

しかし、かう云ふ風にすべてを分業で片附けてゆく事が出來るものであらうか。一國の國民は複雜な個人の集合體であつて多種多樣な趣味や傾向や能力を含んだものであり、其の國民が占めてゐる土地も、氣候もそれ〳〵にちがつてゐる。個人の場合にしても其の通りで、人間を生涯一つの仕事に無理にしばりつけて一つの工場とか、一つの坑山に閉ぢこめて、機械の附屬物奴隷として活かして置くと云ふことは、人道の上から云つても許しがたい事である。しかも彼等は、自分の仕事の單調無味なのに倦き、自分の持つてゐる種々な能力を發揮しようとする傾向をだん〳〵著しく見せて來てゐる。これは極めて當然の結果である。

生產力を增すのに、仕事を專門にすることはいゝ方法であるに違ひはないが、これは全く人間の性質を無視したやり方で、それよりは各個人の趣味に應じ知力に應じて自由にその能力を發揮させ工夫を凝らさす方が、より自然な最善な生產を增加さ

せる方法である、とクロポトキンは主張する。

しかし、此の不都合な分業は實際に、今一刻一刻に勢力を失ひつゝある。そして、多くの人間は、其の國の農業者をして田園を耕しながら諸種の工業にも從事する、と同時に研究し得た科學的知識を勞働の熟練に結びつけると云ふような理想に向つて進みつゝある。其の事實を、クロポトキンは、第一に、分業萬能を謳歌しつゝある工業の『分散』が分業の理想を裏切りつつある事によつて確かめてゐる。

Fields, Factories and Workshops の第一章に、其の事實に對する觀察と研究とを書いてゐる。

英國は久しい間大工業國として、又其の工業の進歩に伴ふて發展した海外貿易の覇王として、世界に誇つてゐた。しかし、幾多の大犧牲を拂つて得た工業的生產の獨占權はだんだんに侵されて來た。久しく秘密に保たれて來た工業上の知識も、其の企業もやがて大陸に輸入された。

フランスは其の產業の幼芽をイギリスの爲めに蹂躙されて以來、久しくその工業上の生產をイギリスに仰いでゐたが、十九世紀後半から再び成長をはじめて。今日では最早英國の覇權を脫して、輸出額も今は英國の半分位には達してゐる。しかし、フランスでは、その製品の販路は貿易によるよりは、主として自國の市場に俟たうとしてゐる。斯うして國內の消費はすべて自國製のもので維持しようとする傾向を見せてゐる。

ドイツも亦、普佛戰爭以來、その產業狀態は全く一新した。設備は完全にされ、職工や技師は工學的科學的な教育を受けた優良な人々である上に、各專門の學者の助力があつて其の發展の狀態は目ざましいものがある。

製造業の波動が斯うしてヨオロッパの西北部に發すると同時に、東に、南に、其の波動は傳へられて、科學が工業に與へ得べき悉ゆる力をかり、近世の知識が提供する最新最善の結果を獲得しようとする多くの人々に出遭つた。ドイツは、英國が一世紀の間苦心研究した結果を出發點として發達し、ロシアは英獨が現在得てゐる事を緒にしてその事業の發達を奬勵してゐる。オオストリア、ハンガリイ、イタリイも同じやうに內國工業を發達せしめ、英獨の各植民地すらも、その本國の資本と知力を利用して、內國工業を起してゐる。アメリカ合衆國の產業は更に全歐洲を相手にする程大規模な發達を遂げつゝあるのである。クロポトキンは、其の各國の產業の發達を一々研究した結果を詳細な數字によつて發表してゐる。

要するに、各種の工業は總て各地に分かたれて地球の全部に行はれ、事實の特權は衰へて、すべての產業が一齊に起つて來る。各國は順次に製造國となつて其の發達を遂げ、遙かに劣つたやうに見える亞細亞にさへ、日本、印度等は新工業國として起るに至つてゐる。亞弗利加、濠洲などの各地が其の必要に應じて、種々の需要品を自ら製造し得るのも遠い將來の事ではないであらう。戰爭とか其他偶然の事で、一時分散を妨げられることがあるであらうが、しかし此の大勢を阻止し得べきものはないであらう。

斯うして工業の分散による內國工業の勃興は又必然に今迄の工業獨占國の貿易を悲境に導く。卽ち國外に於ける古いとくゐを失くすのである。其處で恐慌が來る。一八七〇年代から初まつた、最初の恐慌時代以來の英國の貿易減退は明かに此の間の消息を語るものである。其處で此の恐慌を防ぐ爲めに生產品のハケ口を植民地に求める。最近の植民地爭奪は、此の經濟的事情が第一の因を成してゐるのである。

しかし、有名な强國は皆な植民地を持つたが、植民地は無限にはない。そして其の植民地も、英國と印度、加奈陀、濠洲等に於いて見るやうに、母國の生產品を仰ぐどころか、世界の市場に競爭をしようと云ふ勢になつて來る。其處で、海外貿易と云ふ事は、だん／＼に悲境に墮るばかりである。斯うなつて來ればすべての生產品は自國內の供給に充てるより他はないようになる。

恐慌が來ると、『生產過剩々々々々』と云ふが、先きにも紹介したように生產過剩は事實存在しない、莫大な貨物を輸出する國內に、それ等の悉ての必要を感じながら買ひ得ないでゐる多數の人間がゐる。

クロポトキンは謂ふ『若し吾々が、海外に需要を得ようとして、其の計畫に費す能力をもつて、次ぎの諸問題を解決するならば、それはどれ程優れた結果を得るか知れない。卽ち、何故イギリスの勞働者が其の產業上の技能を諸種の政治的言論中に賞讃されてゐるか。又スコツトランドの小作人やアイルランドの百姓が非常な勤勉さで不毛の沼地を開墾しながら、何故ランカミアの織工や、セフイールドの刄物師や、ノオザンベランドやウエールスの坑夫やのおとくゐになれないのか。何故リオンの織工等が自分の爲めに絹を織れないばかりでなく、時々彼等はその茅屋で、其の食物もなくてゐなければならぬか。何故ロ

シアの百姓は彼等の穀物を賣つて、毎年四ケ月か六ケ月、時としては八ケ月もの間、彼等のパンを燒くのに一と握りの粉の中に草の根や木の皮を混ぜなければならないのか。何故澤山の小麥や米を産出する印度に屢々饑饉を見なければならないのか、と云ふことを。』

資本家と勞働者、財産家と不定の賃銀を得て生きてゐる階級に分れてゐる現在の制度の下にあつては、新しい地方に工業が盛んになる事は、慘酷な壓制や小供の虐待や、貧乏を伴れて來た生命の不安を感ぜしめる者である。そして、資本家對勞働者問題は世界の大問題になる。しかし、これは又非常に容易な問題だとクロポトキンは云ふ。即ち、工業上の生産物や農業上の生産物もたゞ、其の生産者等の消費の爲めにのみ生産されるようになりさへすればいゝ。そして今は正しく其の方向に向つて進みつゝあると云ふのである。

三

マルサスの人口論は、久しい間一般の經濟思想發達を害ふたものである。彼は、社會に平等が決してあり得ず、且つ多數の貧窮は自然の法則で、社會組織の如何には關しないと主張して有産者に科學的論據を與へた。と同時に貧民階級からは、其の進歩發達の希望を奪ひ其の生活に對する考へを懷疑的に陷らせ最も進歩した社會改革者をすらも、人口の急激な増殖によつて出來る多數の勞働者に迫まられた場合に、其の欲求を、例へ一時間のものにしても與へ得るかどうかと考へ込ませてしまつた。

科學もまたこれにかぶれた。經濟學も國民の生産力が急に増加することが不可能だから非常な勢で増える總ての人間の欲求を充分に滿足することが出來ないと云ふ事を暗に承認して、それを論據にしてゐる。そして、經濟學に關聯する總ての學説がやはり此の説を信じてゐる。

しかし、工業の驚くべき進歩による生産品の増加はマルサスの説に動搖を來たしたが、農業は土地に制限があると云ふ實際の强味から今にマルサス説の牙城と考へられてゐる。が、それも最近の農業の異常な發達には抗ひ得ないようになつて來た。

經濟學者は、土地の面積に限りがあると云ふのを唯一の據り處として、たとへ生産力が一層増すにしても、三十年毎に二倍する人口に充分な生活必要品を供給する事は出來ないと云ふが現在に於ける進歩した農業者は土地のよしあしも眼中におかず

氣候や緯度に頓着せず、一年のうちに四回乃至九回の收穫を得なければ滿足しない狀態にある。

經濟學者や政治學者は、西ヨオロッパ諸國の土地は住民過剩で、絕えず增加しゝある人口を維持する食料品を其の土地から生產する事が出來ないので、製造品を輸出して食料品を輸入する必要があるのだと云ふ。しかし、最近の進步した農法は、西ヨオロッパの土地で、現在の住民に必要な額を遙かに超える程に栽培し收穫する事が出來るのである。

英國では、國內で現在生產されてゐる食料品は其の住民の三分の一の需要を充す程しかない。處が、J. B. Lawes 氏が每年タイムスに發表する穀物の收穫高を見ると、一八五三年から一八六〇年に至る八ケ年間には、英國で費消する小麥の全額の四分の三は殆んど內國產で、外國から輸入するのは僅かに四分の一にも滿たなかつた位であつた。然るに、其後の二十五年間に輸出入の數字は全く顚倒して一八七九年から一八八六年に至る八ケ年間には、內國產の穀物は、漸く三分の一に過ぎなくなつた。が、これは決して八百萬の人口が增えた事に基づくものではない。一八五三年乃至一八六〇年にニエーカアの收穫が一人を養ひ得たものが、一八八七年には、同じ人口を養ふのに三エーカアの土地を必要とした事は、食物の不足が、人口の增殖ではなく、農業を棄て土地を荒廢させたからである事を明白に語つてゐる。實際に英國の土地の荒廢は見る人の眼に直ちに映るであらう。農業勞働者の三分の一は一八六一年以後に漸次に都會に出て耕地を打ち棄てゝしまつたのである。フランス、ベルギイ等の農業の狀態と比較すると、農作、園藝、牧畜、何れの方面に於いても劣つてゐる。クロポトキンは英國の農業の研究から得た結論を左の通りに並べてゐる。

一　若し合衆王國の土地が、たゞ三十五年以前のように耕されるだけで、千七百萬人の代りに、二千二百萬人はその土地からの食物で生活する事が出來、新たに七十五萬人に職業を與へ三百萬人に近い人々を英國の製造者の顧客とする事が出來るであらう。

二　若し英國の可耕地全部をベルギイに於けるように平均して耕されれば、英國は少くとも三千七百萬人の爲めの食物を得て其の上製造品を割かずに農產物を輸出することが出來るであらう。

三　最後に、人口が增加して、八百萬人の爲めに食物をつくる必要が生じた場合には、英國の最も立派な農場や、ロンバルディ

ー、フランダアスに於いて行はれてゐるような最も進歩した方法で耕作をし、現在不生産地として棄てられてゐる草原を利用して、フランスの大都市の附近のように市場園藝場に利用する。

「これは、決して夢想ではない、吾々が現在見る事實から歸納した結論である。これは將來の農業に對して明らかに云ひ得る處である。」とクロポトキンは云つてゐる。

此の、「農業の可能性」に就いては、クロポトキンは、悉ゆる方面から材料を得て、最近の知識と共に進歩した集約農法の驚くべき可能性を説明してゐる。パリの市場園藝家が爲し得てゐるすべての事、果樹や蔬菜の高等栽培、農作物と加熱裝置、最も進歩したアメリカの集約農法の齎らす結果、イギリスのジアーチ島の生産力、同島の土地使用の集約、灌漑法と飼料收穫の増加、メエジョア、ハレットの新種育成、麥作改良の諸方法、温室栽培の一般化、温室に於ける野菜、果物の收穫等、興味ある記述がある。しかし、與へられた紙數が少いので、斯う云ふ内容の紹介は遺憾ながら出來ない。

要するに、クロポトキンは、經濟學者等が、土地に限度があると云ふのを據り處にして食物の生産率が人口の增加率に及ばないと主張するのに對し、最近の進步して來た農業は、一定面積の收穫高を異常に高め、地質の善惡を無視して、自ら土壤をつくり、氣候に頓着せず。人力、器械力、化學等の可能性のすべてをつくして生產率を高めつゝある、と云ふ事實の例擧により其の計算によつて、食物生產が遙かに人口增率をしのぐ事が出來ることを證據立てゝゐるのである。

此の集的農法が現在其の發達を阻害されるのは地代や租稅や設備や勞力やに拂ふ負擔が重い事が非常にたゝつてゐるので、現在制度の下に於ては、其の充分な發達を見るのが六ケしいがすべての人間が其の消費の爲めに生產に携はると云ふような社會狀態になれば、それは充分に何んの障礙もなく發達するであらう。又、農業に對して費す勞力も今日我々が見てゐるような奴隷のような激しい勞働の必要はない。植物の爲めに、どうしても與へてやらねばならぬ僅かの勞働を少しの時間だけ、悉ての人が樂しんでやれる事になるであらう。そしてその他の時間に人々は、其の好き勝手に、製造業にも從ふであらうし、藝術的な仕事、科學の研究、其の他いろいろな仕事に從ふ事が出來るであらう。

四

農業と工業とは、左程遠く隔たらぬ過去に於て、立派に結合し提携してゐた時代があつた、其の當時村落は種々の工業を持ち、市中にある技術家も農業と親しんだので、都市は一つの工業的村落であつた。中世都市の美術工業は富裕階級の要求を充すものであつたが、農村の製品は數百萬の民衆の需要に應じたものであつた。此の現象は今日でもまた、ロシアやフランスやドイツに殘つてゐる。

しかし現在では、動力機關や、いろ〲な機械の發明によつて簇出した大工場によつて農業と小工業は絶縁されてしまひ、數百萬の勞働者は其の土地を棄てゝ大工場に入つて働いた。さうして田園は等閑にされた。世間の人々は大工場の組織的な仕事の効果に眩まされて、農業の衰退も省みられず、大工場によらない工業を貶す事を平氣になつてゐる。しかし、其の大工場に吸收され、都市に集中された多數の勞働者が、どんな悲慘な事情の下におかれ、どんな酷い生活をしてゐるかを知れば、資本と勞働の現在の關係を改良せねばならぬ事を痛感せずにはゐられない。クロポトキンは、第一に、工業國に農業を復活させなければならず、其の方法を發見するのが急務だと說いてゐる。

この結合が果して出來るものかどうか。又これは工業上の見解から可能性を持つてゐるかどうか。或は望ましい事であるかどうか。更に又、今日の工業的生活に對して、此のような變化が其の事業の完成上必要な要素であることを認めさせるに至るかどうか。クロポトキンは此の答へを得る爲めに、經濟學者等には、蔑視され看過されてゐる農村工業、家內工業、職人的工業等の名義で呼ばれる小工業の研究をした。その結果は一々記載されてゐるが、そして、其の間には、大工場と小工場の關係家內工業の發達存亡、小工業と產業組合等の重要な、そして興味ある問題があるが、今は結論に急ぐ。此の不肖な紹介に對する不滿足は是非本物の書に依つて頂きたい。

要するに、クロポトキンの小工業に對する研究の結果は、村落に於ける工業は、大工場の形式に依らずに、社會的に組織された生產方法としての形式によつて專門的知識と機械の助けを借りて農業に結びつけば、人々は幸福な生活をする事が出來る。其處で勞働者は斯う云ふ風に自分で幾らかの土地をもつて其の土地を耕すがいい、と云ふのである。そして勿論、工業を

農業と提携させるために、手工時代に後戻りをさすべきものだと思ふのは間違ひで、人間の勞力が機械で省略される以上は、充分此に依頼し、利用すべきものである。そして如何なる種類の工業も、少くとも製造の或る階段に於ては、機械力を使つて利益のないものは殆んどないと云つてもいゝ位だと云ふのである。

吾々が、農業と工業とに同時に從ふのが、精神上にも肉體上にもいい事だとは分つても、更に一つそれに從ふ事を阻害するものがある。それは、近世工業の必然的な中央集權である。これは政治上に於けるのと同じく或る人々には推奨されてゐる。これはどうしても改革の必要がある。事實上近世の工業には同一の場所に數百、數千の勞働者を集めて共同生活をさせる必要がある事は吾々も知つてゐる。製鐵業とか鑛業とかの大規模な工業は、村落では出來ない。けれども、現在の大多數は、二三の異つた工業を同一監督の下に置いたものや、又或工場は同じ機械を數百臺揃へたのみのものであつたりする。これは大きな紡績工場や、織物工場の大部分に見る處である。そして此のやうな大工場の持主は市場を支配する利益がある。けれど、それよりも重要な問題は、其の一工場に集中した製品の種類に從つてとか、製造の階梯に從つてとか、生産を別々の工場に分ける事である。これは少しの不便もなく、不都合もない事で、是非さうされなければならないのだと、クロポトキンは主張してゐる。即ち工業の各國的分散に伴ふて、各國内の各地方にもそれぞれ分散が行はれなくてはならないと云ふのである。

最後に、クロポトキンは云ふ、人々が自己の消費の爲めに生産に從ふ必要から、或は其の健康の必要から、新鮮な空氣と手工勞働によつて生活の一部を送らうとする所から必然に農業と工業は結びつけられ、其の結果どうしても避け得られない社會的潮流が現在の國際貿易を攪亂し、各國民は自然に自國内の富源によらねばならぬ時が來るであらう。そして、人類を全般に見ても各個人から見ても、此の變化は幸福を與へるものであるから、必ず起つて來るものと信ずべき理由がある。と。

五

然し此の變化は、全然今日の教育組織の修正を含んでゐる。此の變化は、其の手を働かし、腦髓を活動させて、多方面にその力を利用する人々から成る社會を暗示してゐる。

古くは、人々は手の勞働を蔑視するやうな習慣は持たなかつ

た。有名な科學者はその抽象的な研究が少しも手の働きを妨げるやうな事はなかつた。しかし吾々は今は全く違つた習慣の下に置かれてゐる。吾々は頭腦勞働と手工勞働とをハッキリ區別してゐる。勞働者はろくに普通の教育も受けず、その仕事に必要な知識すら與へられずに幼い時から働かされて居る。學者は其の研究にばかり沒頭してゐる。そして勞働を輕蔑し、若しくは無視する。其の結果、勞働者は全く無知な自働機械になり終せ、學者は抽象論のみをして得意でゐると云ふ片輪な現象が見えてゐる。クロポトキンは其の切り離された頭腦勞働と、手工勞働とを結びつける事を主張する。そして悉ての少年少女に、彼れ等が二十歳位までゝ學校を出る前に、彼れ等が勞働者として、科學を應用して働けるだけの知識を得させ、同時に工業的修練の基礎とするべき一般の知識を與へる事に賛成する。彼れは古くからモスコオの工藝學校でしてゐる教育を稱賛してゐる。モスコオの工藝學校の教育方針及び方法は、クロポトキンの望むところと全く一致するのである。そして又彼れは現在の無駄の多い、徒らに子供から青年時代までも苦しめる教育方法を非難してゐる。此の迂遠な無駄の多い教育方法は實際教育の方にも及んでゐる。そして此の教育の結果は遲鈍な學者や無能な勞働者をつくり上げた。そして近世の文明に眞に貢獻し是を建設した人々は、此の惡教育の災をまぬかれた人々である。

さて、本當の結論に入る。繰り返して此の書物に盛られた內容を省略すれば、人間は數千年の間其の食物を生產することを重荷にしてゐたが、今日では最早その必要はない。吾々は自分で土壤を整へ作物が必要とする氣候と濕氣とを與へたならば、合理的な耕作法によつて、一家族の一年分の食料を生產するのは他の仕事の間に挾んでもやれる程の僅かな時間しか要らない。そして若し吾々が土地に復つて、他人とを隔つる壁を築く代りに其の隣人と共同して、既に知り得た經驗を利用し、又適當な科學や技術上の發明をかりるならば、多種類の充分な食料を土から產出し得る事を驚かずにはゐられないであらう。そして又吾々は吾々の子供達が受ける確實な知識の偉大な事及び其の發達の急激な事、及びあらゆる自然の法則を獲取し得る能力に驚くべきものがあるであらう。

吾々の農場や庭園の門のあたりに大小の工場を建てるがいい。そして其處で働くべきだ。勿論鐵工業のようなものは別として、文明國民の種々な趣味嗜好を滿足させる無數の工場は總て農業と一緒に行はれる處に置かなければならない。

『奴隷視されてゐるアフリカの野蠻人に屑物や廢物や、有害物を賣つて利益を得るような事をせず、ヨオロッパの幾百萬の人

人の滿足されぬ欲求を充たし得べき種類の工場や製造所を建てるがいゝ。さうすれば其の需要に對して速かに供給し得る。そして富裕になる事は、近頃の工場のように其の株主や支配人や監督の財嚢を充たさせるものよりは遙かにまされるものがあるであらう。人々は、其の仕事に興味を持つて來るであらうし。其の子孫は自然の法則や學術上の理論や機械に關する一切に親しんで、其の仕事に關する研究をし、其の發明力も幼時から發達する機會を與へられるであらう。』

『吾々が現在から將來へ向つて進んで行くのを妨げるものは、「科學の破産」ではなくして、それは先づ吾々の激しい貪慾―黄金の卵を生む鳥を殺した人間の貪慾―で、次ぎには過去に於いて怯懦心が丁寧に培つておいた吾々のなまけ根性である。

數世紀の間科學や實際的學問は人間に云つた。金持になるがいゝ、少くともお前の物質的必要を滿足させるがいゝ。その滿足を得る能力を持つがいゝ。その金持たるべき唯一の方法は、自分の爲めに他の人々―奴隷、小作人、日傭人等―を使へ。彼等は、お前の爲めに富を作る。お前はその富を作らしめる能力を養成しなければいけない。人間の採るべき道は一つしかない。農民や、職工の位置にあるものは、たとへ經濟學者や論理學者等が理論に未來の改善を稱へても、實際には度々來る凶年や又は罷工によつて飢に迫るであらう。そして忍耐を破つた瞬間にお前は自分の子供の手に斃されなければならぬ。又若しさうでなければ、お前は軍人になるか、政治機關の一輪となるか又は商工業の支配人となり得るだけの能力を養成しなければならない。』と。實際數世紀の間、此の他に選擇の道はなかつた。そして今は此の忠告に從つたけれども、これによつて自分も、又子供等も、若しくは、一家が惡運から逃れられるだらうと云はれた人々も、幸福を樂しむ事は出來なかつた。

しかし近代の知識は、思索力のある人々に人間が富を得るのには、他人の口から奪ふ必要はないと云ふ違ふ事を悟らせた。そして尙一層合理的な事は、悉ての人間が、自分の手を働かせ自分の知力を盡して、旣に發明された、又發明さるべきいろいろな機械の助けによつて、自ら其の富を生產し得べき社會である事であらう。若し生產が此の方面に向へば、技術も科學も之に應じて著しい進歩をするであらうし、猶觀察により研究により實驗によつて彼等はすべての要求に應じ得るであらう。彼等は、其の欲しいだけの富を生產する時間を節約して、その嗜好に應じて、自分の時間をつくり得るであらう。彼等は、各人の幸福は其の境遇により、個性によるものであるから、素より保證する事は出來ない。しかし、少なくと彼等は人生のいろいろな能力の充分な且つ變化ある活動の中に、過勞の必要のない仕事の中に、他人を苦しめて自分の幸福を圖るような事のない良心の中に見出さるべき幸福を確保する。』

女子運動としての「新婦人協會」

森戸辰男

一

今や世界的不安の狀態は世界的改造の時代に進みつゝある。而して此の改造運動の主なる對象をなすものは、云ふ迄もなく現代の軍國主義文化と資本主義文化とであるが、今日の男性文化も亦その圈外に留まることは能きぬ、殊に軍國主義と資本主義とを男性文化の二大典型と見るとき、男性文化改造の意義は愈々重きを加ふるのである。女子運動は卽ち此の改造運動の擔當者であつて、一方、男性文化の下に於ける隷屬的地位より女子を解放すると共に、他方、男性偏重の文化を變じて人類的文化を創造せんとするのである。此處に吾々は女子運動の人道的文化的意義を認めることが能きる。

微弱ながらも改造の世界的機運に參與することの能きた我國に於て、諸種の改造運動と列んで、女子運動の起るであらうことは多くの人々の期待した所であつた。蓋し、我國に於ける女子の地位の極度に劣惡なことと、我國文化の男性化の著大なることは、目醒めたる女子をして、女子運動を創めさせるに最も適切な狀態であつたから。吾々の期待は裏切られることなく、『新婦人協會』の設立によつて答へられた。先づ、私は我が國の新しき婦人達による此の改造運動の誕生を祝し、その健全なる發達を祈るものである。

二

此の如き際に、吾々のなすべき所は、空疏な讃辭を呈することではなく、むしろ嚴格な、併し同情ある眼を以て之を考察し、その强味の存する所弱點の潛む所を明かにし、之が健全なる發達の道程を指示することであると思ふ。勿論、評者と運動者との立場が常に同一であると云ふわけに行かぬから、時には、運動者にとつて甚だ不當だと思はれるやうな批評や論文が出て來ないとも限るまいが、併し左樣に違つた見地の成立ち得ると言

ふことを知ることも、運動者にとつて滿更無益なことではあるまい。

此の任務を引き受けたものゝ、私は少からざる不安を感じて居る。と言ふのは、『新婦人協會』其者に關する私の知識の不充分なことで、私が同協會に關して見たのは、斷片的な新聞記事と早稻田文學及中央公論に載せられた平塚さんの論文と同協會の『宣言、綱領、規約』とだけである。

或る運動を批評するのに、運動の實狀を精査せずに文字に表はれた理想や抱負だけによることは、殊に我國のやうに名文家の多い所では最も危險である。例を政黨にとつて見れば、政黨の宣言や綱領のみによつて、我國の政黨の眞相を知らうとするのは、丁度總理大臣の施政方針の演說によつて政治の實際的趣向を窺はうとする試みの如く、多く徒勞である。併し私の問題として居る『新婦人協會』は、成立後如何程の月日も經過して居ないのであるから、實績に徵しての批評をなすのは、未だ其の時でない。從つて私が以下に述べる多くのことは、主として單に同協會の理想抱負に關するものであることを豫め承知して置いて戴きたい。

三

第一に注意すべき『新婦人協會』の特徵は、女子の『社會的地位の向上改善』をその目的とする點にある。

即ち同協會は、婦人は「その社會的地位の向上改善を計り、婦人としての、母としての權利獲得のため、男子と協力して戰後の社會改造の實際運動に參加すべき時」であることを『宣言』して居る。

然し玆に云ふ『社會的地位の向上改善』と言ふことは二つの意味に解釋できる。一つは、女子を依然として從來の如き家庭奴隸の地位に留め、唯その運命の苛酷を緩和しようとする所謂『改良』の意味で、他は、女子をその隸屬的地位より解放して男子と對等の自由を與へんと計る所謂『革命』の意味である。若し『新婦人協會』が第一の意味の『向上改善』を目的とするのなら、そんな種類の婦人會はさらにあるのだから、特に取り立てて吾々の注意に値しはしない。併し、同協會の意氣込や、その名前に『新』の字が冠らされて居ることや、「婦人の能力を自由に發達せしめるため、男女の機會均等を主張する」と言ふ綱領及び「婦人、母、子供の權利を擁護し彼等の利益の增進を計ると

共に、之に反する一切を排除する」と言ふ（綱領四）やから推して同協會の目的が現代に於ける女子の地位の『革命』に存することを私は信じて疑はぬものである。私が同會の前途を祝福するのは主として、女子の地位に關する革命的主張に係つて居るのである。

女子の解放と聞けば、直ちに女子の男性化と家庭生活の破壞とを杞憂する人々の多い我國のことであるから、協會が「男女の價値同等觀の上に立ちて、其の差別を認め協力を主張すること」（綱領一）及び「家庭の社會的意義を闡明すること」（綱領三）を綱領中に揭げたことも先づ適當なことであらう。

四

次に協會は、此の根本的目的を實現するために、『女子の團結の力に』よらんとして居る。

今や方に「婦人も亦婦人全體のために、その正しき義務と權利の遂行のために、團結すべき時が來」て居る。然るに、我國には、旣に知られた幾人かの、また隱れたる更に多數の、立派な婦人があるにも拘らず、「是等の婦人の力が一つとして社會的に若くは社會的勢力となつて活動して來ないのは『全く婦人相互の間に何の聯絡もなく、各自孤立の狀態にあつて、少しもその力を婦人共同の目的のために一つにしよう、といふやうな努力もなく、又そのための機關もない」からであつた。故に「婦人の團體的活動の一機關として『新婦人協會』を組織し、婦人相互の團結を計り』『相互の堅き團結の力によつて』その所期の目的の達成を計らんとするのである（括弧は『宣言』の引用）

女子運動としては當然のことながら、協會が女子の『相互の團結の力』によるべきことを力說して居ることは注意すべきことである。私は此の『團體の力』が、他の如何なる方法よりもヨリ多く尊重され、ヨリ多く信賴されんことを希望して止まぬものである。

五

終りに、協會の運動方針の『實際的』なることをも指摘して置かねばならぬ。

吾々は『宣言』や『規約』の中に於て「戰後の社會改造の實際運動に參加する」とか、「女子高等教育、小學大學の男女共學、婦人參政權、婦人に不利なる諸法制の改廢、母性保護等の要求をなすために實際運動を開始する」（規約第三條一號）とかの文字

を讀むのみならず、先頃の議會開會期に於いて治安警察法第五條の撤廢及花柳病男子結婚禁止に關する請願運動をなしたと言ふ事實に徴しても、協會の將來採らうとする實際的態度の一端を認めることが能きる。

勿論、協會の人々は、平塚さんが早稲田文學(四月號)所載の文章の冒頭に「豫め斷つて置」かれたやうに、請願運動ばかりで滿足せずに、「これと同時に他に於てもつと積極的な且つ根本的な運動をはじめよう」として居られることを信じて居る。併し同時に彼等は、「先づ容易なるものの實現を期し、然る後にそれを踏み臺として困難なものの實現を少しでも容易にしようとすることは、實際の場合に於て誰れでも撰ぶところの當然の順序で」あり、「困難なものの實現を期することによつて、容易なるものの實現をも同時に期さうとするのは、却つて容易なものまでも困難にする結果に立ち至ることで、最後の目的に忠實なるものの決して採らない愚かな仕方だと」なすのである。(中央公論春期大附錄)「理論と實際と若くは理想と現實との間の距離の無視乃至は混同」を避け、「實際的順序」を重ずる所に、協會の實際的態度が存するのであつて、抽象的の考へ方としては多く異論のない所であらう。

六

以上、私は、新婦人協會の運動が、女子の地位の根本的變革を目的とし、女子の團結の力により、實際的効果に着眼しつつ行はれる女子運動であることを認め、其の前途の多望ならんことを祈つたのであるが、同時に私は協會の中には、その健全なる發達の障害となり得べき危險の含まれて居ることを指摘しないわけには行かぬ。私が玆に健全なる發達と言ふのは、その最後の目的に忠實なと言ふ意味で、中途半把な、泥水され去精された、所謂穩健なる、併し實は最も不健全なる、發達と同一義ではない。從つて私の虞れる危險とは、協會をしてその掲げたる根本的目的の把持を弱めるやうな結果に導く虞ある一切を指すのである。次に私はその危險の二三を擧げよう。

第一に、私は協會の實際的態度に匿れて居る危險を見出すものである。

「實際的」と言ふことの眞實の意味は、「最後の目的を到達するに實効ある」と言ふことに歸着すると思ふ。從つて、成功の容易なと言ふことのために、姑息な方法を尊重することと、實際

的と言ふこと丶は別物である。所が實際的であらうとする努力は、屢々終局の目的を忘却しない迄も、之に對する熱情を弱め、目に見える外的結果のさし當つての實現に主力を注ぐことに陷り易い。而して此の如き態度は、必然に外的勢力との所謂協調となり、今日の日本のやうに女子の解放に對する反對勢力の强い所では、協調は遂に長い物に捲かれることに終り、結局何時の間にか當初の根本的主張は放棄されて仕舞ふのである。實力の弱き者の所謂實際的態度は常に此の如き實際的非實際に立ち到るの危險に曝されて居ることを注意せねばならぬ。

更に具體的成果を急ぐ意味での實際的態度は、動ともすれば實力以上の仕事を背負込み、爲めに運動の不自然なる膨脹を齎す危險がある。之は次に私の述べる點と關聯して居る。

七

次に、團體の增大其者の中に一種の危險を見る。

運動の効果の上からは、團體の膨脹は何よりも大切なことである。殊に卑近な成功のためには、頭數を揃へること丶資力を調達することの必要がある所から、團體の量的增大は最も望ましき所となる。と同時に、此の外形的發展のために、團體の本來の使命が團體の內部から崩づれて來ると言ふ虞れも生じて來る。併し、麥粉は勿論必要であるが、パン種がなくてはパンは燒けない。

平塚さんの如きも、明かに『婦人團體聯合』の如きは「實際運動者の立場から見れば所詮不可能な空想」であるとして、排斥して居られるから、團體の空虛な外形的發展は恐らく協會の方針ではなからう。併しそれでも規約の示すやうな條件で、どんどん新會員が殖えて行つたら――實際、會員がどう增加して來たか私は知らぬ――それは一見歡ばしいことのやうであるがそのことの中には、同時に將來の禍根が包まれて居るかも知れぬ。

新會員の大部分は、恐らく中產階級に屬する女子であらう。而して男性文化のミッション・スクールのやうな女學校出の中產女子の多くは、果してどれだけの程度に、眞實の意味に於ける婦人の社會的地位の向上を希望して居るであらうか、自覺の不充分なこの種の婦人の多數を會員に持つことは、自然協會の活動に對する重荷となり、確乎たる信念に基いた有力なる幹部の强大なる感化と統制とのない限り、遂に協會をして其の本來

の使命を忘れしむるであらう。

八

終りに、幹事の一部の人々の思想に關聯して生じ得る一種の危險もなくはない。

幹事の方々の中で、吾々が種々の機會に於て女子問題に關する意見を聞くの機會を得たのは、平塚さんと山田さんとである。然るに此等兩氏の女子問題に關する見解は、大體に於てエレンケイの流を汲むものと言へよう。而して現に綱領の二、三、四に於ても左樣な傾向が表はれて居るやうに見へる。

私はエレン・ケイが近代に於ける兩性問題に關する最も偉大なる思想家であることを認めるものであるが、同時に亦彼女の所說の中には特に我國に於て誤用される危險の存するものゝあることをも承認せぬわけには行かぬ。彼女の『戀愛の自由』が屢ゝ無責任たる『自由戀愛』と混合されるやうに、彼女の『母性論』は屢々所謂『良妻賢母主義』と結び付き得る。エレン・ケイの思想はヨオロッパに於ける所謂中產的女子運動を背景として考へる時に、その匡正としてまたその發展として、非常に大きい歷史的意義を持つて來るのであるが、我國の正統思想たる所謂良妻賢母主義の思想と結び付とき、それは我女子運動の進步に貢獻するよりも、むしろその障害となることがあり得るのである。

嘗て我が國の社會主義者の一派は、恐らく實際的効果を急ぐために、軍國主義者等との接近の徵候を示したことがある。而も此の兩者はその外形的類似にも拘らず越ゆべからざる本質的差異の存することは明かなことである。丁度その樣に、ケイ流の母性論は、その實際的効果を急ぐと、外形的類似にも拘らず、その精神に於ては全然別異なる良妻賢母主義に墮落しないまでも、之と協調する程度に傾く可能性を備へて居はしないか。

之を要するに、私の云はんとする所は、協會の實際的態度は自然外部の反對勢力との妥協に導き、その結果却つて平和的に征服しようとした外部的勢力のために征服されてミイラ取りがミイラになると言ふ危險があるのみならず、一方には自覺の不充分なる會員の增加の中に、また、一部の幹部の思想に關聯して卽ち協會內部に於ても、協會の根本的使命の追求を妨げるに至ることあるべき可能性が存在して居る、と云ふことである。併し玆に注意して置きたいことは、此等は單に實現の可能性を持つた所謂危險であつて、現に協會の運動がそうであると言ふの

でもなければ、協會の運動が必然にさうなる、と言ふのでもない。私が此の『危險』を指摘した所以は、將來此の新しき女子運動の最大關心事がその本來の根本目的の追求であり得ることのため、その路上に横はる此等の危險の存在を指摘したまでのことである。

九

最後に私は、協會に對し積極的に私の二三の希望を述べて置き度い。

先づ第一に、協會は女子の社會的地位の革命と言ふその根本目的を最も忠實に追求して貰ひたい。社會に於けるまた家庭に於ける隷屬的地位より女子を解放すると云ふことは、賃銀奴隷の解放と共に至重の文化的意義を有する運動である。此の純眞なる使命を穢されざらんがために、協會は之に直進せんとする努力の障害となる一切の妥協と衒合とを拒絶する獨立自顧の精神に以て進んで貰ひ度い。

天國に入る門の狹い如く、重大な意義を持つた運動は前途には多くの障害がある。多くの戰はあなた方を待つて居る、私は溫かい心と同時にミリタントとしての鬪志と勇氣とを望まざるを得ない。

更に此の如き態度は我國の現狀の上にあつては必ずあなた方をマイノリティーとするであらう。無自覺なる多數の女子は無論のこと、所謂教育を受けた女達の多くも、亦あなた方の運動より離れるかも知れぬ。併し、それは凡ての意義ある革新運動の忍ばなければならぬ共通の運命である。革新運動は此の如き光榮ある『少數者』によつて始めてその生命を賦與せられるのである。

十

次に、私の望まんとする所は、女子の地位と社會制度との關係に就いての一層明確なる洞察である。

私は女子の地位の問題の全部が經濟組織政治組織の問題に含まれるとは考へない。併し、現存の經濟組織や政治組織を其儘にして、女子の地位が根本的に革新されやうとは、私の到底想像し得ぬ所である。例へば、エレン・ケイの根本的理想の實現の如きは、軍國的專制主義の思想と貧困との壓迫より自由なる家庭生活の出現を待つて、始めて期し得られるもので、現在の社會制度の下に於ては、到底實行不可能のことであるやうに思

はれる。

勿論協會は「戰後の社會改造の實際運動に參加すべき」ことを『宣言』し又女子運動の進步を阻害する「一切を排除す」ることを『綱領』として居るけれども、此の『社會改造の實際運動』の主要なる對象が何物であるか、また排除さるべき『一切』とは何物であるか、に就いては少しも之を明かにして居ない。併しこれを明瞭にして置くことは、協會本來の使命に到達することのためには、最も必要なことである。

私の考ふる所に從へば、女子運動は最も適當に軍國主義と資本主義との改造をその目的とすることが能きると思ふ。生命の生産と愛護とを目的とする女子が、殺戮と破壞とを稱揚する軍國主義の戰爭文化に對してプロテストするのは當然である。然るに我國の所謂婦人團體の多くは、種々の平和的人道的理想を標榜して居ながら、事實に於て軍國主義の後援團體となつて居るのは、私の最も遺憾に思ふて居る所である。私は此の點に就いて協會が一層進步的な態度に出でられることを切に希望するものである。

協會は婦人勞働者の問題を無視しては居らぬ。實際運動の一方面として「婦人勞働者の教化機關として學校を設置し、婦人勞働新聞を發刊し、健全にして實力ある婦人勞働組合を組織する基礎を造る事」（規約第三條第六號）を認めても居り、且つ此の方面に關係のあつた市川さんや奥さんが理事の中に居られるのだから、將來協會の活動が此の方面に向ふであらうことを私は期待して居る。併し、此の運動が主として中産女子の運動として發展すると言ふ豫想にして適中すれば、勞働問題に關する態度は、自然保守的となり、賃銀奴隷の解放ではなしに、唯賃銀奴隷をその地位に留め、唯その慘禍の緩和をのみその目的とするに到るであらう。私は所謂「健全なる婦人勞働組合」の『健全』と云ふ意義が資本家に都合のよいと言ふ後の意味でなく、更に根本的なる前の意味であることを望んである。若し協會の態度が第二の見解以上に出でぬものであれば、恐らく所期の女子の地位の革命は到底望み難く、その結果協會の分裂、若くは新團體の發生を招致するであらう。

軍國主義と資本主義との問題と共に、私は我國の家族制度の問題に關する協會の明瞭なる態度の決定を希望したい。此の問題は今や漸く世上の論題となりつつあるので、協會の態度は世人の最も知らんと欲する所であらうと思ふ。「家庭の社會的意味を闡明する」と云ふだけでは未だ甚だ不充分である。

此等の諸點に就いては、或は協會は此後の設立すべき研究部の研究の結果に從つて其の態度を決せんとするのであるかも知れぬ。そうだとすれば、私は協會の使命と重大なる關係を持つ此等の問題の存在を指摘して、愼重なる研究を願ひ度いと思ふ。

十一

最後に、私は協會の運動が現代の進歩的諸運動と提携せんことを希望する。

女子の地位を男子の地位に迄引き上げることは、また、多數の場合に於ては、女子を男子と同じ隷屬の地位に置くことである。換言すれば現代社會の下に於ては、大多數の男子も亦自由を得て居ない。從つて女子運動は之を徹底すれば、男女共同の人類的解放運動とならなければならぬのである。現代社會に於ては、多數の女子は勿論男子も亦、解放されたる自由の生活を翹望して居る。而して是等眞實の解放運動に從事する男子は、國籍や階級や皮膚の色やによつてと同じく、性の差別によつても人格價値に高下を附することを肯ぜぬ人々である。此種の解放運動と純眞なる女子運動とは事實に於て最も能く提携し得るのみならず、**此の提携は最も自然で而も最も望ましく且つ最も**有効な提携であると私は思ふ。

協會は『宣言』にも『綱領』にも、男子との『協力』を主張して居る。私は此の協力の相手が單に漠然たる男子でなく、上記の如き具體的意味を持つた男子の解放運動との協力であつて欲しいと思ふ。而して私の知る限りでは、此の如き女子運動と社會運動との典型的協力の一例は社會主義運動である。故に、勞働者運動と女子運動との前途を概論したベーベルの『女子論』の末節を引用して筆を擱くことは、此の小篇に應はしき終末であると私は考へる。

「各人が益多くの熱意と力強さとを以て、自分の選んだ進路を突き進んで行けば、それに應じて、來るべき日の勝利も亦愈々大なるものとなるであらう。あらゆる骨折と心配とをしても新しきヨリ美はしき文明の時代の到來は、吾々が生きて之を見ることのとても叶はぬものではないか、と言ふやうな疑のために、何人も躊躇してはならぬ。豈んや此の如き疑のためにその前進を中止してはならぬ。吾々は丁度、自分の生命が何時迄續くかに就いて少しも確實なことを知らないと同樣に、社會の發展形相の一々に就いても、その繼續期間もその性質も均しく之

を豫定することは能きない。併しながら現代のやうな時代に於ては、吾々は自ら勝利の日に會ふと云ふ希望を捨てる必要は一寸もない。吾々は云はゞ、一時間七哩の速力の汽船と共に前方に驀進する時代、それ故に、新しきヨリ善き世界のあらゆる敵を戰慄せしめるに足る時代、に住んで居るのではないか。

「來る日も來る日も吾々の代表する思想の發達と普及とに就いての新しい證據を與へて呉れる。あらゆる領域に於て、動搖があり、また前へ前への押し合ひがある。美しき日の曙は近きつつある。故に、吾々は絶えず戰ふて、前方へと進み行かう。新しきヨリ善き日が人類のために『何時』『何處』に到來するかに至つては、吾々の意に介せざる所である。若し吾々が此の偉大なる人類解放の鬪爭の中途で斃れることがあれば、後營にある者は吾々に代つて陣頭に立つて呉れる。吾々は、人間としての吾々の責任を果した、と自覺を以て、また、人類進歩の敵である諸勢力が如何に間斷なく之に對して防衞し抗爭しても、竟に吾々の目的は達成されるであらう、と言ふ確信を以て、安じて瞑目するであらう。

『何がどうしやうと、天下は吾々のものである、即ち勞働者と女子とのものである。』」



朝鮮の友に贈る書

柳宗悦

私の知れる、又は見知らぬ多くの朝鮮の友に、心からの此書翰を贈る。情の日本は今かくする様にと私に命じてゐる。私は進み出てもだし難い此心を貴方がたに話し掛けよう。是等の言葉が受け容れられる事を私はひそかに信じたい。若し此書を通じて二つの心が觸れ得るなら、それはどんなにか私にとつての悦びであらう。貴方がたもその淋しい沈默を私の前には破つてほしい。人はいつも心を語る友を求めてゐる。特に貴方がたの間に於ては、人間の愛が心の底から求められてゐるのだと私は想ふ。かく想ふ時どうして私はこの訪れを果さずにゐられよう。貴方がたも此書翰を手にして、私に答へる事を躊(ためら)つては被下らぬであらう。私はそれを信じたい。

(一)

私は此頃殆ど朝鮮の事にのみ心を奪はれてゐる。何故かくなつたかは私には說き得ない。どこに情を說き得る充分な言葉があらう。貴方がたの心持ちや寂しさを察しる時、人知れぬ涙が私の眼ににじんでくる。(一行缺)私の心は平和ではあり得ない。心が貴方がたに向う時、(十六字缺)何ものか見知らぬ力が私を呼ぶ様に想ふ。私はその聲を聞かないわけにはゆかぬ、それは私の心から人間の愛を目覺ましてくれた。情愛は今私を強く貴方がたに誘ふ。私は默してはゐられない。どうして貴方がたに近づく事がいけないであらう。親しさが血に湧き上る時、心は心に話し掛けたいではないか。出來得るなら私は溫くこの手をさへさし出したい。かゝることは此世に於て自然な求めだと、貴方がたも信じて被

下るだらう。

人は生れ乍らに人を戀してゐる。憎みや爭ひが人間の本旨であり得よう筈がない。様々な不純な動機の爲に國と國とは分れ、心と心とが離れてゐる。(十九字缺)然し永續し得る不自然さが何處にあり得よう。凡ての心は自然にと歸りたがつてゐる。凡が自然に歸るならば、愛はもつと繁く吾々の間を通う筈だと私は想ふ。(廿四字缺)「汝曹互に愛せよ」と教へは云ふ、然しかゝる教へが現はれるよりも先に、人情は生れ乍らに「互を愛したい」と求めてゐると私は想ふ。愛は聖者の教へであるが故に深いのではない。人情に基くが故にその教へが深いのである。人が自然な人情のまゝに活き得たら、此世はどんなにか温いであらう。此世に眞に貴いものは權力でもなく知識でもない、それは一片の温い人情であるといつも想ふ。然し何が故か人情の生活は踏みにじられて、金力や武力が世を支へる柱だと考へられる。かゝる勢ひは宛ら「互を憎め」とさへ云ふ様に見える。國と國とはいつも戰ひの用意を怠らない。然し人情に背くかゝる勢ひがどうして永遠な平和や幸福の贈り手であり得よう。只かゝる不自然さが蔓るばかりに、心は心から本意なくも裂かれるのである。(一行缺)

(九行缺)

嘗何處の國に情に基く政治があつたであらう。愛による武力があつたであらう。爭ひは道徳に缺け、戰ひのいつの場合にも宗教を持たない。此事は眞理を知る民にとつては苦痛である。私は日本がいつも正しく温い日本である事を希ふ若し無情な行ひに倣ふ事があるなら、その日本は宗教の日本ではあり得ない。今日不幸にも國と國との關係はまだ道徳の域にすら達してゐない。況んやその間に宗教的な愛が保たれよう筈がない。(二行缺)人は多くその罪を疑つてはゐない。それは避け難い不完成な世の出來事としていつも過される。然しかゝる行ひの爲に苦む民族が玆にあるなら、それは一國の恥辱であり、又人類の侮辱であらう。正しい日本はかゝる行ひを改めるに憚る事があつてはならぬ。吾々はいつも眞理に迄國家を高めたいと希うのである。

私はそれが私自身の行ひでないとは云へ、(一行缺)私はひそかに神に向つてその罪の許しを乞はないではゐられない。日本が神の國に於て罪深い者として見られる事は、私の忍び得る所ではない。私は日本の榮譽の爲にも、吾々の故國を宗教によつて深めたい。私は目擊者ではないとは云へ、(二十五字缺)私の心は痛んでくる。(三十字缺)私は何と云ふ可きかを知らない。私は心ひそかに許しを求め乍ら、こう呟いてゐるのである「(一行缺)眞の日本は決して....を欲してはゐないのである。少くとも未來の日本は人道の擁護者でありたいと希つてゐるのである」と。貴方がたはかゝる聲を信じては被下らぬだらうか。

此頃日に〳〵貴方がたと私達とは離れてゆく。近づきたいと思ふ人情が、離れたいと思ふ憎みに還るとは、如何に不自然な出來事であらう。何ものかの心が茲に出てかゝる憎みを自然な愛に戻さねばならぬ。(三十字缺)然し情の日本はそれを成し就げ得ないであらうか。力强い威壓ではない、涙もろい人情のみが此世に平和を齎らすのである。私は人間としての貴方がたが情には心を柔らげて被下る事を信じてゐる。私は日本が如何なる道によつて吾々の爭を拭ひ去らうとするかを知らない。然し私は只ひとりの個人に過ぎないとは云へ、私の心に湧き上る情愛に於て、貴方がたの中に深く活き得ないであらうか私は多くの日本の人々が發言しないとは云へ、私と共に情の日本人である事を熟知してゐる。(二十字缺)

此世にはどれだけ多く許し得ない矛盾が矛盾のまゝに行はれてゐるであらう。(一行缺)眞理は普遍の眞理であつていゝ筈であるが、時として一ツの行ひに二ツの名が與へられる、(二十五字缺)數へればこう云ふ矛盾はどれだけ此世に多いであらう。多いにつれてどれだけ無數の人々が暗い陰に惱まねばならぬであらう。(一行缺)私は心に傷を受ける。時としては心が激し、時として寂しさに沈んでくる。(一行半缺)御身等の上に少しでも平和あれかしと私は心に祈つてゐる。

然し私は人間に尙も燃える希望を抱いてゐる。いつか自然は人間の裡から正しいものを目覺ますにちがいない。(二十

五字缺）之は何れの處を問はず、凡ての家が懷抱する理想でなければならぬ。私はいつか眞理によつて日本が支へられる日の來るのを疑はない。私は今若い日本の人々が此理想に向つて努力してゐる事を知つてゐる。貴方がたは人間としての日本人をも拒けて蔑下つてはいけない。私の正しい觀察によれば、個人として朝鮮の人々に憎みの心を持つ人は殆どないのである。否、吾々は藝術を通していつも朝鮮が卓越した國民であつた事を想ひ回してゐる。嘗て露國と戰を交へたその間に於てすら、吾々は露國の偉大な思想や文學を日に深く學んでゐたのである。二つの國が裂かれるのは個人との憎みによるのではない。私は情に於て吾々の同胞が隣邦の友を忘れてはゐないのを信じてゐる。少くとも未來の日本を形造る人々は、理に疎く情に冷かではある事に安んじはしないであらう。

（四十六字缺）私は人間の本質を信じてゐる。人間としての日本人に希望を抱いてゐる。人間は不當な事に滿足し得る人間ではない。悲慘な事や淋しみに冷な人間ではない。壓迫や鬪爭は衷心からの求めではない。今の世は不純な勢ひを許して、心ならずも醜い生活を續けてゐる。然し打ちあければ愛に悅び人情に濡う生活が、人間の心からの求めなのだと私は想ふ。此世に暗黑の時が來ようとも、それは人間の本質をも奪う事は出來ぬ。自然はいつも甦る力を固く支へてゐる。今は國と國とが隔てられ、人と人とが背いてゐる。然し異邦の人と互に心を打ち開け得たら、どんなにか人類は厚い幸福に浸るであらう。見知ぬ人との交情はわけても親しさの想ひが濃いであらう。人間はかゝる幸福を求めてゐる。吾々も亦貴方がたも、此求めに於てはいつも一つであると私は信じてゐる。

貴方がたと私達とは歷史的にも地理的にも、又は人種的にも言語的にも、眞に肉身の兄弟であると想ふ。（二行缺）正に日本にとつての兄弟である朝鮮は、日本の　　であつてはならぬ。それは朝鮮の不名譽であるよりも、日本の恥辱の恥辱である。私は私の日本がかゝる恥辱をも省みないとは思はない。否、私は未來の日本を信じてゐる。情の日本を疑はない。精神に動く若い人々は、日本を眞理に迄高めねばならぬ任務を感じてゐる。貴方がたも私と共にそれを信じてほしい。人間そのものゝ本質を信じる事によつて、再び希望を私と共に甦してほしい。

(一行半缺)人間は神意によるその矛盾に於て凡てのものの捷利者ならねばならぬ。それが出來ないならそれは個人としての、又國民としての拭ひ得ない恥辱である。(一行缺)人間の誠心にはかゝる勇氣が斷じて消えない事を私は信じてゐる。(三十二字缺)前者に對しては人間の味方が起ち上るだらうが、後者には必ずや自然の刑罰が加へられる。「劍をとる者は劍にて亡ぶべし」とイエスは告げた。此世に永へ得る惡の榮えはないのである。

玆に反省を乞ひたい一事がある。吾々が劍によつて貴方がたの皮膚を少しでも傷つける事が、絕對の罪惡である樣に、貴方がたも血を流す道によつて、革命を起して被下つてはいけない。殺し合ふとは何事であるか。それが天命に逆ひ人倫に悖ることは明確に知る必要がある。それは啻に酷いのみならず、最も不自然な行ひである。それは決して〳〵和合に至る賢明な道とはならぬ。殺戮がどうして平和を齎らし得よう。吾々はいつも自然な人情の聲こそ耳を傾けねばならぬ。愛し合ひたいとそれは云つてゐるではないか。どうして吾々は人情のまゝに活きる事が出來ないのであるか。自然に逆らつて迄爭ふとは如何なる心であるか。自然の深さを知りぬいてゐる老子は「不爭の德」を說いた。

私は再び反省を貴方がたに希ひたい。(一行半缺)それは國と國とを結びはしない、人と人とを近づけはしない。古往今來是等の道を通して內から愛し合つた國と國とがどこにあらう。政治や軍力の平和は利害の平和に過ぎない。さもなくば强制の平和に過ぎない。私は眞に貴國と吾が故國との間がかゝる關係に終る事を欲しない。貴方がたも貴方がた自身の武力や政治に信賴をおいてはいけない。かゝる力はどの國であらうとも人間の心を溫めはしない。一國の名譽を悠久ならしめるものは、武力でもない政治でもない、その藝術や宗教や哲學のみである。若し信任し得る政治があるなら、それはプラトンや孔子が說いた如き政治であらねばならぬ。然し不幸にも現代はかゝる聖賢の聲を用ゐる事を恐れてゐる。然し吾々はかゝる偉大な古人の敎へが吾々を欺かない事を信じねばならぬ。私は貴方がたが朝鮮の存在を精神の上に安泰せしめられん事を切に望むのである。之は實に吾々に於ても亦固く保持せねばならぬ理想であると私は信じてゐる。

貴方がたは(廿二字缺)人間そのものにも絶望して被下つてはいけない。眞の愛や平和を求める心はその中に尙も溫く包まれてゐる。それは自然の意志によつて甦らねば止まぬであらう。如何に世は寥いにしても、草はいつか地の懐から萠え出るであらう。よし刄の勢に攻められる事があつても、人間そのものが朝鮮の運命を固く保護すると私は確信する。否、私はいつか朝鮮は人情に最も溫められる國の一つであるとを切に感じてゐる。世は如何に殺伐にならうとも、人情は此世から消えないであらう。貴方がたは過去の苦しい歷史にてらして、何處の人間をも、もう信じ得ないと云はれるだらうか。然しその淋しい聲の中からもう一度人間を呼んでみてほしい。おゝその時私は貴方がたの中に進み出よう、こゝに貴方がたの手を握りたい一人の人間がゐると云ひ出よう。(三十五字缺)私は私の誠心が、今迄の日本人でない何ものかを私の顔に現はす迄、貴方がたの前から退くまい。私は貴方がたが眞に人間を戀してゐる方だと云ふ事を信じてゐる。私にさへ誠心があるならば、それは吾々の距離を近づけるにちがひない。若し近づき得ないなら、それは貴方がたの罪ではなく、尙も私の誠心が足りないからだ。私は再び私を淨めて出直そう。

日本は未だ人間の心に活ききつてはゐない。(一行缺)私はかゝる日が現はれて、朝鮮と日本との間に心から友情が交される時の來るのを疑はない。少くとも私は此悅びに向つて不斷の努力を献げよう。私は惡が善に捷ちおうせるとは思はない。私は人間の深さを信じ眞理の力を信じてゐる。必ずや正しい道が最後の捷利者である事を信じてゐる。又自然の美しい意志がいつか滿される事を疑はない。又刄よりも愛が絶大な力の所有者である事を疑はない。又は柔かい人情が平和の固い守護者である事をも信じてゐる。よし樣々な汚濁の勢ひが蔓らうとも、私は宗教が眞に此宇宙を支配する力だと信じてゐる。又藝術が此世を淨め美しくする力だと信じてゐる。爭ひは本流を作りはしない。愛に飢える人情が此世の家庭を作るのである。人間の心の底にはどうしても奪ひ得ない情愛の求めがあると私は信じてゐる。

私は重ねて貴方がたに私の心を傳へたく思ふ。決して今の武力や政治を通してのみ、人間を判じて被下つてはいけない。人間の裡に潛む深い性質はかゝるものを越えて、眞に平和や愛情を慕つてゐるのである。(十八字缺)(何處の國が

かゝる大膽な發言をなし得るであらう)。然し此國に住む人々はその本性に於て悲しい事や罪な事に冷ではないと知つてほしい。又愛や人間の道に就てその心を注ぐ事を忘れはしないと知つてほしい。又不正な事に關しては、不正であると云ふ明かな反省が吾々の間にある事をも知つてほしい。人間の正しい運命を保持しようとて、今吾々は努力してゐるのである。それ等の人々は眞に貴方がその淋しさや苦しさに對しての味方である。之は私一個人の推量ではない。私の多くの知友が私と同じ感を抱いてゐる事を私は知りぬいてゐる。

私が先年「讀賣」紙上に「朝鮮人を想ふ」と題する一文を寄せた時、日本の見知らない多くの人々からどんなに厚い共鳴の手紙を受けたであらう。若し貴方がたの心に交る時があるなら、吾々はどんなにか深い自然な友情を、貴方がたに感じることであらう。朝鮮が日本を愛し、日本が朝鮮を愛するとは、如何に自然な感情であらう。私は吾々の血がいつか互に肉身の兄弟だと云ふ愛の本能を、吾々の心に甦らす事を厚く信じてゐる。貴方がたはそれを疑うだらうか、そう信じては被下ぬだらうか、私はそう信じて被下る事を切に望んでゐる。

（二）

私は朝鮮に關しては殆ど何等の學識を持たない。又朝鮮の事情に就て豊な經驗を所有する一人では決してない。然し私に是等の躊躇があるとは云へ、こゝに私をして發言せしめる資格を全く缺いてゐるのではない。私は久しい間私の隣邦の藝術に對して心からの敬念と親密の情とを抱いてゐるのである。私は貴方がたの祖先の藝術程、私に心を打ち明けてくれた藝術を他に持たないのである。又そこに於て人情に細やかな藝術を持つ場合を他に知らないのである。私はそれを眺めてどれだけ屢々貴方がたを、まともに見る想ひがあつたであらう。それは歴史以上に心の物語りを私に話してくれた。私はいつもそこに貴方がたの自然や人生に對する觀念を讀む事が出來る。貴方がたの心の美しさや溫かさや、又は悲しさや訴への心がいつもそこに包まれてゐる。想へば私が朝鮮とその民族とに抑へ得ない情愛を感じたのは、その藝術からの衝動に因るのであつた。藝術の美はいつも國境を超える。それは心と心とが逢う場所である。そこには人

間の幸福な交りがある。いつも心おきなく話し掛ける聲が聞こえてゐる。藝術は二つの心を結ぶのである。そこは愛の會堂である。藝術に於て人は爭ひを知らないのである。互に吾れを忘れるのである。他の心に話さる吾れのみがあるのである。美は愛である。わけても朝鮮の民族藝術はかゝる情の藝術ではないか。それは私の心を招くのである。どれだけ屢々私はその傍らは座つてそれと盡きない話をかはしたであらう。

私は朝鮮の藝術ほど愛の訪れを待つ藝術はないと思ふ。それは人情に憧がれ愛に活きたい心の藝術であつた。永い間の酷い痛ましい朝鮮の歷史は、その藝術に人知れない淋しさや悲みを含めたのである。そこにはいつも悲しさの美しさがある。涙にあふれる淋しさがある。私はそれを眺める時、胸にむせぶ感情を抑へ得ない。かくも悲哀の美がどこにあらう。それは人の近づきを招いてゐる。溫い心を待ちわびてゐる。貴方がたの過去の運命や又思想は如何なるものであつたらうか。その地理や隣邦との關係から避け得ない環境の爲に、溫い平和な歷史は永く保ち難かつたであらう。まして東洋の靜かな血が通ひ、佛陀の敎へに育てられた心には、地の生活が如何に無常に思へたであらう。貴方がたは靜かな森の中や人里の稀な山深くに心の寺院を建てた。それは眞に修道の應はしい場所であつた。淋しさのみが淋しさを慰めるのである。聲なくして靜に佇む悲母の觀音は貴方がたの愛した姿であつた。高麗の陶磁器は人々の心に親しみたい爲の器であつた。それは古代に於てのみではない、李朝の時代に及んでも日常の凡ての用品にさへその心を深く滲ませた。爲すこと行ふことに、見るもの觸れるものに、貴方がたはその靜なもの淋しい心を反映させた。日々眼に觸れるそれ等の器具の淋しい姿は、必ずや貴方がたの心の友であつたであらう。互に慰められつ慰めつ日々を送つたにちがいない。それは情に柔らかな作品であつた。

私は今それ等の作をあり〳〵と心に想ひ浮べてゐる。流れる樣に長く〳〵引くその曲線は、連々として無限に訴へる心の象徵である。云ひ難いもろ〳〵の怨みや悲みや、寂しさや憧がれが、どれだけ密にその線を傳つて流れてくるであらう。その民族は應はしくも線の密意に心の表現を托したのである。形でもなく色でもなく、線こそはその情を訴へる

に足りる最も適した道であつた。人は此線の秘事を解き得ない間、朝鮮の心に入る事は出來ぬ。殊にはまざ〳〵と人生に對する悲哀の想ひや苦悶の歴史が記されてゐる。その靜な内に含む匿れた美には、朝鮮の心が今尚傳はつてゐる。私は私の机の上にある磁器を眺める毎に、寂しい涙がその靜な釉薬の中に漂つてゐる樣に思ふ。

屢々是等の作品は私にこう話し掛ける。「人生はいつも淋しくしめやかに見える。長い間私達の民族は苦しい歴史を續けてきた。然し誰もその悶える心を察してはくれない。又何處にも私達の心を打ち明け得る友を持たない。私達はせめてもの想ひに是等の器具にその情を洩らしたのである。それ等のもののみは私達を欺かない日々の友であつた。後に生れてくる人々よ、希くば是等のものを傍ら近くに置かれよ、それは聲なくともいつも人情を戀してゐる。是等のものを愛し用ゐて吾れ等の心を温め給へよ、温められようとて私達は是等の作を造つたのである。」おゝ、私はかゝる聲がその器の底から絞り出る時、どうして私の手をそれに觸れずにゐられよう。

或時その淋しい姿は亡靈の如く浮び出て私にこうも告げた。「他國の人々よ、どうしてそう云ふことを吾々の民族にしむけるのであるか、私達の………運命が、貴方がたの歡樂になるのであるか」。私はかゝる叫びを聞く時、眞に斷腸の想ひがある。

「なぜ〳〵私達に愛を贈らないのであるか」と或ものは私に尋ねてゐる。「これ程人情に飢える吾々に、答へる人情はないのであらうか」と詠嘆の聲が聞えてくる。「わけても血に近い日本の人々よ、兄弟の愛に吾々を結ぼうとなぜしないのであるか。吾々は同じ母の懷に眠り、同じ傳説に生ひ立つた昔を想ひ回す事があるではないか。嘗て私達の僧は經卷を携へ、佛軀を贈り、寺院の礎を奈良の都に置いたのである。宗教に榮え藝術に飾られた推古の文明は私達の心からの贈物であつた。それ等のものは今も尚昔乍らの姿を殘してゐる。それにどうして再度ならずも、（十二字缺）厚い友情を裏切らうとするのであるか。かゝる事が日本の名譽であると誰が云ひ得るのであるか。」私はかゝる直接な訴へに詰られる時、眞に答へ得る言葉を持たない。

私もその器を淋しく見つめる時、その姿はいつも默禱するかの樣である。「神よ、吾れ等が心を遠く〱御身の御座に迄結びつける事を許されよ。見知らぬ室に在す御身のみは、吾れ等を慰めることを忘れ給はぬであらう。御胸にのみ吾れ等が憩ひの枕はあるのである。」たわやかな細く長く引く線は、そう祈るが如く私には思へる。是等の聲が聞える時、どうして私はそれ等の作品を私の傍から離し得よう。あゝ、私はそれを溫めようと、思はず手をそれに觸れるのである。

四年前私が朝鮮を訪ねて以來、只の一時でもそれ等の作品の何れかを私の室から離した事がない。それはいつも私に話し掛けたい樣に見える。私はそれを冷い暗い場所に長くしまうに忍び得ない。私がそれを机の上に置く時、それは悅んでくれるかの樣に思ふ。それはいつも私を待つてゐてくれる。私はそれに近づかないわけにはゆかぬ。ましてその美しい姿は私の心を引きつけてゐる。それを眺めそれに手を按く時、私には心と心とが觸れ合ふ思ひがある。それはいつも私の情愛の友だ。私も亦彼等の親しい友だ。それが淋しく悲しい姿に見える時、私も淋しく悲しい想ひに襲はれてくる。それが私の傍にあつて悅ぶ樣に思へる時、私も心に嬉しく思ふ。かくして二人はいつも共に悲みや悅びの世界に步む。

それは親しさの作品である。愛に憧れる作品である。それは人の心をいつも招いてゐる。人の情を待ちわびてゐる。どうしても私はそれを音づれずにゐられよう。こゝに私がゐると私はいつも心に囁くのである。その作者よ、心安かれよと私は念じてゐる。かくしてそれが私の室にある限り、私達はいつも二人で暮して居る。孤獨ではない、その作品も孤獨ではない樣に思ふ。孤獨の寂しみに堪えないでそれ等のものは作られたのではないか。私はそれを孤獨にしてはならない。私は朝鮮の藝術よりも、より親しげな美しさを持つ作品を、他に知る場合がない。それは情の美しさが產んだ藝術である。「親しさ」「Intimacy」そのものが、その美の本質だと私は思ふ。いつもかく想ふ時、どうして私はその作者と同じ血を受けた今の朝鮮の人々に、親しさを感ぜずにゐられよう。私は早く貴方がたから離れてゐる關係を破らなければならぬ。

然しかゝる「親しさ」に於てのみ、私は朝鮮の藝術を解してゐるのではない。私はその内に潜む驚く可き美に對して、全き敬念を捧げないわけにはゆかぬ。それは親しさであると共に、眞に驚く可き美の示現である。種々な運命に虐げられた朝鮮は、その藝術の美に於ては王皇の位に列してゐる。何人もその悠久な美を犯かす事は出來ぬ。生命は短く藝術は長いと詩人は歌ふ。然し藝術に現はれた朝鮮の生命こそは無限であり又絶對である。そこには深い美がある、美そのものゝ深さがある。靜な内へ内へと入る神秘な心がある。それは神殿を飾るに足りる藝術である。朝鮮はよし外に弱くとも、その藝術に於て内に强い朝鮮である。儼然として自律する朝鮮である。

或者は支那の影響を除いては、朝鮮の藝術はあり得ないかの樣に云ふ。或は又支那の偉大に比べては認め得る美の特色がないかの樣に考へてゐる。實に專門の教養ある人々すら、時としてかゝる見解を抱く樣である。然し私はかゝる考へが眞に獨斷に過ぎなく、理解なき謬見に過ぎぬのを感じてゐる。私はそこに日本に於てと同じく支那の影響を否みはしない。然しどうして支那の感情がそのまゝに朝鮮の感情であり得よう。特に著しい内面の經驗と美の直觀とを持つ朝鮮がどうして支那の作品をそのまゝに摸倣し得よう。よしその外面に於て歷史に於て關係があつたにせよ。その心とその表現とに於て、まごう事ない差違があると私は解してゐる。

朝鮮の内なる感情がその民族に於て固有であり、内なる歷史がその經驗に於て獨特であるに從つて、その藝術も亦眞に獨歩である。批評的歷史家はその國是を「事大主義」であると云ふ。然し少くとも藝術に於てはそうではない。朝鮮の藝術そのものがそれ自身の美に於て偉大である。どこに事へるべき他の大があつたであらう。今日法隆寺や夢殿に殘された百濟の觀音は支那のどの作品に劣るであらう。又どの作品の摸倣であり得よう。それ等は日本の國寶と呼ばれるが、眞に朝鮮の國寶とこそ呼ばれねばならぬ。又は玆に慶州石佛寺の彫刻を撰んだとする。それはどの唐代の作に事へた痕跡を告げるであらう。眞にそれは動かし得ない朝鮮固有の美を示すではないか。私はその寺院を訪ねた日を忘れる事は出來ぬ。そこは朝鮮がいつも保有する深さと神秘との絶える事のない藏庫である。人々は又高麗の陶磁器を宋窯の

摸倣であると云ふ。然し試みにその器に流れる線を一分でも何れか矯めてみよう。吾々は立ち所に高麗の美を見失うのである。藝術は眞に心の微妙な發現である。それはそれ自身であつて如何なる他の性質にも還元し得ない作である。高麗の美は決して宋の美ではあり得ない、兩者にはその成分に於て技巧に於て近い素質もあらう。然し現はされた美には、まがひもない差異が嚴存する。高麗の器に流れる微妙な線の美しさは、少しでも宋窯に求める事は出來ぬ。それは眞にそれ自身の線であつて、一分だにそれを變えるなら、それは既に朝鮮の心から離れるのである。李朝の作に於てもそうである。明の磁器と李朝のそれとのどこに類似があらう。どこに明の「大に事へた」李朝の美があらう。そこにはそれ自身の心があり生活がある。朝鮮の美は固有であり獨特であつて、決してそれを犯す事は出來ぬ。疑ひもなく何人の摸倣をも、又は追隨をも許さぬ自律の美である。只朝鮮の内なる心を經由してのみあり得る美である。私は朝鮮の名譽の爲にも是等の事を明晰にしたい。

その藝術が偉大であるとは、直ちにその民族が美への驚く可き直觀の所有者であると云ふ意味である。然もそれは粗野な美にあるのでもなく、强大な特質にあるのでもない。それは實に纎細な感覺の作品である。私は朝鮮民族の美に對する敏銳な神經に對しては、實に疑ひ得る聊かの餘地を持たぬ。私はその藝術を通して厚い敬念を朝鮮に捧げる心を禁じ得ない。それは如何なる人たるを問はず、正に抱かねばならぬ驚嘆である。此名譽こそは永く厚く尊重されねばならぬ。然るに何事であるか、その藝術素質な民が、(七字缺)その固有の性質を放棄せられんとしてゐるのである。私はその世界の損失に對して傍觀するに忍び得ない。藝術への尊敬こそ國と國とを近づけるのである。世界を美に迄揚げるのである。日本は嘗て朝鮮の藝術や宗敎によつて、その最初の文明を産んだのである。今日此事は感謝を以て記憶されねばならぬ。私は悠久な朝鮮の藝術的使命を畏敬する事が、日本の執らねばならぬ正當な態度であるべきを想ふ。世界の藝術に獨特な位置を保有する朝鮮の名譽は、今後も尙永續されねばならぬ。其民族が絕えない限りかゝる藝術は再度ならず甦るであらう。一國の藝術、又は藝術を産むその心を破壞し抑壓するとは、抑も罪惡中の罪惡である。

吾々の間に朝鮮の作品が賞美せられてから、長い月は過ぎた。然も今日はそれは甚だしい市價をさへ呼んでゐる。然し專門にそれを研究する學徒に於てすら、その美の内面の意味を捕へて、その民族固有の價値を認得しようとする者は絕えてない樣である。何故朝鮮の藝術を讃える事によつて、その作者である民族をも讃えないのであるか。昔の時代は去つたとしても、民族の血の質に迄變りがあらう筈はない。よし事情の變移はあらうとも、素質を否む事は出來ぬ。到抵今日朝鮮に藝術が現はれないのは、單に製作の餘裕が與へられないからである。それは寧ろ吾々にこそ責任があるであらう。私は朝鮮が眞に美しい藝術を再び産む事を信じ得たい。私は近來二三の友と知るに及んで益々その希望を强めてゐる。若しも美術館にその古藝術を保護する事が、邦人のよい仕事の一つであつたなら、それ等のものゝ未來の作者を畏敬する事を、どうして吾々の任務から取り去つたのであるか。過去の朝鮮を愛して未來の朝鮮を敬はないのは、過去の朝鮮に對する侮辱に過ぎない。過去への全き尊敬は未來への信賴へに活きねばならぬ。私は古への朝鮮が驚く可き藝術を私に示す事によつて、現代の朝鮮にも深い希望を持つ事を學ばしめたのを感謝してゐる。

朝鮮を内から理解し得ないのは、一つには全く宗教や藝術の教養を持たないからである。只武力や政治を通して内から結び得る國と國とはない筈である。眞の理解や平和を此世に齎らすは、信を現はす宗教である、美に活きる藝術である。かゝるものゝみ第一義である。第一義なものにのみ人は眞の故鄕を見出すのである。信や美の世界には憎惡がなく反逆がない。永へに吾々の間から爭ひの不幸を斷とうとするなら、吾々は吾々の間を宗教や藝術によつて結ばねばならぬ。かゝる力のみが吾々に眞の情愛と理解との道を示すのである。人はそれを理想に止ると云ふであらうか。然し、之が唯一な然も最も直接な交りの道であると云ふ事を眞に悟らねばならぬ。正に爲さねばならぬ規範の命は躊躇なく爲されねばならぬ。

私は朝鮮に住む日本人の、所謂親しい經驗に對しては多くの信賴を持たない。内なる朝鮮に入り得ない限り、それは只外面の經驗に過ぎぬ。かゝる經驗は少しだも理解の裏書とはならぬ。人々には宗教的信念も尠く、藝術的洞察も乏しいのである。不幸にも人々は貴方がたを朋友として信じる事を忘れてゐる。(二十五字缺) 若し彼等に豐な信仰や感情があ

るなら、必ずや貴方がたに敬念を拂う事に躊躇しなかつたであらう。若しも朝鮮代々の民族が、その藝術に於て何を求めてゐるかを知り得たなら、恐らく今日の態度は一變されるにちがいない。多くの宣教師は自らを卓越した民だと妄想してゐる。然し同じ醜さが優秀だと信ずる吾々の態度にもある事を私は感ぜずにはゐられない。然し敬念や謙讓の德が無い處にどうして友情が保たれよう、眞の愛がかはされよう。(四行缺)朝鮮固有の美や心の自由は、他のものによつて犯されてはならぬ。否、永遠に犯され得るものではないのは自明である。眞の一致は同化から來るのではない。個性と個性との相互の尊敬に於てのみ結ばれる一があるのである。

朝鮮の友よ、見知らぬ多くの友よ、私の如き者を例外だと思つて被下てはいけない。希くは精神に活きる私の多くの知友が、正義や情愛を慕う心に忠實であることを信じてほしい。若い日本の人々は眞理の王國を守護する事を決して忘れはしない。(二十字缺)私達は貴方がたを近い友として理解する用意を缺かないであらう。貴方がたと私達との結合は、眞に自然そのものゝ意志であると私は思ふ。未來の文化は結合された東洋に負う所が多いにちがいない。東洋の眞理を西洋に寄與する爲にも、又東西の結合を全くする上にも、東洋の諸國は親密な間柄であらねばならぬ。わけても血に近い朝鮮と日本とには、もつと親しさや情愛が濃い筈であらねばならぬ。吾々はかゝる友愛をいつか又支那や印度との間にも結ばねばならぬ。かゝる結合が未來の文明に對して深大な意義を持つ事を貴方がたも信じて被下るであらう。それは只の夢想ではない。深く要求せられた自然の聲そのものであると思ふ。

私は海を越えて厚い心を貴方がたに寄せる。私は貴方がたが此心を受けて被下る事を疑はない。共に吾々は自然の心に歸らねばならぬ。人情の自然さに互を活かさねばならぬ。情愛にこそ眞の平和があり幸福がある。眞理はそこに固く保たれ、美はそこに溫く活きるのである。

私は貴方がたを想ふ。その運命を想ひ、その衷情を想ふ。私は此書翰を貴方がたの手に委ねたい。之を通して私の心が貴方がたの心に觸れ得るなら、此世の悅びが一つ私の上に加はるのである。更に又私の心を貴方がたが訪ねて被下るなら二重の幸ひが私に降るのである。此世に於てはかゝる事が眞に深い幸福を意味するのである。見知らぬ力がかく爲させ給ふ事を私は心に念じたい。私は貴方がたの上に祝福を祈りつゝ、玆に筆を擱こうと思ふ。

千九百二十年四月十日　　千葉縣我孫子町にて　　柳宗悅認む



藝術的社會主義者ヰリアム・モリス

堺利彦

一　はしがき

ヰリアム・モリス William Morris の名はまだ幾許も日本の社會に知られてゐない。以前から文學雜誌で多少紹介された事はあつたにしても、一般社會の注意を引くには足りなかつた。我々社會主義者の間には、勿論古くから善く知られてゐて、殊に其の名著 News From Nowhere は隨分廣く讀まれてゐた。私がそれを抄譯して『理想鄕』といふパンフレットを作つたのは十五年前の事である。近來、社會主義のユトピアを紹介した記事があちこちの雜誌に載つて、モリスの此の名著も餘ほど廣く知られて來たが、それでもまだモリス其人の全體については幾許も紹介されてゐない。それで私はこゝにザット此の『藝術社會主義者』若しくは『社會主義的藝術家』の事を書いて見る。

モリスの傳記としては、"The Life of William Morris" by J. W. Mackail といふ二冊物の大きな本がある。手頃な讀み本としては、"William Morris: His work and Influence" by A. Clutton-Brock と云ふ、Home University Library の一冊がある。其外、私の持ち合せてゐる小冊子に、"The Socialism of William Morris" by John Spargo "A Day with William Morris" by M. C. Gillington とがある。私は今、主としてクラットン・ブロックの本に依り、少しばかり他の諸書を參照して此の文を作る。(ついでに、私の抄譯『理想鄕』はツイ先頃小さな單行本にしてアルスから出版した所、發賣禁止に遭つて大いにマゴついたが、其後五六頁削除してお許しを得たので、近日『訂正再版』を發行する筈になつてゐる。)

二　幼年時代及び靑年時代

ヰリアム・モリスは一八三四年三月廿四日、英國の倫敦に近いウオルサムストウに生れた。父は手形の仲買商で可なり富裕な人だつた。モリスの幼時は別に著るしい天才の芽ざしを示す事もなく、只エッピングの森をさまよひあるく事が好だつた。

然し一つ斯ういふ話がある。八歳の時、彼は初めてタネットに行つてミンスタアの會堂を見たが、そして其後一度もそれも見た事がないのに、五十年後になつて其の會堂の事を細かに記述した。之は彼が天性上、ゴシック式の建築を理解した證據であつた。音樂の天才モーツアールトは幼兒の時から音樂を理解したと云ふが、モリスの建築に於けるも亦た同じであつた。彼が中世のゴシック式建築に渇仰したのは、世間の好古者が死んだ古美術を愛するのとは違つて、今も猶ほ生きた物としてこれを研究したのである。

十三歳の時、彼はマルボローの專門學校に入り、そこでは圖書館で多くの書を讀むと同時に、又好んで其の近處の森をさまよひあるき、次いでオクスフオードのエキセタア大學に入つた其頃、ラスキンが『ヴエニスの石』を著した。モリスは其中のゴシックの性質を論じた一章を讀んで、自分がゴシックの建築を愛し、ルネサンス（文藝復興期）の建築を嫌ふのに深い理由のある事を知つた。ラスキン曰く、ゴシックの建築では、總ての職人が自己を表現する機會を持つてゐたが、ルネサンス及び其後の建築では、職人は只だ建築師が命ずる儘の事をするのである。故にゴシックにはルネサンスの樣な堂々たる所はないが到る處に自發的の生氣がある。丁度それは人民の權利を承認した國家の樣なものである。と。此の説明はモリスに取つて實に福音であつて。モリスは勿論、ルネサンスに大藝術家のある事を認めた。然し彼は亦ルネサンスの中に產業時代の害惡を認めた。そしてナポレオンの勝利に眩惑されないと同じく、ミケランジエロの成功にも眩惑されなかつた。

一八五四年（廿一歳）彼は初めてフランス及ベルギーに遊んで、ゴシックの建築の大作や、ヴアン・エック、メムリンなどの繪畫を見た。此の繪畫も矢張り中世の藝術であつたのだ。其年彼は一年九百ポンドの收入を相續した。翌年、彼は親友バーンジヨーンスと共に藝術家にならうと決心した。其頃、彼は既に詩を作つてゐた。彼れの友人等が其の處女作を見て、モリスは大詩人だと云ふと、彼は、之が詩なら詩を作るのはワケはないと云つて、それから毎日の樣に詩を作つてゐた。彼等の一團はモリスの出資に依つて、『オクスフオード、エンド、ケンブリッ

チ、マガジーン」といふ雜誌を出して、テニソンやラスキンの稱讃を博したが、それは十二號までしか續かなかつた。

三　ロセチの影響

一八五五年（廿二歳）モリスは大學を出て學位を取つた。翌年一月、彼はジョージ・エドマンド・ストリートに弟子入した。ストリートはゴシック復興派の建築師であつた。然し彼れのゴシックは摸倣ゴシックであつて、モリスはそれに滿足する事が出來なかつた。それに彼は、他の藝術よりも建築が一番好だつたからストリートに弟子入はしたものゝ、決して本當に建築師になるべき人物ではなかつた。彼は只ストリートの門下に在つて、獨りで勝手に土をこねたり、彫刻をやつたりした。

其ころ彼は初めて一個の大人物に遭つた。それは友人ジョーン・バーンスの繪の先生なるロセチであつた。ロセチは當時眞盛りの大家で、ラスキンの教へた所を實現させて、繪畫の革命を遂行すべき人物と見えてゐた。そこでモリスも大いに彼れの影響を受け、彼に勸められて畫をやりだした。彼れのかいた畫は多くは無かつたが、其中には、ラファエル別派の作中、最美なる者の一つと云はれたのがあつた。然し彼はどうも畫の氣分が厭だと云つた。之が彼とロセチとの全く違つた點で、ロセチに取つては畫の氣分が大切であつた。ロセチは人生を逃れて藝術に入らうとしたが、モリスは人生を藝術化しようとした。ロセチに取つては、藝術家の特殊なる情操の表現であつて、從つて彼は繪畫の様な他の者から獨立した藝術を最も重んじたのだがモリスは常に藝術の作品中に、其の藝術家と公衆との關係を見た。故に彼に取つては、藝術は一個の社會的業務であつて、健全な社會に於いてでなくては其の完美は期せられないのである。彼がゴシックの藝術を愛したのは、それが進んで建築に服從した點に在る。從つて建築から獨立したルネサンスの藝術に對しては、彼はどうしてもそれを愛する事が出來なかつた。ルネサンスの藝術には私慾があつた。そしてそれがモリスには、近代の世界に於ける有ゆる私慾の徴候と見えた。彼は藝術を熱愛しながら、藝術家（若しくば彼自身）を一種の超人と考へる事が出來なかつた。彼は寧ろ自ら一個の職人として、自己の仕事を樂しむの餘り、人の求めるより以上を與へる者だと考へてゐた。彼と雖も、ミケランジエロや、ヴエラスケーを大人物と認めないではなかつた。然し彼は一時代の藝術を批判するのに其の繪畫の大作に依るよりも、寧ろ其の小屋や、コップや、臺

皿などに依らうとした。それは丁度、一國家の繁榮を批判するのに、其の富者の狀態に依るよりも、寧ろ其の貧者の狀態に依るのと同じ譯合であつた。

斯くてモリスは到底ロセチに心服する事は出來なかつたが、姑くは矢張りバーン・ジョーンスと共に喜んで其下に働いてゐた。然し彼がジョーンスと共にレッド・ライオン街十七番に部屋借をした時、彼は其の家具と裝飾とについて非常な不滿を感じた。それは必ずしも彼が六かし屋であつたのでは無かつた。彼に取つては、家具の俗惡な事は、衣服態度の俗惡なのと同じく、心の俗惡を示すものであつた。そこで彼は自分で家具を作りはじめた。後に彼が『詩人的家具職』と綽名された其の事實は、實に此時から自然に始まつたのである。彼は藝術家であつたばかりでなく、自分の好む通りに世の中を作り上げようとする實行家であつた。即ち彼は其點に於いて、椅子の改善から始めて遂に全社會の改革に及ぼしたわけである。

四　モリス會社の設立

モリスはオクスフォードで畫をかいてゐる中、ミス・ジエーン・バーデンといふ婦人を知つた。其人は大へん美人であつたのでロセチと二人で肖像をかきたいと賴んだ。彼女は心よく承諾して二人のカンヴァスの前に坐つてくれたが、モリスは程なく彼女に戀して、とう／＼一八五九年四月(二十六歲)に結婚した。それからモリスは自分の趣味に叶つた家が欲しいと考へだしたが、從來ありふれた家や家具ではどうしても滿足が出來なかつた。それで結局、ケントのベクスレー・ヒースの、クレーの谷の上の方に、果樹園と牧場とになつてゐた土地を買つて、友人のフイリップ・ヱッブといふ建築師に家を建てゝ貰つた。

當時に於ける一般の美術界は今日よりもズットひどい有樣で家と云へば皆な一樣に煉瓦を漆喰で塗つて石造に見せかけると云つた鹽梅式で、富者は徒らに富の廣告をする樣な俗惡な美術を喜び、富まざる者は又富みたるが如きイリユージョンを與へる爲に擬ひ物の美術を使つてゐた。然るにモリスは天から落ちて來た人でもあつたかの樣に、直ちに此の惡美術の意義を看破した。彼は感覺上から此の惡美術を憎惡したのでなく、それを惡事の表現として道德的憎惡を感じたのであつた。彼はラスキンと共に、初めて眞に自己の藝術に於ける好惡について、科學的理解を持つた人である。哲學者は昔からよく藝術を談じたが、彼等は皆な藝術を人間の他の諸活動から孤立させてゐた。

然るにラスキンとモリスとは寧ろ藝術と他の諸活動との關係、即ち全社會の心との關係を考へた。即ち社會が富を崇拜してゐる時には、其の偶像崇拜心がテーブルの脚にも、ランプの釣金にも現はれると考へた。そこでモリスは自分の憎む其の崇拜心を自分の家の如何なる些細な部分にも現はさせまいと決心したのであつた。

グリムソープ卿がモリスの事を『詩人的家具職』と呼んだのは固より輕蔑の意味であつたが、モリス自身は頗る其名を喜んで、それが當然だと思つてゐた。彼は家具なり室内の裝飾なりを、當然に詩的表現であるべきだと考へた。そこで彼はそれを自分の家に試みはじめた。それが彼れの反抗運動の始まりであつた。

フイリツプ・エツブの建てた家は、當時の建築師の力以上美麗を求めたものでもなく、莊嚴を求めたものでもなかつた。只だ其の單純な事と、材料の品質とに於いて、他の建築と異なつてゐた。全體はL字形の二階建で、林檎や櫻の木々の間に赤い煉瓦と赤い瓦とで出來てゐた。庭園も特に注意した設計で、森でもなく、花壇でもなく、寧ろ家が戸外まで續いてゐるといふ趣きであつた。

家が出來上つてから、モリスは自ら室内の裝飾に取りかゝつたが、自分や友人の意匠を現はすべき材料の缺乏に困難を感じた。それがモリス會社設立の直接の動機であつた。モリス會社の提案は誰が初めて言ひだしたのか分らないが、兎にかくロセチ、バーン・ジョーンス、エツブ、其他の友人が加はつてゐたモリス會社の目的は裝飾美術の設計と執行とを分離させない樣に、どこまでも美術家の手でやつて行かうと云ふので、其の營業課目は左の五項であつた。

一、壁の裝飾（繪畫若しくば型）。
二、建築物に應用する一般彫刻。
三、ステンドグラス。殊にそれと壁の裝飾との調和。
四、各種金物細工。寶石類をも含む。
五、家具。美術的設計に依つて或は從來看過された諸材料を適用する者。或は又、模樣、型などの新工夫、

猶ほ此の第五項の中には、各種の刺繡、革の刻印、其他一切の家具が含まれてゐた。蓋し氏の仲間の大將たるロセチの考へでは、彼自身にせよ、其他の人々にせよ、こんな事ぐらゐ何でもないと考へてゐたに相違ない。所が實際になつて見ると豫告された事の大概はモリスの手で成し遂げられた。勿論他の人に

も種々の助をしたには相違ないが、モリスがいつも中心になつて全體の事業を指揮してゐた。モリス夫人と其の妹とは刺繡をやり、友人の妹達は瓦や陶器の着色をやり、外に小僧も何人か使つてゐたが、モリスの下に居ればそれらが皆な一廉の職人になるのであつた。會社の資本は組合員が銘々少しづゝ醵出したのだつたが、大部分はモリスと其母との補助に依つたのだつた。

モリス會社の製品として最も有名な物は壁紙であつた。そしてモリスは其の壁紙の型を作る事に於いて卓拔の技術を示してゐた。然し彼は又そういふ點に於いて餘りに商賣的だといふ非難も受けた。けれども彼は寧ろ十五世紀の伊太利人の樣に、藝術家が商賣人になる事を重んじてゐた。商賣人が藝術家になるのに不思議はない。モリスは實際、店持の商賣人であり又藝術家であつた。曾てキーツがミエレーに云つた。藝術家は神とマンモン(金の神)とに仕へねばならぬと。そしてサミユエル・バトラアは云つた。それは容易な事でないと。所がモリスはそれに成功した。彼は一層善く神に仕へんが爲にマンモンに仕へた。そして世間の、神にも仕へずマンモンに仕へぬ人達の批評に對しては全く平氣であつた。

斯くて新築のレッド・ハウス・(赤い家)に於けるモリスの生活は實に幸福で、多くの友人は常にそこに來て遊び戯むれてゐた。友人等はモリスを大人物として敬愛してゐたが、實際にはフザけちらしてソウいふ扱ひをしなかつた。モリス自身が少しも大人物らしい氣取方をする男でなかつたのである。

然し此の幸福な生活は永く續かなかつた。モリスはリユーマチスに罹つて會社の用務の爲に屢々倫敦に往復するのが困難になつて來た。そこで彼はレッド・ハウスを人に賣つて、ブルームスベリーのクヰーン街に一軒の古家を買ひ、そこに家族と店とを移した。そしてテイロアといふ支配人を置いて、自分は再び詩作に耽る暇を作つた。有名な長詩『地上の樂園』の第一二卷は一八六八年に出版された。斯くて彼はロマンチック詩人として、ロセチやスヰンバーンと同一の地位に立つ事になつた。

五　ロマンチック詩人としての彼

ロマンチック藝術の運動は、當時の都市的文明に對する反抗であつた。そして彼等は現在を厭ふが爲に昔を憧憬したのであつた。然るにモリスはそれらのロマンチック詩人の中で、最もロマンチックな者であつた。彼は當時の社會狀態に對して一層

意識的不平を持つてゐた。彼がラスキンに學んで熱烈に中世の藝術を研究した事は前に記した通りである。

モリスは其の藝術の爲に中世を利用したのではない。中世は彼れの戀であつた。詩人が自己の戀を歌ふが如く、彼は中世を物語つた。彼は或時に於いてブラウニングの體を學んだ事は明かだが、併しブラウニングが只だ古代に對する好奇心を表明してゐるのと違つて、モリスは中世に對する自己の情熱を表明してゐる。

然しロマンチツク詩人としてのモリスは、彼が自ら云つた通り『太平に吟咏する一閑人』(an idle singer of an ampty days) で、只だ面白い物語を社會に供給したに過ぎない。然し彼が遂に『一閑人』に甘んじられなくなつた事、そして過去に對する愛の樣な憧憬を轉じて、將來に對する實際的の希望に移した事は、後に記す通りである。

六　中世工藝の復活

一八七一年(卅八歳)、モリスはロセチと共にテームス河の上流に、ケルムスコットの莊と呼ばれた美しい古家を買取つて住みこんだ。(此の莊の事は『ニュース・フロム・ノーホエア』の中に描きだされてゐる。)そして彼は之を以て浮世からの幸福な隱れ場だと考へてゐた。然るに此の美しい家と、他の多くの家殊に貧しい人々の家とのコントラストが氣になりだした。彼れの園の緣を流れてゐる靜かな水を見るにつけて、其の流れの末の倫敦の生活が思ひだされた。

然し彼は猶ほ暫らくアイスランドの古話の反譯などに耽つてゐた。彼は數年前からアイスランド語を學び。一八七一年には自らそこに遊び、深く其の淳樸の風に打たれたものらしい。

一八七五年、モリス會社が解散された。モリスとロセチとの不和が遂に頂點に達したのであつた。モリスは曾てロセチの忠實な門人であつたが。今は變つた思想と要求とを持つ對等の人であつた。ロセチの死後、モリスが友人に送つた手紙の中に斯う書いてゐる。『ロセチが全く政治に興味を持ち得なかつたのはどうした譯であつたらうか。……蓋し彼は個人的の事より外何も考へなかつた。勿論それも主として文學藝術に關する事だつた。彼は或る個人の苦痛を救ふ爲には隨分よく面倒を見たが多數人の困苦に對しては全く心を勞せる事が出來なかつた。』

モリスは一體個人の困苦といふよりも一般的の害惡に注意する人であつた。其點に於て彼は實に近代的であつた。個人の事

件を一般的狀態の徵候と見るのは、即ち近代の科學的傾向である。

モリスの科學的傾向は更に他の方面に發表した。彼は諸種の工藝に於いて、當時が殆んど全く暗黑時代に在る事を見た。そしてそれらに關する前代の智識を復活させようと努力した。即ち染色に於いても、綴り織に於いても、印刷に於いても、彼は皆な自ら研究し經驗して、一々前代智識の復活に成功した。世間の通說に依れば、工藝を奬勵するには、特殊の才能ある人物を見つけだして、それに保護を與へるが一番だと云ふのだが、モリスはそんな才人を求める事をせず、直ちに自分で其事を研究して、それを希望の人々に敎へた。彼が過去の藝術の研究から得た確信に依れば、過去の藝術の勝れてゐたのは、決して少數の天才が現はれた爲でなく、普通の職人を正當に仕込んだ結果である。そして其の狀態は又、善い品に對する一般社會の要求に依つて生ずるものである。そこで彼は善い品を作つて見せて、それに對する社會の要求を生ぜしめようと試みた。然し當時の社會狀態は常に彼が善い品を作る事を妨げた。此に於いて彼は藝術から政治に赴いた。即ち藝術の改革に志したと同じ熱心を以て、今度は根本的に社會狀態の改革に志した。

七　社會主義者としての彼

モリスは元來あまり公けの集會や政治上の論爭を好んではゐなかつた。けれども彼は自然に諸種の問題に卷込まれて、古代建築保護會を設立したり、東方問題協會や國民自由同盟の會計を引受けたりしてゐた。併し彼は藝術界の事に失望したと同じく、政治界の事にも失望した。さうして遂に社會主義者になつた。彼は其の理想實現の希望を唯玆に認め得たのである。

一八八三年一月、ハインドマン等が『民主同盟』を組織した時、モリスも其の幹部の一員に加はつてゐた。此の團體は翌年（『社會民主同盟』と改名して其の旗幟を鮮明にした。）其時、彼は既に五十歳であつた。彼は勿論、出來るだけの金も出した。それが爲には多くの書籍を賣つたりした。そして社會主義の詩を作り、社會主義の講演をやり、遂には最も嫌ひだつた路傍演說までやりだした。そしていつでも『我々の仕事は只だ社會主義者を作る事だ』と云つてゐた。

或時、社會主義者の示威運動があつて、數人の同志が拘引された。その裁判の時、モリスも傍聽席にゐて、多くの同志と一緒に裁判官を嘲弄した。そしてそれを取鎭めに來た巡査との間

に多少の衝突があつた。モリスも巡査を打つたと云ふので警察署に引張られた。署長は勿論モリスの名を知つてゐたが、傲然として『お前は何者だ』(What are you?)と訊問した。モリスは其の態度に少しムツトして、『自分は藝術家であり文學者である。全歐羅巴に可なり善く知られてゐる筈です』とやつた。此の答へ方は少し高慢すぎたといふ非難がある。思ふにモリスも、持病の神經痛と、監房の板の寢臺との事を考へて、直ぐに放免される爲に態とこんな言ひ方をしたのだらう。モリスほどの人物として、如何にも餘り面白い遣り方ではなかつた。そして彼自身も後々まで共事を氣にしてゐた。勿論、彼は直ぐに放免された。『マアよろしい、今日は返してあげます』と署長は云つた。モリスは其の恩を着せた言ひ方が氣に食はないので『併し自分は巡査を打ちはしなかつた』と逆らつた。すると署長は『宜しい。お望みならお殘りなさい。』そこでモリスは『イヤ、殘りたくはない。』こんな事で其場は濟んで、翌日は又數千人の示威運動をやつて、それで社會主義の屋外集會の權利が回復された。ちよつと面白い話だから書き添へておく。

モリスの社會主義に關する智識について、色々の批評をした者がある。元來が藝術家であり詩人であるのだから、經濟學上の智識は丸で無かつた樣に評してゐる者もある。マルクスの資本論など讀んだ事はないのだといふ評もある。併し實際は決してそんなわけではない。モリスほどの人物が、苟くも一身を投じてやる仕事について、そんな淺薄な事で滿足の出來る筈がない。彼は資本論の佛譯を讀んで、ハインドマンやバツクスやシユウなどと議論をして、十分の智識を貯へてゐた。ハインドマンとの共著なる A Summary of the Principle of Socialism"やバツクスとの共著なる "Socialism, its Growth and Out come" を見れば、モリスの其の方面に於ける造詣が善く分る。

所が社會民主同盟の中に論爭が起つて、純マルクス主義のハインドマン派と、無政府主義的の分子を寬容するモリス派との間に反目が生じた。此邊の事を委しく話してゐると餘り長くなるから略して置くが、右の結果として一八八四年の十二月、モリス一派は民主同盟を去り、別に『社會主義同盟』を組織した。そしてモリスは此の新團體の會計役となり、又その機關紙『コンモンヰール』の主筆となつた。

彼は元來、社會主義運動の首領となる積りはなかつた。彼は會て斯う云つた事がある。『自分が初めて此の運動に加はつた時

今に勞働者の中に首領が現はれて、一切の中等階級の援助を押しのけ、自ら歴史上の大人物になる事を望んでゐた。今でも矢張り、若し其の見込があるならそれを望むのだが、卒直に云へば、差當り其望みが無いらしい。』そこで彼は止むを得ず自然の首領になつて、（それには金のあるといふ事も手傳つてゐたらうが、）不得手な演說まで努めてやつてゐたのである。彼は又から信じてゐた。貴人が慈善バザアを開く樣な態度で社會主義運動を保護するのは決して善い事でないと。そこで彼は自分の力の浪費をも顧みず、斷乎として社會主義の爲に戰つたのである。

然るに『社會主義同盟』の中に又論爭が起つた。例の議會政策と非議會政策との爭ひであつた。モリスは其の何れにも屬せず、中立の形で出來るだけ調和に努めてゐたが、一八九〇年の十一月、遂に『コンモンヰールの』主筆の任を罷められた。

『社會主義同盟』を脫したモリス及び其他の人々は更に『ハマスミス社會黨』を組織した。そして其の新團體は每日曜の夜講演會を開き、ステプニアク、ジョン・バーンス、バアナードショウ、ロード・ハルデーン、シドニー・エッブ、ウオルタークレーン等の人々が講演した。そしてモリスはいつも司會者であつた。

一八九三年に、社會民主同盟、フエビアン協會、ハマスミス社會黨の三團體が提携して、社會主義合同委員會を組織し、一つの宣言書を發表した。其の宣言書はモリスに依つて書かれた。但し此の運動は何ほどの反響をも生じなかつた。そして之がモリスの公けの運動の最後であつた。其後の彼は病中の五年間を靜かに過すのみであつた。

或者をして云はしむれば、此の一章に記した所は、モリスが藝術家としての浪費、政治家としての失敗に過ぎないとするかも知れぬ。然し彼れの運動に依つて英吉利の社會主義が如何に其の發展を助けられたか、英吉利が彼や、ショウや、エルスの樣な、藝術的社會主義者、文學的社會主義者を有する爲に如何に大いなる誇りを示してゐるか、又更に彼れの社會主義的著述が如何に廣く全世界に影響を與へてゐるかを思へば、殊にそれが遠く今日の日本にまで少からぬ影響を與へてゐる事を思へば社會主義者としての彼れの價値と功勞とは、洵に偉大なものである。又藝術家として見ても、彼が晩年に社會主義者となつたが爲に、特殊の光彩が發揮した大利益がある。若し『太平に吟詠する一閑人』で生涯を終つたなら、それこそ藝術家の浪費である。

八　彼れの晩年及び死

一八九一年の春、五十八歳の時、彼れの體力は衰へはじめた。病氣は痛風と腎臓とであつた。併し彼は其間に猶ほ詩を作り散文を書き、又オヂツセー(ホーメルの詩)の反譯をやつた。同時に又古代建築保護會の爲に講演をやつた。

一八九六年(六十三歳)一月、彼は遂に不眠症に罹つた。醫師の勸めに依つてノルエーに海上旅行を試みたが何の効果もなく今は只ケルムスコツトの靜かさにあこがれて八月十八日倫敦に歸つて來たが、其ケルムスコツトまで行く事も出來ないで、十月三十日倫敦で死んだ。或る醫師は云つた。彼れの病氣は只だ彼が普通の人の十人分よりも多く働いた結果だと。

彼れの遺骸はケルムスコツトに運ばれて、十月六日そこの小い十四世紀の會堂の裏庭に埋葬された、其日は暴風雨であつたが、其の暴風雨の中に荒削りの楠の木の質素な棺が、眞赤な車輪のついた農家用の荷車に乘せられて、それが栗毛の牝馬に引かれ、農家の勞働者の先立で、レツクデール停車場から會堂まで送られた。車は葡萄蔓や、柳の枝や、苔などで飾られ、棺の上にはモリスが平生愛好してたゐビロードの布片が掛けられてゐた。それらの趣きが如何にも詩人藝術家の葬式らしかつた。

＊　＊　＊　＊　＊

彼れの散文の著述としては、『藝術に對する希望と恐れ』『建築産業、及び富』『變化の徴候』『ニユース、フロム、ノーホエア』(前記の『理想郷』)『ジヨンボールの夢』などがある。前三者は論文集であり、後二者は小説である。小説の中、『理想郷』は未來の自由社會を想像したもの、後者は中世の社會を回顧したもの是等の著述の内容については、別に私の雜誌『新社會』に書くつもりである。

強羅より（妻を得る頃）

武林無想庵

一

女の心はわからない。男の生活の中心は、いや、外の男の心はわからない、少くとも、私の生活の中心は、唯一の女性を除いて外のものではない——と、それだけの事實が、漸くの思ひで、ハッキリと呑み込めた。

私はあまりに自己のみを中心として來た。さうしてあまりに自己以外の凡てを無視して來た。私はそれを愧ゆる。社會の基礎は女性だつたのだ。女性を中心としないで、どうしてそこに生きた社會が實現せられやう。そこに氣のつかなかつたのは、抑も私の愚昧であつたのだ。私はそれを愧ゆる。

私は女性を得たい。唯一の女性に從ひたいさうして社會の一員となりたい。それより外に、もう私の生きてゆく道は盡きた。然らずんば私はこのまゝ死ななければならぬ。私はまだ死にたくない。生きて社會の中へ這入りたい。さうして社會の爲に働いて死にたい。今日まで、私は社會の爲に全く何もしなかつた。しようとも考へなかつた、私はそれを愧ゆる。

二

人間と昆蟲と、その社會組織の中心點は、全く同一のところに歸着してゐた。彼等は一箇の女性を中心として社會を組織してゐる。一箇の女性　生活意志を滿足させんが爲に、そこに幾多の男性がある。そこに無數の中性がある　そこに無數の勞働者がある。そこに無數の軍人がある。願くば私はそのうちの男性のうちの一人でありたい。そして女王に愛せられて死にたい。

三

私は周の幽王を羨む。彼は褒姒の一笑を得んが爲に國家の一切を抛つた。褒姒は眞の女性である。男性をしてその所有せる一切を抛たしめなければ、彼女は決して笑ふ事を敢てしなかつた。私は褒姒のやうな女性の爲に生命の全部を抛ちたい。

四

私は美に傲る女を好む。さうしてその美に憧れて死ぬ男性の意久地なさを見て、わづかに冷笑を洩らし得るやうな女を好む。

五

私は女性の虚僞を知る。男性の生活を蹂躪して顧みぬ女性の冷酷さを知つてゐる。それにも拘らず、私はたゞ女性を得たい。さうして女性に蹂躪されて死にたい。女性を棄てゝ涅槃を得た釋迦は偉い。全く偉い。けれども私は偉くなりたくない。女性の爲めに狂へるだけ狂つて、噴火山のやうな大煩惱のうちに死にたい。

武林氏は此感想文を寄せられて、間もなく中平文子氏と結婚された。而して此感想を書かれた箱根に、睦ましい新婚旅行をされた。（編者）



加波山事件疑獄の眞相

怨みの利根川

澤田撫松

長い間勤めて居た讀賣新聞が昨年の八月三十一日限りで解散したので、私は何ものにも束縛を受けない氣樂な身になつたのを心から悦んで居た。氣が向けば筆を執るし、氣が向かねば散歩ばかりして居た。秋雨(あきさめ)の霽れた小春日和の日であつた。私は上野公園から谷中の墓地をぶら〳〵歩いて居ると、加波山殉難志士の碑の前へ出た。大きな天然石に琴田岩松、小針重雄、三浦文治、横山信六の四氏の名が刻りつけてあつた。この墓石を見ると、私は加波山事件の眞相と言ふものを書いて見やうと言ふ氣が起つた。その翌朝、上野驛から東北本線に乘つて小山驛で乘替へて下館へ行つた。下館町の妙西寺で加波山殉難志士の碑文を見たり、當時此事件に關係した土地の有志家なぞにも逢つて、所謂加波山の旗擧げなるもの丶眞相を調べた。そして東京へ歸へつてから、明治十九年七月三日千葉重罪裁判所に於て河村(幸雄)裁判長審理の下に門奈茂次郎、横山信六、三浦文治、小針重雄、琴田岩松、草野左久馬五十川元吉、玉水嘉一、原利八の九名に對し言渡したる判決書、並に同年同月同日東京重罪裁判所に於て小松(弘隆)裁判長審理の下に河野廣體、天野市太郎、杉浦吉副、鯉沼九八郎大橋源三郎、佐伯正門の六名に對し言渡したる判決書を見る便宜があつたので、瀟々たる秋雨を耳にしながら此稿を書いた。

一　壯烈な下館有爲館の乾盃

海斷鯨鯢陸斷豹　山川攘盡護神州

何來復害自由體」　怨以寶刀斬厥頭」

饒な聲量で吟詩をして居るのは有爲館の館長富松正安で、稽古着に小倉の袴を着け、朱鞘の一刀を拔きはなち壯烈な劍舞を舞つて居るのは有爲館の劍師玉水嘉一であつた。劍舞が終ると、廣い道場に並んで居た百餘名の青年が一齊に拍手喝采した。

『諸君』と富松は立ちあがつて一座を見渡した。

『諸君、眼を開いて我國現時の狀態を見給へ、外は條約未だ改まらず、内は國會未だ開けず、而かも政府は苛法酷律を設けて人民の自由を奪ひ、收斂度なくして民の財を枯し。餓莩道に横はるも之を顧みず。酷吏民を虐げるも之を咎めず。言論を壅蔽して、志士を逆遇し、人民の進歩を阻止して之を奴隷視して居るのではないか。斯くの如くにして進んだならば、國家の前途は思ひやられる。此時に於て憂國の志士たる者は文武兩道を研鑽して、國家の爲めに盡さねばならぬ。鹿兒島の私學校や土佐の立志社の青年の志を以て進まねばならぬ。此意味に於て我々自由黨員は東京に有一館を起し、我が茨城縣には中田町に文武館を設け、今又此下館に有爲館を設立し茲に開館の式を擧げるに至つたことは國家の爲めに祝福すべき次第である。本日の開館式に當つて、何よりも先きに劍道師範玉水嘉一氏の劍舞を請ふたのは我黨の元氣を示さんが爲めである。諸君、自由の敵、民權の仇は又諸君の敵否國家の敵である。諸君は此の敵と鬪はねばならぬ。諸君の任務は重く、して且つ大なるものである』

館長富松の激烈なる演説を聞いて、血氣の青年は熱狂した。田宮太平、倉持茂三郎、大内達三郎、、藤田善次郎、瀬端東作、仙波太平、大吉騰一郎等の有志家は交々と立つて燕趙悲歌的の演説をして開館式を終えた。式が濟むと一同は常磐樓に懇親會を開いて時事を談じて居た。其所へ東京から仙波兵庫がやつて來て有一館の近狀を語つた。

『我が有爲館も東京の有一館と連絡を保つて緩急相應ずるの策を採らねばなるまい、それには誰かしつかりした人物を有一館へ入れて置く必要があらうと思ふ』仙波は有一館と氣脈を通ずるの必要なることを力説した。富松を始め同志の面々孰れも仙波の意見に贊成したので、有爲館の青年の中から誰か一人有一館へ送ることに決した。そこで次に起る問題はその人選であるがこの重任を負つて東京へ行く者は事に臨むで奇策縱横の才物であると同時に、武術に達した者でなければ萬一の場合が氣遣はれると言ふので、白羽の矢が横山信六に當つた。信六年

當二十四才、紅顔の美丈夫であつた。このことが決ると、立ちあがつた。

『横山君何所へ行く』玉水嘉一が咎めると、

『東京へ行きます、早い方がよからうと思ひます』信六は立つて小倉の袴の襞襀を叩いた。

『東京へ行くなら家へ歸つて仕度をしたらよからう』玉水が注意すると、玉水の顔を眺めて、

『我々は國家の爲め自由の爲めに命を投げ出して居るのです、東京へ行く位に何の仕度が要ります、仕度はちやんと此所に出來て居ます』

握拳で兩の腕を交々打つて見せた。列座の志士は横山の勇氣を嘆美した。横山は旅費を懐中に入れると、三度笠を冠つて東京へ立つた。それは明治十七年の八月四日であつた。その翌日中館の觀音寺境内で自由大運動會を催した。會する者が五百名ばかりあつた。此日有爲館の館長富松正安は靑糸縅の鎧を着て、鞍馬に乘つて出た。會衆は一齊に自由萬歳を唱へた。

二　噫！　大事の露顯

秋草が庭の所々に繁つて居た。淋しい聲で秋の虫が啼いて居た。下館の鯉沼九八郎の家では障子を開け放して、座敷の右手に九八郎が坐つて居ると、其の前に三浦文治、小針重雄、草野佐久馬、五十川元吉、保田駒吉、天野市太郎、杉浦吉副等の同志が並んで居た。

『我々が愛國の至誠を以て唱へる自由民權の議論を、政府が自己に不利益なるの故を以て過激論として之を排斥し、飽まで言論を壓迫するさへ不埒なるに、不急の土木を起して民に苛税を課し、憂國の志士を徒に幽閉するとは不法極まる次第じや、今日となつては最早言論の時代でない、臨機應變の手段を執つて、國家の公敵を倒さねばならぬ。それには兼ねて計畫した通り、二十日の宇都宮新廳の開廳式に事を擧げて、臨場の大官を鏖さなければならぬ』三浦文治はかう言ふて一座を見渡すと、

『我々小數の同志を以て藩閥政府と鬪ふのだから、お互に決死の覺悟でなければならぬが、早まつて事を破る様な失策のない様に注意せねばなるまい、それには當日の作戰計畫を研究せねばならぬ』

草野佐久馬が莊重な言葉でこれに應じた。

『それは言ふまでも無いことじや、當日は附近の村落より搗餅

を馬に乘せて式場へ送ることになつて居るから、爆彈を搗餅の様に見せかけ、三頭の馬に乘せて、一手は下河原の方面より、一手は日光街道より、一手は六道の往來より宇都宮に紛れ入り、明神山の裏手に集るのじや、その後のことは鯉沼氏の指揮に從はうじやないか』

小針重雄が膝を進めて意見を陳べた。先程から默つて同志の意見を聞いて居た鯉沼九八郎は、

『小針氏の意見は至極よからうと思ふ、然し今日は九月十二日だから、二十日までには八日しかない、私が作つて居る爆彈の數を、それまでに充分殖やして置かねばなるまい、それにしても河野廣體、横山信六、小林篤太郎、門奈茂次郎の四氏から何の消息(たより)もないのは心掛りだ』

と心配相な顔をする。それは同志の河野廣體、小林篤太郎、門奈茂次郎の三人が、有一館に居る横山信六と共に軍用金の調達に東京で奔走して居るのであるが、今に何の消息(たより)もないからであつた。

『河野、横山、小林、門奈の四氏は我々の先輩で、分別のある人達だから、失策のあらう筈はない。心配するには及びますまい』

保田駒吉が言ふと、同志の面々が保田と同感の旨を陳べたので鯉沼の眉宇にかゝつて居た曇がとれた、その時、表に人の足音がしたので、わざと聲高い世間話を始めると共所へ入(はい)つて來たのは河野、横山、小林の三人であつたから、孰れも座を開(ひら)いて三人を迎ひ入れた。

『御苦勞でした』鯉沼が聲をかけると、

『結果はどうです、うまく行きましたか』

三浦が氣づかはし相に尋ねた。けれども三人は默(だま)つて俯向(うつむ)いて居た。顏色と言ひ、態度と言ひ、たゞごとで無いと見て取つた一座の面々は、三人の方へ皆膝を向けた。暫らく陰鬱の沈默が續いた。

『諸君に申譯がない、失敗をした』

漸くのことで横山が口をきると、

『天下國家を救ふのが我々の志であるから、正しい目的を達する爲めには、手段の如何を顧みる暇がないと言ふ見地から、富豪に依つて軍用金を調達しやうとして、その手始めに九月十日の夜五十稻荷(ごとをいなり)の緣日の混雜に紛れて、神田裏神保町の質商山岸豐壽郎方へ押しかけ、主人(あるじ)豐壽郎を說いて金を出さゝうとしたところが、家内のものが音を聞きつけて、表から群衆

が入つて來たから、仕方なく裏口から逃げ出すと、後より泥棒々々と叫びながら追ひかけて來るので、小川町の通りへ出て、神田橋の方へ逃げやうとすると、警察署の中から巡査が飛び出して來て我輩の袖を摑むだもんだから、用意に持つて居た爆彈を投げつけたのじや、すると其が警察署の門に當つて、恐しい音響と共に爆發して、巡査は其所へ倒れた。巡査の外に通りがかりの者も二三人負傷した樣子だ。この騷ぎに紛れて我輩と横山と小林の三人はうまく其場を逃げたが、門奈は追ひかけて來た今一人の巡査に背中を斬られて倒れたが生死を見屆ける暇がなかつた』

河野は軍用金調達の失敗を陳べた。鯉沼はこれを聞くと、

『大事は破れた』と歎息した。

『大事が破れたとは』三浦が膝を進めた。

『さればじや、今河野氏質屋を襲ふて目的を果さず、追捕を防ぐ爲めに爆彈を投げたと言はれたが、此事實を政府は何と見るであらうか。普通物盜の所業とは見まい、世は太平でない、江藤、前原、西鄕の諸先輩が相尋で斃れたけれど、政府は枕を高くしては寢て居まい。近くは福島、群島の兩事件があり、政府の秕政を攻擊する政敵のあることを知つて居る筈閥の奴等は、爆彈の破裂を徒事とは思つて居まい。きつと自由黨員に眼をつけるに定つて居る。さうなれば我輩が爆彈を拵へて居ることが自然發覺する。その時は我々の計畫が破れて、お互が犬死せねばならぬのじや』

鯉沼は憮然として語つた。一座の面々は、こと茲に至つた上は一刻も猶豫はならぬと、直ちに事を擧げやうと言ひ出した。

『その說も一理あるが、何を言ふにも爆彈が不足じや、それに二十日の開廳式も間のないことだから、二十日までに私は一生懸命に爆彈を殖す、そして一擧に事を擧げやう、然し、ことによると二十日の開廳式を延期するかも知れぬ、若し延期すると言ふことになつたら、政府が感附いたに相違ないからその時は直ちに事を擧げねばならぬ。それにしても必要なのは爆彈だ、かうして居る間も時間が惜しい。私は失敬して仕事にかゝる』

鯉沼は立ちあがつて奥の室へ入つた。後には三浦を座長にして擧兵の軍議を凝らして居た。と、間もなくすさまじい音響と共に、戸も障子も一時に倒れると、奥の室には黑煙が漲つた。スワと言ふので、三浦、小針、草野の面々が奥の室へ駈け込むだ時は、鮮血に塗れて鯉沼が倒れて居た。眞先に飛込むだ三浦が

鯉沼を抱き起すと、胸から腹へかけて一面の火傷で、左の腕は捥取られて傷口から血が流れて居た。鯉沼は此日朝から五個の爆弾を作つて、第六個目の爆弾を仕上げ、爆弾の口を封じた麻糸を鋏で切らうとした時、鋏の先が觸つて爆弾が破裂したのであつた。

『鯉沼君、鯉沼君』三浦が鯉沼の耳の傍へ口を寄て叫ぶと、

『駄目だ、駄目だ、もう俺は駄目だ。我輩の命は惜しくはないが、折角こゝまで事を運んで、今一歩と言ふところで大事を破つたのはかへす〳〵も殘念だ。神田の爆弾騒ぎがあつた上に、今又この事があつた以上は、もう政府で捨て置くまい。大事を擧げるよりも今は諸君の身があぶない。此所にまごまごして居て諸君の身に若しものことがあつては同志に申譯がない。我輩の軀はかまはないから、諸君は早く此場を去つてください』

鯉沼は苦し相な息づかひで同志に此所に居ることの危險を說いた。

『生死を共にした君の負傷を見ながら、我々が何所へ行かれるものか、死なば諸共だ』杉浦吉副が悲痛な聲でかう言ふと、

『發覺すればそれ〳〵逮捕に向つた奴ばらと刺違へて死ねばかりだ』

天野市太郎も決心の臍をかためる。保田、五十川、草野、小針の面々に異存のあらう筈がない。孰れも身を以て鯉沼を守らうと主張した。

『イヤそうでない、お互の命は國家の爲めに捨てるのだ、自由の爲めに捨てるのだ。私情の爲めに捨てる命はない筈じや。我等にかまはず早く逃げくれい、かう言ふて居る間もあぶない早く行つてくれ、早く行つてくれ』

鯉沼は苦痛を忍むで手を振らうとしたが、手先がないので二の腕の切口からタラ〳〵と血汐が流れた。

『諸君、情に於ては忍びないが、大義は親を滅す。今此所で犬死しては、鯉沼氏の苦心も水泡に歸すことになる。こゝは忍び難きを忍むで、鯉沼氏の言ふ通り我々は此場を落ちて後圖を策するのが何より肝要だ。又それが鯉沼氏に對する我々の友誼だ』

横山は血氣にはやる同志を押へた。其所へ鯉沼の父親兵彌と妻のお時が駈けて來た。鯉沼は爆弾製造が危險であるのと、同志の密談の漏れることを恐れて、家族を半丁ばかり離れた別宅へやつて置いたのであつたが、爆弾破裂の音を聞いて駈けつけた

のであつた。

「気をたしかに持つてください」

妻のお時が血塗になつた夫の躰に縋りつくと、父の兵彌は何よりも醫者だと駈け出さうとするのを止めて、

「待つてください、醫者をよぶのは待つてください。諸君、今諸君の身に萬一のことがあると我事終るのだから、早く逃げてください、さうしてくださらねば俺は生きることも死ぬことも出來ぬ」

鯉沼が急き立てるので、同志の面々も横山の意見に従ふて鯉沼の家を出た。

三　同志の籠城

鯉沼の負傷を氣遣ひながら其所を出た横山信六等の一行は、小堤村の館野芳之助を訪れて今後の方針を定めやうとしたが、館野の家はひつくりかへる様な騒ぎをして居た。どうしたのかと聞くと芳之助が爆弾を製造して居たところ、今しがた其の中の一個が爆發して、芳之助は全身を火傷したばかりでなく、右の腕を捥取られたと言ふのであつた。時を同じうして鯉沼と館野とが同じ様に爆弾で負傷したゞけでさへ不思議なのに、鯉沼は左の腕、館野は右の腕を失ふたのは何かの因縁かも知れぬと、一行は奇異な現象に驚いて居た。芳之助の負傷の模様も見たいとは思つたが、混雑の中へ入つて治療の妨げをしてはならぬとそのまゝ其所を立ち去つた。途中で同志の大橋源三郎に逢つたから、鯉沼、館野兩氏遭難のことを語ると、往來では落付いて話が出來ないと言ふので、道から少し隔たつた雑木林の中へ入つて環座になつた。其所でいろ〳〵評議をしたが、首領と頼む鯉沼がかう言ふことになつた以上は、今輕々しく事を擧げるのは不利益であるから、暫らく隱忍して時機を待たうと言ふ者もあれば、政府が我々の計畫を勘附いた上は、闘ふより外に道がない。豫定通り宇都宮新廳開廳式に事を擧げやうと主張する者もあつて、容易に議論の一致點を見出すことが出來なかつた。その時、大橋は聲をひそめて、

「諸君の議論は孰れも一理あるが、今はさう言ふ議論をして居る時でなからうと思ふ。鯉沼、館野兩氏の椿事で、我黨の計畫を政府に知られた今となつては、都賀郡内に諸君の居ることは頗る危險だ。一刻も早く此地を去つて安全の地に身を置いて、徐に後圖を圖るより外に道はあるまい。それには茨城の中田地方が最も適當な匿れ場所だと思ふ。兎も角此所を切

りあげて中田の文武館へ行くことにして、萬事は中田へ着いてからの相談にしやう』

と栃木縣下に居ることの危險を說いたので、孰れも大橋の說に從ふて雜木林を出た、秋の夕日が落ちて、冷たい風が吹くと、枯葉がサラ〳〵と鳴つた。一行は、道を南に取つて夜路を古河から中田へ出た時は、もう東の空が白くなつて夜が明けた。疲れた足を引づりながら一行が中田の文武館へ着くと、表の戶は締つてあつたが、垣根の隙間から覗くと、四五人の男が書類を庭へ持ち出して火をつけて燒いて居た。傍に立つて指圖をして居るのが館主の野口熊太郞であつた。表から橫山が聲をかけると、野口は此方を振り向いた。そして垣根越しに橫山一行の立つて居るのを見て、自分で表の戶を開けに來た。

『橫山氏じやないか、今時分、どうして來られた』

野口は暫らく一行を眺めて居たが、

『其所では話が出來ぬ、此方へ入られい』

と先に立つて座敷へ案內した。橫山は同志を伴れて突然訪づれたのは、鯉沼、館野の負傷から自分等の企が政府に知れて、栃木縣下に居ることが危險になつて來たから、此所まで逃げて來たと譯を話す傍から、

『我々同志が一時身を匿すのはこの文武館より外にないと思ひまして、私が勸めて伴れて來たのです』

大橋が一行を匿まつてくれいと賴むだ、野口は腕を組むで橫山大橋の話を聞いて居たが、眉根に皺をよせた。

『困つたことが出來た。實はそのことに就て俺も心配して居たのじや、館野が爆彈を製造すると言ふから俺が資金を出したり材料を集めたりしてやつたのじや、かう言ふ風になると俺の身もあぶない。俺の身の危險はかまはぬとしても、累を文武館に及ぼす樣なことがあつては後々に困るから、此事に關係のある館の重要書類を今燒き捨てゝ居るところじや』

野口が話をして居るところへ、一人の男が入つて來た。それは東京の動靜を探りて行つて居た保田駒吉が歸へつて來たのであつた。保田は野口から委細を聞いて、

『それは容易ならぬことだ、小川町の失敗と言ひ鯉沼館野兩氏の火傷と言ひ、政府は目をつけずには居まい。それにこの中田は京北の國道で宇都宮往復の道であるから、此所に潛伏することは策の得たるものでない。愚考を以てすれば、下館の有爲館こそ諸君が身を匿すに最も適當な場所だと思ふ。殊に館長富松正安は智謀に富むで雄略のある傑物だから、これよ

り下館に赴いて富松氏と共に後圖を圖るが良策だと思ふ』と中田に居ることの不得策を說いたので、孰れも保田の說に從ひ、その日の夕暮に中田を立つて、夜路を下館へ急いだ。夜半に有爲館に着いて、館長富松に來意を通ずると、富松は一行を座敷へ通し、酒肴を出して持成した。三浦は河野等が小川町で爆彈を投げたことから、鯉沼館野の火傷の顚末まで話をして、自分等一行を暫らく匿つてくれと賴むと、富松は心よく承知した。そこで更に一歩を進めて、今度の企の指揮者に富松を戴かうと三浦が言ひ出すと、横山、小針、五十川、草野等の面々が孰れも之を贊して、是非富松に首領になつて貰ひたいと懇願した。

『諸君の計畫は惡いとは言はぬ。企に贊成して居るから諸君を匿うことを承知したのだ。然し自分がその指揮者になることは御免だ。自分は人の首領になる様な人物でないから、諸君を指揮するなぞと言ふことは思ひも依らぬことだ。それにこの計畫は餘りに輕卒で、どうも成功しさうに思はれない。出來ることなら此企を中止する様に忠告したい位だ。然し今日となつては諸君が思ひ止まり相にないから、諸君が思ふぞんぶん働ける様に御援助はする。けれども自分が直接諸君と行動を共にすることはお斷りをする』

富松は首領となることをきつぱりと斷つた。けれども横山、三浦、小針の面々はなか／＼承知せぬ。藩閥政府の惡政を攻擊して、今度の企は眞に國家を思ふ赤誠から出たことだと力說した。そして富松に首領になることを懇願した。默つて聞いて居た富松の眉宇には決心の色が見えた。

『此企が果して成功するや否や、我輩は頗ぶる疑ふのだが、假令失敗に終るも天下の志士を奮起さすだけの功はあらう、よろしい、我輩の命は諸君にさしあげやう』

富松は宇都宮襲擊の指揮者になることを承諾した。

四　加波山に籠る

東京有一館の磯山淸兵衛、佐伯正門の二人は、同志を糾合する爲めに千葉、茨城地方を遊說した。秋の日の夕日が沈む利根川端に立つて渡船の來るのを待つて居ると、

『磯山君に佐伯君じやないか』

と後から聲を掛ける者がある。二人が振り向くと、それは同志の琴田岩松であつた。琴田はよい所で二人に逢つたと悅んで居た。そして之れから何所へ行くと聞くと、磯山は栃木縣へ行く

が、佐伯は下館の有爲館へ行くのだと答へた。

『それなら尙よい、僕も有爲館へ行くところだ』

琴田は有爲館に富松を訪ねる旨を答へた。三人が船に乘つた時は、夕暮の空が燒けて、紅色の雲が西の方に棚引いて居た。船が中流に出た時は櫓を漕ぐ音がだる相に聞えて、舷に水の當る音の外には耳に聞えるものはなかつた。

『滿目長江萬感生。　雲烟澎湃急舟行。
雄心落々渡刀水。　意氣軒々望宇城。
願斬毒蛇淸禁闕。　須殊猛虎奏功名。
一聲鴻雁高秋月。　壯士別離無限情。』

琴田は自作の詩を悲壯な聲で吟じた。雁の一行が空を鳴いて通つた。船が對岸へ着くと、磯山は栃木へ行つたが佐伯と琴田は下館の方へ向つた。飯島、神谷を經て下館へ着いた二人は有爲館を訪ねた。有爲館には三浦、小針、草野の同志が居たのだから、直ぐ二人を迎へた。そして東京の樣子を聞くと、油斷が出來ないと思つた。殊にかうして多くの壯漢がたゞ集つて居ることは怪しまれる元だから、擊劍の稽古に來て居る生徒の樣に見せかけて、夜は富松の家と有爲館とに別れて寐る樣にして居た。それにしても二十日の開廳式に果して東京から顯官が來るかどうか、これは確めねば活動の方針が立たぬと言ふので、横山信六と小林篤太郎とが宇都宮へ樣子を探りに行つた。十九日の晩になつて二人は歸つて來たが、二十日に擧行する筈であつた開廳式は二十七日に延期となつたと言ふことを聞き込むで來たので、一同は心配せずには居られなかつた。開廳の準備は悉く調ふて居るのに、俄に開廳式を延期したのは、小川町の爆彈騷から政府で警戒したのではあるまいか、若しさうであつたならば、二十七日になると又延期するかも知れぬ。よし延期しないとしても、大臣や參議は來ないかも分らぬ。さうなればかうして居ることは危險だ。ことに依ると政府の方で我々の背後に人を廻して居るかも知れない。今は一歩立ち遲れたならば取りかへしのつかぬ不覺を取るかも知れぬ。先んずれば人を制す、もう一刻も猶豫して居ることは出來ない。直ちに事を發せねばならぬと言つて居ると、表へ網引の俥が止つた。俥の上から降りたのは玉水嘉一で、座敷へ上がると、聲をひそめて、

『今東京から弟が歸へつて來て言ふには、小川町で爆彈を投げた犯人が下館に居ると言ふことが分つて、東京から五十名の巡査が繰出して來たから、自分もその後から來たと言ふのだ。それで今下館警察の模樣を見に行くと、東京から來た巡

査も潜いて居たし、水戸や宇都宮からも大分入り込むで居る樣子だから、一刻も早く諸君に知らしたいと思つて駈けつけたのだ」

と、事の切迫した旨を語つたので、一同は直ぐ對抗策に就いて評議した。

「この有爲館を敵に取り圍まれたら袋の鼠でどうすることも出來ない。我輩の考ではこれより雨引山に立籠り、本木の勝田盛一郎氏と氣脈を通じて敵に當らば、輙くは陷されまいと思ふ」

地理に明るい保田が咄嗟に建策すると、

「さうだ、雨引山は一方口だから、敵を防ぐにはよい場所だ」

富松も贊成したので、直ちに雨引山へ立籠ることに決した。玉水嘉一は稽古着に小倉の袴を着け、泰龍齋の鍛へた二尺八寸朱鞘の大刀を腰にさし、爆彈百五十個を入れた具足櫃を背負ふて立つた姿は、どう見ても水滸傳中の人物であつた。玉水を先頭に富松正安、横山信六、保田駒吉、琴田岩松、三浦文治、小針重雄、河野廣體、小林篤太郎、平尾八十吉、天野市太郎、山口守太郎、原利八、五十川元吉、草野左久馬、杉浦吉副の面々が孰れも腰に一刀を差して、草鞋の紐を堅く結んで出發した。朝からの雨で、路は泥で捏ねかへされてあつたから、闇夜を歩くのは非常な困難であつた。山路には慣れた連中であるが、かうした泥路を闇夜に歩くことは徒に時間のかゝるばかりであるから、提灯をつけた方がよからうと言ふ者があつた。最初は提灯をつけるのは人に氣取られる恐れがあると言ふので、殊更提灯の用意をしないで出たが、今となつてはどうしても燈がなくは進めなくなつたから、新治の谷島彌平太を叩き起して提灯を借りた。谷島は一行の樣子を見て、愈々事を擧げたなと思つたが何にも言はずに提灯を貸した。富松が提灯を持つて先に立つたので一行の足取りが早くなつた。その時、富松は

「道々考へて見たが、今一度諸君と評議して見たいことがあるから、神山の家で休むで行かう」

と、小路を左へ取つて神山藤三郎の門前へ一行を案内した。戸を叩かれて目を覺した神山は門を開いて一行を座敷へ通したが武裝した一同の姿を見て、愈々勃發したことを知つた。其所で再び評議が開かれた。

「此所まで來てから言ふことを言ふと、富松は氣後れがしたと諸君は笑ふかも知れぬが、命は既に投げ出した富松正安、

今更命惜しさに言ふのではない。同じ死ぬにしても華々しく死にたいからだ、犬死をするのがいやだからだ。諸君考へて見給へ、如何に雨引山が敵を受けるによい場所だからとて、一行の人數僅に十六人、これを以て何百人來るか知れない敵を引受けて幾日かよく支へられよう、結局は繩目の辱を受けるか自刄をするかゞ落ちだ。さう言ふ見込のない戰鬪を開始するよりも、一先づお互に身を匿して、當初の計畫通り、宇都宮開廳式に東京から顯官の來るのを待つて一擧に事を發したならば、假令破れて斃れるにしても、敵にかなりの痛撃を與へることが出來やうと思ふ。今玆で屈するのは大に伸びんが爲めだ。諸君、雨引山籠城の企を變更して、宇都宮開廳式のあるまで身を隱さうじやないか』

富松は雨引山籠城の無謀なことを說いた。

『僕は富松氏の說が道理だと思ふ、今雨引山へ立籠つて警官と鬪つたところで、何の役にも立たぬ。富松氏の言はれる通り、宇都宮開廳式まで我々は安全の場所に潜むで居る方がよからうと思ふ。然し、玆に考へねばならぬのは、何故に我々は雨引山へ籠らうとするかと言ふことだ。それは言ふまでもなく僕と河野氏とを逮捕する爲めに警察隊が押寄せるからだ。今諸君が河野氏と僕の軀に繩うつて警察へ突出してくれたならば、警察は諸君を疑はぬであらう。さうすれば政府でも安心して開廳式を擧げるであらう。その時こそは諸君が我我の志を果してくれることが出來やうと思ふ。女々しいことを言つて居る場合でない、早く我々二人に繩かけて警察へ出してくれ給へ、ねえ河野、さうしやうじやないか』

横山信六は河野廣體を顧みた。

『さうだ、横山の言ふ通り、我々二人を犧牲にして、諸君が目的の遂行に進んでくれることが我黨の本旨であらうと思ふ』

河野も同志の爲めに身を投げだした。富松は眼を閉ぢて默つて聞いて居た。

『それはいかん、如何に目的の爲めであるからとて、同志を賣る樣なことは斷じていかん、殊に今日となつては、政府が八方に綱を張つて居るから、何所へ行つても我々の身を置く所はあるまい。我々の目的とした宇都宮開廳式も、我々を渡すまでは延期するであらう。かうなつた以上は雨引山に籠つて華々しく鬪ふより外に道はあるまい。それが男の意氣地だ男の最期を裝るのだ』

三浦は飽まで雨引山籠城を主張した、富松、横山、河野三人を

除いた一同は皆三浦の說に同意した。そして富松を首領に戴い

て雨引山に立籠らうと言つて聞かなかつた。横山、河野が犠牲にならうと言ふことも、富松の隱忍說も容れられなかつた。

『思はぬ不覺から我々の計畫を政府に知られた以上は、十六人の人數を以て目的を達することの出來ないのは分つて居るこの上は華々しい最期を遂げて明治の陳呉たればよいのだ。』

三浦が斯うした主張は一同の意思であつたから、富松も今はこれまでと、雨引山籠城に同意して袖山の家を出た。一行が本木の勝田盛一郎の家に着いた時は、東の空が白くなつて夜がほのぼのと明けかけて來た。勝田の門を叩いて、先づ富松一人だけ入つて來意を告げ、盛一郎の承諾を得て一同を座敷へ呼入れた。

『愈々事を擧げなければならぬことになつたが、困るのは軍用金のないことだ』

富松が勝田に軍用金の相談をすると、一週間前までは一千圓ばかりの國稅を預つて居たが、今は全く手元に金がないから軍用金の用達は出來ないけれど、兵糧と人夫は引受けると言つてくれたので、一行はそれを力にして雨引山へ登らうとすると。

『成程、雨引山へ立籠ることも惡くはないが、四方に間道が**あるから籠城には不適當だ。諸君が眞に死を決して闘ふの**なれば加波山こそ屈竟の場所と思ふ。絶頂の新宮本宮を本陣にして、四方を瞰下して居たなら、敵に乘ぜられることはない。』

勝田は雨引山の地の利を得さることを語つて、加波山の要害を說いたので、一行は雨引山に登るのを止めて、加波山に向つた勝田は人夫を呼集めて山上へ兵粮を運ばした。

五　戀の怨み

加波山は筑波山、足尾山と峯續相接し、岩石を以て疊み上げられた常陸西部の高地で、山頂に加波神社があつて、社務所が本宮新宮の二殿に分れてあつた。此所へ登り着いた富松の一行は本宮を訪ふて社掌宮本正愼に逢ひたいと言ふと、社守の谷田定助が出て來て、社掌は留守だと言ふから、谷田に本意を告げると、谷田は驚いた顏をしたが、孰も武裝して居るのを見て恐を懷いて居たから拒絶はしなかつた。『一死以報國』『自由の魁』など言ふ文字を大書した紅白の旗數旒を峯頭の彼方此方に樹てゝ、加波山三神大權現へ參拜する登山者に檄文を散いた。富松は十

五人を三隊に分ち、第一隊は阿野、平尾、零田、玉水、小林、第二隊は三浦、草野、原、小針、天野、第三隊は松浦、横山、五十川、保田、山口とし、自ら之を指揮して寄手に備へる準備をした。横山新六は第三隊の一人として足尾山の通路に當る南面を警戒して居たが、咽喉が渇いたので五十川と交代して社務所へ茶を飲みに行くと、

『新さん』

後から聲をかける女があつた。振り向くと、色の白い、綺麗な娘が、袖で口元を押へて立つて居た。横山は會津の藩士横山新藏の長男で、麒麟兒と言はれてた秀才であつた。三年前に叔父の横山陸軍大佐を便つて宇都宮へ來たが、大佐は長崎に轉任したので逢へなかつた。仕方がないので稲田屋と言ふ宿屋に泊つて、身の振方を定めやうと思つて居る中に旅費を遣ひはたして困つて居た。その時横山に同情して、自分の給金を出して横山を助けた宿屋の女中であつた。名をお澄と言ふ美しい女であつた。斯うした女から恩を受けることを心苦しく思つて居た横山も、外に道がなかつたのでお澄の親切を受けて居た。其後横山が鯉沼九八郎の家へ引取られてから、暫らくたつて稲田屋へお澄を訪ねて行つた時は、もうお澄は稲田屋に居なかつた。それ切りどうしたか消息を知らなかつたお澄に呼びかけられなのだから、横山は驚からずには居られなかつた。

『あれから如何なさつたかと思つて、私心して居りました』

お澄は懐しさうに横山の傍へ寄つた。お澄は社守谷田の娘で、病氣で親の家へ歸へつたきり奉公をしないことにしたと言つて居た。そして横山に内々話があると言ふから、お澄に誘はれるまゝ萩の繁みの中へ行くと、赤い萩の花の散つた上へお澄が屈むから、横山も向ひ合つて屈むと、

『あのう、かう言ふことは申しあげてよいのか悪いのか存じませんが、あなたゞけに一寸と申して置かうと思ひまして』

お澄はあたりに氣を配りながら話を續けた。

『社掌の宮本さんがお留守だと言つたのは、あれは嘘なんですあなた方が社務所へおいでになると直ぐ裏口から出て山を下りたんですから、ことに依ると警察へ密告に行つたのかも知れません……私は必とさうだと思ひます、ですからあなたゞけにお知らしをしたのです』

『おのれ……』

お澄は未だ何か言ひたさうにして居たが、横山が

と言つて立ちあがつた勢ひに、話の腰を折られて何にも言はれ

なかつた。横山はお澄に禮を述べて直ぐ富松の所へ駈けて行つた。富松にこのことを語ると、

『さう言ふことなら一刻も猶豫が出來ぬ、敵の押し寄せて來る前に、此方から逆襲を試みやう』

富松は玉水、琴田、原、横山と共に本部を守り、三浦、河野、小針、杉浦、天野、小林、山口、平尾、草野、五十川の十氏に山を下つて眞壁町の町屋分署を襲撃することを命令した。ソラ愈々開戰だと言ふので孰れも元氣づいて、山を下つた。山に殘つた富松、玉水、琴田、原、横山の五人は、僅か五人で居るところへ、敵に押し寄せられては堪らんと思つたから、山上の彼方此方に篝を焚いて、大軍が屯集して居る樣に見せかけて居た。山を下つた十人の決死隊は眞壁町の町屋分署へ迫つた。後鉢卷に白襷を掛け、袴の股立を高く取つた十人の姿を見た門番が、ソラ來たと叫ぶと、河野は一彈を其所へ投げつけた。恐ろしい響と共に玄關が破壞された。一同が中へ入つた時は其所に誰も居なかつた。相手がなければ闘も出來ないから引きあげた。

六　無殘な敗衄

加波山の旗揚げが縣下に知れ亘ると、時の茨城縣令人見寧は、眞壁、新治、西茨城の各警察署長を召集して逮捕手段を講ずると同時に、縣會常置委員、妹尾萬壽吉、藥師寺清右衛門、飯村丈三郎、濱名信平、中井敬之介等を招集して警察費の臨時支出を議決さした。そして警部と巡査を幾隊にも分け、縣下に入つて來る旅客を一々點檢さして、一方土浦、石岡、笠間の警察署長に部下を率ゐて加波山の包圍攻撃に向はしめた。近縣から應援に來る巡査が毎日入込むので、笠間、羽黒の兩街道は賑かであつた。取卷いた警官隊は、急に攻めては徒に人を損ふことを知つて居たから、わざと山へは登らず、遠卷きに取り卷いて持久戰の陣立をした。山上では町屋分署を襲撃した三浦、河野等が凱歌を奏して引揚げて來たので、大勝利と言つて祝盃を擧げたが、敵が遠卷に取卷いたまゝ、山へ登つて來ないのに困つた。敵が登つて來たら華々しく闘はうと思つて居たのに、それが出來ないばかりでなく、初め豫期して居た同志の來援がないのと軍用金の乏しいのには更に困つた。殊に山上の籠城を困難ならしめたものは、水に乏しいと食ふものがなくなつたことである。お澄親子の者がいろ〳〵心配してくれたので、辛うじて三度の食事を續けて來たが、それも後一日か二日しかないと言ふことになつた。四方は警官隊に取卷かれて居るから、兵糧を運び入

れることが出來ない。よしんば其は出來るにしても買ふべき金がない。このまゝじつとして居れば飢ゑて死ぬより外に道がないことになつた。

『こと茲に至つては殘念ながら山を降るより外に手段はあるまい。包圍の一方を斬り破つて宇都宮へ闖入し、縣廳に肉迫して叶はぬ時は斬り死するまでだ』

横山が山を降りることを主張すると、富松らも其の說に賛成したので、一同は加波山を放棄して宇都宮に突進することに決心した。爆彈を藏めた具足櫃を擔はすのに二人の人夫を雇ふて、一行十六人が本宮を出た。横山がお澄親子に禮を陳べて山を降らうとすると、お澄は横山の顏を眺めて、何か言ひたさうにして居たが、遂に何にも言はなかつた。横山はお澄の方を振り向いたが、やつぱり何にも言はなかつた。一行の姿が見えなくなるまでお澄は立つて居た。山を降りて行く横山は幾度も後を振りかへつて見た。それは明治十七年の九月二十四日の夕暮であつた。一行が長岡村の畷にさし掛つた時、前面から提灯を提げて來る男があつた。玉水が拔打に提灯を斬つて落すと、男はあとへ引きかへした。すると道の兩側から黑い影が動いて、一隊の巡査が一齊に拔刀で斬り込むで來た。此方も一刀拔いて斬り捲つた。警官隊は警部野牛道德、警部補神代澤身が巡査十九名を指揮して闘つて居るのであつたが、十六人の決死の壯士が太刀先鋭く斬りたてるので、警官隊には多くの負傷者を出して退却した。闘の濟むだ後に二個の屍が月を浴びて青白かつた。一人は制服を着けた巡査で、一人は平尾八十吉であつた。平尾は生死を共にした同志であるし、巡査は敵ながらも職務に斃れた尊とき犧牲であるから、十五人の同志は二人の死者に敬禮した殊に今の今まで語り合つて居た政友平尾が、鮮血に染つて倒れて居る姿を見ると、それを見捨てゝ行くに忍びなかつた。けれども、退却した警官隊が人數を增して盛返して來る虞があるから、早く其所を立ち去らねばならぬ。十六人が今は十五人となつた一行は宇都宮へ急がうとしたが、爆彈を負はしてある二人の人夫の姿が見えぬので、彼方此方搜すと、田圃の中に顫へて居た。玉水が一喝すると、二人は泥まぶれになつて這ひあがつて來たが、爆彈を入れた具足櫃は負ふて居なかつた。驚いて田圃へ逃げ込むだ拍子に具足櫃を飛ばしてしまつたのであつた。同志の生命よりも大切な爆彈をなくしては大變だと、其の邊を搜すと、二個の具足櫃はあつたが、孰れも蓋が開いて、中の爆彈は田圃の中へ埋つてしまつた。手わけをして搜したが、泥が

深いのと、月が雲にかくれて暗くなつたのとで、僅に數個を捜

し出したゞけで、殆ど全部を見出すことが出來なかつた。その

時、遙か向の方に火影が見えたので、てつきり警官隊の逆襲と思つたから、爆彈を捜すのをやめて、右手の間道をつたつて宇都宮の方へ走つた。白井村へ入つた時は大分空腹を感じて來たから、同村の有志勝田盛一郎を訪ふて食事にありつかうと思つたが、夜道で方角が分らなかつた。そこへ一人の百姓が來たから、それを道案内にして勝田の家へ行つた。勝田の情けで食事をして元氣を恢復すると、同志の一人を失ふたことが殘念でならなかつた。

『平尾の屍をあのまゝ棄て來たのは我黨の恥辱だ、これから後へ戻つて、人の氣づかぬ所へ埋葬して置かうと思ふ、諸君は此所に待つて居てください、僕は一走り行つて來る』

玉水が斯う言ふて表へ出やうとした時、眞壁方面に砲聲が聞えた。警官隊が押寄せて來たのに相違ないから、平尾の屍などに係り合つて居られない。勝田に迷惑のかゝらぬ樣と、一行は勝田の裏手に在る山路を登つて行く中に東の方が白くなつて、山頂に達したは時、金色の雲の間から目映しい光がさして來た。下の方を見渡すと、岩瀨村附近は制服の巡査が鐵砲を持つて彼方にも此方にも屯して居る。その間を騎馬の警部が驅け廻つて

居る。この有樣を見て一行は輕々に山を降ることが出來なくな

つた。

『諸君、見られよ、かうして行手を絕たれてしまつた上は、到底も宇都宮へ入ることはむづかしい。それも我々の武器たる爆彈のある中なれば兎も角、その武器を失ふた今となつては此團を破つて進むことは不可能だ。殘念ではあるが一先づ解散して、お互に此場を逃げて東京に入込み、來月二十五日に飛鳥山で再會することにしやう。再擧は其の時に相談したいと思ふが』

富松が解散說を唱へると、橫山、三浦、河野、小林の四人はそれに反對した。叶はぬまでも宇都宮へ押寄せやうと主張したがその他は皆富松の說に從ふて解散しやうと言ひ出したので、四人もしぶ／＼解散說に同意した。然し鬼怒川を渡るまでは一團となつて居なければ危險だと言ふので、十五人は隊伍を調へて白田蒼野を橫ぎつて、上野小幡まで來たが、朝から全くの食はず飲まずで步いた爲め、饑くて步くことが出來なくなつた。漸く鮑屋と言ふ宿屋の前まで來たから、入らうとすると中から十人ばかりの巡査が驅け出して來た。此所で又烈しい鬪が演じら

れたが、一行は一人の負傷人も出さずに其所を通過した。二十六日の拂曉に栃木縣芳賀郡小林村の山中へ辿り着いた時、横山は再び宇都宮襲撃說を持ち出した。

『諸君と此所で別れて了へば、再び逢ふことはとても出來ない。假令潜伏して夜走るにしても、結局は小吏の手に辱めを受けるに極まつて居る。同じ死ぬるのなれば當初の目的通り宇都宮に押寄せて、斬り死をした方が男子の本懐だ』

横山はどうしても宇都宮へ押寄せやうと言つてきかなかつた。然し解散ときまつた今となつては横山の說に贊成する者がなかつたので、横山はいきなり刀を拔くと自分の腹へ突き立てやうとした。

『早まるな』

と三浦が止めた。富松も今此所で死ぬのは犬死だと、國家の爲めに何所までも奮闘せねばならぬと說き諭した。横山は血涙を飲むで自殺を思ひ止つた。富松は懐中から金を取り出して、それを十五人に別けると、一人が二圓十錢宛の割になつた。十五人は別れの握手をした。皆の眼に涙があつた。

七　同志の就刑、お澄の投身

横山は一行に別れて東京へ向つたが、日光街道は人目につき易いので、わざと田舍の作場路を取つて利根川の渡船場へ出た。日が暮れて人の顔も定かに見えなかつた。渡船場には船が向岸から此方へ着かないので客が待つて居た。客の中に若い女が居た。横山が柳の木にもたれて川面を眺めて居ると、その女が横山の傍へ來て、

『信さん』

小聲で囁いた。見るとそれはお澄であつた。横山は驚いた。お澄が眴せをしたから、渡船場から少し離れた木立の中へ二人で入つた。お澄は横山等の一行が山を降りると、直ぐ警部や巡査が出て來て、一行を山に泊めたのが悪いと言つて父親を警察へ伴れて行つた。自分は調べられたゞけで直ぐ放還されたが、父の身が案じられるので山へ歸らずに居ると、父は東京の方へ送られたので、自分もこれから東京へ行くところだと別れてからのことを語つた。横山はお澄親子にまで迷惑をかけたことを悲しむだ。二人は利根川の水の音を聞きながら、堅く々々手を握り締めて居た。渡船場の方では船が着いたので客を呼び立て丶居た。二人は林から出て船に乘つた。眞暗がりの中を波の上を滑る樣に船が進むで行つた。二人は船の中でも手を握り合つて

居た。此所で別れたらもう此世ではお澄に逢へないと、横山は胸の中で別れを惜むで居た。この船が何時まで岸へ着かねばよいとさへ思つた。けれども船は間もなく對岸へ着いた。乘客が上つた。横山もお澄の手を取つて岸へ上つた。

『これから先は二人で行くと人目につき易いから此所で別れやう、お父さんは氣の毒だけれど、關係のないことが分れば放免になるだらう、壯健で居てくれ』

横山の聲は顫えて居た。お澄は默つてうなづいた。二人は其所で右と左に別れた。横山は暗い心を懷いて東京へ入つた。そして早稻田に栗原足五郎を訪ねると、保田駒吉、小林篤太郎の二人が先に着いて居た。四人は今後の方針に就いていろ〳〵考へて見たが、何分警察の偵察が嚴しくて匿れ場のないのに困つた。栗原が大井憲太郎に相談して見るがよいと言ふから、三人は密に大井を訪ねると、大井は大阪へ行つて家に居らなかつた。この上は有一館に身を寄せるより外に道がないと、有一館に館主山田勇次を訪ねて圍つて貰ひたいと言ふと、山田は自分の一了間できめる譯に行かないと内藤魯一に相談した。内藤は暫らく考へて居たが、

『加波山の旗擧げは我が自由黨の本意でない、我が有一館は全國黨員の協力で設置したものであるから、此所へ三人を圍ふと、累を自由黨に及ぼすことになる。私情に於ては誠に忍びないことではあるが、黨の爲には代へられない、氣の毒だが三人を圍ふ譯に行かぬ』

と三人を保護することを避けた。三人は已むなく其所を立つて八王子に向つた。それは十一月一日であつた。翌二日に山梨縣に入つて猿橋にさしかゝつた時、向から來る男があつた。見るとこれから訪ねやうと思つて居た神山八彌であつたので、三人は奇遇を悅んだ。神山は三人を伴れて後へ引返したが、横山は足を痛めて居るので歩くのが困難であつたから、神山は横山を鳥澤驛の神山亮の家へ預けて、小林と保田とを伴れて都留郡谷村の自分の家へ歸つた。その晩神山亮の家へ警官隊が踏込むで烈しい格鬪の末横山に繩をかけた。それから三日目に保田、小林の二人も山梨警察署へ引かれて行つた。横山が東京に護送された時は、富松、玉水を始め同志の者は悉く逮捕されて居た。自由黨員を憎むで居た政府は、加波山事件を機會に、栃木、茨城の兩縣に亘つて、自由黨員百二十四名を檢擧した。加波山に立籠つた十五人の中、富松正安は千葉縣重罪裁判所で死刑の宣告を受け、栃木重罪裁判所へ廻された杉浦吉副は死刑、河野廣

償、天野市太郎は無期懲役、佐伯正門は重懲役十年、大橋源三郎は重懲役九年に處せられた。東京重罪裁判所で審理をした横山信六、三浦文治、小針重雄、琴田岩松の四人は死刑、玉水嘉一、原利八、草馬佐久馬、五十川元吉は無期懲役の宣告を受けた。山梨重罪裁判所へ廻された保田駒吉は死刑、小林篤太郎は無期懲役に處せられて、加波山事件の結果を告げた。

初瀬山、紅葉の色は、まだ薄し、
　ときへて後の、錦をぞ見む
　　　　富松正安

時ならぬ、時に咲きにし、櫻花、
　散りてぞ花の、いさをなるらん
　　　　保田駒吉

今更に、何にか惜まん、大丈夫の、
　かくなるものと、豫て思へば
　　　　松浦吉副

今日よりは、死出の出路に、登るなり
　これも皇國の、爲めと思へば
　　　　三浦文治

幾歳辛楚事難成　空止憤魂江府城
一片丹心有天識　磴然不顧世間名
　　　　小針重雄

三歳爲囚稀雁鯉　夢魂幾何故園回
鐵窓漏入半輪月　應照萱堂枕上來
　　　　琴田岩松

死刑を執行された人達は、斯うした辭世を殘して從容死に就いた。

横山信六は死刑執行の前夜、小指を嚙切つて血書の辭世を書いた。

天下紛々何點歸　半生事業與心違
滿腔熱血無由注　强向狼門蹈禍機

これを書き終ると、二十四歳を一期として、舌を喰切つて獄中で自殺を遂げた。

それから間もなく、利根川へ身を投げた女があつた。それはお澄であつた。

日本に於ける思想界幷に文藝界の分野

日本に於ける現在の思想的分野と、文藝家の系統的分野とを人に依つて劃然と區分すると云ふことは、頗る困難な事であると共に、第三者の判斷の異なるに從つて、又非常なる相違の在ることは勿論である。随つて或る一二特定の人に依つて其分野を定めるよりは、常に評論界に起つて居られる五六人の御方に其觀る所を卒直に明示して頂いたならば、自ら一致點を發見することが出來やうかと考へたので、本社に於て約三十の思想的系統を列擧して、其主義を主張して居る人、及特に其思想系統を深く研究して居る人を二た通りに分けて、御返事を求めた。御差支へのある御方もあると云ふので、特に二三の御方は匿名を用ひられた。

勿論斯くの如き分類は、唯物論と唯心論、又は現實派と思想派と云つた大綱から出發點として、各分野を定むべきであらうが極めて簡易に、卒直に、大まかに、取敢ず列擧して見た。

■マルクス派社會主義者

河上 肇　○　堺 利彦　櫛田 民藏　（室伏高信）

河上 肇　○　（高畠素之）

堺 利彦　○　櫛田 民藏　河上 肇　荒畑 勝三　（北澤新次郎）

堺 利彦　○　河上 肇　櫛田 民藏　（S 博士）

以上三氏中堺氏は唯物主義、河上氏は精神主義のソシアリストだと思ふ

○　河上博士は其主義を高唱せんが爲めに「社會問題研究」を、堺氏は「新社會評論」を、櫛田氏は「我等」を有してゐる。　（江口渙）

福田 德三　○　堺 利彦　（堺利彦）

山川　均　　荒畑　勝三　　高畠　素之　　安部　磯雄
河上　肇　　石川三四郎　　山口　孤劍　　櫛田　民藏
以上の諸氏は皆之に屬すと云ふを得べし、予も亦た然り。

■社會改良主義者（社會政策主義）

○（室伏高信）
福田　德三　　河津　暹　　米田庄太郎・神戸　正雄
○（高畠素之）
桑田　熊藏　　床次竹二郎
○（北澤新次郎）
姉崎　正治　　河津　暹
○
之に屬する團體として、勞資協調會を擧げ得やう。
○（江口渙）
堀江　歸一　　中澤　臨川
○（堺利彥）
紳士閥の經濟學者、政治學者、社會學者の多數は之に屬す、福田、幸田堀江、米田、神戸、吉野、小泉、河田の諸博士皆然り、但し其中に硬軟の差異程度の色々あるべし。

■無政府共產主義者

○（室伏高信）
大杉　榮　　森戸　辰男
○（高畠素之）
森戸　辰男
○（S博士）
日本に於ける無政府共產主義の急先鋒は、永年間大杉榮君の獨り天下と思はれ居り候處、最近筆禍事件以來、世間に於ては森戸辰男君を以て大杉君を凌ぐアナキストの如くに思ふ者あり、然れども森戸君は無政府共產主義の研究者には相違なきも、決して無政府共產主義者には無之と存じ候、私をして云はしむれば、森戸氏は寧ろヒユマニストに屬するものにして、其精神的なるに於て、河上肇氏に最も近き學說を有せらるゝに非ずやと思ひ候。偶々クロポトキンの學說に傾聽した事は、彼の學說が「『人類の最大幸福』詳しく言へば、『人類社會の各單位の幸福の最大量』を實現する爲の、最良の條件を作出することにして、個人の幸福の中核をなすものは、物質的幸福に非ずして、精神的幸福なり」とする、スピリチュアルな點に共鳴したるに過ぎず、現代の宗敎家又は唯心論者の多くは、此精神的根柢に對しては、比較的多量の感激を有する者なきに非ざれば、單に此點のみを以て、アナキストなりとするに於ては、倘多數の森戸氏を出すべく、司法官權は應接に遑なきことと存じ候、倘大杉榮君の說は發表を差止められたる爲めか不幸にして今日迄明確なるものを見ることを得ず、單に世評に依つて判斷するの外なしと雖も、『改造』五月號「クロポトキン總序」中に於て、「僕がクロポトキン大明神でおさまつてゐたのは、もう十年も十五年も昔だ、はたち前からクロのものを讀み出して、十年近い間クロかぶれしてゐた、少なくとも書物の形で出たものは、片ツ端から買ひ集めて讀み耽つた……併しせめてもの申譯

に斯う白狀しておくが、僕は決してクロ大明神のもうし兒でもなければ又謂ゆる無政府主義者なぞと云ふ至極量見の狹い狂信者でもない」と、明かに其態度を闡明されたるより觀る時は、日本には現在一人の無政府主義者をも有せざることと相成るべく候。

森戶 辰男 ○ 高野岩三郎 山川 均 (北澤 新次郎)

大杉氏には「勞働運動」と云ふ、月刊雜誌がある、必ずしもアナキズムを宣傳してゐるのではない、一般的勞働問題、思想問題の雜誌である。團體としてはない。

森戶 辰男(研究者) ○ 大杉 榮 (江口 渙)

大杉榮氏獨り其の顯著なる代表者なり。森戶辰男氏は其の有力なる「研究者」なり。山川均氏等も幾分の傾向を有す。

■基督教社會主義者

安部 磯雄、○ 帆足理一郎 賀川 豐彦 (室伏 高信)

森戶 辰男 ○ 木村、久一 北澤新次郎 (高畠 素之)

生田 長江 賀川 豐彦 吉野 作造

賀川 豐彦 ○ (北澤 新次郎)

同上 ○ (江口 渙)

○ (堺 利彥)

安部磯雄、石川三四郎、の二氏は廣き意味のマルクス派なると共に、本此派の最も古き代表者なり。河上肇、賀川豐彦氏等も亦此傾向あり。

■人道主義者

有島 武郎 ○ 武者小路實篤 白樺一派 (室伏 高信)

武者小路實篤 ○ (高畠 素之)

中澤 臨川 ○ (北澤 新次郎)

白樺一派には「白樺」「新らしき村」等の機關雜誌を有つてゐる。

吉野 作造 ○ 武者小路實篤(外白樺派) 阿部次郎 有島武郎 (江口 渙)

○ (堺 利彥)

當今の善人君子、センチメンタリストは皆な之に屬す。

■トルストイアン

○ 德富 蘆花　加藤 一夫　（室伏 高信）

○ 德富 蘆花　（江口 渙）

○ （堺 利 彦）
前項の善人君子、一層寡耳にして、一層センチメンタルなる者、若くは一層隱遁的なる者、若くは貧乏的別莊生活の趣味を有する者、之に屬す、前々々の人々も亦此傾向を有す。

文化主義者

○ 桑木 嚴翼　左右田喜一郎　土田 杏村　（室伏 高信）

○ 野村 隈畔　左右田博士　（高畠 素之）

○ 左右田喜一郎　大山 郁夫　長谷川如是閑　桑木 嚴翼　（北澤 新次郎）

○ 此種の團體には「文化學會」がある。「啓明」と「文化」とは其主義の雜誌である。

○ 左右田喜一郎　木村 久一　（江口 渙）

○ （堺 利 彦）

予は未だ正確に此言葉の意味を理解せず、然れどもボンヤリ想像する所に依れば、紳士閥の政治學者、社會學者等の中、幾分社會主義的傾向を有する者、之に屬するが如し、大山、吉野の諸博士或は然らん。

人本主義者

○ 姉崎 正治　（室伏 高信）

○ 大隈 侯爵　（高畠 素之）

○ 姉崎 正治　（江口 渙）

○ 何の事やら分らず　（堺 利 彦）

國家主義者

○ 帝國軍人　（高畠 素之）

○ 福田 德三　阿部 秀助　田中萃一郎　（北澤 新次郎）

○ 佐々木惣一　三宅 雪嶺　（江口 渙）

○ （堺 利 彦）

忠君愛國專賣の諸君、乃至は英雄豪傑自任の諸君、皆之に屬す。

■アナキスト

○（堺　利　彥）

無政府共産主義者と區別したるアナキストは、藝術家、宗敎家、[illegible]蕩[illegible]、金持、泥棒等の中にザラほどあり。

■サンヂカリスト

荒畑　勝三　○（室　伏　高　信）

山川　均　新人會一派　○（北　澤　新　次　郎）

大杉　榮　○（江　口　渙）

米田庄太郎（研究者）　○（堺　利　彥）

荒畑、山川氏等は亦た之に屬すと云ふべし、大杉君も亦然らん、植田好太郎氏は最も猛烈なる此派の代表者なるが如し、新人會の諸君中にも多少此の傾向を見る。

■國家社會主義者

高畠　素之　○（室　伏　高　信）

堀江　歸一　河田　嗣郎

高畠　素之　北　一輝　北　輝二郎　○（高　畠　素　之）

高畠　素之　○（北　澤　新　次　郎）

高畠　素之　○（S　博　士）

高畠素之氏以外大膽に國家社會主義を高唱しゐる人は外にない、堀江博士は近時餘程進んだ思想を持つてゐられる、例へば改造五月號の「生產の社會化」を一讀して氏は大分國家社會主義の思想に近付いて居られると思はれるが、此は矢張り勞働組合主義ではないかと思ふ。

高畠　素之　遠藤　無水　○（江　口　渙）

○（堺　利　彥）

社會改良主義、社會民主主義、修正派社會主義、愛國的社會主義、國民社會主義などの別名を見るを得べし、但し無政府共産主義や、サンヂカリズムと區別する時、マルクス派もボルセキキも、亦た國家社會主義と云ふを得ざるに非ず。

■ボルシエヴイーキ

木村　久一　○（北　澤　新　次　郎）

○（堺　利　彥）

日本現時の情勢の下に在つて、此派の代表者と認むべき者なし、但し、

大抵の社會運動者、勞働運動者、社會主義的傾向者は、多少この傾向を帶びざる者なしと云ふべし。

■カント派社會主義者

河上　肇　○　福田　德三　（高　畠　素　之）

桑木　嚴翼　○　（江　口　渙）

○　（堺　利　彥）

社會改良主義、國家社會主義、修正派社會主義の人々の多くは之に屬す。新人會の靑年諸君が、一面この傾向を有しつゝあり、一面急進的傾向を有するは聊奇なり。

■社會民主々義者

○　（高　畠　素　之）

室伏　高信　堺　利彥

○　（北　澤　新　次　郎）

室伏　高信

○

室伏君の獨力經營「批評」がある。近時ギルドの宣傳に努めてゐる。

（江　口　渙）

河上　肇　○

○　（堺　利　彥）

此名稱は今や只だ獨逸の多數派社會黨を意味するものと見るを得べし。卽ち國家社會主義、修正派社會主義など同視するを便利とす。

■修正派社會主義者

○　（高　畠　素　之）

室伏　高信　堺　利彥

○　（北　澤　新　次　郎）

安部　磯雄

○　（堺　利　彥）

場合に依りては殆んど社會改良主義と同じく、場合に依りて國家社會主義に同じ、學者的社會主義は多く之に屬す。

■ギルドソリアリスト

○　（室　伏　高　信）

賀川　豐彥　北澤新次郎　小泉　信三

○　（北　澤　新　次　郎）

北澤新次郎

○　（S　博　士）

室伏　高信　北澤信次郎　小泉　信三

ギルドを日本に宣傳した功績者は、室伏氏と小泉氏とであらう。室伏氏

は單に研究されたのみでなく、北澤氏と同じくギルドは實行の可能性を最も多く信じて居られはせぬかと思ふ。小泉氏は眞面目なギルドの研究者として擧げたい。

○（江口　渙）

室伏　高信　小泉　信三（研究者として擧ぐ）

○（堺　利彦）

研究者はザラはどあれども、未だ明瞭なる其主能者を見ず、要するに英國式サンヂカリズムとして、或は國家社會主義とサンヂカリズムとの折衷主義として、ボルセキズムと共に總ての社會運動者、勞働運動者に影響を與へ居れり。

■勞働組合主義者

○（室伏　高信）

堀江　歸一　鈴木　文治

○（高畠　素之）

福田　德三　山川　均　荒畑　勝三　鈴木　文治

○（江口　渙）

荒畑　寒村　山川　均

○（堺　利彦）

勞働運動に於ける社會改良主義と云ふを得べし。「穩健」なる勞働運動者は皆之に屬す。

○（北澤　新　次　郎）

堀江　歸一　北澤新次郎

貴社の新しい試みは誠に時期を得たる試みであると信じます。我國の思想界が近時漸次眞劍になつて行くにつれて所謂灰色の人間が何れへか加入しなければならない樣になる事は恰かも中間階級のものが資本家の手先になつて働く事にするか、勞働者の味方となつて有産階級に對抗するか何れかに態度を決しなければならない地位と同樣です。從來我國の所謂學者と云はれたものの中でも隨分態度曖昧なものが尠くなかつたのでしたが斯う官憲の壓迫と一方思想的色彩が明白にならなければならない諸種の事情が出て來まして今迄の樣な無主義主義を保持する事は出來なくなります。實に思想界の健實なる發展のため賀すべき事です。自分は勞働組合主義を保持するもので或點迄はギルドソシヤリズムに共鳴するものであります。此の事は何れ發表したいと思ひます。

■分産主義者

○（室伏　高信）

中澤　臨川

○（高畠　素之）

井箆　節三　中澤　臨川

○（中澤　臨川）

私は分産主義に同意する、私が分産主義に賛成するのは、第一には自由の愛情からである。私はプルードンと共に、獨立した個人が有ちうる唯一の自由の基礎は財産であると信ずる。わたくしは財産の獨立的、非一元的性質を愛する。わたくしは嚴格な社會的責任の觀念を以て能く護ら

れた財産が決して罪惡の原因とならないと思ふ、それのみか、程よく萬人に分たれた私有財産は社會的生活の調和劑としていかにも自然で缺くべからざる幸福の源であるかに考へる(――自分の土地のないものには愛郷の心がない。愛郷の心のない者には、道徳的定着心がない、肉體的に浮浪の徒は精神的にも浮浪の徒である。わが土はわが歸るべき母の懐ろである。――人間には消すべからざる所有の衝動がある。一定適度の私有財産制を許してのこの衝動に安定的滿足を與へることはそれが、惡い方向に發酵するのを防ぐ安全瓣となる。且つまた人類には競爭本能がある。あれは人生の向上に缺くことの出來ない刺戟であつて見れば、この本能の表現は適度に許さるべきである。元氣の溢れた社會の爲には共産の水準に沈んだ死海よりも無邪氣な競爭の餘地を存した分産主義をとるべきである。――正義と自由・一一三―一一五――

○ (堺 利 彦)

無政府共産主義も、サンヂカリズムも、分産主義なりと云ふを得べし。
出題の意義よく分らず。

■デモクラット

○ 吉野 作造　大山 郁夫　佐々木惣一 (室 伏 高 信)

○ 吉野 作造 (北 澤 新 次 郎)

○ 大山 郁夫 (江 口 渙)

○ 資本主義中の左翼、社會改良主義の政治學的表現とも云ひ得べし。 (堺 利 彦)

■ニヒリスト

○ 長谷川如是閑 (室 伏 高 信)

○ 長谷川如是閑 (江 口 渙)

○ 長谷川大山兩氏の雜誌「我等」がある。

○ アナキストと同じとして置く。 (堺 利 彦)

■聖雄主義者

○ 杉森孝次郎 (室 伏 高 信)

○ 同上 (高 畠 素 之)

○ 同上 (江 口 渙)

○ 同上 (北 澤 新 次 郎)

○ 帝國民にして道徳智能に自信あらば、建國の韜の英志を今日相當の規模に發揚して、あすをも待たず世界を一家一村に收縮する常識なかるべからず、列國諸民の各個性に充分の機會を供給する英雄は、現存せる窮屈な國家組織國際關係の中からこそ出でねばならぬ。英雄は各人の個性に雌伏してをる。」その英雄が雄起して、高蹈飛躍する爲めに、音樂もいらう、詩もいらう。世界再造の序曲がこの一文の趣意である。英雄と聖人とは、餘りに久しく離婚したり。兩者の自由意志によつて、熱烈なる戀愛と抱擁とが、此序曲を機會として兩者の間に兩立せよ。個性の解放、事何ぞ容易ならんや。何となれば、個性の解放は個性の組織を意味するからである。聖人と英雄と抱擁して、そこに始めてわれらが希望する新世界秩序は産まれん——人類の再生——一六四——一六五——　（杉森孝次郎）

存せず　○　（堺 利 彥）

■資本主義者

田中幸一郎　○　武藤 山治　（室 伏 高 信）

田中幸一郎　○　大倉喜八郎 徳富 蘇峯　（高 畠 素 之）

徳富 蘇峯　○　（北 澤 新 次 郎）

評に及ばず　○　（堺 利 彥）

■日本主義者

岩野 泡鳴　○　有田 音松　（室 伏 高 信）

岩野 泡鳴　○　（高 畠 素 之）

同上　○　（北 澤 新 次 郎）

岩野氏獨力で「日本主義」を月刊してゐた。

岩野 泡鳴　○　三井 甲之　（江 口 渙）

獨逸の國家主義は獨逸主義なり。日本の國家主義は日本主義なり。岩野泡鳴君の死を弔し、有田ドラクツ商會主人の繁榮を祝す。　（堺 利 彥）

■溫情主義者

桑田 熊藏　○　松岡 均平　（室 伏 高 信）

武藤 山治　○　若宮卯之助　（高 畠 素 之）

添田 壽一　○　帆足理一郎　（北 澤 新 次 郎）

勞資協調會は此主義の信者である。

床次　内相　○　(江　口　渙)

武藤　山治　澁澤　榮一　其他灰色的資本家　○　(堺　利　彥)

■夢想的社會主義者

特殊國の特殊主義なり、但し僞善的社會改良主義と稱するを得べし。

白樺同人　武者小路實篤　○　(北　澤　新　次　郎)

■傳統主義者　○　(堺　利　彥)

日本主義、國家主義と同視し置く。

■中心主義

上杉　愼吉　佐藤鐵太郎　筧　克彥　○　(室　伏　高　信)

山口　孤劍　乃木　希典　○　(高　畠　素　之)

德富　蘇峯　○　(江　口　渙)

續に長し　○　(堺　利　彥)

■勞働資本主義者

山川　均　荒畑　寒村　堺　利彥　鈴木　文治　福田　德三　○　(室　伏　高　信)

■鵺的社會主義者　○　(高　畠　素　之)

堺　利彥　大杉　榮　高畠　素之　遠藤　無水

北　一輝　生田　長江　茅原　華山

■個人主義　○　(堺　利　彥)

アナキズム及び資本主義の中に其の手合甚だ多し。

■マロック主義者　○　(高　畠　素　之)

北　昤吉

■藝術的社會主義者　○　(生　田　長　江)

生田　長江　○　(S　博　士)

武者小路實篤氏の新しき村は、或意味に於て人道主義者の村落でもあるであらうが、藝術的憧憬、又は藝術的衝動が多量に含まれてゐると思はれる、其他今日の藝術家には不言不語の間に此思想が醸成されてゐはせぬであらうか。

日本思想界の分野

生田長江

何々主義での分類も、まんざら無意義な仕事ではないが、本氣にやる爲めには、單に所謂經濟問題や社會問題なぞからばかり分類の標準を取つたのでは十分であるまい。

しかし私自身斯ふ云ふ仕事に、餘り骨を折つて見る酔興と時間とがない。それ故、渡された綱目の中に、思ひ浮んだ儘の人の名前を書き込み折々註釋を附け加へる位の事に止めて置かう。

△**マルクス派社會主義**　堺利彦、河上肇二氏は、その研究としても祖述者としても主張者としても、最も代表的なものであると思ふ。櫛田民藏氏もマルクス學者として造詣の深い人だと聞いてはゐるが、マルクス派社會主義者を以て目せられるやうなところを、どれだけもつてゐられるかは明らかでない。

△**社會改良主義**　社會主義を捨てて、社會政策を取られるやうに見へる點から云へば、福田博士なぞも此主義の中に一括されて差支はあるまい。他に此連中にいくらでもあるであらうが、特に博士を擧げて置く。

△**無政府共産主義**　森戸辰男氏を此中へ入れた人もあるさうだがそれは專ら究極の社會的理想にのみ重きを置いた見方である。その理想へ到達する爲めの方法手段に眼目を置いて見れば、森戸氏なぞは――少くとも氏がこれまでに發表されたものについて見れば――所謂無政府共產主義者からだいぶ遠い處に立つてゐられるやうに思ふ。

大杉榮君はこれまで世間から、日本隨一の無政府共產主義者と見做されてゐるらしいが、五月號の『改造』誌上に御本人自ら『謂はゆる無政府主義者なぞと云ふ至極量見の狹い狂信者でもない』と宣言してゐる。

どんな人が此項目の中にはいるべきものか、一寸私には見當が附かない。

△**基督教社會主義**　所謂階級鬪爭を基督教的平和主義（通俗的解釋に於ける）の立場から是認しないと云ひ乍ら、其他の點で出來るだけ社會主義的改造をして行かうとするのが、基督教社會主義であるならばふるいところでは安部磯雄氏、新しい處では賀川豐彦氏なぞは、さうした傾向がどれだけか認められるやうに思ふ。

△**人道主義**　武者小路實篤氏はじめ『新しい村』の人々。吉野作造、中澤臨川氏等も、その中に一括されることを、それほど迷惑に感じられないであらう。

私自身も、人道主義者を以て目されることに、太した不服もない。但し、私の人道主義が他の人々の人道主義と、かなり異つたものであることは勿論である。

△トルストイアン　トルストイを尊敬すべき人物、賞すべき人物と思ふこと、又さう思はない人々との折々の論争さへ辞しないといふことが、トルスイアンの資格たるべく十分なものであるならば、私自身もトルストイアンの中へ加へて頂きたいのである。

△文化主義　私の記憶にして謬らずんば、左右田喜一郎氏土田杏村氏などは、御自分などから此主義を名乗つてゐられたやうである。

所謂文化主義か、矛盾階級の早晩産み出すべき新文化（フリイドリツヒ・ニイチエすらも不可能を否定しなかつた）を軽視しない限に於て、私自身も文化主義の信奉者たることを光栄とする。

△人本主義　姉崎博士の論文に此文字の用ゐられてゐたことを記憶する。そして其内容は一種の人道主義とも云ふべきものであつたやうに思ふ。

△國家主義　三井甲之氏等は、かなり眞面目な國家主義者もしくは民族主義者であると思ふ。

日蓮宗の人々の國家主義が、どれだけ眞面目なものであるかは暫く措き、それが宗祖日蓮上人の志から非常に遠いものであることだけは明々白々である。

日蓮の所謂日本は文化國としての日本である。軍國としての日本ではない。

△アナアキスト　善き政府にも惡しき政府にも、出來るだけ交渉せず、出來るだけ無頓着でゐようとする今日の文士藝術家の大部分は、實際上一種のアナアキストたることを失はない。

△サンデイカリスト　大杉榮君などは最善の代表者かも知れない。本人にきいて見ると、さうではないと云ふかも知れない。

山川均、荒畑勝三君等もサンデイカリストに一番近いところに立つてゐられるやうにも想像される。

言論の自由の少しばかり不足してゐる今日の日本では、こんな問題について要領を得ないこと夥しい。

△國家社會主義　高畠素之、遠藤無水氏等。

△ボルセビイキ　片山潜氏等。

△デモクラツト　吉野作造、大山郁夫氏等。

△ニヒリスト　長谷川如是閑氏を此中に入れる人もあるとのことだが、私共にはその當否が分らない。

△聖雄主義　杉森孝次郎氏。

△資本主義　勞資協調主義温情主義社會改良主義の正體はつまり資本主義にほかならないと思ふ。

△日本主義　岩野君がなくなつて最も賑やかな代表者を失つた。

△温情主義　早川千吉郎、武藤山治氏等。これらの人々が厳密な意味で思想界の人々であるかどうかは知らない。

△備傳主義　民族や國家の傳統ばかりに重きを置かずし普く人類の文化に傳統として働くもの總てを尙ぶといふのが、やはり傳統主義であり得るならば、私自身も傳統主義者です。

社會主義といふと、とかくに淺薄な唯物哲學の根底を聯想させるので私などは社會主義者と呼ばれることをいやがるのであるが、しかしヰリアムモリスなどを藝術社會主義者といふのならば、その派の中に入れて貰ふ位は我慢しようか。

いや、やつぱり社會主義者はいやだ　社會主義者——何といつても[illegible]な、何といふ調子の低い言葉であらう！

私はやつぱり人道主義者、藝術主義者でいい。藝術至上主義者でもいい。

文藝家の思想的分野

江口渙

一、——浪漫主義。新浪漫主義。高踏主義。藝術至上主義。唯美主義享樂主義。惡魔主義。象徵主義。新古典主義。傳統主義。

——に屬すべき人々は、

泉鏡花、谷崎潤一郎、佐藤春夫、室生犀星、芥川龍之介、里見弴、永井荷風、森鷗外、鈴木三重吉、近松秋江、久保田萬太郎、水上瀧太郎、豐島與志雄、近藤經一、生田長江、秋田雨雀、山本有三、菅野二十一、長田秀雄、中戸川吉二、南部修太郎、有島生馬、邦枝完二、小島政二郎、須藤鐘一、灰野庄平、成瀨正一、太宰施門、森田草平、田中純、相馬泰三、葛西善藏、等。

二、——自然主義。個人主義。徹底自然主義。虛無主義。現實主義。

——に屬すべき人々は、

德田秋聲、田山花袋、島崎藤村、正宗白鳥、岩野泡鳴、中村星湖、廣津和郎、谷崎精二、加能作次郎、細田民樹、細田源吉、福永挽歌、鈴木善太郎、白石實三、前田晁、加藤武雄、水守龜之助、等。

三、——理想主義。人道主義。人間主義。民衆主義。社會主義。

——に屬すべき人々は、

武者小路實篤、有島武郎、長與善郎、志賀直哉、菊池寬、久米正雄、宇野浩二、加藤一夫、藤森成吉、宮地嘉六、島田淸次郎、江馬修、小川未明、上司小劍、吉田絃二郎、舟木重信、萬造寺齊、安成二郎、野上彌生子、野村愛正、中條百合子、武林無想庵、中村吉藏、幸田露伴、等。

宇野浩二

變な事を言ひますね、そんな事をしたら皆が怒りますよ、江口に書かしたんですか、見せて下さい、僕はこんなに大勢の人を知りません、

鏡花、潤一郎、春夫、犀生、龍之介、淳、荷風、鷗外、三重吉、萬太郎、與志雄、二十一、生馬、

これ等の人々は、この位看板が上つてゐるんですから、「一」の中のどれかに入れてもいゝでせうね、しかし怒つて來ても知りませんよ。

二番目ですか、

秋聲、白鳥、泡鳴、花袋、藤村、星湖（などといふ人々は自然主義と定つてるんでせう）和郎、精二、武雄、龜之助、兩細田、作次郎 挽歌、善藏、泰三、直哉、成吉（もこゝへ入れといたらいゝでせう。）

三、——

實篤、善郎 武郎、佐、濟二郎、一夫、正夫、嘉六、江口渙、寛、未明、枝二郎、

ざつとこんなものですかねえ、……よくこれだけ色々の主義の名前を考へ出しましたね、これで、一寸讀上げて見て下さい、江口が書いた人の中で、抜けてる人は誰々ですか、

秋江、瀧太郎、經一、長江、雨雀、有三、秀雄、吉二、修太郎、政二郎、鐘一、庄平、正一、施門、草平、純、善太郎、正雄、浩二、齊、重信、吉藏 彌生子、愛生、露伴、小劍、百合子、無想庵、

少し面倒くさくなりましたね、この中には作品を全然知らない人も一つ二つありますからね、困りましたね、

瀧太郎、吉二、修太郎、完二、政二郎、（それから）庄平、正一、施門、草平、善太郎、正雄、露伴、無想庵、を「一」に入れて、

秋江、長江、鐘一、純、重信、吉藏、秀雄、を「二」に入れて、

經一、雨雀、齊、二郎、愛生、小劍、百合子、を「三」に入れときめませうか。以上、文責記者にあり、言責も亦記者にありとしといて下さい

水守龜之助

一、谷崎潤一郎、永井荷風、小川未明、芥川龍之介、豐島與志雄、里見弴、久保田萬太郎、長田秀雄、中戸川吉二、久米正雄、島崎藤村、宇野浩二、室生犀星、佐藤春夫、水上瀧太郎、泉鏡花、鈴木善太郎、

二、徳田秋聲、田山花袋、岩野泡鳴、正宗白鳥、志賀直哉、葛西善藏中村星湖、加能作次郎、谷崎精二、相馬泰三、白石實三、加藤武雄細田源吉、福永挽歌、上司小劍、前田晁、須藤鐘一、藤森成吉、

三、武者小路實篤、有島武郎、長與善郎、加藤一夫、宮地嘉六、廣津和郎、吉田弦二郎、野上彌生子、江口渙、青木重信、細田民樹、秋田雨雀、島田清次郎、江馬修、菊池寛、有島生馬、南部修太郎

菊池寛

凡ての作家は、いろ／＼な要素を持つて居るもので、それを簡單に別けるなどゝ云ふことは、甚だ下らないことだが、かりそめに別けるならば、先づ人生觀の上の差別で別け、その次ぎに藝術觀上の差別で別けねばならぬ。人生觀上のイズムと藝術觀上のイズムをごつちやにしてはならない。

(イ)人生に對する態度の上で。

(一)理想主義乃至はそれに近い人。(人道主義、社會主義、人間主義、民衆主義、等は之に屬す)

武者小路。有島武郎。志賀直哉。長與善郎。近藤經一。廣津和郎。泉鏡花。秋田雨雀。舟木重信。南部修太郎。江口渙。

(二)現實主義乃至はそれに近い人。(自然主義。個人主義。虛無主義享樂主義などは、之に屬すと思ふ)

谷崎潤一郎。芥川龍之介。里見弴。久米正雄。永井荷風。中戸川吉二。正宗白鳥。田山花袋。葛西善藏。相馬泰三。宇野浩二。

(三)以上の中間にあるやうに思はれる人。島崎藤村。中村星湖。谷崎精二。加藤武雄。水守龜之助。

(ロ)藝術に對する態度の上で。

(一)理想主義に屬する人(藝術の上では、理想を持つて居る人。藝術上の浪漫主義者、高踏主義、藝術至上主義。象徵主義。郷土藝術主義之に屬す)

谷崎潤一郎。泉鏡花。佐藤春夫。芥川龍之介。久米正雄。里見弴。永井荷風。中戸川吉二。岩野泡鳴。宇野浩二。久保田萬太郎。

(二)現實主義に屬する人々(藝術上の自然主義、現實主義を奉持する人々)

志賀直哉。德田秋聲。田山花袋。中村星湖。廣津和郎。加藤武雄。水守龜之助。加能作次郎。

芥川などは人生觀の上では可なりリアリストであるが、藝術的にはアイデアリストだと思ふ。武者小路氏は、人生觀の上では、アイデアリストであるが、藝術に就てはリアリストだと思ふ。「人生はかうならなければならぬ」と思つて居る人でも藝術に對しては、何の理想も持つて居ない人があり、「藝術はかうならなければならぬ」と主張して居る人でも、ありのまゝに人生を肯定して居る人もある。だから、作家を別ける場合は、人生觀の上で別けることゝ藝術觀の上で別けることゝをごつちやにしてはならないと思ふ。

不思議なことに、人生に對して理想を持つて居る人々は、藝術的には理想を持つて居ない人が多く、藝術に對して理想を持つて居る人には、人生に對して何等の理想をも示して居ない人が多い。

社會講談

社會講談新欄設置豫告

■本誌が絶えず世に卒先して計畫し斷行する新らしき試みの一つとして、七月號以下、毎號「社會講談」の一欄を設けます。

■講談なる者が一種の歴史物語として、話術から變じて文藝に進化しつゝある事は、既に眼前の事實であります。然しながら話術としての講談その儘を文字に寫し出したした現在の講談本が、讀物として甚だ不滿足の者であるは、申すまでもありません。そこで講談本の「改造」即ち「書き直し」が必要となります。

■然しながら又、講談の改造は決して形式上の事ばかりではありません。從來の講談は其の基調として常に一種の平民的氣象、反抗的精神を有してゐるとは云へ、猶そこに幾多の舊思想、舊道德が絡んで居ります。そこで此の講談を十分力強く新時代の教化に役立たしめる爲には、亦た思想上にそれを改造する必要があります。

■右の如き趣意からして、本誌の「社會講談」は即ち現今の新時代に適應すべき、形式上及び思想上の改造講談であります。平易通俗な點から云へば從來の講談と少しも違はず、而も新思想を鼓吹する點から云へば堂々たる論文と同じ効果を持ち、猶ほ文藝的價値に於いては小說創作に比して敢て遜色なき事を確信するものであります。

■七月號及び逐號掲載すべき「社會講談」の題目及び執筆者は左の通りで、爾後續々諸名家の勞作を發表いたします。切に諸君の御熱讀御批評を仰ぐ。

清新平易通俗なる歴史小說

二世相創作

■いかけ松　堺利彦
■石川五右衛門　上司小剣
■英傑サウル　冲野岩三郎
■太閤記　生方敏郎
■藤十郎と富蔵　白柳秀湖
■清水の次郎長　江口渙
■西郷隆盛　生田長江
■老女江島　大庭柯公
■鼠小僧次郎吉　荒畑寒村
■福間の又左　伊藤野枝

形式上及思想上の改造講談連載

藝術的氣品豊満なる勞作

新刊紹介

▲**最近社會思想の研究**（米國I・W・Wの研究）（文學博士米田庄太郎著）米國の社會運動中最も特色のある、又最も注目すべきI・W・Wを研究されたものである。先づI・W・Wの淵源を究め、米國に於ける勞働組合と社會主義及無政府主義との關係とI・W・Wの準備を述べ、茲に誕生に至るまでの經緯を說き進んで米國に於ける外國移民の發達幷に最近に於ける其品質の變動を論じたる後、千九百八年より米國參戰までのI・W・Wの形勢、及び參戰より今年一月に至る迄の活動を詳細に研究されてある。坊間に相似たものが現はれ、統計其他未だ最近のものに非ずして不滿を感じたことがあつたが、此書の現はるゝに依り茲に最近のI・W・Wが了解することが出來たのを喜ぶ。豐滿た思想と暢達の行文とは更に深き敬意を感ずる社會思想を知らんとする士勞働運動を爲さんとする人の必讀書として推す（定價二圓九十錢京都丸太町寺町弘文堂）

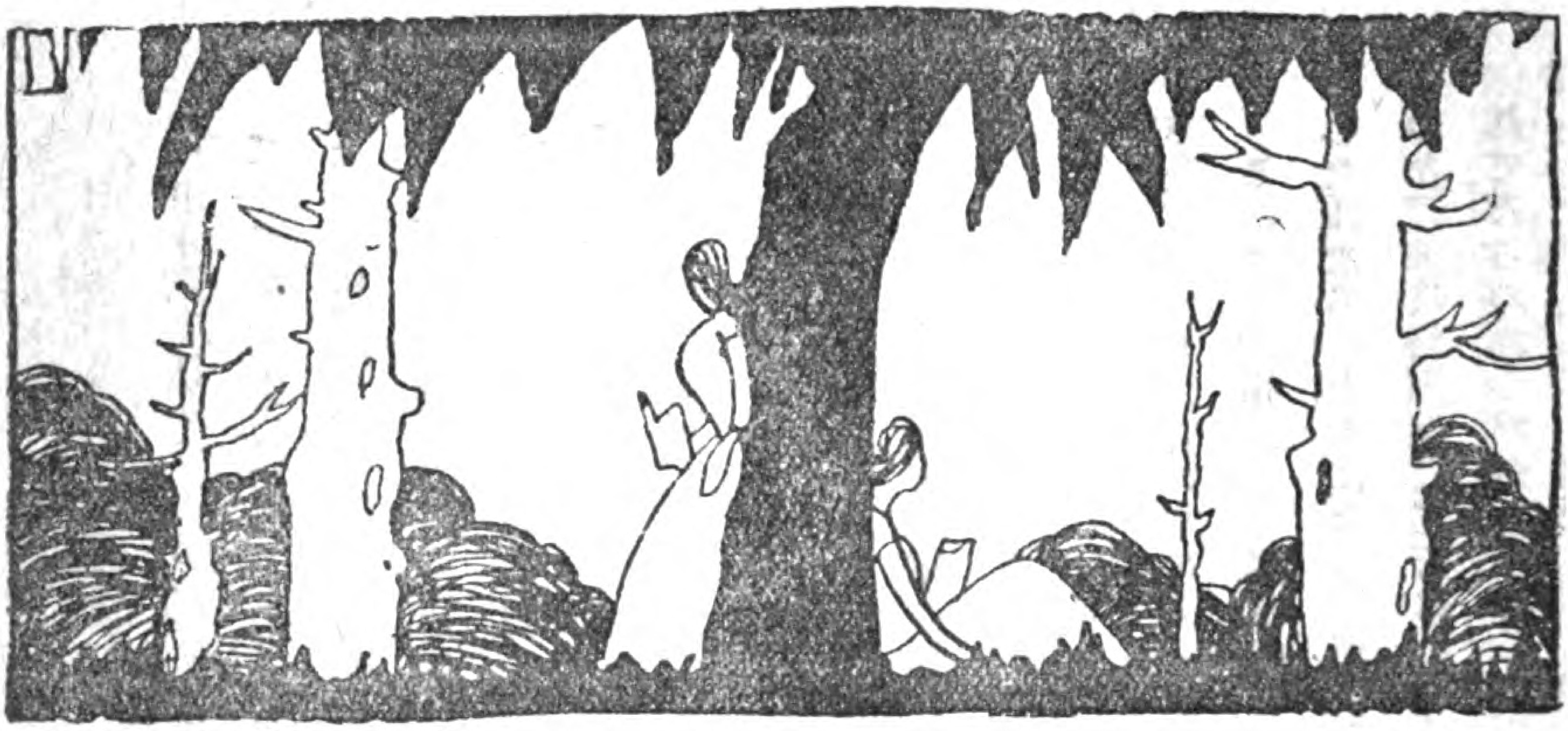
▲**勞働組合論**（法學博士堀江歸一著）社會叢書の第一册にして勞働者の團結權、組合の職分、組合の鬪爭的職分と組織等の根本原則を論述し、更に英國の三角同盟と、組合の功業、組合と政治、並に我國現下の勞働法規問題に及んで博士の深奧なる研究の結晶を著されたものである。殊に組合法案が內務省から提出せられんとしてゐる際、是非共一讀研究して置くべき好資料であらう（定價貳圓芝區三田一ノ十三國文堂）

▲**利益分配法**（法學博士瀧本誠一著）社會叢書の第二册で、勞働賃銀制度の改良案としての利益分配法を研究したものである。『余は我國の現狀に於て此利益分配法は歐米の先進國より比較的實行し易く其効果を收め易い』と此の序文にもある通り、眞に勞資相互の意志合致した利益分配法は必ず効あるべき筈である、唯資本家が自利の爲めに能く實施するを躊躇してゐるのみである。本書は即ち此盲見を開發して餘りありと思ふ（定價一圓八十錢芝三田一ノ十三國文堂）

▲**愛と生活**（山田わか著）社會問題に對して一隻眼を有する夫人の論文集である。因習のかたい殼をかぶせられて弱く脆くなつてゐた夫人の心を目ざましてくれた夫の力、夫れに自ら米國で體驗した苦酸を根柢とした夫人の哲學を語るものは本書である（定價一圓三十錢神田表神保町六　三德社）

▲**動搖の巷を眺めて**（西宮藤朝著）新進文藝評論家としての氏の論文集で、改造思想の將來、眞の文化生活を求めて、人と事業等の評論に此獨特の立場より細論したものである（定價一圓三十錢神田表神保町六、三德社）

▲**勞働組合の話**（井箆節三譯）ギルドソシアリズムの權威コールの原著を譯出したパンフレツトで勞働組合に關する著書として最も簡單に要領を得たものであらう（定價四十錢東京小石川小日向臺町二文化學會）



惡夢

葛西善藏

一

一郎が正午に村役場をひけて、この三四日遠退いてゐた彼等を泉屋の二階に訪ねて見ると、川島がこれからO市のうちへ行つて來るのだと云つて、仕度をしてゐた。

『さつきうちから電話だつたものだからね、すぐ歸つて來るだが、鈴村君々も一緒に行かないかね。久しぶりで鰻でも喰べて來ようぢやないか』と川島が一郎の顏を見ると云つた。

『さうしたまへな。俺がひとりで留守番をしてゐるから。そして君たちの歸つて來るまで素敵な名案を考へ出して置くよ』と井出も例のニヤリとした凄い薄笑を浮べて、長い口髭を引張りながら、錆びた聲をして弥ひるやうな調子で云つた。

『どうせ井出君の名案と來ちやアな、暴風的名案に違えあんめえが、併しひとりで留守番も退屈だらうから、まあ精々名案を凝らして見るんだね。その代りお土産はどつさり持つて來てやるよ。……ぢやあ鈴村君出かけようか』と川島も意味ありげに云つて、二人は井出を殘して宿屋を出て、通りに待つ　ゐた自働車まで歩るい

た。一郎は羽織も袴もうちへ脱いで來て、白地の單衣を着たなりで川島と並んで腰をかけた。

H温泉からO市までは三里ばかしの道程で、自働車では三十分程の時間であつたが、その間ゝ川島はいつになくむつつりと默り込んで、暗い顔を見せてゐた。で一郎にもいよ〳〵問題が切迫してゐることがはつきりと感づかれたが、さてそれがどんな風に、――川島一流の辛辣？。井出の暴風的？……いづれにしても彼等のやうに度胸の据つてない一郎としては、考へたゞけでも胸騷ぎがしない譯に行かないのだ。M市の春奴の方の問題はどうなつてゐるか、そのことについても此頃彼等は一郎に餘り打明けた話をしないが、この春奴のことでは川島もかなり頭を惱まして、此頃やうやく七分通りまで漕ぎ附けた樣子であるが、今日の用事もその方ではないかと一郎も思つて見たりしたが、一郎の方の問題をもこのまゝで放つて了ふのやうな彼等でないことは、一郎にも解り切つたことであつた。

一郎はこのH温泉でのたつた一軒の小さな質屋の一人息子で、二十八になつてゐた。村の小學校を出るとM市の電信技手の養成所に這入り、そこを出てすぐ村の局に勤めることになつたが、二三年前に止めて役場の方へ出てゐた。所謂村での智識階級の一人で、文學の愛好者で、青年會では幹事などやつてゐた。

川島とはこの四五年來の知合であつたが、その間に川島自身が關係をつけて此村から引こ拔いて行つた妓が四五人もあつて、一郎はいつもその手先きとなつて働いてゐた。この春若松屋から拔いて行つた桃代と云ふ十九になる妓も、一郎がうまく下を働いて昨年の秋から川島に引かけ、今はO市でやはり同じ名の桃代で出てゐるのであつた。また彼自身が囮になつて川島の手に渡した妓も一人や二人あつた。

この春、役場のすぐ隣りの新井屋へ、東京では屋敷奉公してゐたと云ふちよつと可愛らしい、下ぶくれのおつとりとした顔だちの十七になる子が來たが、彼は逸早くその子に目をつけた。彼の流義はいつも斯うした新米の妓に限られてゐた。彼は料理屋などではひどく評判がわるいし、金使ひも汚ないので、少し村に居附いた妓たちからは爪彈き者にされてゐるのだつたが、斯うした新米の、殊に若い子などには一寸好かれさうな樣子をしてゐた。短かく前の方で分けた

氣取つた髮の刈方をして、頰が削け過ぎてはゐるが色白の優男型で、金縁眼鏡をかけ、ゴム草履を履いて、細いステッキなぞ振つて歩いてゐるので、新米の若い妓なぞつひ引かゝることになるのである。そして、まだほんとには色戀の道も知らぬらしいその子は、いつしかさうした彼の誘惑にかゝつてゐたのであつた。

二ヶ月程仕込まれたばかしで、ちよん子と云ふ名で一本で出ることになり、そのひろめの晩、例の料理屋のお座敷からの歸りを途中に待伏せしてゐて、彼はお宮の境内の方へ彼女を引張つて行つた。それからは夜更けに役場の宿直室に忍び込ませたり、晝間こつそりと汚ない小料理屋で一本か二本の玉で呼ぶやうな遊び方を續けて來てゐた。がこの女をも川島の手に渡さうと云ふやうな考へは最初からなかつた。二十六の獨身者として、女は必要でもあつたし、またどこまでも初心な娘々した相手に對して、彼はいつになく眞實な情味を感じてもゐた。で、川島たちに嗅ぎつかれて、『なんでえ、あんな娘つこなんかにうつゝを拔かしやがつて、君も餘つ程どうかしたな。それほどなんだつたら俺のうちに來たかつて勝手に會へるぢやないか』斯う嚇かされるやうに云はれても、彼はいつも煮え切らない返事で、彼等の追求を避けるやうにしてゐた。この節二百圓位ゐの金でちよん子位ゐの妓を拔いて行かれるとすれば、全くの掘出し物に違ひないので、川島は自分のうちへ置くつもりらしかつた。『慾張つてゐやがらあ……』と一郎も腹の中で呟かずにはゐられなかつた。

二

川島たちはもうひと月餘りも逗留してゐて、相變らずの豪奢ぶりを發揮してゐたのである。春奴と云ふ妓はM市でも一流の流行つ兒で、文學藝者として聞えてゐた。美人と云ふ方ではなく、藝も普通で、細い顔の幾らかお凸の目立つ顔であつたが、縣廳の若い役人ほどに所謂理智的だと云はれる程度の大氣があり、一通りの飜譯物の小說は讀んでゐるらしかつた。そして前から彼女につぎ込んでゐたその地方の若い法學士の郡長が、此頃では自分の方から落籍を女に迫り、

正式に結婚しようと云ふほどの逆上せ方になつて來てゐた。さうした事情のところへ川島が飛び込んで、獨特の手腕で、ほんの二三回會つたばかしで女の心を引つけて了つたのだ。そして二三日も泊つて行つたが、さうした場合にもカラマゾフ兄弟や出家とその弟子など手提げバックに入れて來てゐた。

　彼等がH溫泉へ來て八九日もすると、春奴はひとりでM市からやつて來た。

『それはね、私しとても、どちらかと云ふと川島さんの方に多く心が動いてゐるのは事實なんですけど、それでないと、ほんのまだ昨今のなんでせう、如何になんでも斯うして圖々しく私の方からやつて來られはしないんですけど、それにしてもあの人にさうした眞實な……さうした眞實な愛なんかわかるやうな質の人でせうか、私には疑問に思はれますわ。私もこれまでのあの人の噂さについては聞いてないこともないんですから、あの人の言葉をそのまゝ眞實として受け入れられない氣がしますわ』

『それはね、過去の川島君の行動に對しては、多少世間の非難の當つてる點も無きにしもあらずでせうが、しかし僕の觀察するところでは、現在の川島君の心持はだいぶ變つて來てることは確かですね。この春來た時分なんかと較べては恐らく心機一轉したと云つてもいゝでせう。自分でもしきりに覺醒とか眞實の生活とか云つてゐるやうですがね、今度はほとんど料理屋歩るきもしないやうで、やはり出家とその弟子なんか讀み耽つてしきりに考へ込んでるやうですよ。僕はやはり、あなたの感化だと思つてるんですがね。兎に角川島君も、折角あなたのやうな人が見つかつたのですからね、この邊で生活を全く一變して、眞實一路と云つたやうな生活に這入るべきだと思ひますよ。僕なんかもしよつちうさうは考へてはゐるんですがね、何しろまだ適當な相手が見つからないものですから……』

『知つてますわ。ちよん子さんと云ふねえ……』

『いや、あれはほんの……』と、一郎も顏を赤らめた。

一郎は最初から川島の意を含んで、ひとりでよく春奴を散歩に引張り出しては、生噛りのドストエフスキー物の人物

など引合ひに出して、彼女の虚榮心を煽ぎ立てるやうな役目を勤めてゐた。最初のうちは、彼が全く名も聞いたことも無いやうな本を女が讀んでゐるので、つひ臆病な曖昧な調子で下手に出てゐたが、二三度も話し合つて見ると、女の頭腦の全く散漫でなつてないことがわかり、いゝ加減な屁理屈でも雜作なく相手をやり込め得る自信が出來た。『なあんだ、M市一流の文學藝者なんて云つてもこんなものか』と、彼は今更のやうに自分の頭腦を誇らしく、そして相手を腹の中で嘲笑した。頭腦だつて斯んな程度だし、容貌から云つたつて迚も川島の敵ではないと思つた。やつぱし可哀相にツンと胸を張つて、どこやら池なんかの水鳥がスイ〳〵と泳いででもゐるやうな誇らしげな様子をしたこの女も、今に彼等の喰物になつて了ふのだと、一郎は同情をそゝられる氣もした。若しさうではなく、川島も今度はほんとにこの女に惚れて、この女相手に所謂眞實な生活を夢見てゐるのだとせば、川島と云ふ男も案外甘い男だと、いつもその手先となつて働いて來てゐた彼だけに、一郎としては皮肉な微笑を禁じ得ないのであつた。

が、彼にも川島のほんとの心持がだん〳〵わかりかけて來た。川島はO市で抱えを三四人置いて小さな藝者屋をしてゐるのだつたが、美貌を資本の女衒が本職で、藝者屋は看板に過ぎないのである。それが今度、彼が春奴に口でも云ひ手紙にもしば〳〵書いたやうに、一大覺醒をして眞實の生活に入らうと思ひ立つたのだ。永年身に浸み込んだ女衒商賣を打切り、春奴を女將としてうちへ入れて、藝者屋の方を盛大にやり出さうと云ふ計劃であつた。それで彼は、自分ながらも滑稽に感じられるやうな眞實だとか理想だとか信仰、愛などと云ふ言葉など書きつらねて、相手を自分の物にしようと心を碎いた。M市とH温泉との間に毎日電話が交はされた。其後も春奴が來てる間はO市から自分の抱えの見すぼらしい妓たちを替り番こに呼び寄せ、姐さん〳〵とお追從を云はせたり、彼女等との折合ひについて注意も拂つてゐた。春奴がカラマゾフ兄弟を枕に、大き過ぎる感じの鼻をして口をポカンと開けて晝寢をしてゐるだらしない姿を見ても、井出や一郎の前を兼ねても、厭な顏するばかしで咎めるほどのことはしなかつた。しかし元來が約ましい性質の彼女は、借金があると云つても大した額ではなかつたし、若い郡長さんと云ふ立派な旦那もついてゐるので、如何に蟲の

好いた男のことではあり、郡長の奥さんよりか藝者屋の女将の方が性に合つてゐるとは思つても、彼女としては當然思ひ惑はねばならぬ問題であつた。

また、川島自身の事情にしても、いよ〳〵彼女を引入れると云ふことになると、養家との關係が一層難かしくなるのである。彼の養家はやはりO市在の農家で、養母とひどく身體の弱い細君とが親戚の監督の下に留守を守つてゐて、家政の上では全く彼の手も足も出ないやうな狀態になつてゐた。彼は此度は幾らかの纏つた資金を養家から引出さうと云ふ下心であつたが、その前に、まづこの度の計劃について妾を入れると云ふことの承諾を得てかゝらねばならなかつた。斯うした用件で、ふだんからピストルなど潜ませてある鞄を持つた井出をつれて、川島は二三度も自分の村に出向いて行つた。

三

がすべてが、彼等のやつてることが、一郎の眼には視透しがつかなかないのだ。が兎に角春奴の方の問題が一段落を告げ、それで今度はちよん子の處分にかゝつて近々に引揚げるつもりらしいと云ふことだけは一郎にも推察された。で自働車の中でも、さつき出がけに井出の云つた名案と云ふ言葉に暗く胸を塞がれて、不安に神經を惱ましてゐた。あの井出の人相相應な名案ではどんな恐ろしいことをもし兼ねないと思ふと、今日ひよつこり梟屋を訪ねて取摑つた不幸が嘆かれた。

『一體井出さんは亞米利加で何をしてゐたんでせう。やつぱし商賣の方でせうか？』と、一郎は自分の不安な氣持を紛らさうとして、斯う並んで坐つてゐる川島に聲をかけた。

『さあ、やつぱし何だらう、農場でもやつてゐたんだらうがね、それを賣拂つてども來たものらしいがね、僕にも詳しいことは云はないから……』と、川島は話を避けたさうに、斯う云つたなり口を噤んではやはりむつゝりした顔を續け

た。

新井屋では、やう〳〵お座敷へ出せるまでに鍛錬して、これからいゝ旦那でもつけようと云ふ大事なちよん子が、出る早々ふだんからげちげち扱ひにしてゐる一郎に狙ひ落されたと云ふことが業腹でならなかつた矢先き、川島たちが這入り込んだと云ふので、必死になつて警戒した。ちよん子の親元や世話人の方へも手紙を出し、近所の同業や他所のお座敷へも一切一人では出さぬほどにしてゐた。一郎が役場の宿直室に忍び込ませる望みは、全く絶えて了つた。斯う堰かれて見ると、一郎もつひ意地になり、『えゝッ糞！。そんなにまでしやがるんだつたら、こつちにも覺悟があるぞ』と創けた頬をビリ〳〵させては、川島の手に渡して了ふと云ふ氣にもなつたりした。

その時分、川島が小間使ひ代りにつれて來てゐた下地つ子のそのちやんと云ふ十二になる子が、間諜として巧にちよん子に接近してゐた。新井屋の人達の警戒の目を盗んでは、ちよい〳〵と立話の機會を覘はせた。

『ちよん子姐ちやん、……あんた一郎さんに會ひたいでせうねえ？』そめちやんはませたしなを作つては、斯う誘ひかけるのであつた。

『それは會ひたいわ、あたし。でもねえ……』

『ほんとにねえ、無理もないわ。ですからね、いつそO市の方へ來ちやあどう？。うちの旦那はそれはいゝ人よ。うちの姐さんたちもそれはみんないゝ人たちよ。だからね、うちの旦那に話するとどうにでもして呉れてよ。さうなるとあんたは幾らだつて一郎さんに會へるぢやないの。あんたのうちの人たちはみんないゝ人たちぢや無いやうねえ。あの若子さんと云ふ姐さんも随分意地のわるさうな顔をしてるわねえ。だからね、うちの旦那もあんたのことを氣の毒がつてゝよ あんなに會ひたがつてゐるものを會はせないなんて随分可哀想だと云つてゝよ』

『だつてねえ……』

『いゝわ、それではあたしが引受けてね、明日乾度會はしてあげるわ。明日の夕方ね、觀音様にお參りにでも出る風を

してちよつと脫けてゐらつしやいな。あたしあそこの裏のとこで待つてますからね、そしてあんたもよく一郎さんの心持を聽いて見なくちや駄目よ。あたしも加勢するわ。一郎さんも何だか此頃ちよつと變でせう？』

『…………………………』

その翌日の夕方、一郎はこの二人と觀音堂前の汚ない蕎麥屋の二階でこつそり會つた。ちよん子が彼の顏を見ると、何も云ひ出さないうちに、眼を淚で一ぱいにした。それを見たその子は同情に燃え立つたやうな眼をぢいつと一郎に向けて、キイ〱聲で叱りつける調子で云ひ出した。

『それご覽なさいな！　鈴村さんは…ちよん子姐ちやんが泣いちやつたぢやないの。あんたのやうな薄情な男つてありやしないわ。こんな優しい姐ちやんに薄情するなんて罸が當るわよ。誰のお蔭でこの姐ちやんがうちの人たちからこんなに苛められてゐると思つてなさるの！。みんなあんたの爲めよ。あたしだつて隨分姐ちやんが可哀相だと思つてよ。あんただつて男ぢやないの。あんたも男だつたらどうかしてあげるのが本當でせう。あたしだつて隨分口惜しいと思ふわ。…ほんとにねえちよん子姐ちやん、斯んな薄情な人思ひ切つちまひなさいな。ちよん子姐ちやんがおこらなくたつてあたしがおこつて見せるわ。えゝツ口惜しい…』

斯う齒ぎしりしながら起ちあがつて、茶湯臺の向うに坐つてゐた一郎の傍へ寄つて行つたが、大膽に力を込めた平手で、ピッシャリ〱と二度彼の頰桁を張つた。『何！』と彼も咄嗟の怒りに顏色を變へたが、氣を取直して苦笑に紛らした。

『えゝ、あたしちよん子さんに代つて打つてあげたのよ。それが口惜しかつたら、こんな可哀相なちよん子さんを苛めるやうなことをしないで、早くどうかしてあげなさいな。…さあ、ちよん子さん行きませうよ。こんな薄情な人と話したつてつまらないことよ。さあ行つちまひませうよ…』

その子は斯う云つて、淚に濡れたまゝの顏したちよん子を急き立てゝは、室を出て行つたのであつた。

四

自働車を下りて細い路次を這入つて行くと、丸い軒燈の出た川島のうちでは、妓たちはまだ二階で晝寢してゐる時刻で、世帶のことをすべて切盛りしてゐる雇ひ婆やが一人で流しで洗ひ物をしてゐた。川島は婆やに取らした氷水を飲むとそゝくさと出て行つた。一郎一人がそこの狹い裏座敷に寢そべりながら、壁の裸體美人の版畫や椽先きの盆栽など、所在なく眺めて、ぐつたりした氣持で居ると、そめ子がお稽古から歸つて來た。

『あらッ兄さん。……今日は。……こないだは兄さん隨分おこつてね』そめ子は斯う皮肉らしく唇を歪めて、馴れ〱しい調子で云つた。

『餘計なお世話だい！』と一郎もムッとして、斯うした子があと二三年もするとどんな女になるのだらうと末恐ろしさの氣持から、眼を反らさずにゐられなかつた。

斯うして二三時間も經つた時分に近くの料理屋から使ひが來て行つて見ると、川島はキンパゲと云ふ綽名で通つた高利貸の寺田と差向ひで、奥まつた座敷で酒を飲んでゐた。寺田はまだ三十二三の、東京の私立の法科を出てる男だが、綽名のやうに頭の地がすつかり赤く禿げて、辛うじて油で手入れして左りから持つて行つた薄い毛で隱し立てゝゐた。

『やあ、鈴村の色男先生。近頃は景氣はどうかね。……たいへんなうまい話があると云ふぢやないか』キンパゲは脂切つた赤ら顏に太い金縁を光らして、髭の無いだゞつぴろい上唇を獸に反らしながら、例の人を見下した態度で云つた。

『うまい話なんかありやしないさ』と、一郎も卒氣ない態度を裝つて云つたが、今まで二人がどんなことを相談し合つてゐたかと云ふことが察しられると、苦い盃を突きつけられるやうな氣がして、酒もうまくは飲めなかつた。

川島も冴えない顏色で、下つた細い眼尻に險しい色を見せて、酒もすゝまない風であつた。そして『キンパゲもいゝ男なんだがなあ、高利貸さへしなけあいゝ男なんだがなあ』と、冗談でもない調子で繰返した。

黄昏の高原の道を、キンパゲと別れて彼等は自働車を駛らしてHへ歸つて來た。一郎は自分のことを、呪はれた人間だと思つた。どんな結果に立到らうと、俺には全く責任が無いのだ、俺は運命に呪はれてる人間なのだから――と云つたやうな唐突な絶望的な氣持が頭腦に浮んだりした。彼はちよん子との戀愛など最早どうでもいゝと云ふ氣がした。彼等に抵抗を試みるべく餘りに無力であり過ぎる自分をも、知つてゐた。また斯うした囮役をやりつけた爲め、正しく或る感情が痲痺してゐることに氣づいてないこともないのだが、自分を強く責めるだけの反省心が乏しくなつてゐた。彼は寧ろ器用な性質で、役場でも戸籍、學務、温泉容舍係、それから毎日の天候觀測の方まで受持つてゐて、議員や助役などの氣受もわるい方ではなかつた。『俺はこの惡黨に見込まれて了つた。實に呪はれた存在だ』と彼は並んで坐つてゐる川島のことを今更らしく呪ひ出したが、しかしまた明日にも彼に摑まれる四五十と纏つた金のことを思ふと、すべてが忘られて、ニヤリと卑しい微笑が口邊に漂うて來るのである。

　留守の間にやつて來てゐた春奴との四人で、十疊二室打拔いた三階の涼しい部屋で、彼等はまた酒を飲み始めた。川島も井出も今日の春奴のだしぬけの來訪には一寸當惑の樣子であつたが、一郎だけがホツと甦つた氣持になつて、ひとりではしやいでは、春奴の爪彈きで甘つたれた調子の都々逸など唄ひ出してゐた。

　春奴が一寸座を立つた機會に、井出は例の凄い眼玉を据えて、

『…パゲの方の用件は?』と、川島に低い聲で訊いた。

『どうせ彼奴のこつたからな、…兎に角今夜來るつてことになつてるんだが、…それにしてもあ　が來てるんで一寸間のわるいこともあるな』と川島はまだ春奴のことが氣になるらしく眉を寄せたが、

『それで君の名案の方はどうかな?』

『やつぱしなんだな、これは梅村君と結婚と云ふことにするんだな。斯うまでお互にラヴし合つてゐるその純なハートに感じて、俺が義俠心で金を出して女をひかして双方一緒にしてやらうと云ふ段になつたら、誰だつて文句があるめえぢ

やねえか。俺は今日も半日いろんな案を立てゝ見たが、この際これ以上の名案はあるめえと思ふ』と、井出はいよ〳〵嶮い眼を三角にして、長い口髭を引張りながら、斯う抑えつける調子で云つて二人の顏を見較べた。

『フン、さすがは暴風相當の名案だな』と、川島はさすがに主領らしく鷹揚な苦笑ひを浮べたきりで、あとを續けなかつた。

『お前なんだらうね、僕が村で出した手紙を讀んで呉れたらうね？』と川島は言葉の調子を變へて、戻つて來て傍に坐つた春奴に云つた。

『拜見しましたわ。それでいろ〳〵なんだものですから……』

『いやはや、俺も今度ばかしはほんとに弱つたよ。親戚やおふくろには頑張られるしな、女房には泣かれるしさ、……ねえ井出君も知つてるさ、ほんとにピストル狂言騷ぎまでしてやつとこさで承諾さして來たんだがね、それでもまだ眞實が足りないと云はれたんぢやあ俺もほんとにやれ切れないね。どれもみんなお前のドスエフスキーの惡靈に崇られたと云ふ譯かね』

『いや恐らくはその反對でせうね』と。一郎はうつかり口を滑らして、龜の子のやうに首を縮こめた。

五

ゲラヽヽツと云つたやうな人を馬鹿にしたやうな獨特の大きな笑聲を廊下に響かせて、さつき電話だつたその珍らしい土産物と云ふのを引つれて、寺田は醉つた眞赤な顏をして、太つた胴體に金鎖を光らしながら這入つて來たのである。土産物と云ふのは川島がこの春若松屋から引こ拔いて行つた桃代と、今の女將とであつた。これにはさすがに川島も井出も度膽を拔かれて、サツと顏色を變へた。

桃代はこの春以來絶えて逢ふ瀬のなかつた戀しい男の顏を見ては、積る恨みも忘れ、座敷の梯子にも氣が附かぬ態

で、薄過ぎる眉毛の下の色つぽい眼を懷かしさうに輝かし、顏を赤らめて男の傍ににじり寄つた。

『どうでえ大將、土産物が氣に入りやしたかね。何とかお賞めのお言葉の一つ位ゐあつてもよかりさうなものぢやねえか。桃ちやんもそらしつかり……ゲラ、、ツ』と、寺田は大口を開けて身體をゆさぶつた。

『よせやい……いゝ加減にしろい！』と川島は險しい眼付して云つたが　寺田はやはりゲラ〳〵笑ひ續けた。

『このすべた野郎が！』井出は斯う云つて膳を跨いで行つて、五尺六七寸もの巖丈な身體の尻をクルリとまくると、桃代の顏にすり附けるやうにしてビリビリツ〳〵と續けさまに浴せかけた。

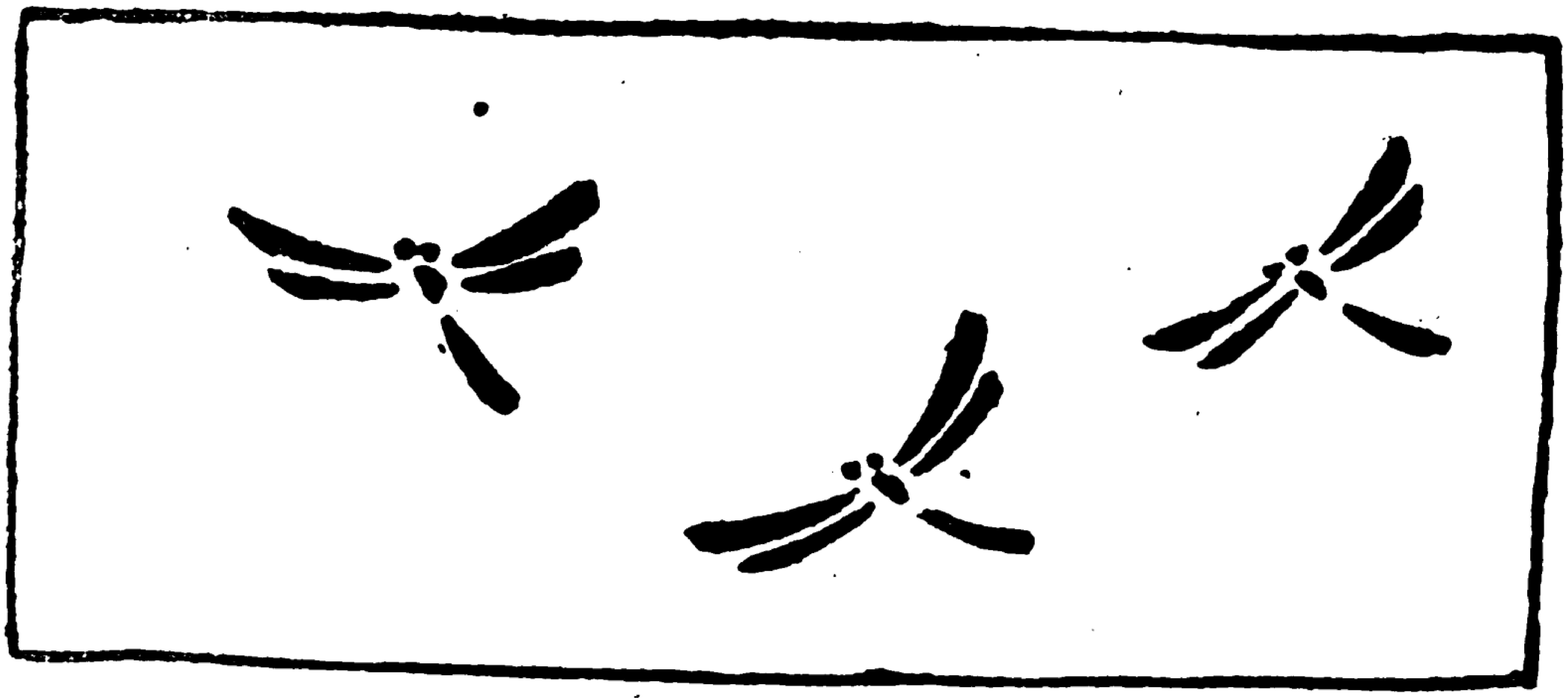
　桃代は斯うした侮辱も更に氣にならぬかのやうに、また一郎の挨拶も耳に入らぬかのやうに、やはり嬉しさうににこ〳〵し續けてゐた。そしてどこまでも愛嬌笑ひに紛らしてゐる女將に急き立てられて浴衣に着代へて來たが、手すりの手拭や鏡臺に載せた石鹼箱の一つ〳〵に、『これ川島さんの手拭？……さう、……これ川島さんの石鹼？……さう！』と川島の名を呼んではにこ〳〵とひとりでうなづいてゐた。

『うるせえ奴だな！』と、川島は我慢を破烈させて顏をあげて怒鳴つたが、さすがに顏を蹙らして眼を俯せた。彼女は左りの袖をまくつた二の腕を鏡に映しては、彼と入墨した彼の名の頭字に、微かな鼠啼きを投げてゐたのである。

『違えねえやなあ……』

　寺田も、たちのわるい彼等への例の毒は毒主義からの思ひつきの趣向も、今夜のは少し藥が利き過ぎたか知らと氣がさしたが。そのテレ隱しに、彼はまた一層大きくゲラ、、ツとやり出した。

――九年五月――



彌次郎兵衞と喜多八

大泉黒石

一

その頃、朽面屋彌次郎兵衞には、彼がほんの一時の氣まぐれに持つた女郎上りのお千代といふ醜い女房があつた。そのお千代の留守を、喜多八を相手に冷酒を呷つてゐたのは、ある小春の夕暮だつた。

平生なら、酒を飲むと、日當りの惡い濕つぽい部屋の中に寢そべり乍ら『罷出候者はお江戸紳田八丁堀に巣籠る彌次郎兵衞と申す天下一の怠け者にて候』と謡つたものだ。そんな癖のある彼が、まるで別人のやう、むつつり浮かぬ顔して、喜多八と向き合つてゐた。手酌の冷酒に蒼褪めて、思ひ出すやうに時々溜息を吐く樣子が、喜多八の目から見て、頗る珍らしいことだつた。寧ろ不思議なことだつた。

世の中のあらゆるものは皆悉く自分のもので、同時に一つとして自分のものでない。と日頃の彌次郎兵衞が云ふ通り、何を貰つても喜ばないし、何を失つても平氣で苦勞を苦勞とも思はぬ、心配を心配とも考へぬ彼であつた。女房のお千代はもとより、自分自身すら一體誰の胴體かしらと云ふやうな取扱ひをして、年中鐚（びた）一文なしに

樂々と生活してゐる彼が、喜多八が外から入つて來て、彼是一時もなりさうだが、まだ一口も利かないで、苦り切つてゐるそれが珍らしかつたのだ。

彌次郎兵衛の方では、喜多八の顏を見てゐると、先刻の夫婦喧嘩を思ひ出した。その夫婦喧嘩と云ふのは、原因を手操つて行くと、喜多八の失敗からだつた。喜多八は彌次郎兵衛よりも、ずつと年下だつた。二人の仲を知らぬ人が見たら、恐らく親子だと思ひさうな年違ひなのだつた。

併し、いくら年が足らぬからと云つて、と彌次郎兵衛は考へるのだ。考へて行くと喜多八が小面憎くなるのだ。いくら向ふ見ずの年頃だとは云ひ乍ら、小錢の廻りがいゝのと、主人のお氣に入りだと云ふ處から、奉公先の金を何時の間にか、うかうか費ひ込んで、それが漸く曝れかゝつてから、いつも厄介を掛け通しの自分の家へ、また候泣きついて來られる圖迂々々しさが忌々しかつた。それは一昨日のことだ。その時は、困つたことになつたとは思つたけれども、親兄弟も身寄りもない喜多八が、悄れ切つてゐるのを見てゐると、つい日頃の癖が出て、

『明日の晩までには、何とか都合してやる。こんな、しみつたれな生計で居たつて、いざとなれや、十兩や二十兩の端數金に行き詰るやうな俺ぢやねえから、まあ落着いて居ろ』強いことを云つたのだ。女房のお千代が側から袖を引いた

『お前さんに、そんな金が出來るなら、喜多八つさんより、この妾に帶の一本も買ふておくれ。女房に腸のはみ出た帶を締めさせて置いて、ほんに氣が强い』と云はれた時、彌次郎兵衛はどう云ふ譯だか、いきなり『えゝ。五月蠅い』とむかつ腹を立てゝ喜多八と一緒に戸外へ跳び出したのだつた。いくら親子のやうな仲でも、こんな口上を喜多八の前で云はれたのが、何でもないことだが、やつぱり氣に觸つたのだ。かねてからお千代に嫌はれてゐた――それは喜多八が居敷奉公に出るまで、のんべんぐらりと居候してゐた故もあつたが――仲の惡い彼と、あてもなく戸外をぶらつき廻つた時の往き話に、喜多八に飽く程お千代の惡體を列べて聞かされたのだつた。その惡口の中で

『隣家のお神さんとお千代の立ち話は、それだけぢやねえのだよ』

と喜多八は彌次郎兵衞の女房を、蔭では、お千代、お千代と呼び棄てにしてゐた。

「隣家のお神さんとお千代とが流し口に突つ立つてゐると、あの横町の髮結ひの娘のお文が挨拶して通つたのさ。するてえと、お文がまだ遠く行かねえうちに、お千代がこう云ふのさ。ねえお神さん。あの髮結ひの娘は、何だか御屋敷奉公に居たつてえことを聞いてゐたが、御屋敷奉公も凄まじい。一寸見ても解るわよ。あんな上品ぶつた、乙にこう澄した風をしてゐるけど、あれや、飛んだ喰はせ者だよ、この間もさうさ。一時暇を貰つてたお屋敷へ、また出掛けますつて、飾りたてゝ出て行つたけど、何あに、側で聞いて見れや、淺草あたりの質屋の隱居へ妾に行つたと云ふぢやないか。それで、支度金が十五兩來たとさ。あの面で妾も恐ろしい。妾だつて、額の禿がなくて、あの爺穢い宿六が居なければ、妾にでも出て支度金が取りたいね、ほゝと厭な笑ひ様をしてね、其處へお前さんの姿が露次口に見えたもんだからそれ旦那様がお歸りだなんて、慌てゝ家へすつこみやがつたぜ。俺は表から入りかけて、聞いてゐたのさ。お前さんにこんなことを云つちや、氣を惡くして怒るかも知れねえが。あんな下素張つた女つたら、ないぜ」

と憎らしさうに、腹癒がましく饒舌り立てたことが、いつまで耳つ端にびりついて、お千代を見ても、喜多八を見ても、不愉快でならなかつた。喜多八と一緒に新道横町から神田川に沿ふて、ぶら〳〵歩いてゐるうちに、喜多八に對して、腹の底から、何とも云へない憎惡が頭を擡げて來た。そして、ふつ、と氣が變つて了つて、何となく、このやくさ男のために、出來るか出來ないか見當すら附かない金を拵へてやると受合つて見せたが自分が、年若の喜多八から、冷笑されて舌を出されてゐるやうに思はれたのだつた。昌平橋の袂で喜多八に別れて、また、いやな新道横町の露次の奥へ戻つて來た彌次郎兵衞は、惡口の的にされたお千代が、却つて哀れになつたのだ。その翌晩、いや晩までに、一時、一時早い夕景に、奉公先から態々喜多八を呼び出して貰つた。呼び出しに行つたのは、隣家のお神さんだ。彌次郎兵衞はお千代の留守に、隣家のお神さんに足を運んで貰つたのだつた。本郷にあつた屋敷先から、喜多八は急いで來た。喜多八と、薄暗い部屋の中で向き合つた時、彌次郎兵衞は、相手が全く悄然としてゐるのに氣がついた。喜多八は、沈み切つた調子

で、不氣味さうに、四邊を見廻し乍ら、冷酒の盃をしやぶつてゐる彼に、

『お千代は珍らしく留守だね。それやさうと、お前さん、急用てえなあ。自體何だい』

と先づ相手の顏色を窺ふのだつた。この、人を散々食ひ散した奴が、かう萎れたは、膨れた上にべそを搔いたやうなお千代の顏に笑ひが浮き上る數より稀だ。こんな頭も尻もないやうな奴には、たまに突き詰めた心配もさせて見るのも藥だと思つた彌次郎兵衛は、多少小氣味よくもあつた。

『お前に頼まれた品物を見せて、お前の喜ぶ顏を肴に一杯やりてえから、態々呼び出して貰つたのよ』

から云つた時、ふつと、

『頼んだ品物とは?』

と、十兩の一件を忘れた譯ではないのだが、彌次郎兵衛の腹の底に手が屆と云つたやうな形で、頼んだ品物と云ふのが、例の金の一件のやうでもあつたから、氣がゝりらしい樣子をしてゐる處へ、彌次郎兵衛に、

『はて、頼んで置いた方で忘れるたあ物覺えの惡いのにも程がある。例の品たあ、他でもねえ、十兩の金さ』

と、いきなり出られた時、磁針がぐら／＼と廻轉して、思つた方角を指した時の、喜しい驚きやうなのだ。

『お前さん眞個に例の一件を都合して呉れたのか?。有難え。何にも云はねえ。この通りだ』

と、出し抜けに拜む眞似をした。彌次郎兵衛は澁い顏をした。

『何と禮を云うていゝか解らねえ』

と染み染みとした調子で、ふと氣がついたと見えて、

『然し毎度のことだけど、下らねえ心配をかけて、眞個に氣の毒だつた』

と頭を二三度下げたのだつた。それから、暫くの間は、どんな手付をして、何を饒舌つたか、一寸夢中だつた。それから、早く金を出して呉れゝばいゝと願つてゐた。けれども、彌次郎兵衛が、急に、拵へて呉れた金に勿體をつけて出し

て呉れないのを堪えてゐると、了ひには。こんな厭味も云ひたくなつて來るのだ。

『お前さん。今云つたことは、眞個だらうな。今日明日のうちに、人間一人生きて居られなくなるつてえことも、お前さん承知の筈だ。まさか冗談ぢやねえとは思ふけど。やつぱり、こんな時は氣がかりだよ。後生だから一寸出して拜ましてくんな』

それでも彌次郎兵衞が一人で苦り切つて一口も切り出さないでゐると、態々此處まで、一杯食はされに來たのではないかしらと云ふ疑惑も湧くのだつた。さうだとすれば、せつぱ詰つて苦しい目先の自分が、氣心知れた彌次郎兵衞に擔がれるのもへまだと云へば、へまだらうが、相手も餘り人を馬鹿にし過ぎた仕打ちだと思つた。けれども、喜多八としては、假令彌次郎兵衞の云ひ草が根つから嘘だとしても、この場合、嬉しい便りを、今のは嘘だと、酒の座興にして貰ひたくはなかつた。嘘でも眞個だと押つかぶせて貰ひたかつた。

落ちつけなくなつた喜多八は、相手が、先刻から默然人見たやうに、只悠然と構へたつきり、猪口の緣ばかり甜めてゐることが、腹立しくなつて、

『お前さん見たいに、さう何時迄も人を焦らさなくつてもいゝぢやねえか。都合が出來たものなら早く出して呉れたつて、罰も當るめえよ』

と云ふ風な催促を始めたのだつた。

『嘘僞りを言ふものか。苦しい思ひをして拵へた金だ。少し位はお前の焦れる處も見たくならあ。今出してやるよ』

『お前さんも罪な人だね』

とは呟いたが、先刻の疑惑の雲の上から、輕い歡喜が、自然に擴がつて來て、了ひには、その歡びが、隱し切れぬほどの、明るい微笑となつて、不規律な皺み切つた、でも矢つ張り若々しい色艶の頬に浮び出るのだつた。

『有り難え、それで富士屋も失敗らずに濟むと云ふもの。お世辭ぢやねえが、持ちてえものは義兄弟だお前さんの方ぢ

や迷惑に違えねえだらうがの、この恩は生々忘れねえよ。』

『これで、お前も、懲りるがいゝ。今度、こんな眞似を繰り返したら。相手にならねえぜ』

と云ひ乍ら、彌次郎兵衞が、惜しみ惜しみ懐から、喜多八には、見馴れぬ財布を出した時、全く彼の目は異樣に輝かずにはゐなかつたのだ。が、ふと、彌次郎兵衞の、ひきしまつて際どく蒼褪めた顔色が、俄かに目立つて來ると喜多八は呑みかけたものを吐き出す心持ちで心配さうに、

『だけど兄貴。俺の方は助かるとして、お前さんの、急に面窶れした樣子を見ると、こんな失禮な挨拶も出たくなる。と云ふのは、何時もピイ〳〵困つてゐるお前さんに、かう云つちや、全く濟まねえけれども、十兩の金が出來なけりや、あの富士屋の裏口から繩付で暗え處へぶち込まれなくちやならねえと、苦しまぎれに、つい口を辷らせた。と云ふ譯ぢやねえ。愚痴な泣き事を列べた事にや。まさか十兩と纏まつた金を拵へて貰へやうとあ思はなかつたよ。然し、出來ねえと思つた奴が首尾よくも惡くも出來て見ると、俺としちや金の出處が知り度くなつて來た。でなけりや、何ぼ放埒な俺でも。氣が咎めて、受取れねえ、いかい苦勞を掛けて置いて、こんなことあ尋ねられた義理ぢやねえし、またよもや、そんなこともあるめえとは思ふものゝ、やつぱり氣になる。彌次郎兵衞さん、お前さんは、生死の堤を迷つてゐる俺が不憫の餘り、後暗え、いや、さもしい量見を起してくれたのぢやあるめえの』

すると、彌次郎兵衞は、とんでもないと云ふ樣子をした。が、何となく物思はしげな眉を動かして、盃と貧乏徳利とを靜かに側へ押しやつた小鬢のあたりを掠めて、陰氣な翳りが影のやうに走るのも見えたのだつた。

『いや。よく云つて呉れた。だがの、この年になつて、お前の案んずるやうな曲つた事も出來めえぢやねえか。それやね昔だと百や二百の小判に困る俺ぢやねえこた、お前も知つての通り、富士山裾野の河原女郎に溺れたのが凶の始まりで、旅役者のお前を最氣に善根惡業のありつ丈を仕盡した揚句が食ひ詰め者の夜逃げと定まつて江戸落ちから、この薄つ汚ねえ長屋住居さ、それでも懲りずに、江戸前の美酒に醉ふた果が吉原で馴染で根びきした婦は裸にするし、婦と談

合して連れて來たお前にや奉公に出て貰つたのだ。そのお前ぢやねえか。考へて見ねえでも、身寄りのねえ旅役者の成れの果のお前が、急場に構ひつけられや首でも縊らなきやならなくなるだらう。そいつが彌次郎兵衞には見てゐられねえと云つた處でさ、俺も國元で若え時分に習ひ覺えた色繪の手藝を便りに、意氣地のねえ生活つ振りだからの、お前が不愍がるのも尤もだ。ことに自分にも覺束ねえ一件を工面したのだから、生やさしい藝當ぢや、追つかねえなあ、推察の通りよ。だがの、そこへ行けや、世の中に恐い物なしの俺のことだ。一件の出處はお前にや云ひたくねえがの、尋ねられて隱してゐれやお前の寢覺も悪からうと思ふから明すのだが、一件が俺の手に入つたのは、せつぱ詰つた今朝と云ふ今朝のことだ』

と彌次郎兵衞は云ひかけて、さも殘念な物語を繰り出して行く風であつた。

『聞かねえことぢやねえ。話の次第ぢや、有難うございますと頂いて戻る譯に行かねえかも知れぬ。お前さんに災難のかけ放しで、凉しがつてもゐられねえからの』

と喜多八も、しんみりとした彌次郎兵衞の調子に、引き摺り込まれて來るのだつた。

『俺は色繪の問屋へ出掛けて、どうでも十兩の金を前借りする積りで早く床を拔けたよ』

と云ひかけて、彼は一寸云ひ淀んで瞑目した。

二

俺が起き拔けに流し口で洗手を使つてゐると、年の頃四十五か五十位の田舍侍らしい姿が、表の入口を行つたり來たりするのが、見えた。はてな。この露次は行き止りだが、入つて來て戻るのが臆劫で、出口でも探してゐるのぢやねえかと思つてゐた。お前も知つてゐるだらうが、この露次の中の長屋にや、侍に近づきのあり相な家や一軒もねえからの、迂路ついて居るのを見るのも氣の毒になつたから言葉をかけて『お前さん。其處は袋路だ』と敎へてやらうと考

へてゐるうちに、侍の姿が急に見えなくなつた。と思ふと、』

『鳥渡お尋ね申したいが。』

と云ふ嗄聲が、表格子の外で聞えたから、ひよいと見ると色の淺黒い顏が、戸口から、迂散な目付で家の中を、ぎよろ〳〵と覗いてゐる。それが、先刻の田舍侍ぢやねえか。

『鳥渡お尋ね申したいが。朽面屋彌次郎兵衛と御有るのは、こちらではないか』

と云ふ。それがさ。寢起の霞んだ目だも、さう尋ねられて見ると、何處かで一度出逢つた覺えのありさうな形の顏なのだ。が、こんな風體の侍に知り合ひはない筈だとは思つたけれども、兎に角、朽面屋の彌次郎兵衛は俺だから、何の用で何處から來たのか知らないが、出て行つて返事をしやうと構へた處をあの出しやばりのお千代が駈け拔けに、

『彌次郎兵衛は、こちらでございますが、貴老樣は、どちらから、お越しになりました』

と、お千代のいけぞんさいな口から出たとも受取れねえ慇懃な尋ねやうをしたのだ。すると、件の田舍侍がさ。やれやれ、辛つとのことで探し當てたてえ大儀さうな物腰で、ぷいゝとまた格子戸の外へ出直した。かと思ふと。

『あゝ。あゝ。草臥れたの。さあ、早く家へお入り』

と獨言ちた。と思つて呉れ。俺もお千代も、さつぱり合點が行かないでゐると、侍は格子戸の外で手招きした。それで、侍にや連れのあることも解つた。あの格子戸の蔭だ。その侍の連れと云ふのは、蔭に縮んでゐた振袖の女ぢやねえか。馬鹿々々しい。怪物時節ぢやあるめえし、臙溜見たいな、溢つぽい、青黴に花が吹き出さうな小汚ねえ露次の中に、年配から云へば、彼是二十と七か八の、老けても三十とは行かねえ女がしよんぼり蹲んでゐたのを、田舍侍が、上り框へ連れ込んだ時、俺は薄つ氣味も惡いし、ちと工合もよくねえから、流し元の障子の蔭に引つ込んで、様子を凝乎と隙見してゐると田舍侍は、

『私は、決して氣づかひな者ではない。國元の府中から、遙々彌次郎兵衛殿を訪ねて參つた兵五左右衛門と云ふ田舍者

でしての、主人が見えたら、早速取り次いで貰ひたいが』
とお千代に挨拶を始めた。

府中の兵五左衛門と云へや、喜多八お前も知つてゐる筈だ。俺が城下でお出入りの小屋敷の主人さ。障子の陰で聞いてゐた俺は、どれだけ驚いたか知りやしねえ。と云つたゞけぢや、呑み込めねえかも知れねえがの、親仁が連れの女だ。その女にや、お前の前だがちつとばかり身に覺えがあつたのだ。飛んでもねえ處へ飛んでもねえ代物を引つ張つてこられたものだと、一時は實際逃げ出さうとは思つたが、生憎猫の潜る穴もねえ。だからと云つて、何時まで流しに蹲つてもゐられねえから、度胸を定めて、どうでも成る樣になれと覺悟しての、姿を見せると、上り框に、つくねんと物珍らしさうに腰かけてゐた振袖の女が、いきなり跳びつくやうに構へてさ、

『まあ。お前達者で居て呉れましたか。妾はお前から、ついぞ便りがないのを心元なさに、遙々尋ねて來ましたぞへ』

と、袖に顔を埋めたかと思ふと、さめざめと泣き出すぢやねえか。俺は、其時どんな形で、何と云つたか知らねえ。また、女房のお千代が、どの邊に坐つて、どんな顔つきをしてゐたか、覺えねえ。がの、

『これは兵五左衛門の旦那樣、何で、お娘御を連れなすつて、江戸表へお出向きでございますか。殿樣のお供でも』

と、どうせ、いけねえことだとは思つたけがの、白ばつくれるだけ、白ばつくれて見やうとしたが、やつぱり駄目だ。相手は、強う出たものさ。

『何の用で、江戸へ出向いたかとは氣の強い挨拶。一口に娘のお艶をお前方の妻に引具したと申せば、先頃國元で、娘と密通して置き乍ら、お艶を欺して、こつそり逃げた時の景色が胸に浮ばう。お艶とお前の不義を後で聞いて、一圖に其當座は腹も立つたがの、考へて見れば、後にも先にもたつた一人の娘が、どうした拍子違ひの狂ひ緣か、お前と添はねば、いや添ふことが叶はぬとあるなら、命を棄てますと思ひ詰めてゝ油斷すれば、自害もし兼ないと氣遣ふてゐたし、また親馬鹿な心から、つい娘の身が不憫になつた。いや勘忍の胸を鎭めてお前に添はせやうと、態々、暫らくの暇

を貰ふて、引連れて來た。この上は、是が非でも、末長くお艶を不束でも可愛がつてやつて下さい』先年國元で、ちよい／＼顔を合せた時分は、それ程——と云つて年が年だけれども——瘦せて凹んでゐなかつた、あの正直さうな萎んだ眼瞼から、ほろ／＼と流れた涙が、暫く見ないうちに、ぐつと削け落ちた頬の皺を傳ふて零れた時には、流石の俺も、あゝ、悪い悪戯をしたものだと、今更のやうに、つくづく後悔した。併し、いくら物事に一本調子の田舎侍でも、俺の側に女つ切れがありや、少しや考へて貰ひたいぢやねえか。の。俺の面を見ると、こう頭から、罪人呼ばはりをされちやね。それもさ、俺一人なら、どうでもいゝが、居て貰つちや面倒なお千代が、生憎側に居て、聞いてれや默つて濟む道理、がねえ。彼女奴いつも俺を摑まへて苦舌を列べる時の景氣づけて、火鉢の邊を小つぴどく、やけにぽん／＼と叩きつける長煙管を、いきなり其處へ放り出しやがつてさ。こう云ふのだ。

『お前さん方は』

と、先刻口を凋めて、貴老様はと出た彼女奴が、

『どこのどなたか知らないがね。どこのどなたであらうと』

と黝ずんだ目を鋭く尖がらせて、蒼褪めた唇を、ぶる／＼と顫はせ乍ら泣くやうな、せゝら嘲ふやうなそれや何とも、かんとも、見辛え坐り樣で、

『妾の出る幕ぢやないかも知れないが、昔から、男と云ふものは、女と名のつくものなら、たとへ目つかちでも、裂唇でも、捕へて置いては二世の三世のと、眞心から嘘をついて欺す手管を持つて生れた生き蟲のことですよ。その嘘吐きの中の嘘吐きで、日頃から他所の女と自分の女房との見堺のつかぬ男が、お恥しいけれども此家の主人ですよ。その上、女だけならまだしも、他所樣の財物は自分のもの、自分の財物も他人樣のものなど途方もない無茶を云つたら、知らぬ他國を、さも隣り同志のやうに心得て、二日目には、やれ一寸歩いて來るの遊んで來るのと、まるで世界と云ふものが自分一人のために出來上つてゐるか、それでなければ、世界に住んでゐるのは自分一人位に考へてゐる愚け者です

よ。』

と今度俺の方を斜視に見て置いて、威丈高になるぢやねえか。

『何處の世界に義務も權力も知らない木偶坊や、恥と云ふことも外聞と云ふことも名譽と云ふことも、まるでお構なしの海鼠見たいな英雄が二人とありますかい。その男の言葉を眞に受けて駿河から押しかけて來なさるお前さん方の氣見が知れない。それもお前さん。男でも好いとか、其處に多少でも金があると云ふなら話も別だけど、色はあの通り眞つ黑でね』

と、俺が默つて居りや、いゝ氣になつて亭主を芥のやうに罵りやがるのだが、充分にも十二分にも弱味のある俺は、まあ我慢も出來るがの、つゞいて

『こんな主人の彌次郎兵衞ですから、それはひよつとすると何處の島の端つこで懇ろにした女もないとは限らないが、お前さん方見たいに、欺まされても目が醒めないで、懲りずに跡を追ふて來る頓間は、今日まで一人もありませんぜ。それもいゝとしてさ、このぼろぼろ長屋に二人と女房が燻ぶつた圖は嘸見ものになりませうよ』

と、づけ〱云つたものだから、流石の氣のいゝ田舍侍の兵五右衞門も、お千代の口達者に呆れてばかりも居られなくなつたのだ。

『先刻から恐ろしく獨りで饒舌るが、自體お前は何だ』

と來たものだ。いくら田舍者の劍術と手習ひより外に能のない年老でも、お千代に、お前は何だと聞かなくつたつて、感づき相なものだが、逃げた男を執然尋ね廻る底の、こう云つちや惡いけど、全く融通の利かねえ一筋者だから、お千代が、態あ見ろ、いゝ氣味だと云つた調子で、

『妾は彌次郎兵衞の家内です』

と云つた時。田舍侍の兵五右衞門が不意に頓狂な聲を揚げて

『何、お前が、お前が彌次郎兵衛の女房だと』

と打ち懸いた拍子に、俺が、ぎよつとして悸み上り乍ら、侍が、どうするかと見るてえと、侍の血相は、すつかり變つて了つてゐるのだ。あの涙の溝見たいな、うねうねした大きな小鼻から頬骨へかけた皺の波が、ぐい〳〵と引縮つて、物凄い殺氣が、引窓から落ちて來る黄色い光に、まるで陽炎が躍り狂うやうにちら〳〵と動いた。老侍は如何考へたものか、死靈に取魅かれたと云ひてえ程窪んでどんよりした目を、そろ〳〵と俺の方へ向けたかと思ふと、暫く俺の顔を穴のあく程見詰めてゐた。俺は蛇に睨まれた青蛙見たいに、手も足も悸へるだけで、背中が、ぞく〳〵して來た途端に、老侍の、空洞の眼から、枯れ切つた涙が、つる〳〵と流れたやうだつた。娘は先刻から、壁に凭りかゝつて泣いてゐるのだ。老侍はまるで地の底から洩れて來たとしか思はれぬ細い聲だ。

『女房持つたとあれば仕方がない。もう何にも言はぬ。お艶を引取つて呉れとも頼みませぬ。のう、お艶折角此土地まで來て、手蔓から手蔓へ歩いて尋ねて、此の邊だとは薄々聞いてゐたから、地主に當つて、やつと探し當てゝ、安心したかと思ふと、今の樣子では、所詮理を說いても無益と思ふによつて、このまゝ國元へ引返したい。引返したいけれども、一應の話はして置かねば、侍ともあらうものが、町人に娘をたぶらかされて、それを悟らずに、何處までも跟いて廻つたとあつては先祖は無論のこと、人に聞かれては面目もない。』

と言葉の尻はもう濕つてゐたのだ。俺は今年になるまで、あんな枯木見たいな老ひ侍が泣いたのを見かけたことがねえ。

『國元の上役の鳴尾澤殿から、先達手仲介入を立てゝ、お艶を申受に來られた時、何にも知らない私は二つ返事で承諾しました。先づ何よりの目出度い出世緣だと喜んだのは却つて後の悲しみを深うしたやうなものゝ、娘にその旨を語ると、お前と云ふ男があることが解つて、どの位膽を潰して、心を痛めたことか。それでも娘の方では、一旦契つた男を外に、側へ嫁く位なら、死んだ方がましだ、殺して下さい。殺して貰へば、貴父の顔も潰れずに、家の名前にも疵がつか

ずに濟みますと云つて、私の膝頭に首を投げました。それもならぬ處から、兎に角、上役の屋敷へ使を走らせて、事情を訴へると、上役殿の方では、娘の首一つ貰つても詮ないこと、けれども、婚姻の取沙汰が城内や出入の者の耳にも入つて了つたことで、この儘打ち棄てゝ置けば、世間はどうでも、第一家名に關る上は、外に分別もないとあつて――私へ決鬪狀を寄せられた。私と鳴尾澤殿の果し合ひが噂となつて城内に擴がつたと見えて、騒いで仲裁に入つて來られたのが、今市と云ふ、お前も出入をしたと云ふことだから、知つて居るだらうが、あの人の好い家老殿での、私恨での爭ひも愚かではあるし、娘のお艶が上役へ嫁入つて了つたと云ふではなし、お互に知らなかつた手落ちだから、内證にして置けば、双方の心持も一分も立つ譯だと云ふので、漸く、果し合ひだけは廢めになつたやうなものゝ、娘はお前を慕ふし、城下で嫁にもやれない顏になつてゐるから、約束したお前から、やつと一度か二度、ずつと以前に江戸へ落ち着いたと便りがあつた相だから、それを便りに、道中も老人と娘の足でやつと辿りついたやうな次第であつたけれども、お前に女房が出來てゐるのを見ては、娘を押しつけることも叶はない。と云つて、此儘、すご〳〵と、どの面下げて國元へ戻れやう、こうなるのも、宿世からの約束ごとゝ、諦めて國元への土産にお前の首を申受けねば、この武士が來る』と云ふが早ひか、枯木の枝よれや、ひよろ長い腕をまくつて、刀の鞘を拂つたのだ。娘のお艶は必死になつて、親父の腕に縋りついた。事を分けて見られりやあ、成る程俺は笠の臺を飛ばすのが當り前よ。はじめのうちや恥しくて穴にでも入りたかつたが、かうしたどん詰りに落ち込んぢや、お千代の言ひ草ぢやねえけれど、もう恥も外聞もあつたものぢやねえ。お艶が狂女のやうに泣き崩れて取亂した處を見ると、俺は恐ろしい天罰が一寸先の目の前に迫つて來たのをよく感じたよ。然しな、これまで苦勞と云ふ苦勞の掛け放題で、天道樣の顏も見せぬやうに酷めて來た女房のお千代が、いくら鼻について來た時節だからつて、今更おつぽり出してお艶を引き入れる心にや、どうしてもならなえし、こうなれや、いつまで長々と生きて居た處でどうせ碌な眞似はしねえ、一層この邊で娑婆の業晒しや切り上げて、今度生れて來る時の氣の利いた仕度でもした方が、罪亡ぼしだと覺悟した。そう腹を据えて見れや、俺の息の根が止りや、兎

角の、紛擾もなくて濟む譯だから、温順しく斬られやせうと、すつかり觀念して首をのべたのだ。いや、首をのべたのぢやなかつた。知らず識らず、こう前へ、つくばつて了つたときや、自分乍ら吃驚すほど、生きてるのか、死んだのか解らねえ氣持ちだつたが、耳つ端でがや〳〵と騷々しい聲が餘つ程時刻も經つてからゝしい。

『先刻からの樣子では、お前さん方の處置も尤もなことでございます。妾もよく解りましたが、たとへ以前は賤しい稼業の身でも、現在夫が打ち首になるのを見てもゐられないし、また、苦勞をさせた女房が、どうして棄てられやうと云ひました家夫の志が、妾に取つては何よりの手向でございます。妾はどうならうと、たつた今暇を取つて出て行きますから、何卒彌次郎兵衞を助けてお娘御を添はせて下さいまし。妾の氣性として、こうなる上からは、是が非でも二人を夫婦にせずには置きません』

と云つて、今度は、俺の方へずいつと向き直つて、

『妾はもう諦めたから、お前も夫婦の緣は今日までの夢、今朝醒めたのだと思つて、きつぱりと妾に暇をやつておくんなさい』

と、生温い水つ氣に濕りやがつて頼んだ時やあ、どうしていゝか解らなかつたのだ。折があつたら、何かに凶をつけて叩き出さうと構へてはゐたのだが、こう出られて見れや、可憐相と云ふのか未練と云ふのか、このまゝ別れちや濟まね氣がしたのと、張り詰めてゐた氣が段々緩んで來るにつれて一旦ねえものだと見切りをつけて侍の前に投げ出した命も惜しくなりかけた。が、お千代と別れるか、命を棒に振るか、一方へ片づけねばならぬとあつては、今更怯むやうだが、不實なやうだが、もう大分先刻とは氣の迷ひ方が違つてゐたけど、それぢや、仕方がねえ、來世ぢや夫婦になつて見せるなどと、子供を欺すやうな甘えことも云つて追ひ出せねえ處からの、氣短えお千代が去らうとするのを、袖を捕へて引き止めたのだ。處が、俺には全く都合のいゝことにや、お千代がこう云ふのだ。

『そんなら暇は呉れずにお侍の手に掛るつもりかえ。後に殘された根なし浮草の妾が、路頭に迷ふのがお前本望かえ。

そう云ふ氣なら、妾から先に殺して貰ひませう。さあ殺しておくんなさい』
と氣の早い。侍が提げ刀を、いきなり捥ぎ取らうとするのを見た俺は、いくら氣強い女房とは云ひ條、突き詰めた女の膽の据るにや、流石に俺も驚いた。それから。俺が何と云ひ聞かせても、
『いゝえ。いゝえ。妾の勝手にさしておくんなさい』
と終ひにや、持ち前の癇癖になつて、いつかな聞かねえから、腹の奥ぢや、これや具合に行きさうだと思つたが、その時や、もう何も彼も、こうならねばならぬ因緣づくめことだと觀念した顏をして、
『それほどまでに俺を想つて犧牲になつてくれるなら』
と、それから先は、小せえ聲で、侍やお艶には聞えねえやうに、
『ほんの少かの間でいゝから、俺が旅に出たと思ふて、吉原の親方の宿に行つてくれ。そのうち、こつちや、何とか片づけて置いて、屹度お前を迎へに行きや、また元々通りの鞘に納まるのだから』
と云ひ聞かせたのも、實はいゝ加減の嘘言に過ぎぬのさ。それから、
『こんなはめから、女房と別れるのも、元はと云や皆俺の心得違えからだ。何と詫びたつて、追つつく話ぢやねえが、まあ、悪い夢を見てゐたのだと考へて、これから先あ、體を大事にしねえ』
と云つた。口から出任せな別れの文句を上の空で云ひかけたが、氣がつくと俺の目は急に霞んで來たのだ。別れるのに心殘りがある譯ぢやねえけれども、やつぱり、別れると云ふなあ厭なものだのう。それは別としても、その時お千代が、例の洗ひ晒らしの一重とも袷ともつかねえ筒袍の袖の下に、何を包んだのか解らねえ小せえ風呂敷包を抱え込んで、影法師見たいに、しよぼ〳〵と出て行く後姿を呆氣に取られて見てゐた侍が氣が利かねえぢやねえか。いやさ、少しは思ひやりがあつてもいゝだらうぢやねえか』

三

と饒舌りつゞけて來た彌次郎兵衛は、話に釣り込まれて、息もつかぬ形で聞いてゐる喜多八が、何だか可哀さうになつたから、話の途中で、『侍が氣が利かねえぢやねえか』と馬鹿に力を込めて云ふのだつた。

『どうして、侍が氣が利かねえのかい』

と喜多八は迂濶に尋ねて見たのだ。

『知れたことよ手前が追ひ出したやうなお千代が乞食の姿で立つのに、小づかひの廿兩も、手切れ金とか、涙金とか理屈をつけて、俺と女房とに分けて呉れたらよささうなものぢやねえか。それもさ、考へて見ると、眞個の侍だつたら、確かに呉れたかも知れねえ。その今の半分もお前にやれたかも知れねえ』喜多八は俄かの不安に襲はれた。その不安と云ふのは、先刻から摑みかけてゐた彌次郎兵衛の空の財布が十兩の小判を呑んで、だんだんと、手の屆かぬ處へ逃げて行くやうな心地のする不安だつた。

『ぢや、その侍は僞者だつたのかい』

『侍ばかりぢやねえ、俺はそのお艶と云ふ娘も僞者なんだ』

『するてえと、今の話は、今の話は、何だねお前さんが拵へたつくりごとになつちまうぢやねえか。冗談ぢやねえ。どこが眞個だ』喜多八が、すつかり氣を落した樣子を見ると彌次郎兵衛は、ひどく濟まないと思ひ出した。

『話はまるつきりの噓事ぢやねえ。然しな、今朝からお前の一件でお千代と口汚ねえ喧嘩をしてゐたのだ。大事な女房は、ひぼしにして置いて、年が年中、のらくら者の喜多八が、それも眞個だか噓だか判然解らねえ今度の一件に血眼になるやうな俺にや、今始まつたことぢやないけれども、つく〴〵愛想がつき果てたから、出て行くと言ふぢやねえか。成る程考へて見れや、どうせ出來ない相談を持ち込んで來たのだ。それに毎度のことだから、と云ふ氣になつて駈け摺

り廻ること廢めたのだ。そうすると、今迄工面しやうと焦つたのが忌々しくての、終ひには、お千代の頭髷をついたお前までが、何だか、俺を罵つてるやうに面憎くなつて、癪に障つたから、むしやくしや紛れにお前を引つ張り出したのよ。何も知らねえで飛んで來たお前の顏を見ると、また急に氣が變つちまつた。お前が蒼い顏をして、心配さうに俺の顏を氣にした樣子が、急に哀れつぽくなつた譯だ。それだから、いきなり、お前に金は迚も出來ねえと、頭からきつぱり斷る積りだつたのが、どうしても言へねえで、愚圖々々してゐるうちに、愈々、お前からは、催促食ふし、せつぱ詰つて、今朝爭ひの最中に生憎尋ねて來た深川夜鷹のことが思ひつひて苦しい話を始めたやうな譯だからの、惡く思はねえでくれ』

と云つた彌次郎兵衛はびつしより汗を掻いてゐたのだつた。喜多八は、怒る元氣すらなく、全くがつかりして了つた。けれども、何だか、さう云ふ彌次郎兵衛の氣の毒さうな言ひ譯も、また信じかねた。どう云ふものか、彌次郎兵衛の方から、話は嘘だと打ち消されてゐながらも、それは眞個だらうと云ひたかつた。

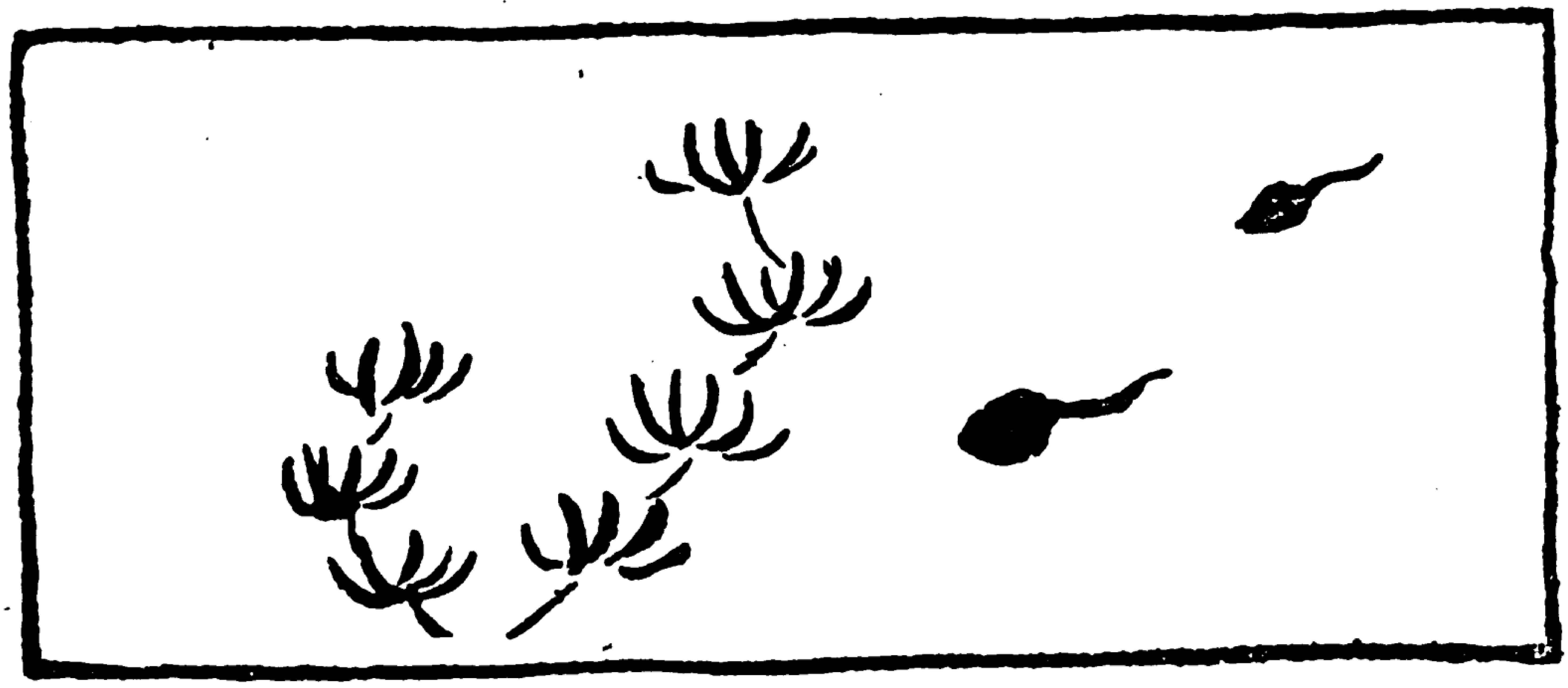
『つくりごとにしちや、面白くもねえ。馬鹿に長つたらしくて、氣が利かねえぢやねえぢやねえか。今の俺の身になつて見れや』

と太い溜息をつき乍ら、恨めしさうに彌次郎兵衛を見詰めてゐたが、

『今の俺の身になつて見れや、先刻の話を、いくらでもいゝから眞個のことにしてえよ』

と投げ出すやうに言ふと、濟まない濟まないと云ふより外に何の考へもなくなつて了つてゐた彌次郎兵衛は、せめても の罪亡ぼしと思ふのと、彼を慰めやうと思ふところから、心配するなと云つた風に、

『いや、その話にや、眞個のこともあるよ。つい云ひ忘れて、すまなかつたがの、筒砲袖の下に風呂敷包を抱へ込んだ女房のお千代に今朝ほど出て行れて、困つてゐることだ』（完）



祖父と孫

豊島與志雄

その朝、祖父は病氣ぢやないかしらと、民雄は思つた。自分達――彼と彼の弟と――が、大急ぎで食事を濟して、學校の道具をカバンに投げ込む時、朝早く起きて庭の散歩を終へた祖父は、笑顔でその六疊にやつて來て、一々時間割を見ながら、忘れものはないかと注意するのが、常であつた。所がその朝はやつて來なかつた。民雄は弟の民治と一緒に、離れの十疊へ、祖父に挨拶をしに行つた。

祖父は椽側の寢椅子に横はつて、朝日の光りが横さまに流れてる庭の方を眺めてゐた。二人の方へ向いた彼の顔には、微笑の影も、それかと云つて苦々しい影も、全く浮んでゐなかつた。眼の下の皺をたるまして、まだ何かうつとりと考へ込んでゐるらしかつた。

『お祖父さん、行つて來るよう！』と民治が云つた。

祖父は、『うむ』と首肯いたが、そのまゝ二つ三つ眼を瞬いた。何だかきまり惡いといつた樣だつた。二人が言葉を待つてると、彼は何とも云はないで眼を外らした。

民雄はふいと廊下をばた／＼と馳け出した。民治もその後に馳けてきた。廊下の曲り角で、牛乳のコップをお盆にのせて持つて來るみねに出逢つた。

『もうお仕度は出來ましたか。』と彼女は云つて、晴々しい笑を見せた。

民雄は默つてゐた。――いつも母が牛乳を持つて行くんだが、と彼は思つた。

民雄と民治とは連れ立つて學校へ出かけた。變だなあ！と民雄は考へた。その側で、民治は口笛を吹き初めた。

――そのことを、民雄は氣にしてゐた。學校から歸ると、すぐ祖父の所へ行つてみた。祖父はみねに新聞を讀まして聞いてゐた。民雄の姿を見ると、『もういゝ、』と云つて讀むのを止めさした。

『お祖父さん、病氣でもなんでもないの？』と民雄は尋ねた。

『何だい、病氣だなんて！なぜ？』

民雄はなぜさう思つたかはつきり云へなかつたので、默つて居た。

『何ともないよ。この通り。』と云つて、祖父は右腕を眞直に差伸してみせた。『どうだ、腕相撲でもやらうか。』

『いやだ。子供の方が負けるにきまつてるよ。……神經衰弱ならやらう。』

『むむ、やらう。此處に持つておいで。』

民雄は自分の室から、トランプの札を持つて來た。民治も歸つてゐた。それで、祖父とみねと民雄と民治と、四人で神經衰弱をやりだした。それは、トランプの札を皆裏返しに並べておいて、勝手な所を順々にめくつて、同じ數の札を四枚見付けると、それを自分に取るのであつた。多く取つた者が勝ちであつた。

民雄はどうしたのか、その日餘りよく取れなかつた。初めの一回では、彼と民治とが三組づつ、みねが一組、祖父が殘りの五組を皆取つてしまつた。

『どうだ、皆だめだね。』と祖父は云つた。

『こんどは負けるもんか。』と民雄は云つた。

然し彼はどうもうまくゆかなかつた。それに、彼の次が祖父になつてゐた。彼が折角三枚探し出すと、祖父は殘りの

一枚に前から目星をつけておいて、すぐに取つてしまつた。祖父は無駄口も餘りきかないで、妙に眞劍になつてゐた。二回目に、祖父はやはり五組取つたが。民雄は四組きり取れなかつた。

三回四回となると、少し頭がぼんやりしてくると共に、民雄は忌々しくなつてきた。彼は誰も眼につけてゐさうもない札を、6とかジャックとかいふ札をねらつた。ポイントやキングや5など、頭にはいり易い札の方は捨てゝおいた。丁度みねが6を二枚めくり出した。それから一順した後に、彼は6を一枚めくり出した。すると、民治が殘りの一枚をめくつた。民雄はしめたと思つた。自分の番になると安心して、6をめくりかけたが、終りの一枚で、ふと場所を忘れてしまつた。『あれだ、あれだ。』と云つて民治が手を叩いた。『默つてゐなけりやいけない。』と祖父が云つた。民雄は一寸考へた後、思ひ切つてやつてみた。札はクラブの3だつた。がつかりして札をふせやうとすると、『いゝよ』と祖父が云つた。そしてにや／＼笑ひながら、6を皆取つてしまつた。

民雄は向つ腹を立てた。いきなり札をかき廻した。

『ずるいや。』と彼は叫んだ。『お祖父さんはずるいや！』

それと同時に祖父も叫んだ。

『何をするんだ！』

『ずるいや、他人(ひと)がねらつてるのを……。』と云ひかけて彼は一寸息をつめた。祖父が恐ろしい顔をして彼を睨みつけてゐた。然し彼はそれにうち負けたくなかつた。何か惡口を探すつもりで見廻すと、みねの姿が眼についた。『みねやの前だから負けたくないんだ！』

彼にとつて『みねや』は、はるやでも原野さんでも誰でもよかつたのである。然し祖父は、その『みねや』にひどく機嫌を損じたらしかつた。いきなり彼の腕を捉へて、激しく搖ぶつた。

『これ、お祖父さんを馬鹿にするのか。』

民雄はその大きな手に鷲掴みにされて、小雀のやうに身を竦ましてゐた。祖父は云ひ續けた。

『口惜しけりや一度向つて來い。勝負に負けて人の惡口を云ふとは何だ、馬鹿ッ！、さあ謝るがいゝ。謝らないのか！』

彼は民雄の首筋に手をかけて、疊の上にその頭を押しつけやうとした。民雄は承知しなかつた。のしかゝつて來る祖父の腕力を、自分を侮辱する暴虐のやうに感じた。何か云ひ返してやりたかつた。然し言葉が出なかつた。喉に大きな塊が出來て、息が苦しくなつた。そして口惜しかつた。わつと泣き聲を立てゝ、祖父の手に武者振りついた。

『何をする！　わしに向かつて來るのか。』

大きな拳固が民雄の右腕に飛んだ。民雄は夢中になつた。頭を下げてむちやくちやに突進しやうとした。すると後ろから誰かゞ彼を引止めた。何か言葉が聞えた。しいんとなつた。祖父がかう云つてゐた。

『……はゝゝ、豪い。いゝ元氣だ。うつかりしてるとわしの方が負けさうだ、はゝゝ。』

民雄は顔を上げた。祖父が頬の筋肉をぴく／＼させながら笑つてゐた。みねが自分の手を押へてゐた。それらの様子が變に滑稽でまた眞劍だつた。彼は不氣味な恐怖に囚へられた。胸の中がむしやくしやした。俄にみねの手を拂ひのけてわつと喚き立てながら、それでも亂れたトランプの札を蹴散して、其處を逃げ出した。

自分の六疊の室に逃げ込むと、ほつと息が出來た。ひどく不當な取扱ひを受けたやうな氣がした。今に思ひ知らせしてやるぞといふ念が燃え上つてゐた。けれども、それがまた馬鹿げてるやうにも感ぜられた。ノートを取出して鉛筆でやたらにひつかき廻した。

暫くすると、母がやつて來た。彼女は立つたまゝ、彼を上から見下した。

『お前はお祖父様に向つて何をしました？　謝つていらつしやい。……此度からあんなことをすると承知しませんよ。此度だけは許してあげるから。謝つていらつしやい。さあいらつしやい、私と一緒にお謝りなさい。』

彼女は彼の手を取つて引立てやうとした。

『いやだい。』と彼は頭を振つた。

『何ですつて！謝らないんですか。謝らなければ謝るやうにしてあげます。』

民雄はつと母の手を拂ひのけて、逃げ出した。跣足のまゝ椽側から飛び下りて庭の植込の奥に隱れてしまつた。あたりは靜かだつた。誰も追つかけて來なかつた。彼は植込の間から覗き出して、それから蔦の絡まつた大きな岩の影に出て來て、其處に屈んだ。誰もやつて來なかつた。『謝るもんか、謝るもんか、』と心にくり返してるうちに、いつしか憤激の情が靜まつて、彼は岩の根本の芝生の上に身を投げ出し、ぼんやり空を仰いだ。地上にはほろゝ寒い夕闇が下りかけてゐたが、空にはまだ明るい夕陽の光りがあつた。淡綠の芽を出してゐる松の梢の向ふに、靑い空が圓く擴がつてゐて、その中に閃めき慄える光線が一面に入り亂れてるらしかつた。見つめてゐると、眼奥が眩しく痛くなつて來た。

……誰かゞ自分の名を呼んでるやうな氣がした。……頭がぼんやりして眠くなつた。長い間だつた。……彼がふと我に返ると、みねがすぐ眼の前に立つて、彼の顏を見つめてゐた。彼は不氣味な衝動を受けて立ち上つて逃げやうとした。すると俄にみねの兩手に抱き止められた。彼女は其處に兩膝をついて、彼を胸にしかと抱きしめた。『民雄さん！』さう彼の名を呼んで、益々強く抱きしめた。彼は息苦しくなつた。手足を踠いてその抱擁から脫れやうとした。……と突然、喫驚した。みねが泣いてゐた。閉ぢた彼女の眼瞼から、その黑い睫毛の先へ、圓い光つた涙の玉がたまつてきて、ぽたりと落ちた。彼は急に彼女の胸に顏を埋めた。彼女の胸がどき〳〵してゐるのが感じられた。その動悸につれて、甘い咽つぽい香りが身に沁み込んできた。彼はひしと彼女に取り縋つた。

俄にみねは立ち上つた。ぼんやりしてる彼に着物の埃を拂つてやつた。そして云つた。

『御飯ですからあちらへ參りませう、ねえ。そして、お祖父樣に一寸お辭儀をなさるんですよ。何とも云はなくてもよござんすから、お辭儀だけなさいねえ。』

『うん。』と彼は答へた。

茶の間へ行くと、祖父は既に飼臺に向つて、日本酒の杯を手にしてゐた。民雄は横の方へ坐つて、誰にともなくお辭儀をした。

『民雄か。』と祖父は云つた。『こちらへおいで。わしが惡かつたよ。……然しお前の意地つ張りにはかなはないね。』

民雄は妙に悲しくなつた、そして、みねが、先刻のことが、怨めしくて憎くなつた。胸がわく／＼してきた。みねの取澄してる頬邊を毆りつけてやりたくなつた。彼は食事の間一言も口を利かなかつた。

***

それから四五日後、民雄と民治とは母の側に呼ばれた。——原野さんはもう來ないこと、みねが原野さんの代りに祖父へ新聞や雜誌を讀んでやるやうになつたこと、これから宿題に分らないことがあつたら、母から敎はるやうにといふこと、みねは並の女中と違つて、祖父の付添になつたのだから、いくらか丁寧にしてやること、さういふことを長々と說き聞かせられた。

『分りましたか。』さう念を押して、彼女は二人を追ひやつた。『分つたらそれでいゝから、勉强をしていらつしやい。』

自分達の室に戻ると、民治は云つた。

『兄さん、みねやは豪いんだつてよ。』

『なぜ？』

『お祖父さんとお母さんとがさう云つてたよ、原野さんと同じ位に本が讀めるんだつて。』

『噓だい、原野さんの方が豪いや。』

『でもお母さんはさう云つたよ。』

『いや噓だい。』

『なぜ？』
『お母さんはさう云つたらう、宿題に分らない所があつたらお母さんに聞けつて。みねやに聞いたつて分らないからだい。』
『でもいろんなことを知つてるさうだよ。』
『知るもんか。そんなら試してみやうか。』
『うん。』
二人は讀本の中からむづかしさうな字を五つ六つ探し出して、それをみねの所へ持つていつた。
『みねや、この字は何といふの！』と民雄は尋ねた。
みねは一寸彼の顏を眺めたが、それから低い聲で、字の讀み方とその意味とを說明した。そして微笑みながらつけ加へた。
『私はうろ覺えですから、お母樣に尋ねてごらんなさい。』
二人は室に馳け戾つた。
『知つてるぢやないの、兄さん。』と民治は云つた。
『なあに、こんな字なら誰でも知つてらあ。』
然し民雄は、彼女がそれを知つてたことを、嬉しいやうなまた憎らしいやうな氣がした。なぜ嬉しいのかは分らなかつた。けれども憎らしい方の理由ははつきり分つてゐた。それは原野さんが祖父に書物を讀んであげてしまつてから親切に自分達の質問に答へてくれる原野さんが、もう來なくなつた責任は、彼女に在るやうな氣がしたからである。原野さんが來ないといふことは妙に心細かつた。彼は母の所へ行つて尋ねた。
『お母さん、ほんとに原野さんはもう來ないの？』

「えゝ」

「なぜ？」

「忙しいから……。」と云ひかけて彼女は、どうしてそんなことを尋ねるのかと云つたやうな様子で、彼の顔を見返した。

彼はぷいと其處を立ち去つた。そして庭や裏の方を歩き廻りながら、一人で考へ續けた。先日幾度も母と原野さんとひそ〳〵相談し合つてたことを、思ひ出した。また、母とみねとが夜遅く話合つたことも、思ひ出した。何かあるに違ひなかつた。あの日の祖父の様子と、彼を抱いて泣いたみねの様子とが、俄に頭の中に閃いた。それからいろんなことが分つてきた。どの女中も、祖父の附きになると、祖父からいたづらをされて、すぐに逃げ出すといふことを、彼は知つてゐた。所がみねは、あの日から祖父の側につききりになつてゐた。晩も祖父の室に寝た。今迄は、どの女中も次の室に寝て、夜中に相圖の鈴が鳴ると、尿を取りに起き上るのだつたが、みねのやうに同じ室に寝ることはなかつた。……民雄は頭が熱くなるやうな感じを覺えた。對稱の分らない腹立ちに、胸がわく〳〵した。裏の方に廻つてきて、黒い板塀の前に立つてゐると、もう誰の前にも出たくないやうな氣がした。

「坊ちやん、何をしてゐます？」といふ聲が響いた。

見ると、爺やが草取鎌を持つて向ふに立つてゐた。民雄はその方へ走つていつた。何か云ふつもりだつたが、それが口に出て來なかつた。

「爺や……。」と彼は呟いた。

「どうなすつたかね、坊ちやん、變な顔をしてますね。」

「僕はつまんないや。原野さんがもう家には來ないんだといふんだもの。」

「え、原野さんが！」

「もう來ないんだとお母さんが云つたよ、みねやが代りをするんだつて。」

『へえ、では愈ゝ本當だな。坊ちやん、しつかりしてなくちやいけませんぜ。太え奴だ。』そして彼は獨語のやうな調子で云ひ續けた。『旦那様が居ねえもんだから、うまく奥様に取り入りやがつて‥‥。だが、あんな奴に手をつけるなあ、大體大旦様那が悪いや。八十にもなつてあんなことをするたあ、よつぽど變つてらあ。』

『爺や、みねやはお祖父さんのお妾になつたのかい。』

『坊ちやん、知つてますか。知つてりや仕方はねえが、あのおみねは悪い奴ですぜ。何でもね、昔書生とくつつきやがつて、その子供を産んでから、すつかり身を持ち崩してしまつたつて話です。一度女醫になりかけたさうですがね、あんな奴にうまくいくもんですか、今ぢや自棄になつてるんだ。もう幾歳かな‥‥。』

『二十八だよ。』と民雄は云つた、そして自分がどうして彼女の年齢を知つてたのか、自ら喫驚した。

『二十八、なるほど、若くは作つてるがそれ位にはなるかも知れねえ。さうでなけりやいくら金ずくだつて‥‥、もう自分の身に見切をつけてるんだな。』

『爺や!』と民雄は注意した。向ふの物置の入口に、下働きのおちかが立つてるのを、彼は認めたのである。然し爺やにはそれが通じなかつた。

『兎に角いけねえことだ。同じ家に住んでるなあほいけねえ。坊ちやん、旦那様が留守だから、坊ちやんがしつかりしてゐなくちやいけませんぜ。奥様は餘り人を信じすぎなさるだ。人を信じすぎるなあいけねえ。おみねは碌な奴ぢやありませんぜ‥‥‥‥。』

『爺やさん!』とおちかは聲をかけた。彼女はいつのまにか側にやつて來てゐた。『坊ちやまに何を云ふんです!』

『やあおちかさんか、悪い所を聞かれちやつたね。だが俺は本當のことを云つてるんだ、おみねはうまく猫をかぶつてるが、俺はちやんと睨んでることがあるんだよ。』

『いゝえ、そのことなら私の方がよく知つてるよ。大旦那様があの通りで、來る女中も來る女中も居つかないんだらう

それでね、原野さんと、……原野さんにも一寸變なことがあつたさうだが、原野さんと奥様と大變心配なすつて、お二人で相談の上、おみねさんに無理に頼まれたんだよ。おみねさんもそれを承知したのは悪いが、人に知れない苦勞もあるし、義理にからまれてね。私はよく／＼のことだつたらうと思ふよ。いつかもね、あの人はしく／＼泣いてたよ。すると奥様がそれを慰めてゐらした。私はちやんと見たんだよ。あんまり惡口を云ふもんぢやないよ。』

『然しだね、あいつは隨分ひでえことをして來た女だつて云ふぢやねえか。』

『そんなことは知らないがね、考へてみりやあ氣の毒な人だよ。たとひひどいことをして來た人だつたにしろ、それだけに苦勞も多いだらうぢやないかね。』

『兎に角いけねえことだ。旦那様が居りや許しちやおかねえよ。』

『でもあれでよくなりやいゝぢやないかね。』

民雄はさういふ話を傍から聞いてゐた。そして何とも云へない嫌ふ氣持になつた。彼はそつと二人の側から逃げ出した。『坊ちやま！』といふ聲が後ろに聞えた。ふり返ると、おちかが手招きをしてゐた。彼はぢつと立ち止つた。『こんなことを人に云つちやいけませんよ、』と彼女は云つた。彼は首肯いた。そして足早に立ち去つた。

彼は庭の隅に行つて、ぼんやり考へてゐた。何かゞ、凡てが、忌々しくてなさけなかつた。眼から自然に涙が湧いてきた。泣きながら、先刻の話を考へてゐた。爺やの云つたことが本當のやうでもあれば、おちかの云つたことが本當のやうでもあつた。しまひにはおちかの云つたことばかり考へてゐた。そしてみねの姿を頭の中に思ひ浮べてゐた。知らず識らずのうちに、庭木の新芽をつまんでは投げ捨て初めた。……ふとさうした自分自身に氣がつくと、何だか恐ろしくなつた。日が陰りかけてゐた。

彼はアメリカに行つてる父のことを思つた。そして家の方へ驅け出した。椽に驅け上ると元氣づいた。何でもやつて來いといふ氣がしてゐた。

＊＊

祖父は非常に大食だつた。そして特にその頃美食を取つてゐた。朝は普通の味噌汁の外に納豆(なつとう)や豆腐など輕い物ばかりだつたが、晝にはフランス麪麭と北海道の農科大學で出來るバタとを食べ、午後三時頃に柔い洋菓子を取り、晩になると、白鶴一合と豚の臘肉か牛のひれ肉か鳥のさゝ肉か時には牡丹肉や鼈(すつぽん)などを食べ、夜寢る前にフランス産の葡萄酒を二三杯飮んだ。そして朝起きると庭を、朝食後と晝食後とには長い椽側を、幾度も歩き廻つて運動した。――さういふ祖父の日々の生活に、民雄は皮肉な眼を向けてゐた。『お祖父さんは死ぬのを恐がつてるんだ。』と彼は思つた。然しみねが祖父の世話をするやうになつてからは、たゞそればかりでもなささうだといふことが、彼の幼い頭にも映じてきた。祖父は非常に疲れた顔をしてることがあつた。かと思ふと、神經が苛々してるやうな元氣を示すことがあつた。そして菓子やなんかを子供達に少しもくれなくなつた。そのくせみねにはいつも、自分の洋菓子を食べるやうに勸めてゐた。――民雄は氣を惡くした。祖父はすつかりみねに奪はれてるやうな氣がした。そして彼の頭では、みねが惡いのではなくて、祖父が惡いのだつた。『少しからかつてやれ。』と彼は思つた。

民雄は弟をそゝのかして、二人で祖父の菓子を盗まうとした。祖父が室に居ない隙を見計つて、二人で次の室に忍び込んで、違ひ棚の上にのり、上の袋戸棚にしまつてある菓子器から、まんまと中のシュークリームを皆盗み出してしまつた。二人は庭の隅に驅けて行つて、それを食べた。

『旨いだらう。』と民雄が云つた。

『うん、旨いね。』と民治が答へた。

『お祖父さんをからかつてやらうや。』

『どうするの？』

民雄は弟の耳に囁いた。そして二人で何喰はぬ顔をして、祖父の所へ行つた。祖父はみねに足を揉ましてゐた。

『お祖父さん、おはじきしやうか。』と民雄は云つた。
『うむ、やらう。』と祖父は答へた。
『だつてただぢやつまんないな。』
『どうするんだ？』
『お祖父さんが負けたら僕達にお菓子をくれない？』
『はゝゝ慾張つてるね。よし〳〵、負けたらお菓子を上げる。』
民雄は碁石を持つて來て、祖父とおはじきを初めた。祖父の年老いた太い指先は極めて不器用だつた。民雄は譯なく勝を占めた。此度は民治が代つてやると、民雄は弟の方を時々助けてやつて、また祖父を負かしてしまつた。祖父は苦笑しながら、みねに次の室から菓子器を持つて來さした。そして蓋を取つてみると中は空であつた。
『や。確かに岡野から屆けて來たのを入れて置いたが、誰か取つたな！』と祖父は叫んだ。
彼は非常に癇癪が强かつた。自分の所持品が一寸見當らなくても、すぐに腹を立てた。或る時、襯衣の置き場所が違つてゐたので、大聲に怒鳴り散らしたこともあつた。
『お祖父さん、お菓子をおくれよ。』と民治は云つた。
祖父はわな〳〵と指先を震はしてゐた。額の眞中に一本靑筋を立てゝゐた。『郁を呼んで來い！』と怒鳴つた。
『お母さんは用をしてるよ。』と民雄は云つた。
『いゝから郁を呼んで來い。』
民雄はその見幕が可笑しくなつた。弟と顔を見合してくすりと笑つた、祖父はその樣子に氣付かなかつた。自分で立ち上らうとした。すると、みねがそれを引止めた。彼女は云つた。
『あの・・・私が惡うございました。私がつい頂いてしまひましたので。』

『お前が！』
『はい。食べたかつたらいつでも食べるがいゝと仰言いましたので、すつかり……』
『さうか。』と云つて祖父は猛り立つた氣分をがつくりと和らげた。『それなら、早くさう云へばいゝぢやないか。』
民雄は一寸心の向け所に迷つて、ぼんやり眼を見張つたが、そのまゝには落付けなかつた。次の瞬間には譯の分らない憤激の情に驅られた。彼ははつと立ち上つて、逃げ腰をしながら叫んだ。
『みいねやの嘘つき！お祖父さんのお馬鹿さん！お菓子は僕が食つたんだい。』
『何だ！』と祖父は叫んで立ち上つた。
民雄と民治とは逃げ出した。逃げながら民治は云つた。
『婆食つた爺や、椽の下の骨見ろ！』
祖父は菓子器の蓋を取り上げて追つかけて來たが、走れないから平氣だつた。二人はゆつくり驅け出して母家の方へ逃げて行つた。自分達の室に逃げ込んで、襖をしつかり押へると、急に可笑しくて堪らなくなつた。腹を抱へて笑ひ出した。誰も追つて來さうになかつた。家の中はひつそりしてゐた。
『お祖父さんは本當に怒つてるよ。』と民治は多少不安さうに云つた。
『怒つたつて平氣だい。後で謝りやいゝや。』と民雄は答へた。
然し家の中が餘り靜かだつた。耳を澄してても何の物音もしなかつた。民雄も少し不安になつた。
『見に行つてみやうか。』と彼は云つた。
『だつて捕ると恐いよ。』と民治は答へた。
民雄は何だか氣懸りで仕方がなかつた。それで弟を其處に殘して、一人でそつと覗きに行つた。爪先で座敷を通りぬけて椽側に出たが、離れから見られる恐れがあつたので、また座敷の中にはいり、廊下をぬけて、離れの祖父の室の次

の間を覗いた。誰も居なかつた。襖の向ふもひつそりしてゐた。何だか豫期に反したやうな氣がして、彼は暫く佇んでゐた。

すると後ろの方に臺所から廊下傳ひに、人の足音が聞えて來た。逃げやうと思つたが、前へ出れば祖父から見つけられる恐れがあつた。彼は知らん顔をして立つてゐた。足音は近づいて來た。みねが姿を現はした。

民雄はほつとしたが、もう逃げられなかつた。みねは彼の側に寄つて來て、彼を胸に抱くやうに引寄せた。そして耳許に口を寄せて囁いた。

『民雄さん！』

一寸沈默が續いた。

『民雄さん！』とみねはまた云つた。『なぜあんなことを仰言るの。お祖父様が本當にお怒りになつたら、どうなさいます？、私のせいになさつとけばいゝぢやありませんか。餘り惡戯をしてはいけませんよ。少し位はいゝけれど……お祖父様はあの通り氣が短いでせう。どんなことをなさるか分りませんもの。怪我でもなすつてはつまらないでせう。ねえ、これから何かあつたら、私の云ふことも少しはきいて下すつていゝでせう。惡いやうにはしませんわ、ねえ、分りましたか。お分りでせう。私あなたが大好きよ。だからね、私の云ふことも聞いて下さるわね。』

民雄は彼女の言葉をよく聞いてゐなかつた。その口早な柔い息に、耳が擽つたくてたまらなかつた。聲を立てやうとしたが、身動きも出來なかつた。いゝ香りのする海綿に、じわりと緊めつけられたやうな氣がしてゐた。恐さと快さとで胸が一杯になつて、背中が震えてきた。

『何を震えてゐらつしやるの。』と彼女は云つた。

彼は益低く頭を垂れてしまつた。彼女はそれを、上から蔽ひ被さるやうにして抱きすくめた。彼は胸が激しく動悸してきた。

向ふの室で、祖父の咳拂ひが聞えた。彼は慄然とした。どうにも出來なかつた。息が苦しくなつて、わつと泣き出した。

『泣いてはいけません、泣いてはいけません。』とみねが云つてゐた。

彼はその言葉を聞くと、益々肩を震はして泣いた。祖父がやつて來た。

『何をしてるんだ』。と祖父の荒々しい言葉が響いた。『子供をいぢめてどうするんだ。……民雄、こつちへおいで。面白い氣性だ。も一度おはじきでもやるか、どうだい。』

そして祖父は聲高に笑つてゐた。

民雄はぞつと冷たいものを背筋に感じた。殆んど夢中になつて逃げ出した。自分の室に馳け込むと、其處には誰も居なかつた。一人で居るのが恐ろしかつたので、母の所へ行つてみた。民治が何かねだつてゐた。彼は急にぼんやりして其處につゝ立つた。

『どうしたんです、涙なんか流して。』と母が云つた。

その時、彼は一種の屈辱を感じた。それは祖父から來るのか、みねから來るのか、または母から來るのか、よく分らなかつたが、兎に角屈辱を感じた。そして母から種々尋ねられても、彼は默りこくつてゐた。今に仕返しをしてやるぞといふ氣分で一杯になつた。

その翌日、原野さんが何かの用でやつて來て、六疊の勉强室を覗いた時、民雄はいきなり彼女の耳許にかぢりついてかう云つてやつた。

『先生、みねやはお祖父さんのお妾でせう。』

『え！』と原野さんは顏を擧げた。『そんなことを仰言るものではありません。あの人はお祖父樣のお世話をしてるだけですよ。お祖父樣はもう年取つてゐられますでせう。いろんな御用をしてあげなければならないのです。お妾だなんて

そんなことを人に云つてはいけませんよ。夢にも仰言るものではありません。』

それから民雄は、母と原野さんとの前に呼ばれて、長い間小言を云はれたり、説き聞かされたりした。彼は默つて疊の上を見つめてゐた。しまひには堪らなくなつた。そして反抗の氣分がむら〳〵と湧いてきた。『いゝ加減なことを云つてらあ。』と彼は心の底で思つてゐた。

お説教から解放されると、彼は弟を誘つて祖父の所へ馳けて行つた、何か面白い惡戯はないかと考へながら。

＊＊＊

祖父は喜んで子供達と一緒に遊んだ。時には自ら進んで子供らしく騷ぎ出した。そしてよく怒つた。よく笑つた。怒る時には顔色を變へて喚き立てた。笑ふ時には全く沒表情な顔付をしてゐた。腹底から一人でに笑ひが飛び出して來るがやうであつた。子供等は面白がつた。笑つてるかと思ふと、額に青筋を立てゝ怒つてゐた。凡てが全く唐突で取り留めがなかつた。それを子供等は面白がつた。恐くなると逃げ出した。祖父は肥つて脂ぎつた身體をしてゐたが、足は不自由だつた。子供等は一度も捕らなかつた。

民雄は次第に大膽になつていつた。そつと祖父の後ろに忍び寄つて、顱頂部の禿を平手でぴしやりと叩いて逃げた。祖父は立ち上つて追つかけて來た。民雄はひらりと身をかはして、十疊の室の中を逃げ廻つた。民治も衣桁や屏風の後ろに隱れてはやし立てた。しまひに二人は手を叩いてわざ〳〵祖父の手先を驅け廻つた。祖父は息を切らして室の中に立ち止まつた。途方にくれたやうな顔付をしながら、目玉をぐる〳〵動かしてゐた。二人はわつと笑ひ出した。民雄は面白いことを考へついた。

『お祖父さん、盲目鬼をしやうか。』

『うむ、よからう。』さう祖父は答へて、大きな頭を三つ四つ横に動かした。『庭でやらう。』

じやんけんをすると、民治が負けて鬼になつた。民雄は彼の耳に囁いた。彼は首肯いた。細かな濱砂を撒いた庭に棒

切で圓を畫いて、その中で盲目鬼を初めた。薄ら日が照つてゐた。暫くすると、祖父が夢中になつてる隙を見計つて、民雄はその後から力一杯に鬼の方へ押しやつた。鬼はうまくよろけかゝつた祖父を捕へた。祖父は足をふみしめて、くるりと向き返つた。

『卑怯な事をするな!』と祖父は怒鳴つた。

民雄と民治とは十歩ばかり驅け出した。すると後ろで祖父の笑ひ聲が聞えた。振り向くと、祖父は口を少し開いてぼんやり立つてゐた。

『お祖父さんが鬼だよ。嚇かしたつて駄目だ。』と民雄は云つた。

『よし〳〵、鬼になつてやる。』と祖父は靜に云つた。

民雄は祖父の眼にしつかと手拭を結へて、つき放した。太い兩手を擴げ、大きな禿頭を振り動かし、薄い脣をきつと結んで、危うげな足取りで追つかけて來る祖父の姿は、云ひやうもなく道化て見えた。民雄と民治とはくす〳〵笑ひながら逃げ廻つた。と、どうしたはづみでか、祖父はばたりと俯向きに倒れた。二人は息をのんだ。祖父はいつまでも起き上らなかつた。二人はこは〳〵近づいて行つた。祖父の肩のあたりがびく〳〵顫えてゐた。

『お祖父さん、どうしたの?』と民雄は云つた。

返事はなかつた。

民雄はそつと眼隱しの手拭を解いてやつた。すると祖父はむつくり上半身を起した。眼から頬へかけて涙が流れてゐた。そしてそのまゝ、涙の顔をひきつらして、わは〳〵笑ひ出した。何とも云へない空虚な狂氣じみた笑ひだつた。二人は恐ろしくなつた。然し庭の中に祖父一人を置きざりにして逃げることも出來かねた。互に寄り添つて、笑ひ續ける祖父の顔を見つめてゐた。

丁度、向ふの椽側をはるが通りかゝつた。

『はるや、』と民雄は呼んだ、『お祖父さんが……。』

はるはすぐにやつて來た。祖父は俄に恐ろしい顔をして立ち上つた。けれども何とも云はなかつた。はるが何か尋ねても、默つて室の方へ歩いて行つた。

その後姿を呆氣にとられて眺めてゐた民雄は、突然不氣味な不安を感じた。いつになく祖父が怒鳴りつけもしなければ、何等の言葉もかけないで、ただ恐ろしい顔をして立去つて行くのが、尋常のことでないやうに思はれた。その上彼は肩が張つて身幹が小さく、背が高いはるを、仲働きの女中ではあるが、何となく嫌ひだつた。

彼は弟に目くばせして、母家の方へ逃げて行つた。自分の室にはいつて寢轉んだ。弟が母の所へ走つて行つたが、彼はその後を追はなかつた。然し一人になると、日當りの惡い室の中が妙に窮屈になつた。ノートを一冊持ち出して、座敷の椽側に寢轉んだ。何か繪をかくつもりだつたが、それも大儀だつた。薄ら日の午後の明るみが庭に在つて、植木や岩や芝生の作りが、盆景のやうに乾びて見えた。

柱時計が三つ鳴つた。お祖父さんがお菓子を食べる時間だな、と思つたが、その思ひはすぐに煙のやうに消えていつた。彼はまたぼんやりした氣分に浸り込んだ。

向ふに、離れへ行く椽側に、みねの姿が見えた。民雄はつと起き上つた。先刻のことで自分を探しに來たんだなと思つた。そして障子の中にはいつて隱れた。然しいつまで待つても、みねはやつて來なかつた。そつと障子の蔭から覗き出すと、もう誰の姿も見えなかつた。

彼は騙されたやうな氣がして、輕い不滿の念を覺えた。そして自分でも何故か分らずに、靜に祖父の室の方へやつて行つた。室の前で一寸躊躇した。それから思ひ切つて首をつき出した。障子の硝子から中を覗くと、誰も居なかつた。折れ曲つた向ふの椽側の端で、何かこと〳〵輕い音がしてゐた。忍び足で椽側を曲り角まで傳つて行つて、そつと見ると、其處の洗面所で祖父が歯を洗つてゐた。洗面臺の前に敷いた坐蒲團に坐つて、水道の口から水を少しづつ出しな

から、抜き取つた總入齒を、小さな刷毛で洗つてゐた。それはいつも見馴れたことではあつたが、ひそかに偸見てるせいか、その時妙な氣がした。祖父は前屈みになつてるので、後ろから頭は見えなかつた。未だに眞綿の胴着をきてゐる背中が、昔て見世物で見た人間と牛との混血兒のそれのやうに、圓く膨らんでゐた。その背中の上に、太い耳朶が二つによきりと出てゐた。背中の横に角張つて飛び出して居る兩肱が、ちよこ〳〵動いてゐた。口の中から取り外した齒を刷毛で擦つてるのだ。……民雄は眼を見張り唇を尖らして、それに見入つてゐた。

　ふいに彼は、後ろから抱き寄せられた。はつと我に返ると、みねが上から彼の顔を覗き込んでゐた。彼は眞赤になつた。突差の間にかう云つた。

『みねや、負ぶしてあげやうか。』

『えゝ、大丈夫？』

　さう尋ねながら、彼女はしつかと彼の肩につかまつてゐた。彼は障子を明けて室の中にはいつた。みねは片足をついてくつついてきたが、室の中にはいると、全身の重みで彼の上にのしかゝつて來た。彼は其處にへたばつてしまつた。彼女は離さなかつた。彼は息が苦しくなつた。でもぢつと我慢してゐた。苦しいのが快かつた。彼女の方でも默つてゐた。けれども、やがて彼女は手を離して立ち上つた。

『此度は僕が負ぶするんだ。』と民雄は云つた。

　彼はみねの背中に飛びついて、その首にかぢりついた。香油と白粉の匂ひがぷんとした。その匂ひが分らなくなると肩の手に力を入れて、自分の頬を彼女の頸筋に押しあてた。彼女は輕く身體を揺り動かしながら、室の中をぐる〳〵歩き廻つた。

『此度は民雄さんの番よ。』と暫くしてみねは云つた。

『立つてちや駄目だい、重いから。』と彼は云つた。

彼が四つ匐ひになると、みねは笑ひながら、その背中に後ろ向きに腰掛けた。彼はそれが不滿だつた。そしてやたらに早く匐ひ廻つた。彼女は時々轉げ落ちさうになると、片足を疊について身體の平均を取つた。

民雄は眼に止つた。祖父が室にはいつて來たのである。みねは飛びのいた。民雄は立ち上つた。恥しくて堪らなかつた。顔が赤くなるのが自分にも分つた。その瞬間に、みねの靜かな聲が云つた。

「坊ちやまが私を負ぶ出來ると仰言いますけれど、まだやはり駄目でございますわ。」

祖父は嵌め込んだばかりの入歯をかちかち食ひ合してゐたが、大きな頭を二三度動かしながら云つた。

「そんなにお前は重いのか。どれ、わしがやつてみやう。」

「だつて旦那樣に……」

民雄は急に元氣づいた。そして今のきまり惡さを自分自身に押し隱すやうにして云つた。

「ぢやあ僕が負さらあ。」

「よし二人で來い。」

祖父は其處に四つ匐ひになつた。民雄はその背中に飛び乘つた。

「二人共來い。」と祖父はくり返した。

「みねもお乘りよ。」と民雄は顧みて云つた。

みねは民雄の眼にちらと笑ひを送つて、彼の背中に上からそつと乘つかつて來た。

祖父は徐々に匐ひ出した。民雄は、祖父の背中とみねの胸とに挾まれて、ちつと息を凝らした。兩方から温みが傳はつてきた。祖父の身體が非常に汚いもののやうに感じられた。みねの身體が非常に香しいもののやうに感じられた。而も、その汚いものを胸の方にし、香しいものを背中にしてゐたのである。彼はどうしていいか分らなかつたが、然しぢつとしても居れなかつた。頭の芯が熱くなつて、足の先が冷たくなつてきた。魔法のやうな力で。手足を動くことも出

來ないほど、しつかと縛りつけられてる心地がした。然しぢつとして居れなかつた。氣が苛ら〳〵してきた。苛ら立ちはやがて涙に變つてきた。

彼が危く涙を落さうとした時に、祖父は突然動かなくなつた。ぴたりと止つたまゝ動かなかつた。みねは飛び下りた。祖父は『あ!、あ!』と喉の奥で云ふやうな聲を洩らした。民雄も驚いて飛び下りた。祖父は上半身を起した。見ると、にこ〳〵笑つてゐたが、口の角から涎を垂らしてゐた。

その頃からもう祖父は、中風を病みかけてゐたのである。

＊＊＊

祖父は室の中に一人で寢轉んでゐた。民雄は其處にやつて來た。

『お祖父さん、何かして遊ばうよ。』と彼は云つた。

祖父は返事をしなかつた。民雄はも一度前の言葉をくり返した。やはり返事はなかつた。で何か祖父をつり出す惡口か惡戯かを考へてゐると、祖父は突然云ひ出した。

『民雄、この頃學校はどうだ。』

何がどうだ？ か分らなかつたので、民雄は默つてゐた。

『宿題はいゝ點を取つてるか。』と祖父は云つた。

『うん。』と民雄は答へた、『一昨日の算術も皆出來たよ。』

『本當か。』

民雄は侮辱されたやうな氣がした。そして默つてゐた。

『見せてごらん。』と祖父は云つた。

民雄は一寸考へたが、そのまゝ自分の室に馳けて行つた。そして、何處も直されてゐない算術の答案、とそれから二

直丸が幾つもついてる習字の清書を探し出して、それを祖父の所に持つて來た。

祖父は身を起して、それを手に取り、算術の方をちらと見、次に習字の方をぢつと眺めてゐた。

『ほう、うまくなつたな。』と彼は云つた。それから暫くして、『大事にしまつておいで。』

『そんなものいらないんだよ。』と民雄は答へた。

『いらないことがあるもんか。大事にして置かなくちやいけない。』

『いらないんだよ。』と民雄はくり返した。

『しまつて置けと云つたら!』と祖父は大聲を立てた。

民雄は面白くなつた。祖父をからかうつもりで、二枚の紙を引裂いてしまつた。

『何をするんだ!』と祖父は怒鳴つた。

民雄は二三歩退いた。祖父は歯を食ひしばつて、立ち上りかけたが、どうしたのか、そのまゝ四つ匐になつて追つかけて來た。民雄は屏風の後ろに逃げ込んだ。祖父は俄に追ふのを止めて、落ち散つた紙片を拾つて、それを膝の上でつぎ合し初めた。民雄は可笑しくなつた。

『合したつてつがるもんか。』

すると祖父はわは〳〵笑ひ出した。民雄は屏風の蔭から出て來て、祖父の後ろに忍び寄り、禿の所を平手でぴしやりと叩いて逃げた。祖父はぢつとしてゐた。民雄はまた寄つて來て、禿を叩いた。祖父はやはりぢつとしてゐた。そして膝の上で、清書の紙片を圓めたり擴げたりしてゐた。

民雄は少し氣の毒になつた。

『お祖父さん、五目並べを教へてくれない?』と彼は云つた。

祖父は急に向き返つた。

『よし／＼、教へてやらう。』

民雄は碁盤を持つて來た。そして祖父から五目並べの法を教はつたり、先に二つ置いて祖父と勝負したりした。そのうちに民治もやつて來た。三人で交る代る碁石を弄んだ。

暫くすると、祖父は云つた。

『民治、みねを呼んでおいで。』

『なぜ？』

『なぜでもいゝ、呼んで來い。』

民治は變な顔をしたが、それで母家の方へ馳けて行つて、母と話をしてゐるみねを呼んで來た。

みねは室の中をちらと見廻して、それから云つた。

『何か御用でございますか。』

祖父は彼女に命じて、次の室から菓子を持つて來さした。器の中にはカステーラの切つたのが一杯はいつてゐた。

『それを皆でおあがり。』と祖父は云つた。

誰も手を出さなかつた。

『食べないのか。』と祖父は云つた。

皆一片つゝ取つて食べた。

『すつかり食べておしまい。』と祖父は云つた。

そんなことは珍らしかつた。近頃では殆んどなかつた。で誰も妙な氣がして、手を出す者がなかつた。

『なぜ食べないんだ。』と祖父は怒鳴つた。

『はい。』とみねが答へた。そして彼女は民雄をつゝいた。民雄は手を出さうとしたが、一寸躊躇した。祖父が恐ろしい

顔をして眺めてゐた。

『嫌なのか。』と祖父は頭の上から怒鳴りつけた。

みねが何か返事をしかけたが、その隙がなかつた。祖父はいきなり菓子器を掴んで疊の上に投げつけた。カステーラが飛び散つた。

『あら、今食べますのに……。』とみねは落付いた聲で答へた。

彼女は菓子を拾ひ集めた。祖父は眼を見据えて、膝の上で拳を震はしてゐた。

『早くお食べなさい。』とみねは民雄に云つた。

疊の上に投げ出された菓子であるといふことには、誰も殆んど氣付かなかつた。民雄と民治とは、兩手に菓子を掴んで、大急ぎで呑み下した。菓子が無くなる頃になると、祖父は兩方の眼から涙をぼろ〳〵落してゐた。

『どうなさいましたの。』とみねは云つてすり寄つた。

祖父は怪訝な顔をして皆を見廻した。

『お祖父さん、なぜ泣くの。』と民治が云つた。

祖父はその言葉に、初めて自分が泣いてることに氣付いたかのやうに、平手で眼を拭いた。そして二三度眼を瞬いた。後からまた涙が出て來た。

＊＊＊

梅雨になりかけた頃、アメリカの父から、用の都合で一寸歸國するといふ手紙が屆いた時、祖父はもう一日の半ばを寢床の中で暮すやうになつてゐた。緣側を歩き廻る運動は續けてゐたが、庭の散歩は止してしまつた。よく民雄を呼んで、自分の側で勉強をさした。祖父の室の方が、明るくて廣々としてる上に、非常に綺麗だつたし、また分らない字があればすぐに教はれるので、民雄はそれをいゝことにして、喜んで書物を持つて來た。然し彼は不滿だつた。みねが妙

に取澄した態度を取るやうになつた。新聞雜誌を讀む時の外は、祖父の室に落付いてることが少くて、多くは次の間で針仕事や何かをしてゐた。――夜、彼女はいつのまにか次の間に寢るやうになつた。祖父は湯たんぽを入れて寢た。――民雄は、勉强に倦きてくると、祖父に惡戯をしかけたが、祖父は餘り取り合はなかつた。民雄はぷいと立つて行つたそして民治と遊んだり、母に駄々をこねたりしたが、それもつまらなくなると、彼はまた離れの方へやつて來た。十疊の次の間を覗くと、みねが何か考へ込みながら、ぽつり〳〵針仕事の手を運んでゐた。民雄は中に飛び込んでいつて、その後ろから抱きついた。

『さあ、お仕事の邪魔になりますから、あちらで遊んでいらつしやい。』と彼女は云つて、靜に彼の手を離した。

彼は暫く後ろに立つてゐたが、此度はそつと手を差伸して、彼女の柔い耳朶をちよいとつまんで引張つた。彼女はちつとしてゐた。彼はまたその耳朶を引張つた。彼女は振り向いて、微笑んだまゝの眼を引きしめてきつさうにしながら低い聲で云つた。

『餘り惡戯をなさるものではありませんよ。今にお父樣に叱られますよ。』

『叱られたつて恐かないや。』と民雄は云つた。

『嘘仰言い！』

『なに恐いものか。お父さんなんかちつとも恐かないやみねやの方がお父さんを恐がつてるんだらう。』

彼女は他のことを云つた

『あちらで遊んでいらつしやい、ねえ。今急ぎの仕事をしてる所ですから。』

『嘘つき、みねやの嘘つき！』と民雄は大きい聲で云つた。

みねは何とも返事をしなかつた。民雄は遊々出て行つた。障子を閉めやうとすると、彼女がふり返つて眺めてゐた。

彼は一寸佇んだ。彼女は妙に悲しさうな顔をして、頭を振つた。

民雄は淋しいのか腹立たしいのか分らない氣持ちになつた。それを紛らすために口笛を吹いて、庭の中を歩き廻つた。曇つた空から細かい雨が降りさうだつた。花の散つた躑躅の新芽が長く伸びて、不恰好な形になつてゐた。向ふの樹の幹に絡みついたおかめ蔦に、可愛いゝ若葉が出てゐた。民雄は其處へ行つて、その小さな葉を幾枚もむしり取つた。

やがて彼はまた祖父の所へ戻つて來た。祖父は毛布の上に寢轉んで、足をばたり〱やつてゐた。

『お祖父さん。』と民雄は云つた、『もう二週間ばかりのうちに、お父さんが歸つて來るんだね。待ち遠いなあ。』

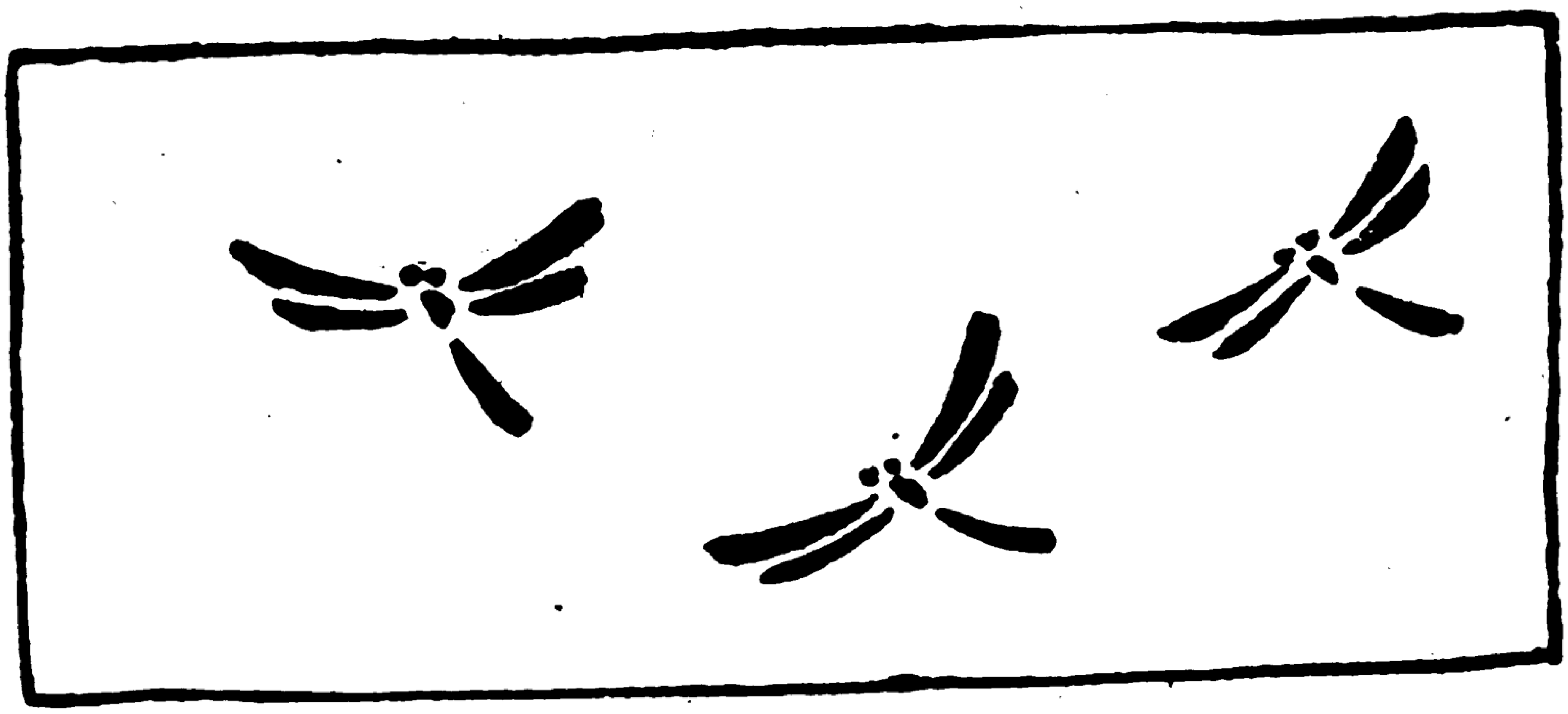
『うむ。』と祖父は氣の無い返事をした。

民雄は急に淋しくなつた。祖父に惡戯するだけの元氣もなかつた。其處に寢轉んで讀本を開いたが、つまらない氣がした。

『お祖父さん、トランプしやうか。』と彼は云つた。

『うむ。』と祖父は機械的な返事をした。

民雄は飛び起きた。そして、民治とみねとを呼びに驅け出して行つた。



美女

宇野浩二

『大丸』にゐました時分のことだす。……

大阪の『大丸』の黒豆奉公ちうて、御存知やおまへんか、まあ、朝は大阪の商人家は何處でもおんなしことで、お粥に澤庵と相場が定つてまつけど、晝は他所ならたとへ目差鰯の三疋でも、大根菜に油上げ位でも、お萬菜に附くもんだすが、それが、大丸のんは三百六十五日、降つても照つても、鹽で煮いた黒豆だんねさかいな、やり切れまへん、と言うて丁稚に入る時に、その約束で行きまんねさかい、苦情の言ひやうがおまへん、それで辛抱出來んやうなもんは、一人前の商人になれんちふねだすさかいな、覺悟はしてますもんの、それでも、車を引いてお得意廻りする時やかてその通りだすやろ、柳合李の辨當の中がやつぱりそのお菜だすね、大概情なうなつて、何遍もうこんな家出てしまふたろ思うたか知れしまへん、他所はんで新しいお得意先やみなで、店の規則を知りはれへんとこでは、時々お菜を出してくれはるとこがおますけど、それ貰うたんが知れましたら、一遍に出されてしまひまんねさかいなあ。……

ほい、これは別の話だした、が、兎に角、私はその黒豆奉公も無事に濟ましまし

て。それから又番頭を十三年も勤めましたんだすが、その暇を貰ふ二年前の、丁度一重羽織に一重もんの時分だしたよつてに、さうさう、何でもその年は空梅雨で、梅雨の癖に雨の少ない年だした、六月の晦日の前の日だした、若旦那はんに言ひ付かりましてな、へえ、若旦那はんはその時まだ二十二三だした、私は丁度三十だした、けど、どういふもんか、うまが合ひましてな、何ぞ言ふと伊豫吉伊豫吉いうて、私には何でも打明けてくれはりました、私は、自分で言ふのも何だつけど、店中で一番の堅人いはれました位で、大旦那はんの大のお氣に入りでもおましてん、ところが若旦那はんは十八九の時分から一寸々々遊び始めはりましたもんだすよつてに、大旦那はんには始終厭な顔をしられてはりました、その堅人の番頭の私と極道もんの若旦那はんとが、妙なもんで、大仲よしだしたんだす、と言うて、断つておきますけど、遊びの方のお附合ひは、私は一遍もした事はおまへんねで、その時でもお茶屋やみなの拂ひにだすやろ、若旦那はんが御良人さんにそつと出して貰ひはつたんだすやろ、千圓ほどのお金だす、それを銀行へ出しに私が言ひつかつて行きました時のことだんね、さあ、これからが本眞の話の始まりだす。……

ほら、美女は、何とか言ひまんな、美女は、何やらだんな、さうさう、美女は命を斷つ斧、昔の人はうまい事いひまんな、いや、もうさうに違ひおまへん、成程、この位の女子やつたら、命を斷つ斧だすやろ、もつともや、そら、本眞に何とも言へん良え女子だしたで、私は今はもうそろ〳〵五十の阪に手の届く年をしてまつけど、生れてから、まだあんなえゝ女子に二度とお目に掛つたことがおまへん。

銀行で丁度千圓の金を受取つて、あれは銀行の門の締まつた時分だしたさかい、勤め人や働き人が歸る時分だしたさかいやろ、浪花橋の下から、まだ巡航船がおました時だす、あれに乗りましたところが、人でぎつしり一ぱいやおまへんか、私は懐の錢を氣にしいしい、と言うて船の外側に立つてんのも阿房らしおますさかいな、無理に人を押し分けて、中へもぐり入りましたもんだすが、それでもやつと低い天井から下つてゐる吊革を一つ掴みまして、やつと落着いて、それでもやつぱり懐だけは始終氣にしながら、人の頭と頭の間越しに、小さい窓の外を船と逆さまに動いて行く、

あの邊の川は堀割と違うて廣いさかい良え氣持だんな、空の曇つた日だしたんで、薄墨色の天の下に染めたやうに綠色の濃う見える川緣の堤や植木や、青い川の景色を見てゐますと、ふッと人臭い、汗臭い人いきれの中に、ふツふツと螢のお尻の火見たいに、何とも言へん、白粉のとも、香水のとも、麝香のとも、髮油のとも、何とも、彼とも言へんえゝ匂がしまんね、私は暫くの間右を見い、左を見いして、漸うのことで、その元が私の前のその前の、私の前には何處ぞの會社員らしい、四十がらみの身體の大きい人がゐまして、その向うは大工さんか左官か、これも亦人並外れた大きい人だしたが、匂はその人の向うから來まんね、見ると、その大工さんの法被姿の向う左に、その大工さんの肩の邊に、髮はかまはん振に見える束髮だんねやがなあ、さあ、それが唯のかまはん振ちふのやおまへんね、何ちふたら宜しおますやろかな、一遍すつかり、地が痛む程洗うて、乾いたところで、半日位油の中に浸けといて、それを又半日位掛つて乾かして、そしてさつともう一遍洗うたとでも言ふやうな毛で、ふうわりと油氣なしに結ひ上げたやうなもんだつかな、その眞黑な、漆塗にほーッと息をかけたやうな色の、朝結うた午後のらしい束髮の中に、ガラス玉見たいに見える曇り氣や縞のない、眞青な、その又彫いふたら、秋の七草を丹念に花束に細かうに細かうに刻み上げた、翡翠の束髮挿をさした女子がゐるやおまへんか、後姿のえゝ女子も隨分おますけど、私は生れてから、あんな髮の恰好から　その髮の下に、首筋と、透通つた乳硝子見たいな耳から、頰つぺたが少うし見えまんねが、それに大川の土手の芝草か、水の色か知りまへんけど、青いのんが、すうつと刷毛をかけたやうに映つてまんね、私はぽーつとしてしまひましたな、もうそれからかれこれ二十年近う經ちまつけど、今思ひ出して見ても、ぞーつとする位はつきり思ひ出せますもんなあ。

　あんたも知つての通り、私は今でもさうだすけど、いえ、本眞だつせ、その時かて、先にも言ひましたやうに、あの大勢ゐる『大丸』の店の中で、堅人の中の堅人や言はれたもんだす、本眞だつせ、それや私かて男だすよつてに、女子は嫌ひやおまへん、けど、人と比べると、まあ〳〵さう好きな方ちふより、嫌な方かも知れまへん、いえ、本眞だす、その私が嚴へ上りましたな、實のとこ、堅人で通つてる私かて、もうこんな爺になつて話しますねさかい、差支へおまへ

んやろ、ちふのは、若い時分の心の中で、色狂ひしてよる朋輩を見ては、なんの、俺が彼奴等見たいな氣になつて、一肌脱ぐつもりで掛つたら、彼奴等と違うて、人も言ふ通り、まあ申分ない男前に生れついてんのや、へゝ、これで仲々えゝ男だしたで、女子の一人や二人はいつでもこしらへよう思ふたらこしらへてこますわ、と思うてましたもんだす、現に女子から水を向けられた事かて一遍や二遍やおまへんが、いつも相手が氣に入らんとこへ、人並よりずつと臆病もんだしたさかいな。……

これは又餘計な話になりましたが、巡航船の中でも、氣が付くと、その女子に目のついた人は、男も女子も、若いもんも年寄も、みんな色々の流儀で、呆氣に取られたやうな、感心したやうな顏して見てよりますやおまへんか、それにしても、不思議なことは、まあ、服裝から何から考へても、どうして車に乘らんとそんな込合ふ巡航船見たいなもんに乘つてましたんやろな、まあ、しかしその時はそんな事を考へるどこか、私はどうぞして、前の方からその女子を見たい思うて、その女子の傍へ行かう思うて心が焦りまんねやが、何せよぎつしり積まつた人込の中で、おまけに私との間に大男が二人もゐまんねもん、どうにも斯うにも仕樣がおまへんね。

そのうちに發動機が急に力が拔けたやうな音に變つたか思ふと、巡航船は肥後橋に着きましてん、私は『大丸』へ歸りまんねさかい、四つ橋へ行きまんねやが、停船場の掛の呼聲が、氣が付きますと、その巡航船は千代崎橋の方へ廻る奴だんね、つまり私はそこで乘換へせんなりまへんね、ところが私は乘換どこやおまへん。

執固いやうだつけど、本眞に私はそれ迄でもそれからでも堅人だした、それ迄でもそれからでも、二遍とそんな事したことあらしまへん、よう人の話に、えゝ女子の後をつけて行くいふやうな事を聞きまつけど、實際は私かて、いつぞ一遍ぐらゐやつて見たろ、思ふた事はおまつし、それに今も言ひましたやうに仲々男自慢だしたさかいな、思ひ切つてやつてさへ見たら、何とかうまい事行くやろ位のことは思うてました、けど、本眞のとこ生れてからまだ一遍もそんなことをした事はおまへんね、それ迄にも、それからにもな、ちふのは、臆病いふより、一寸位感心した女子に會ふたか

て、その後をわざ〳〵つけて行く言ふやうなこと、大儀で、とてもそんな氣になれまへんね、これはまあ誰でもおんなしだすやろな、ところが、その時だけは別だしたんや、後にも先にも本眞にその時だけは別だしたんや、その時は臆病も、大儀も、乗換へも、へちまも、そんなもんやおまへなんだな、私は唯もう夢中で、何より、その女子が乗換するかどうや、そればつかり氣を配つてました、あの時分の巡航船の肥後橋言ふと、東京の電車の須田町だつたな、あすこ見たいなもんだすよつてんな、船の中の人は半分までどや〳〵下りて行きまんね、私の前の、例の邪魔もんの、大男の會社員も大工さんも下りる樣子だんね、私は取敢ず私の直左手の人が下りて行きました後のところへ行きまして、その二人の男を通してやろ思ひましたんや、その時だす、問題の女子の顏がぱッと花が咲いたやうに私の目に入りました。

眞白だしたな、紅味が一寸もおまへんね、どつちか言ふと靑白い色だすな、と言うて、病人見たいな靑さやおまへんで、迚も言へまへんな、河原の石を一つ一つ百日も掛つて探したら、あんな肌の石がおますわ、乾度、何のことはないその石に血を通はしたやうなもんだすな。それや別嬪や、別嬪やないの、唯別嬪言ふだけでは迚も迚も言ひ切れまへん、ところで、その女子の着てる着物がこれ又どゑらいもんだすね、呉服屋の私が吃驚しましたんだすさかいな、羽織いふたら、袂と袖とに水色を染分めにして、全體が紺地で、物は一重の紗お召だんねが、その水色の地のところを主にして、季もんの菖蒲の飛模樣を置いたありまんね、それで下の着物が西陣お召だんねが、その金茶と靑磁の縞模樣の織出しになつてまんのが、上の羽織に透かして雨風をきかしておまんね、まるで芝居の意匠だんな、それでゐて、分りまつしやろ、さうけば〳〵しい言ふやうな派手やおまへんねで、半襟は薄紫に、あれは乾度、特別に誰ぞ畫かきの先生に畫いて貰うて、あつらへたもんに違ひおまへん、西洋花を極く小さいのを散らしたのんを、本縫にしたもんだす、それがすつかり生れるなり着て來たやうに、身體にきつちり着いてまんねが、あゝは迚も普通の代物では行きまへんわ。……

その女子が、そこで下りるか、どうするか思うて見てましたんだすが、ちよつと一足二足、下りる人の後からついて來た樣子だんので、私もそんなら勿論下りるつもりで、横へ寄つたまゝ、それで何處やら女子の樣子が可笑しいので、

もう少し辛抱して様子を見て一番後から出てやれ、思うたもんだすさかい、丁度横へ寄つたとこの腰掛が空いたのを幸ひ、一先づそこへ腰をかけますと、女子は二足三足歩いて、又一寸立止まつて、窓から外を覗く風だしたが、その時、本眞だす、ちらつと私の顔を見ましたデ、そして下りる所が違うたんやと見えて、その邊の空いたとこへ坐るつもりかで、二三度左右を見廻してから、私とは二筋おいて向うの腰掛に、丁度私の方を向いて腰掛けよりましたもんだす。忘れましたが、眞白氣の、所々何の模樣だしたか、赤と黒との飛模樣を置いた、舶來もんの絹レースの、長い長い、膝の邊まで垂れるやうな肩掛をしてゐました。その端を、引きずらんように片手でつまみ上げてゐる指が又、眞白だんね、大抵の女子は、顔より手の色が別の人間見たいに黒いもんだすが、その女子のんは、おんなし、本眞におんなし色だした、指輪が、細い金具に、大きなダイヤの指輪が、一本だけ嵌めたんが、きら／＼光りまんね。するとな、その肥後橋では、下りた人ほど人が乘つて來まへなんだもんだすさかい、すつかり人の氣配が落ち着いて、さて、チン／＼と發船の合圖のベルが鳴つて、動き始めの發動機の音が、ゴー、ゴト／＼／＼とし出した時分に、その女子が又ひよつこり立上つて、どうすんねやろ、と思うて見てますと、何だすな、乾度、後の方の機關場に近い方の揺れるのんが厭で、前の方の席に代るつもりだしたんだすな、私の坐つてたところが、丁度出入口の近くの眞中邊だした、女子は私の前を通つて、前の方へ行く譯だすねが、どうも私の自惚のせゐかも知れまへんけど、私の方を時々ちら／＼その標本見たいな、兩方の大きさのそろうた、少うし切が長過ぎて、黒目の大き過ぎんのが、何とも言へん一寸險がついてる譯だんねやが、しかし廣からず狹からずの二重瞼で、それで私の方をちら／＼見まんねや、男いふもんは阿房なもんだんな、私はずつと船の中のそこら中の人の顔を一順見て廻つて、まあ自分よりえゝ男前の奴はゐえへんぞ、と思うて、これはやつぱり自分の方を見てんのに違ひない、思ひ込みましたもんだす。私は何ちふ氣なしに、女子が私の前を通り過ぎんうちに私の方で先に腰掛から立上つたもんだす、ところが立上つてから困りました、が、咄嗟のうちに思ひついて、出入口の方へ行きまして、さうや、あそこから一寸顔を出して上氣を冷す風にして、えゝ空氣でも吸ふやうに見せたろ、思ひました

もんだす、が、さう思うて私がその方へ行くのと、女子がずん〳〵その出入口の前の途を通つて船の前部の方へ行くのと、一寸すれ〳〵になる迄近寄つたことがおます、ぷん、と今度は、先のやうに人と人との間からやなしに、直接に例の匂を香ざがして見ますと、堪りまへなんだな、年甲斐もない事を言ひまつけど、何や斯う氣が遠うなるやうな氣がしました。その時、どうやらした拍子に、一尺ほどの近くで、私の顔と相手の顔とがちらりと向き合うたことがおました、すると、女子がそろッと笑うたやうな氣がしまんね、いや、本眞だす、その證據に、細こい細こい、そろうた眞白けの歯の奥に、丁度唇の端の邊のとこに、金歯がちろッと光つたんを覺えてますもん、いや、本眞だす、本眞だす。

そして私は夢中で出入口のとこへ行きまして、顔だけ外にのぞかしましたら、すーつと靑いやうな氣のする川の風が頭に當つたもんだす、何とも言へんえゝ氣持がしたんを覺えてます、もつとも多少どころか、大分上せてましたんだすが、川の方へ首が突き出しましたもんの、川の景色も何も目に見えやしまへん、その證據に、背中に目が付いたか思ふ程、私はその女子が前部の方のどの邊に坐つたか、そんなことを川の方を向いたまゝで判じたり、考へたりしてゐました、が、迚もそれでは安定わかる氣遣ひがおまへんさかい、今度は出入口を背中にして、そこに暫く凭れる風にして、くるりと船の中を見渡しました、が、始は後部の方を見まして、段々と中程へ目を移しまして、又後部に戻つて、又中程まで來て、そんな事を三度ほど繰り返して、漸う思ひ切つて前部の方に目をやりますと、吃驚しました！　女子は私の直右手の一つ置いた向うの腰掛に坐つてまんね、さう思ふと、一遍にぷーんと例のえゝ匂がして來まんね。私はそこで一寸考へましたなあ、といふのは、元の席へ戻ると、丁度その女子を後向きにして坐らんなりまへんね、そやさかい、疲れたやうな顔をして、何處ぞ近くにえゝ坐り場所がないか思うて、そ知らん顔してちろ〳〵氣を附けて見廻して見ますと、その女子は、丁度、まん中の、左右の出入口に通じてゐる路から船首に向うて二列目に腰かけてましたもんだすが、私の見付けましたんは、その眞中から船尾に向うて一列目に、つまり私の立つてました一方の出入口の目の下のとこに、具合よう私一人だけ割込めるとこだんね。私はそこで早速そこへぐんにやりと如何にも疲れたやうな恰好を

して坐つて、それから暫く下を向いてましたが、やつとしてから思ひ切つて、女子の方を顔を上げて見て見ますと、ええ塩梅にそこと私との間に挾まつてゐた腰掛には、一人は背中の曲つたお婆さんで、もう一人はそれの連れてゐた十四五の娘の子だしたもんだすさかい、心持大柄なその女子の顔が、眞正面にそのお婆さんと娘の子との間に、頭越しによう見えまんね。先にも言ひましたやうな切長の目と、その目にあつらへた樣に、けど、もしそれが筆で描いたもんとしたら。少うし筆を長い間押付け過ぎたかと思へる程、黒うて、はつきりした三日月型だつけど、長過ぎやへんかちふ眉毛が、これも亦一寸も片ちんばなしに、おんなし大きさで、おんなし長さで、おんなし良え加減のとこに附いてますもんやさかい、目と眉毛の間、眉毛と髮の生際の間が、何とも言へん調子よう取れてまんね、一寸横を向いた時に見ましたが鼻は氣が付かん位に、黒幕かなんぞの前に横向きに坐らしたら、やつと氣が付く位に小さな段がついて、眉毛の臺の高さから、目のある場所の高さから、鼻の高うなり始まりの具合から、こんな顔の子を生んだ親は、本眞にどんな顔をしてんねやろ、思うた位だす、もつとも、一寸位の賢い子は親に似て出來るもんやさうだつけど、うんと賢い人間はまるきり親にもお祖父さんにも似ずに、ひよつこり出來るもんだすさかいな、屹度あんな飛び抜けた別嬪の子は親に似てへんに違ひおまへん、

こんな女子を一目見たら、そこら邊にうじよ〳〵ゐる、藪睨みの、可愛らしい、煙草屋の看板娘も、年が若い言ふだけが値打の、何となしに愛くるしい、貰ひ立ての花嫁はんにせよ、さては口元が可愛らしいのんと、どこやらぽちや〳〵してゐる言ふだけが取得の癖に、自分だけは大の別嬪のつもりの、標緻自慢のどこそこのお上さんにせよ、何奴も此奴も一言もおまへん、みんな下れ、下れだすなあ、何となしに可愛らしいとか、どこやら面白いとこがあるとか、あれなら十人並やちふやうな、世間に降る程ある種類の女子は、みんなあきまへん、あきまへん、この位の女子を見ますと、はアー、別嬪やな…と思ふたけで頭が下りますわい。いえ嘘やおまへん、三十六相そらうた女子いふのんはあんなんだすやろな、もつとも人間の目であらを探しても見付かりまへん、けど、本眞のとこを言ふと、あれで三十三相ぐ

らゐそらうたとこだすやろな、どこやら、一寸嶮があつて、どこやら一寸男の心をきゆつと掴むとこがな、あすこが一相二相缺けたとこかも知れまへん、もつとも三十六相そらうたら、觀音さん見たいな顔になりますやろさかいなア。：

　私はぢつと頭が下るやうになるのを、時々氣を引立て引立て、ちら〳〵目を上げて見ますと、今度は又その女子が私の目と目が合ふと、すーつと下を向くとか、横に反らすとかするやおまへんか、閉ぢるやうに上瞼を下向けると、長からず短からずの瞼毛が、その石見たいな頰の上にはつきり見えまんね、近頃は瞼毛の長過ぎるのんが流行るやうだつけど、あれはほんの物好きな流行物だつせ、短か過ぎたり、少ないのんは、それやいきまへんが、長過ぎるいふのも、本眞の別嬪には禁物だんな。私は、そこで、倘の事、妙に自惚が起りましてな、これや、私を見て恥かしがりよるのやな、と思うたもんだす、本眞だす、私は又私の近所をちろ〳〵と一順見廻して見ましたが、公平なとこ、私が一番えゝ男やと判斷して、むづ〳〵する程嬉しなりました、いつその事、此時巡航船がどうぞして、どーぶく〳〵と沈んでしまうたら、そしたら俺が一番先にあの女子にくらひ付いたろ、あの女子もさうしよるやろ、思ひました、そして死んでもかまへへん、思ひました、笑ひなはんな。

　そのうちに、何橋からや忘れましたが、又どや〳〵乘つて來ましてな、お蔭で、私とその女子との間の、さつき迄背中の曲つた婆さんと娘の子が腰掛けてた腰掛に、入れ替りに六十近い坊さんと、子供を背つたらうた四十餘りのちよ汚い、裏長屋のお上さんらしいのんとが腰掛けますし、まだその上に、その人たちと私との間に、洋服來た二人連の、會社員らしい男が立ちやがりますし、すつかり女子の方が見えんやうになりましてん、それでも、どうぞして見たろ見たろ思うて、氣を附けて見てますと、それから千代崎橋へ着くまでに、二度程、會社員の洋服の袖と、坊さんの頭との瞬間に、ちらツと怪體な恰好にちぎり取つたやうに、女子の顏の一部が、鼻と口とか、髪と目と鼻の上とかだけが見えまんね、そやけど、その位の別嬪になるとゑらいもんだんな、どこを一所取つて見ても、それだけでもう立派なもんだんな、私はあない感心したことはおまへん、目一つ切り離したかて、鼻だけ千切つて來たかて、それだけで、あれな

ら屹度これはどないた別嬪の顔の一部や言ふことが想像つきまへんな、いや、嘘やおまへん、その時氣がつきましたが、その黒目の大きい、切の長い目が、さうだすさかい、少うし黒過ぎて、それが又いつでも涙がたまつてるやうに濡れ過ぎてるとこが、三十六相から言ふと、缺けたとこかも知りまへんが、確に男を引きまんな。

　さうして、到頭千代崎橋に船が着きましたんだすが、着かん先から、今度はその女子が確に下りさうな氣がしてましたよつてん、私は内々そのつもりでゐましたんやが、案の上、そこに着くと、今度は先の肥後橋の時と違うて、下りる人の一番後からになるのも待たんと、傍から見てると押し潰されへんか思ふやうな、繊細な身體を、人と人との間に割込んで、どん／＼出て行くやおまへんか、こゝで姿を見失うたらどんならん、思ひましたさかい、私も夢中で、人と人との間に割込んで、女子の尻をつけました、ぶーんと又あの何とも言へん良え匂が鼻に來まんね、それから船着場に上つて、改札口の所から石段を上つて、橋詰の往來に出るまでに、二遍も私の方をその女子は振り向くやおまへんか、さうすると、その長い眉毛が心持ち八の字になります恰好が、これ又何といふたら宜しおますやろ、雨に惱む海棠といふとこですかな、何とも言へん、物に惱んだやうな、それが麗ひつきたいやうに見えまんね。

　女子はそれから、あんた、千代崎橋を渡りまんね、おかしいな、まさか、松島の遊廓に關係のあるもんとも見えまへんがな、それとも、あの中には、大弓場見たいなもんから、小料理屋のやうなもんはあるけど、まさかあんなとこに……それにお妾や『高等』が住んでる答もないし、まさか、この上品な、こんな別嬪が……思うてるうちに千代崎橋の西詰を北に折れて、どん／＼どん／＼行きまんね、そしてやつぱり時々私の方をちよい／＼振り向きまんねで、いえ、これは自惚やおまへん、歩く樣子が又何とも言へまへんね、それが色町の女子見たいに外輪の足をわざつと厥らしう内輪に歩るいてのやおまへん、どつちか言ふと、生れつき内輪の癖に、それを現代式になるべく派手にぱつ／＼と歩いてるといふ方だんな、さうだす、その何處やら天然自然のまゝやないとこが、又何とも言へまへんねやが、天然自然やない言ふと、肩の恰好が、この女子はどうやら生れ付は怒り肩らしいのんを、機械かなんどで無理にぐつと縮めたやうに、ど

ことなしに、その撫で肩にぎこちないとこがおまして、歩くたんびにそれが上下でなしに、前後に搖れます、もうさうなると、そんなん迄が、何とも言へまへんねや。

　氣がつきますと、もう松島橋まで來てまんね。それを右に見て、西に向うて、梅本橋を渡りましたもんだす、さうなると、段々譯が分らんやうになりました、言ふのは、千代崎橋まで巡航船で來てながら、わざ〳〵松島橋まで後戻りして、梅本橋を渡つて本田の方へ行きまんねさかいな、それはまあ、しかし、うつかりして乘り過したにしても、さて、何處へ行くんだすやろ？ はゝあ、分つた、洋妾かな？ と本田一丁目から又北に、川口の方に行きました時、私は、はゝあ、ひよつとしたら、川口の異人町の百十番とか百四十番とか言ふとこにゐる洋妾かな？ と思ひまして、げつそりしました、なる程、さう思うたら、一寸洋妾らしいとこもおまんねもん、あの女子の背のすらりと高いとこも、房々した束髮の恰好も、どこやら異人向きやわい、あれを錢で買うてよる異人奴があんのやな、あれを異人にあの女子は賣つてよんのやな、思ふと、私は何とも言へん、情なアい氣がしました、さつきから、それを見當にして歩いてる、濃い水色の、つゞれ織らしい地に、銀糸で浪を織り出した、素晴らしい變つた、あの女子らしい帶も、みな異人の錢で買ひよつたんやな、くそ、くそ！ 思ひながら、けど、やつぱり夢中で、どん〳〵ついて行く足は一寸もくたびれしまへんね、やつぱり女子が時々私の方を振り返りまんねもん、男いふもんは自惚と何とか氣のないもんはない言ふのんは本眞だすな。……

　すると又、どうだす　女子は、洋妾とも違ふらしおまんね、その川口も通り越してしまひまして、今度は木津川橋を東へ渡つて、江の子島に入つたんだす、さあ、愈よ分らんやうになりました、何の事はない、巡航船で來た道を逆さまに念を入れて、いろ〳〵寄り道して、その癖何處へも寄らんと、唯ぶら〳〵歩いて歸るやうなもんだすやおまへんか、これや、この女子私を釣る氣やな、とも私は思ひました、その證據に、それからも、又二三遍も後を振り向きまんね、而も、私の姿が見付からんと、つゞけて、二遍でも三遍でも後向きまんねもんな、女子は私を犬見たいに後に連れて、江

の子島を北に、崎吉橋を渡つて土佐堀川の南べりをどん〳〵東へ歩いて行きまんね、そのうちには、さつき巡航船で通つた肥後橋から淀花橋の方へ行くやおまへんか。そして時々後向いて私の顔を見る目附が、こつちの氣の加減かも知りまへんけど、少うしづつ變味が出て來たやうに思へまんね、例の惱ましさうな眉毛の八の字に、少し皺まで泥り出したやうな氣がしまんね。しかし、人間て妙なもんだんな、私も斯う妙に意地になりましてな、―止めずについて行きましたもんだす。

すると、女子は越中橋を渡つて、中の島へ出よりました、私もやつぱりその後から二三間離れて、越中橋を渡つて中の島へ出ました、斯うなると、もう何が何やら、さつぱり分りまへん、何をする女子やら、何處へ行く女子やら、私を吊つてよるのんか、それとも私にちよびつと位は氣があるのんか、さつぱり分りまへん、と言うて、分らん言うて、斯うなつたら、此方も止める譯に行きまへん、もう無茶苦茶に、譯分らずに、まるで女子の腰に紐でも付けられたやうな塩梅で、唯夢中でついて行きました、女子はやつぱり、時々私の方を振り向きながら、どん〳〵東へ行きまんね、……少うし邪慶くそなりましなア、聞いてゝもちつと辛氣くそなりましたやろ、飛ばして話しますわ、それからな、土佐堀川の緣を東へ東へ、到頭肥後橋も通つて、あれから淀屋橋の北詰へ行つて、公園の太閤はんの銅像と圖書館のとこをくる〳〵二週廻りましたもんだす、あすこではぐらかされたら、どんならん、思ひましたさかい、そこでは二間程後まで私も男氣を出して女子の尻を附けましたもんだすがな、その時ちらッと後向きました、女子の顏の別嬪やう言ふたら、一寸口に言へまへんな、それも何も愛嬌を見せた譯やおまへんね、確に睨みよりましてんさかいな、けど、その切の長い黒水晶見たいな目に、さあ、どういふたら分りますやろな、さうだす、怨を持つたやうな目で、ちらッと私の方を見よつた時には、本眞に私はそこで殺されたかてえゝ、思ひましたな、いえ、えゝ女子は確に目だけでも、口だけでも、男を殺せまんな、しかし、あんた、そんな目や口を見たことはおまへんやろ、あゝ、あの女子は今頃どこにどうしてくさるやろ、もうえゝ年になつてますやろが、あんな女子は今見たかて、その時とそないに變つてしまへんに違ひおまへ

ん。

それから、ホテルの花に出て、浪花橋を渡つて、まだどん〳〵東へ、北濱の通りを行きまんね、こんな女子が、こんな着物を着て、ようもまあ、こない歩けたもんやと思ひましたな、天神橋の南詰から松屋町へ出て、それから島町へ曲りました、はゝあ、と私はその時思ひましたな、島町いふと、男妾の周旋屋へ行くのんか、とも一寸思ひましたが、さうやなうて、あんた、聞いたことがおまへんか、島町に名高い美男で、男女の何を數へるちふ不思議なとこがおまんね、そこのお上さんが又繪見たいなえゝ女子で、日本一やいふ評判だす、さうだすやろ、舞や踊ぐらゐではとてもあの位の恰好はつきまへんわい、これは乾度舞や踊の本家本元の、あれの上手、それも手を取つて人に敎へる程の上手になりましたら、そしたら、あんな、何とも彼とも言へん、男を引きよる恰好が出來るのやろ、今迄人を散々、行方を晦まさう思うて引張り歩きやがつたのが、あゝ、これが店のもんなどが始終噂ましう言うてよる、島町のあの師匠のお上やつたんか、思うてるうちに、又違ひまんね、違ひまんね、女子はもう谷町に出てしまうて、今度は谷町筋を眞直に南へ南へ行きまんね、さあ、もう又さつぱり何が何やら分らんやうになりました、あんた、それから南へ南へ行つて、女子ももう大分辛氣くそなりよつた風でな、一町に一遍ぐらゐ振向きしながら、もう如何な私にも、女子が私を撒きたうなつたんやな、いふことが分つて來ましたわい、結局、南へ南へ、天王寺の方へ行きまんねけど、その間に彼方へ曲り此方へ廻り、小さい路さへあると、そんなとこを早足に曲りよりましてな、この位の女子になりますと、早足に歩いても、並足に歩いても、どうしたかて、堪りまへんな、私はもう始のうち見たいに、胸がどき〳〵するのんも何も直つてしまうて、この阿房な頭がだん〳〵はつきりして來たやうな氣がして、さうすると、この女子をいつその事殺したろか、と思ひました、どうぞして、殺したろと思ひました、そのうちに、天王寺の西門を西へ下りて、今の新世界のあるとこから、戎さんの社の前の邊へ出て、あの邊から少しづつ少しづつ南へ入りながら、やつぱり西へ西へと行きよりまんね、そこで、私も始めて氣がつきました、あんたも分りますやろ、西濱の女子だすがな、西濱な、御存知だすやろ、穢多町

の。

私はその時一遍に思出しましたんやが、あすこには、それや、別嬪がゐまつせ、中にはそれや滅法界な別嬪の群に、一とこ目がたゞれてるので興の醒めるのもおまつけどなあ、それや、あんた、えゝ衆の穢多の娘には、目の醒めるやうなんがゐまつせ、昔は私の店でも決してあそこへは、どんな良え注文があつたかて足踏せんちふことだしたさうだんがな、明治になつてから、あそこの『圓駒』ちふ大金持がおますやろ、あそこの婚禮物のあつらへを受けたんが始まりで、それから『圓駒』へだけは店のもんも一寸々々入りますがな、私も二三遍行きました、それや、叮嚀なもんだつせ、番頭になんてまるで殿さん扱ひにしてくれますわ、豪勢な生活をしてまつせ、私は小僧の時始めて行つた時、小僧の私にお茶を出してくれましたが、そのお茶碗が、あんた金ぴかもんだんね、その時は唯えらいもんやな、思ふたゞけで知りまへなんだけど、後で聞いたり、聞いてから又呼ばれた時に見ましたんで、二度びつくりしましたんだすが、それは慶長小判を打拔いて、茶托の恰好にしたもんだんね。そこの家の娘が又、それやえゝ娘だした、さう思ふと、今つけて行く、その女子が、それや『圓駒』の娘より又ずつと別嬪だつけど、よう似てまんねやが、ひよつとすると、あの娘が大きなつて、こないになりよつたんやないか、と私は思ふた位だす。

もう穢多の娘やろが何やろがかまやしまへん、大阪中にそれが知れ渡つたかてかまやしまへん、こんな女子が女房に出來るもんなら、と私は思ひましたな、そのうちに、だん／＼日が暮になつて來ました、丁度今宮を歩いてました時分だすがな、さあ、私も大分氣が苛ついて來ますし、女子もだん／＼堪らんやうになつて來たらしおまんね、もう一町に二三遍も振向きまんね、そして、急に横へ曲つて、大黒町にはひると、やつぱり又西へ、西濱の方へ向いて行きまんねもう違ひおまへん、西濱の女子だす、もういつそ、さうと定つてくれ、そしたら相手の身分が身分だけに、此方から嫁に貰ひに行つても、話が早う付くかも知れへん、俺の方は格別財産こそないけど、さう惡い身分のもんやなし、男前はよしと、思ひながら、丁度鷗町のあのごた／＼したとこへ來ました、すると、細い横町見たいなとこで、女子はもう十間

に一遍、五間に一遍ちふ割合で、むさんこに右左へ曲り曲り、振向きまんね、さすがにもう足附も大分しんどさうだんね、私の方は夢中だす、女子はさつさと足を早めて歩きまんねやが、長道した上に、急いで歩くもんだすよつてに、落物も大分身體から亂れて來た樣子が、それが又何とも言へまへん、まだそこら邊は晝の明りだつけど、お日さんは入つてしまふた時分だす、振向く女子の顔が銀見たいに、青う光つて見えまんね、丁度人通りのない、拔露路見たいなとこを歩いてました、私と女子との間は一間半か二間ほどしか離れてしまへん、私は又もう、いつその事殺してしまふたろか、と思ひました、たまりまへん、女子もこの位別嬪になつたら、何ちふたら宜しおますやろ、何ちふたら宜しおますやろ、惚れたりはれたりするとこを通り越して、殺したうなりまんな、堪りまへんがな、堪りまへんがな、國を傾け、城を傾ける美人ちふのはあんなんだすやろな。

　すると、その時、突然女子がぴつたり立止まりましたもんだす、私もエレキを掛けられたやうに、ぴつたり立止まりました、もう私も本眞の夢中だした、女子も屹度夢中だしたに違ひおまへん、女子はきつと私の方を、腰から上だけだすけど、七分方まで振り向きました、その顔が、何ちふ顔だすやら、柳眉を何とかするちふのはあの事だすな、きつと眉毛を書き直したやうにはつきり際立てゝ、目を七分に開けて、さうするとその切の長い目の中ぢゆうが、その濡れた黒水晶のやうな黒目で一ぱいになつて、それが眞黒氣になつて、別の目でない目見たいに見えまんね、その目に恨が一ぱいこもつてまんね、口が又口だんね、口を特別の大きさより、少し大きう引吊つて、と言うて、それが醜女の大口の半分位の大つきさだつせ、それを心持三角形に開いて、それがやつぱり何んとも言へん恨を持つた表情だしたな、その奥に眞白な、後で植ゑ直したやうに奇麗な、そろふた齒を見せて、

『しつこい!』と一聲、その聲が又、それがヒステリイ的でもなし、と言うて勘走つてもゐず、と言うて鈴を振る言ふやうなんでもなし、男のやうな聲でも勿論なし、言へまへん、兎に角、さう一言だけ言ひました、そして、さう言ふのんと一緒に、私の方にちらつと右の手を振つたか思ふと、私の足元に、ばさツと何や落ちた音がしましてん、それだけ

の事が一息の間のことだんね、何やろ？　と思うて、ふつと足元を見まして、私は一遍に眞青になりました、女子はもうすた〳〵向ふへ行きます、私はその場に膝をついて、そこに、その女子が私の足元にぶつけて行きよつたもん、それは私の財布だんね、それを兩手に握つて、はアーツと長い息をついたまゝで、何と！　口の中で、大きに、大きに有難う！　と念佛を稱へるやうにうなりながら、拜みました、女子はもうその時は横町に曲つてしまうて、姿も何も見えしまへんね。……（九・五・一四）

■編輯室より■

■七月號から『社會講談』の一欄を設けることは別項豫告の通りであるが、此計畫は講談其物の改造であると共に創作界に一新紀元を劃すべき導火となることを疑はない。本社は今後創作家の藝術的作品を掲載すると共に文藝家並に思想家の方々が更に此社會講談に依つて十二分に其藝術味と思想とを吐露せらるることを疑はない。勿論名は『社會講談』であるが其實質は藝術的勞作である。

■クロポトキンの學説は未だ可なりに興味ある、――所謂危險思想と稱せらるゝ部分を除外して――研究題目があるのであるが、未だ自由ならざる現在の制度の下に於ては山川均氏の『パンの征服』其他二三の學説が出すことが出來ない狀態である。兎角奥齒に物の挾まつた感じのせらるゝ讀者諸君の不平の書翰を頂くのであるが、萬止むを得ないと御諒察を乞ひたい。尙五月號大杉氏の『クロポトキン總序』の末尾四頁は切取るの止むなきに至つたことを併せて御承知願ひたい。

■七月特別號の創作欄　谷崎潤一郎、江口渙、久米正雄三氏の長篇小説と新進作家諸氏の勞作とを滿載し、更に村松梢風。野口米二郎兩氏の力作、其他本社同人獨特の新計畫で、深綠誌界の白眉たらんことを期してゐる。

毎月一日發行 一回

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	七十錢	二錢
半ヶ年	四圓二十錢	不要
壹ヶ年	八圓四十錢	不要

外國行郵稅は一部十四錢増大號は別に定價を定む

廣告

▼廣告料は直接本社並に取次店に御照會願上候

▼廣告は御便宜の取次店へ御依賴願上候

註文の注意

▼御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▼増大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▼見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし　但し郵券代用一割増の事

▼御拂込は振替によるゝを最も便利とす

本誌大賣捌所

東京堂　東海堂　北陸館　上田屋　至誠堂

大正九年五月二十七日印刷納本
大正九年六月一日發行

本號定價　金七十錢

編輯發行兼印刷者　東京府中目黑七七〇　横關利藤太

印刷所　東京市京橋區南鍋町廿七番　秀英舍

發行所　東京芝區櫻田久保町七　改造社
電話新橋一八五九
振替東京八四〇二

文學博士 米田庄太郎先生著

（最新刊）

晩近社會思想の研究

中巻別冊 米國I・W・W・の研究

四六版四七〇餘頁

定價 金貳圓九拾錢

送料 金拾貳錢

上巻 拾版 貳圓五拾錢 送料拾貳錢

中巻 五版 參圓五拾錢 送料拾貳錢

内容目次

發行所
京都市丸太町寺町東入
振替大阪三五二六四番
弘文堂書房

新刊發賣！

▼有島武郎著作集第十一輯

惜みなく愛は奪ふ

一つ、而してたゞ一つの規範の上に生活しようとする私の欲求は、私をして私の個性を規範そのものたらしめました。この小さな論文は凡てこの立場の上に創り出されてゐます。凡てが始る前に人はこゝから始めなければならないと私は信じます。私は私にとつて大事なこの思想を公然と容赦なき檢察に供します。少くとも五年以上の歳月を折りたゝんで築き上げたこの論文は、私にある深い自信と愛着とを持たせずにはおきません………著者

有島生馬氏裝

四六版二二七頁

定價壹圓貳拾錢

送料八錢

▼水野仙子著

田山花袋氏序

有島武郎氏跋

水野仙子集

水野仙子逝いて方に一年。今その遺作の粹を輯めて本書を成す。個性と運命に對する作者の深き洞察と同情とは、各篇を通じて人の心絃に響く所あるべし。序跋の兩篇は、人及藝術家としての仙子の面目を明にせり。………（編者）

岸田劉生氏裝

四六版五〇〇頁

定價貳圓七拾錢

送料拾六錢

▼和氣律次郎譯（勞働文藝叢書第三編）

奈落の人々

英京倫敦のイイストエンドに於ける慘憺たる貧民窟の生活を描寫せるもの、之が人間の生活か。

四六版三二五頁

定價壹圓六拾錢

送料八錢

東京市牛込區神樂町二ノ一一　叢文閣　振替東京四二八八九

改造　第二卷第六號　大正八年三月廿一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）大正九年六月一日發行　定價金七拾錢